
異なる運命、新たな螺旋

六爪龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異なる運命、新たな螺旋

【Zコード】

Z2148Z

【作者名】

六爪龍

【あらすじ】

自分を憎み衛富士郎（過去の自分）を消そうとしたアーチャー…………だが、その望みは果たされなかった。
しかし、『答え』を得ることが出来たアーチャーは再び頑張ついくことを決意し、守護者としての己に戻つていった。
そして、『その時』が訪れる…………

初めまして。未熟な文ではありますがあき合つていただけるとあり

が
た
い
で
す。

序章 消滅からの始まり

暁の光景の中、一組の男女が向かい合っていた。

「アーチャー…………」

「凛、私を頼む。知つての通り未熟者だからな。」

そう告げる男 アーチャーの表情は穏やかなもので、その姿は段々と透けていっていた。

少女 凜は別れが避けられないことを、アーチャーが既に決意していることを理解しそれでもと笑顔を浮かべた。

「 私も、頑張るから。だから、あんたも…………」

「『答え』は得た。大丈夫だよ、遠坂。俺もこれから頑張つていくから。」

そして、別れが訪れた。

んでいる。

あれから数え切れないほどの年月がたつていた。

「何とも幻想的な光景だな……。」

エミヤが見つめる先では、荒野の至るところから強のような小さな光が飛び立ち消えていく光景が広がっていた。

その光の発生源、それは大地に刺さる剣であったり槍であったり、荒野自身からであったり又は

エミヤ自身からであつた。

「守護者と言う存在に訪れる最後と云つのが、これ程までに穢やかなものだとは。ククツ、私には過ぎた最後だな。」

そう、この光景は磨耗したエミヤが消滅する過程により起こっているのだ。

しかし、それを見つめるエミヤの目はとても穏やかだった。まるで、待ち望んでいた時が漸く訪れたのかのように……いや、真実待ち望んでいた事なのだろう。ただただ、消滅を受け入れている姿がそこにあった。

「凛……切嗣……私は、俺は最後まで頑張ったよ。」

エミヤは田を閉じてその時を待つ。光の量はどんどん増し、比例し

て回りの物が消滅していく。

今残るはエミヤの周囲とエミヤ自身だけである。

「出来れば……もう一度……姿だけでも……」

それを呟いた瞬間、全てが光へと変化する。

しかし、そこで変化が訪れた。

ただ消えるだけの筈だった光の群れが、ある一方へ向かって流れ始めたのだ。

ここから、新たな運命が紡がれる……

一章 回の歴史（漫書也）

頑張つてこいといひのぞ、まじこへむ願こしまや。

一章 回る歯車

side アーチャー

「（…隨分とゆっくらとした消滅だな。しかも、まだ思考できるとは一体?）」

消えた筈のアーチャーは今だ自分に自我が存在していることを不思議に思っていた。

「（そもそも体が重いし、感じる風は…………って、何！風だと！？本当に何が起正在している……）」

アーチャーは慌てて閉じていた目を開いた。

そこに見えたのは、漆黒の空間の中に小さな光が無数に存在している光景 即ち、星空であった。

その事実を確認したアーチャーの思考は思わず停止したが、その場合ではないとすぐに頭を巡らせる。

「（まさか、これは召喚か…？しかし私は消滅……いや、その寸前で呼ばれたのであれば、ここにいることも不思議ではないか……。だが、この光景はどこかで見たことがあるよつたな?）」

ともかく、現状を確認しようと視線を地上に落とせば、これまた見
たことがある洋館がすぐそこまで迫ってきていた。
それを確認したアーチャーは思わず呟いた。

「…………なんですか。」

ガツシャーン

そしてアーチャーは洋館へと大きな音を立て衝突した。

無意識にでも身体に『強化』をかけていたのは、流石アーチャーと
いつたところだろう。

side 凜

暗い部屋の中、一人の少女が立っていた。

彼女の名は遠坂凜、ここは彼女が住む家の地下室である。なぜこん
な場所にいるのかと言つと……

「準備はこれでよし、と。それに、時間もバツチリ。触媒は、
まあいいか。後は実行するのみね……。どんなのが召喚されるのか
しら。」

そう、とある目的によつて召喚の儀式を行つべく、この場所にいるのである。

そして、最も自分の魔力が高まる時間を持つて、召喚を実行しようとしていた。

カチツカチツカチツカチツ……

「時間ね

A ^{セット}n f a n gg

部屋の中にある時計の針が一時を指した瞬間、凛は目を閉じて詠唱を開始した。

「閉じろ（みたせ）閉じろ（みたせ）閉じろ（みたせ）閉じろ（みたせ）閉じろ（みたせ）繰り返すつどに五度、ただ満たされる時を破却する」

朗々と上がる声は辺りに響いて何重にも重なり、不思議な感覚を凛に『えていた。

「告げる。汝の身は我が下に、我が運命は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば答へよ。」

詠唱が進むにつれ凛の魔力が次第に高まってゆく。

そして、辺りに充満した魔力が見えない渦を作り出し、凛の髪の毛を舞い上がらせる。

「誓いは此処に。我は常世総ての善となるもの、我は常世総ての悪を敷ぐもの。」

凛は最高潮に高まつた魔力を、爆発しそうとまで思つよくな魔力を知感していた。

いける

凛はそう思った。儀式はスムーズに進み、魔力も申し分ない。絶対に成功すると確信した凛は、最後の詠唱を読み上げる。

「汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より來たれ、天秤の守り手よ
！」

終えた瞬間、漂っていた魔力が方向性を持つて集約する。確りとした手応えを感じた凛は目をあけ、相手が現れるのを待つ。

だが、いくら待っても田の前の陣に変化は訪れない。
『失敗』という言葉が頭をよぎった瞬間……

ガツシャーン

とこう大きな音が頭上から聞こえた。

「何でよ…………」

凛はそう叫びながらバタバタと上に行ぐのであった。

辺りにはさんざんたる光景が広がっていた。アーチャーが衝突した影響であろうか、恐らくは目を見張るような部屋だったらしいと予想されたこの場所は瓦礫の山となっていた。

「…………」

周囲を見渡せば、いいよのない懐かしさが込み上げる。

「やうだ、これは聖杯戦争の……」

そこに思い至った時、廊下の方からバタバタと大きい足音が聞こえた。

咄嗟にアーチャーは感情を押し隠し、いつもの皮肉げな表情を浮かべた。

例えどんな時であろうとどんな状況であろうと、感情を押さえつけることはアーチャーにとっては容易いことであった。しかし、その

事をアーチャーが悲しい事と感じるのはなく、また、それを他者に語られるようなこともなかつた。

アーチャーが見つめる先で、扉のドアノブがガチャガチャと音をたてて動く。

しかし、扉が開く様子は一向にない。

これが聖杯戦争による召喚であることは理解したアーチャーだが、召喚の混乱か摩耗していたせいか または、消滅しかけていた影響か 細かい部分は思い出せないでいた。

その為、血り行動を起こすことなく事態を静観していた。

「扉、壊れてる。ああもつ、邪魔だこのおー?」

バキッ、と音を立てて開いた（壊れた）その場所には……

「（あれは、靴底……か?）」

蹴つて開けた為か、足先が見えていた。

しかし、壊れた扉から一本の足が見えている光景は……どうかしゅールだ。

足を下ろして現れた凜は部屋の状況を見て呟く。

「またやつちやつた……やつちやつたことは仕方ない、反省。…怒られるだらうなあ。（ボソッ）

それで、アンタなに？」

そのときになつて漸く向けた凛の視線の先では、白い髪に黒い肌、黒のボディーアーマーの上から紅い外套を羽織った男 アーチャーが壊れたソファーにふんぞり返つて座つていた。

静かに凛の言葉を聞いていたアーチャーは少々気になることを聞いた気がしたが、問われた言葉に直ぐ様意識を切り替えて返答する。

「やれやれ、開口一番それかね。これはまた、とんでもないマスターに呼ばれたものだ。」

でて来た言葉は、わずかに覚えていた以前の台詞と変わらないものだった。

「なんですか。……いいわ、それよりもアンタが私のサーヴァント？」

「それはこひらの台詞だ。君が私のマスターかね？」

アーチャーの口調が多少頭にきたものの、召喚を考えれば仕方ないと無理矢理自分を納得させ、確認するための疑問を口にする。

それに対し、アーチャーは懐かしでも手助けしてか口許を緩めつつ質問し返す。

それを、嘲笑混じりに返されたと感じた凛は一気に頭に血が上った。

「あ、当たり前でしょう……ほら、見なさい。令呪だつてあるんだ

から。」

腕を巻くつて令呪を見せるが、アーチャーはこれ見よがしにヤレヤレと肩を竦めた。

「フウッ、本氣で言つてるのかね? そうなると私には都合七人のマスター候補がいるというわけだ。」

「あつ…………。」

「私のマスターを名乗るくらいなら、レイラインの確認でも確証は得られるだろ? 」

「ぐつ…………。」

魔術師らしからぬ失態に一の句が告げない凛。

ついつい皮肉が口をついて出るアーチャーだが、相手を打ちのめす事が目的ではないことを思いだし意識して言葉を切った。

「……いや、すまないなマスター。乱暴な召喚に些か混乱していたようだ。」

突然変わった口調に、思わず凛はアーチャーを見つめる。

「え? いや、私もちょっと混乱してたつて言つか……」

「私を召喚してなお生氣に満ちる行動、更に供給される魔力は靈地に繋がつていると見紛うばかりに高いときた。」

「これではマスターと認めないわけにはいかないな。」

勝手に自己完結しているアーチャーに、凛は少し狼狽えた。
それはそうだろう。人であり魔術師としては幼いと言える自分より高位の存在である英靈に、力を誇示するまでもなく認められたのだ。嬉しさが込み上げるが、魔術師たるもの簡単に感情を表してはいけないとポーカーフェイスを保ち話題を変える。

「そ、そつ言えばアンタは何のサーヴァント?」「ふむ、何だと思うかね?」

「(せつきから思つてたけど、性格悪いわね。コイツ。)セイバー、じゃないわよね。」

「残念ながら、剣は持つていない。」

凛はその返答に『そつか』と呟き、少し落胆の意を表す。
それにまた軽い違和感をアーチャーは感じたが、気のせいだひとつと思いつす。

「それじゃあ、最後にアンタの真名と性別って何?」

ここへ遠慮するもんでは一瞬で、すぐに決断を下す。
即ち

「すまないがそれは明かせない。なぜなら

「なに？下らない理由だつたら赦さないわよ。」

そう言って浮かべる笑みは、正にアカイアクマに相応しいものだった。

こうにうといいろは変わらないんだな、と思いつつも背中に嫌な汗をかいてくるのは『愛嬌』。

「何故なら、私にも解らないからだ。」

「ハア！？何よそれ。」

「余りにも乱暴な召喚だった為か、どつやら記憶に混亂が見らるようだ。戦い方などは解るが、その一つに関することはせっぱりですね。これはマスターの不完全な召喚のツケだぞ。」

そう言わると反論の出来ない凜。

苦し紛れに文句を溢す。

「むう、そんなんじや今回の聖杯戦争に勝ち抜けないじゃない。」

「なに、それは些細な問題だ。」

「どこがよ、真名処か宝具も解んないよハジヤ無理に決まってるじやない。」

「ククク、私は君が召喚したサーヴァントだぞ？それが最強でない筈がない。」

そう、アーチャーは今度こそ凛を勝者に導こうと決意した。
例え、記憶として残つていなくても、記録が僅かしかなくとも絶対

に勝ち抜こうと。

凛はアーチャーが寄せる信頼に、さつき以上に気恥ずかしい思いを感じた。

隠しきれない照れが頬に朱を差すが、アーチャーは気付かない。流石アーチャー、鈍感スキル保持者（笑）

「ま、まあ仕方無いわね。それに、本人が解らないなら他にバレる心配もないことだし。」

「理解してもらえて何よりだ。」

一旦話が落ち着いた時であつた。アーチャーはあり得る筈のないものを感じた。

急に警戒を露にしたアーチャーに凛は驚く。

「ちょっと、どうしたのよアーチャー？」

「マスター、誰かがここに近付いてくる気配がする。」

そう、あり得る筈のないもの。それは人の気配である。

アーチャーの知る限り凛は一人暮らしの筈であり、だからこそ表情には出さないものの混乱していた。

「うわっ、やば。」

「マスター？」

「あ、うん。大丈夫よアーチャー。いや、大丈夫じゃないかも……。」

「

凛の言葉に警戒は解くが状況は未だに掴めない。
しかし、凛の態度が煮えきらないまま、気配が壊れた扉の前に到達した。

「これまた派手にやつたようだな、凛。」

そう言葉を吐きながら扉から現れたのは、一人の男であった。

一章 回る歯車（後書き）

注意

これはあくまでもネタです。しかも楽しいのは作者だけ（笑）

アーチャー

スキル：鈍感

レベル：E ×

これは簡単に言うと『好意』に気付きにくいと言うスキルである。特に生前ハーレム、またはそれに近い状態に身を置いていたものが得やすい。

鈍感さの加減はレベルによるが、最高値のE ×では直接好意を伝えられても気付かないと言つ威力を有する。

また、このスキルを有するものは同時にたらしのスキルを持つものが殆どである。

副産物として魅了の魔術が効きにくいと言つ性質も有しており、タイミングが良ければ跳ね返してしまうこともあると言つ。（ただし、これはあくまで副次的なものである）

一章 現れる差異（前書き）

ショッパンから捏造全開です！？

因みに前回言い忘れてましたが、アーチャーの歴史は Fate UW

BW 現在のつもりです。

それについても、沢山文章を書いたつもりも、ページに直すとどう
は見えない罫……。orz
更新停滞だけはしないよう頑張ります。

一章 現れる差異

「うわ、美味しい。凄いですね、アーチャーさん。」

「確かに、これは三人以上かもしだせんね。」

「つう、何で英靈の癖に料理ができるのよ。」

「……食事は静かにとりなさい。」

「たまにはいいではないですか、あなた。」

私は久方ぶりに料理の腕を奮っていた。腕前が衰えていなくて何よりもだ。

矢張喜んで食べて貰えると言つのは作りがいが…………って私は一
体何をしている!!

とある理由により朝食作成時から果然としていたアーチャーだが、漸くの事で我に返つたようである。

我を失つても体に染み付いた行動をとるとは……ちょっと泣ける。

アーチャーの目の前にいるのはマスターである凛以外に四人だ。誰も驚くばかりの人物である。

「ハア、騒がしくてすまないな。」

「いや、私は気にしていないので貴方が謝ることはない。……遠坂時臣。」

まずは昨夜現れた男　　遠坂時臣とその隣に座している女性　　遠

坂葵。

アーチャーが知っている限り、遠坂時臣は第四次聖杯戦争にて命を落とした筈の人物であり、遠坂葵の方は詳しく知らないが時臣の後を追うように亡くなつたと聞いた。

今回召喚されたこの世界では一人ともなぜか生きており、遠坂時臣は遠坂家の当主として存在していた。

「うーん、アーチャーさんに料理を教えてもらおうかな……どう思
う、ライダー？」

「それがサクラの楽しみであれば、好きにして構いませんよ?」

それでも「一人」と言つか一組『遠坂』桜とそのサーヴァントのライダー。これまた何故か桜は養子に出されておりず、凛と真正銘の姉妹として過ごしていた。桜の髪は凛と同じ黒髪で瞳も同様に青であり、記録にある桜より明るく活発な雰囲気を纏っていた。サーヴァントであるライダーは桜の側にいるのが当然であるため、桜がいる以上あまり驚くことはない。

そして、最も驚くべき事は聖杯戦争であるにも関わらず、サーヴァントが一体いて戦闘が起こっていないこと。

そして、それをこの場にいる全員（アーチャー以外）が当然と受け止めていることである。

食事を終えた頃合いを見計らい、アーチャーは切り出した。

「さて、いいかね？ そろそろ説明をお願いしたいのだが。」

「そうね、ちゃんと知っていて貰わなくちゃいけないものね。」

「」で言つて説明とは何の事か。それは一度昨夜に戻らなければなら

ない。

「派手にやつたよつだな、凛。」

そう言って現れた男は、どこか凛に似た印象を感じた。

「騒がせてご免なさい、お父様。」

凛の言葉に、薄々感じつつも驚きはあった。

そして、凛の父親がなぜ生きているのだろうかと疑問が起る。アーチャーにとつて予想もしてなかつた事態に困惑するが、口を挟むことなく会話から情報収集を行おうと静かに聞く。

「それにしても、予定より早めに召喚したのだな。」

「え、早め……あれ、一時?」

凛がこの部屋の中にある時計を見ると、一時少し過ぎを示していた。どうやら、遠坂家のお家芸が発動してしまったようだ。

「アハ、アハハハ……あう。」

「成る程。……それで、何を召喚したんだい、凛。」「あつそれは……」

アーチャーを見ながら答えようとしている凛を認めて、アーチャーは慌てて待ったをかけた。

「まで、マスター。」「なに、どうしたのよ。」

「簡単にクラスを口外しようとすると、正気か？マスター。」「何言つてゐる、その位いいじゃない。それに相手はお父様なんだし。」「よくない。君は本当にこの聖杯戦争に勝ち抜く氣はあるのか？」

「何よ、当たり前じゃない。じゃないと召喚なんて行わないわよ。」「ならば、じつひらの情報が漏れる事が死に繋がると理解できないのかね？」

そこで、凛は理解できない言葉を聞いたとばかりの表情をした。

音にするなら、アンタ、何解らない事言つてんの？」と言つ感じだ。アーチャーが視線をずらして見てみれば、凛の父親も同様な表情をしていた。

その反応に続く言葉を失い、暫し静寂の時が流れた。誰も言葉を発さないでいると、新たな乱入者が訪れた。

「お父様、姉さん。どうしたんですか？」

「サクラ、あまり心配せぬともいいと思つますよ。それより、早く休んでください。明日も早いのでしょうか？」

あまりの展開に、流石のアーチャーも構える」とを忘れ、彼女達が入ってくるのを傍観してしまった。

「おや、キチンと召喚ができたみたいですね。」

「ちょっと、どう言う意味よ。ライダー。」

「いえいえ。深い意味などありませんよ?」

敵サーヴァントだと判るもの相手にほのぼの(?)と会話を交わす凜。

アーチャーは耐えきれずに頭を抱えてしまった。

「(一体何だと呟つのだ、これは……。なぜ桜とライダーがここにいる。いや、そもそも何故遠坂時臣が生きているのだ?)」

自分の知る聖杯戦争とのあまりの違いに思わず眉間に皺が寄る。そんなアーチャーに気付いたライダーは声をかけた。

「どうしたのです?ええと……」

「…………アーチャー、だ。」

クラス名を告げるかどうか迷うアーチャーだったが目の前に立つライダーが全く戦闘の意思を見せていないと、そして凜が簡単に告げようとしていた事から問題ないと判断し告げることにした。

要するに、開き直った。

「成る程。リンはアーチャーを呼び出したのですね。ああ、私はライダーです。

それでアーチャー、先程から何から険しい顔ですがどうしたのですか？」

「いやなに、これが本当に聖杯戦争なのか判断がつきかねてな。」

「何か可笑しいことでも？ 基本的な知識は聖杯から送られてくる筈ですが。」

その言葉に自分が知っている聖杯戦争の知識しかなく、ここで与えられる筈の情報がないことに気づく。

言われるまで気付かなかつたとは思つてている以上に混乱していたのだな、と自嘲の笑みを思わず浮かべる。

「ああ、それでか。」

「ふむ。その反応からすると、何も情報が送られてこなかつた、と言つた所でしょうか。その為本当に聖杯戦争なのか理解が出来ないと。」

「ああ、残念ながらその通りだ。全く困つたマスターだな。」

二人は同時に話をしている（恐らくは説教？）時臣と凛へと視線を向ける。

二人の側で会話を聞いていた桜は、苦笑いを浮かべて父親と姉を呼んだ。

「どうしたの、桜？」

「何かあったのか？」

凛は解放されて少し嬉しそうに、時臣は単純に疑問を浮かべて尋ねる。

「はい。と言つても私でなくアーチャーさんなんですが。どうも聖杯から知識が流れてこなかつたらしく、状況がよく理解できないういんです。」

凛はあからさまに不味い、と囁き表情をした。

「……すまないなアーチャー、だつたな。」

「ああ。」

「私は遠坂時臣と言ひ。暫くよろしく頼む。」

それで、本来ならすぐに説明をしたいことだが、流石に夜も遅い。説明は明日で構わないかな。」

「私はそれで問題ない。」

「ありがたい。では、私は先に退室させて貰う。」

「……凛、この部屋は片付けておくれよ。」

少々厳しい顔をしつつもそれ以上は何も言わず退室した時臣。それに続くよろこび『お休みなさい、姉さん』と桜も自分の部屋に戻つていった。

「……どうした、マスター。」

残された凛は恨みがましくアーチャーを見つめていた。

「別になんでもないわよ。」

「ふむ、そうか。」

余計な発言をすれば危険だと察し、なるべく少ない返答を心掛けるアーチャー。

そんなアーチャーを横目に、何やら思い付いたらしく笑みを浮かべる凛。

それに嫌な予感しか覚えないが、逃げれないアーチャーはただその場で待つ。

「アーチャー、最初の仕事だけど。」

「……………なにかね。」

沈黙の長さがアーチャーの心理を如実に表している。

そんなアーチャーの心理を知つてか知らずか（確実に前者だろうが）
、悪魔の言葉を続ける。

「IJの部屋、片付けといて。」

「……私の記憶に間違いがなければ、それは君に『えられた仕事で

はなかつたか？」

無駄だと理解しつつも反論するアーチャー。

しかし、どこまでいっても遠坂凜は『遠坂凜』であった。

「ええ。でもアンタは私のサーヴァントでしょ？マスターとサーヴ
アンタは一心同体、つまりあんたがやったことは私がやったことも
同然つて訳。理解した？」

「その理論は理解できなくもないが、君はサーヴァントを一体何だ
と…」

「使い魔でしょ？ま、一寸生意氣だけど。あつそういう、この事お
父様に言つたら承知しないわよ。」「…」

と、右手の令呪をつりすら光らせて齧る。

やつぱり変わらないな、と遠い目をしながら思つむ、恐らくはいつ
ものうつかりで自ら櫻襷ひざ帯を出すだらうと、部屋から出ようとする凜
を見つめ例の台詞を告げたのであった。

「……了解した。地獄に落ちろ、マスター。」

その後、一人で一晩かけ部屋を修復した後、ちょうどよい時間だからと朝食を作るべくキッチンへと移動した。
そう時間をおかず人の気配が現れたが、桜だろうと特に注意せずにいた。

しかし、現れたのは妙齢の女性で、どことなく凜や桜に似かよつた

顔立ちをしていた。

「あら、どなたかいらっしゃった？」

「むつ、失礼した。勝手に使わせてもらつていい。私はアーチャー、昨夜凛に召喚されたサー・ヴァントだ。」

質問には冷静に返すも、アーチャーは見覚えのない人物に心の中で首をかしげていた。

「あら、凛の……私は遠坂葵、凛の母親です。よろしくお願ひしますね。」

ここではアーチャーの思考回路は完全にフリーズしたと言つていい。いつものアーチャーなら面影もありこの家にいる以上、その可能性を考えていた筈である。

しかしながら、召喚直後の困惑と以前の世界では一言も耳にしていない情報であつたため、無意識の内に除外していたのだろう。

イチイチ困惑を処理していくべきがないと判断を下したアーチャーは、説明を受けるまで深く考えることを放棄し朝食作りへと没頭した。

他人は俗にそれを現実逃避と言つ。

アーチャーが朝食を作つていていることを確認した葵は手伝おつとしたがやんわりと断られ、アーチャーが淹れた紅茶を飲みながらテーブルからキッチンを観察していた。

葵の目から見てもアーチャーの手際はとてもよく、魔術や英靈と言つたものに詳しくない葵は、英雄さんは何でも出来るのね」と呑気に考えていた。

「アーチャーが特別なんだよ、うん。」

こづしている内に続々と起き出し、冒頭の部分に戻ると言つわけである。

食器を片付けた後、時臣・凛・桜・ライダー・アーチャーの五人は再びテーブルへとついた。因みに、葵は家事をする為にここにはない。

本来なら登校の時間だが、凛は召喚翌日の為念を見て休みをとつている。

桜は学校へいく予定だったが、アーチャーに情報がないと言つことで同じサーヴァントがいた方が良いだろうと思ひ休みをとつたのだった。

まず、口を開いたのは凛であった。

「取りあえずは最初の確認だけど、これが聖杯戦争の召喚だつてことは理解してるよね。」

「ああ。聖杯を巡り七人のマスターとそのサーヴァントによつて争われるもの、だろう。」

「ええ、そうよ。七組の主従が己の総てをかけて激突するの。」

「そこはアーチャーが知るものと全く変わっていない。

だからこそ昨夜の『死』と言う単語に、魔術師である彼等が怪訝な表情を浮かべたことが理解できなかつた。

「そつ、聖杯戦争とは聖杯を巡る戦いでもあり、魔術師の力を示す技量比べでもあるのだ。」

「な、技量比べだと……殺し合いではないのか！？」

思わず叫ぶアーチャー。保つていたポーカーフェイスが崩れ、驚愕を露にする。

アーチャーの言つた内容に英靈であるライダーはそれなりに理解の色を示すが、『人間』はその言葉にこそ驚いた。

「そんなわけないだろ？ 現代でその様な血生臭い事とても出来はしない。」

「だ、だが聖杯とはどんな望みも叶えるもの。それを手に入れようとするなら必然的にそうなる筈だろ？ 現実に、私の知る聖杯戦争はそう言つものであつたぞ。」

「そつはなりませんよ、アーチャー。」

聖杯からの知識を有するライダーが言った。

その内容は、アーチャーを更に驚かせるに十分な威力を有していた。

「確かに聖杯を巡る戦いは『そう言つもの』ですが、この土地の聖

杯戦争に限つては絶対に起こり得ません。

何故なら聖杯がそれを許さないからです。聖杯は純粹に自分を得るに相応しい者を望んでいます。と言つても、生きているわけではないので正確には違つかもしれませんが。

故に、聖杯から『えられた決まりを守らないものは自ら排除を行つようで、だからこそ聖杯を望むものは其を守ると言つわけです。』

アーチャーは言葉も出なかつた。だが、生前から鍛われ続けていた

思考回路は直ぐに現状を把握した。

ため息を一つつくことで気持ちを切り替え、表情を元に戻した。

「現状は理解した。つまり、殺しは『法度と言つこと』でいいのだな？」

「ええ。ですが宝具の効果上仕方ないものや不可抗力のものは除外されるそうですよ。」

これまた何とも都合のいい聖杯戦争だな、とアーチャーは思った。そして、もしこの聖杯戦争が普通の聖杯戦争であれば、『自分』が生まれる事もなかつたのだろうかとつい考え……

「そう言えばアーチャー。自分の知るつていつてたけど、記憶が戻つたの？」

凛の声に遮られた。そして反射的に答えを返す。

「残念ながらまだだ。大まかな知識ならば存在するが、自分の素性の事となるとサッパリだ。」

「……姉さん。」

「……リン。」

凛とアーチャーのやり取りを聞き、アーチャーが知識だけでなく記憶さえも定かではないと知った桜とライダーは、何とも言えない視線を凛に送っていた。

そんな視線を向けられても文句も言えない凜居心地悪そうに身じろぎをし、視線を微妙にはずしていた。

「アーチャー。貴方は一応敵ですが、今ばかりは心底同情します。
「はは……気持ちだけありがたく受け取つておこう。」

真剣な同情の視線に、こればかりは罪悪感により目が会わせられないアーチャーだった。

「では、説明の続きといこう。サーヴァント同士の戦いではどちらかが敗けを宣言した瞬間、その主従は聖杯受諾の資格が取り上げられる。

どういう原理かは知らぬが、聖杯はすぐその事が解るらしい。」

「ふむ。私達は相手が敗退したもの達かどうか、どうやって判断できるのかね？」

「それは令呪で確認することができる。敗退したものの令呪は、本来の令呪から色が抜けた状態となる為それで判断するのだ。

色が抜けるのは聖杯が絶対的命令権とは違う令呪の魔力を回収する

からだとされている。」

それは分かりやすい、とアーチャーは思った。

それに、サーヴァントの魔力ではなく令呪の魔力ときた。確かに令呪による命令は通常では不可能な行動を起こすことを可能にさせるが、サーヴァントと言う魔力以上を持つとは思えない。と考えたが、そのサーヴァントに力を与えることができる以上サーヴァントよりも多い魔力を持ちうるのではないか、と言う事に思い至った。
なんにせよ、基本概念が違う以上確信を持つことは出来ず、そんなものかと納得する事にした。

「まあ、重要なのと言えばこのくらいであろう。もしかしたら至らないところもあるかもしだれぬが、その場合は私たちよりライダーに聞いた方が早いだろ?」

なに、家の中では戦闘禁止と言つ決まりにしていてね。アーチャーにもそこは徹底して欲しい。戦闘をするなら外で、とな。」

「了解した。異存はない。」

そうして、アーチャーに一応の知識を教えた事でお開きとなつた。皆が散り散りになる中、時臣が凛に一つ告げた。

「ああ、そうだ凜。アーチャーに町を案内してあげたりどうだ。」「はい、そうですね。アーチャー、今から出掛けるから準備して。」「ふむ。私はいつでもいいが。」「何いってるのよ、そんな格好じゃただのコスプレよ。着替えなきゃこっちが恥ずかしいじゃない。」

的はずれな指摘にアーチャーは息を吐く。今日一日でどれぐらいの息をついたのだろう。

因みに時臣は告げるだか告げてたりなど離れていた。

「マスター、私はサーヴァントだ。」

たたら何よ

……セーラーは元々靈体で、マスターからの魔力供給を受けて仮の肉体を『えらべて』に過ぎん。』

「えっと、つまり…………姿を逆せねば」とか。

「やれやれ。やつと理解してくれたかね、マスター。召喚の手並み

といい、これは拍手でも送るべきか?」

いつもの皮肉な口調が戻るアーチャー。
それは懐かしさも後押ししていた。

ライダーが目の前で霊体化したことがなかつたのでつい忘れていた
凛は、恥ずかしさを隠すべく大声を出す。

ドアに手をかけようとした時に凛は呼び止められた。

忘れてること?と首をかしげるが何も思い浮かばない。忘れ物などない筈であり、訝しげな表情を浮かべる。

それをみたアーチャーは、やはりかと思つて言葉を続ける。

「私たちは契約するに当たり重要な事をまだしていないだろ？」「重要なこと？……あ、名前…」

契約において必要な事とは何だろうと考へて、アーチャーが未だに自分の事を「マスター」とか「君」としか言つていないと漸く気づいた。

「やつだ。真名を明かしていない私が言えることではないが、どうやら計り切れないやつなのでな。言わせて貰つた。」「

凛は名前だけなら昨夜から幾度も聞いている筈なのに、直接の交換を言い出したアーチャーに対しても頬が緩む思いだった。

確かに名の交換は重要な方に部類されるが、それでも絶対にしなければいけないと言つわけでもない。基本的に利害の一一致で結ばれる主従関係が多いからだ。

なので、名の交換をアーチャーが言い出した事に凛はマスターとして認められていること、信頼されていると言つことを実感した。

「それで、マスターの名は？」

「凛 遠坂凛よ、アーチャー。私の事は、好きに呼んで構わないわ。」

「では凛と。ああ、この響きは實に君に似合っている。」

「あ、当たり前でしょ。お父様達がつけてくれたんだから。」

凛は思わず赤面し、怒鳴るよひに返した。

アーチャーはクククと笑つてそんな凛の反応を楽しんでいた。

「凛。

「なによ。」

「アーチャーの名にかけて誓おひ。我が弓は汝と共にあり、汝の運命は私と共にある。ここに契約は完了した。

全身全靈をもつて君のために戦おひ。」

騎士の礼を取り忠誠を誓つ騎士の様にアーチャーは跪く。

その表情はどこまでも真面目で、だからこそそれを見た凛は確信した。アーチャーが、天然、だと言つことを。

「さて、ここで最後ね。」

一通り町中を回つたアーチャー主従は、新都の高いビルの上にいた。

「やれやれ、散々人を引っ張り回してくれたな。初めからここに来ればいいものを。」

「何言つてゐるの。実際の地理は見回らなきや解らないじゃない。」

「そつでもないこさ。弓兵は日が良くないとなれないからな。かなり遠くまで見ることは出来るし、町中ぐらいならここからでも十分把握できる。」

へえ、と感心した声をあげる凛。視線の先にいるアーチャーは、町を記憶してゐるのかアチコチに視線が向いている。

「じゃあ、アーチャー。遠坂邸みえる？」

「むつ、流石に隣町は無理だ。橋までならタイルの数まで数えることができるが。」

その何でもないことのように言われた内容に驚愕した。

「嘘、橋のタイルって新都の！？」

凛は改めて英靈と言つ存在の凄さを認識した。

アーチャーの真名を知らずどれくらいの戦闘能力を有するかわからぬ凛だが、それでもこの聖杯戦争に負ける気はしなかつた。

そして、アーチャーが寄せる信頼に答える努力をしようと空を見上げ改めて決意した。

空には次第に薄闇が広がつていつており、星が瞬き出していた。

「さてと、大分日も暮れてきたし家に帰るわよ、アーチャー。」

「そうだな。ではいこうか、凛。」

こうして、新たな聖杯戦争が開始された。

新たに回り始めた運命が導く先に何が存在するのか……それを知るものは、まだ誰もいない。

一章 現れる差異（後書き）

現在ゲームを買ってプレイしております。が、暇を見てなのでなかなか進まない（泣）

しかし、アーチャーがかっこ可愛い。皮肉げな笑みとか一寸驚いた顔とか呆れた顔とか本当にもう何でこんなに可愛いんだよアーチャーはアーチャーアーチャーハアハアは（「」y

失礼、興奮で一寸頭がやられてしまったようで……え？いつもだって？ハハハハハハハハ、大正解（笑）
こんな自分でスミマセン

三章 初めての戦闘（前書き）

やつぱりまつたぜ　…?

今回はキャラ視点にチャレンジしたのですが、やつてしまつた感が
パンパンします。

やつぱり所々程度にしとつた方がいいですか…よ、ねえ?

次は普通に戻して書きます。はい。

まあ、今回だけの暴走と書ひじりで(汗)

二章 初めての再戦

私と凜は今、学校に向かつて歩いている。まあ、私は靈体化しての行動ではあるがな。

ここでもやはり学校を休むつもりはないようだ。聖杯戦争 자체がすでに違うため、特に否を言つ必要もないがな。

私は念のため警戒も含めて、周囲を注意深く観察した。

すぐ近くにいるライダー以外にサーヴァントの気配は感じられない。桜が間桐にいない事でどんな事が起こるかは予想できんが、そこまで酷い事にならないだろつと判断する。

私も甘くなつたものだ。ここまで楽観的に見るよつくなるとは。

再び回りを見渡せば、自分の記憶の底を揺るような光景が広がつてゐる。

と、そこで私は見覚えのある赤を見つけ、心臓の音が一瞬跳ね上がつた。

凜もその人物を見付けたようで、相手に声をかけた。

「あつ、土郎じゃない。おはよつ。」

「遠坂、お早う。今日は早いんだな、珍しい。」

「煩いわね。生意気なこと言つじやない、土郎の癖に。」

「つて、うわ。悪かったから。殴ることないだろ、遠坂。」

「ひつやからヤツ」とは知の仲らしい。会話の中からも気安げな感情が読み取れる。

私の胸中は複雑な感情が渦巻いている。例え答えを得ていよつと、

このときの自分は私にとつて忌々しい存在と言つことに変わりはない。今でこそ殺そなうなどとは思わないが、進んで関わり合いになりたいとも思わない。一度得た感情はそつ簡単に払拭できるものでもないし、な。

そこに、横から別の声がかかつた。

「何してんのさ、衛宮に遠坂。」

「あつ、お早う慎二。」

「あら、何よ。あんたには関係ないでしょ。

……お早う。

「お早う。つたぐ、朝っぱらから騒がしいな。」

「慎二とも仲がいいのだな。やはりと言つか、刺々しさが全くない分別人を見ている気分だ。

「喧嘩するなら別のところでやつてくれないかい？一緒にいる僕の評判まで下がつてしまふからね。」

いや、嫌味だけは変わらないか。まあ、其でこそ慎二らしいのだが。何だかんだ言いつつ、三人は揃つて校舎に入つていった。

「そう言えば遠坂、サーヴァント召喚したのか？」

「あら、勿論よ。兆しが現れたんだから参加する以外にないでしょ？」

「羨ましいね。僕には元から無理だからね。」

?

：解っていたが、こんなところで聖杯戦争の話を堂々とするのか。防音の魔術を行使してはいるようだが、やはり慣れんな。

「遠坂はどんなサーヴァントを召喚したんだい？」

「流石にあんた達には言えないわよ。かといって、隠すつもりがあるわけでもないから知りたいなら自分で調べなさい。」

うむ、流石に家族以外にはそう簡単に言つ訳ではないか。
だが、自分で調べなさいとは、余計な首を突っ込めば殺されか
と、そう言つ事がない世界だつたな。
やれやれ、暫くは苦労しそうだな。

「ねえ。一応聞いとくけど、士郎には兆し現れたの？」

ドキリとした。

そう、私は確か昨日の朝兆しが現れた筈なのだ。
この衛宮士郎の行動をじつと見つめる。

「まさか、現れるわけないだろ。」

そう言って、衛宮士郎は自分の両手を凜に見せた。
確かに、令呪の兆しはチラリとも現れていない。

私は安堵とも落胆とも取れる感情が胸に現れるのを感じた。

「そりやそうよね。何たつて半人前なんだし。」

「煩いな。これでも鍛練はちゃんとしてるんだぞ。」

「半人前だからって、聖杯にはそう言つ事関係ないんじゃ無かつたのかい？」

「ただけと。より相応しい魔術師がいるんだから、そっちに行くのが普通じゃないかなって思つただけよ。」

「つて、慎一まで半人前つて言つなよ。」

「ははは、『強化』ぐらいしか出来ないんだからじょうがないだろ、衛宮。」

私は変わらず、静かに彼らの会話を聞いていたが、凛から念話で声をかけられた。

どんな情報を得ても努めて平静でいられるようにはしていただが、どうやら私の動搖がラインを通じて凛に伝わってしまったようだ。

「（アーチャー、どうしたの？なんかさつきから動搖が流れてきてるけど。）」

【何でもない、といいたいところだが……そうだな、私の知る魔術師と、ここ、の魔術師というものが異なつていてね。故に少し困惑していただけだ。】

「（へえ、違うつてどんな風に違うの？）

【……なに、大した違いではない。凛が気にするような事はないさ。】

「（ふうん、それならまあいいわ。）

そうだ、こここの魔術師にあちらの有り様など教えなくともいい。血を流す事のない魔術師の在り方、それを態々壊すような真似などを出来よう筈もない。

そういひつこむつちに教室の前まで迫り着いたようだ。

「それではまた後程。失礼しますわ、衛宮君、間桐君。」

「ああ、じゃあな遠坂。」

「ふん、相変わらずだね。遠坂は。」

防音の魔術を解いた途端、優等生の猫を被る凛。……流石だな。衛宮士郎も慎一も呆れたような表情をするのみで、さっさとこの教室へ向かった。

「（アーチャー。）

【なんだ、凛。】

「（授業中の事なんだナビ、一緒にこいつも退屈だと思つから自由に動いていいわよ。）

【むつ、いいのか？】

「（ええ、ただし学校の敷地内にいること。後、サーヴァントを見つけても昼間は戦闘をしないから注意してよね。）

【それは承知している。では、お言葉に甘えて少し見学させて貰つとしよう。】

「（や、こつてらうしゃい。）

‘おはよつ‘ざこます、’といながら教室に入つていく凛を一瞥し、私はその場から離れる。

さて、ああは言つたもののこれとじつて見回る必要も場所もないな。
どうするか……取り敢えず屋上に向かうか。

「ほんな、町だつたか……」

屋上にある給水塔の上に立ち、私は冬木市を見ていた。
学校から見る町はどこか記憶とは違つて見えた。
……感傷に、浸つているのかもしけないな。

飽きず眺めていると大分時間が経過してしまつたようだ。
時刻は昼になる直前を示していた。

さて、では凛の元に戻るとするか。‘あの事’も報告しなければならないしな。

凛の元に戻ると、凛は友人達と弁当を囲んでいた。
報告は食べ終わるまで待つとしよう。

私は授業中アーチャーについて考えていた。（勿論、授業を聞き逃すなんてへまはしないわ。）

アイツは記憶喪失（原因の一部が私になくもないけど……）で真名も宝具も判らぬいくせに、自意識過剰で自信満々だし。なのに何処と無く頼りがいが……って何言つてんの、私は。あいつのどこが頼りがいがあんのよ！？あんな変な奴。

「変つていえば、朝のアイツ。少し可笑しかったわね。」

私は思わず小声で呟いていた。

朝士郎達と会話をしていた時、アイツ何か拳動不審（と言つても見えないんだけね）だつたのを思い出した。

それに、自分の知る魔術師と違つとか言ってたし。

でもすぐに元に戻つて、気にする事無いって言つてたしいか。
どうせ大した差じやないだろ？し、情報がないから目立っちゃつた
だけ……やっぱ、ひやんと謝つていた方がいいかも。

お昼を友人達と食べてるときにアーチャーが帰ってきた。

一寸早いかもって思つたけど、サーヴァント何だしそんなもんかしらね。

何かアーチャーの奴言いたいことがあるらしく、私は教室を出て人気のない所へと行つた。

「それで、どうしたのアーチャー？なんか校内に異常でもあつた？」

アーチャーの落ち着き様からそんな事はないと理解しながら私は言った。

「いや、異常は何処にもなかつた。ただ、一寸したお誘いはあつたがな。」

「お誘い？アーチャーは靈体化してたのよね……て事はサーヴァント。まさか、校内に知らないマスターが！？」

「いや、誘いは校外からだ。一度屋上に出たとき、『トト寧に殺氣をぶつけてきてな。

すぐに霧散したが、恐らく放課後辺りに再び現れるだろうな。」

私もその意見に賛成だ。

アーチャーが校内にいたことで、マスターが学校関係者である事はばれたと見た方がいい。

余程の事がなければ途中で帰つたりしないし、聖杯戦争に参加しているなら逃げるなんて選択肢は端から存在しない。

「アーチャー……」

「何かね。」

「放課後、迎え撃つわよ。」

「ふつ。承知した、マスター。」

アーチャーはニヤリと笑って私の言葉に同意した。

ふふふふ、やつてやるひじやない。この遠坂凜に宣戦布告したこと、後悔させてあげるわ。

side out

ホームルームも終わり、教室にいる殆どの人間が帰宅を始めた。私は凛にこの後の行動を尋ねる。
それで、どんな返答が来るかな？

【凛、この後はどうするのだ？】

「（やうね……とつあえず図書室に行こうかしら。）」

【むり、図書室？】

「（ええ、優等生、の遠坂凛が図書室に居れば遅くなつても座しまれないでしょ？）」

【成る程。だが、対策などはどうするのだ。】

「（対策？そんなの必要ないわよ。真っ正面から受け立つてやるつじやない。）」

ククク、我がマスターはずいぶんと血氣盛んらしい。

「（何よ、何か文句あるわけ？）」

【クク。いや、ないな。マスターは君だ、その意に従つや。】

「（ふん、どうせ魔術師らしくないって言いたいんでしょ。）」

【いこや、君はそのままが一番強いだろ？。そのままの君が好みだ。】

「（あああ、当たり前じゃない。私は遠坂凛なのよ。）

急にビモッてビリしたのだろうか。

戦闘に支障を来さなければ良いのだが。

「遠坂さん、一緒に帰ろ~。」

「申し訳ありません。今日は調べたい事がありまして、今から図書室に向かうところですの。」

「そつか、残念。じゃあ、また明日ね。」

「ええ、さよなら。また明日。」

うむ、会話を聞いている限り大丈夫そうだな。
友人と別れ、図書室へと向かう凛の背後について移動する。

図書室には人つ子一人いなかつた。

それなりに蔵書は揃っているのだが……そういえば、自分も生前は
使用したことは余りなかつたな。

「さて、時間までここで暇を潰しましょうか。」

「それはいいが、いつまでいるつもりなのだ?」

人が全くいないことから問題ないと判断し、境界して凛に質問した。

「日が暮れるまでよ。そこまで待てば人は完全にいなくなるでしょ

うから。

相手も一般人に対する秘匿があるから、そう簡単に仕掛けてこないでしようし。」

「そうか。」

だが、私はどうやって時間を潰していくよ。

ここに仕掛けてこないのが解つてゐる以上警戒の必要はない、かといって鍛練などはできん。

「アーチャー、アンタも本読んでれば？ 知らないことだらけでしょうし。ここで少しでも現代の情報を得ておきなさい。」

それしかないか。英靈は過去の人物と言つ思い込みが強いしな。

辺りも大分暗くなり魔術師が活動するに相応しい時刻になつた。校舎内に人の気配は感じられない。

「凛。」

「ええ、もういい頃合いね。」

「行くわよ、アーチャー。」

図書室を出て、私達は校庭へと向かう。

流石の凜も緊張しているようだ。表情が少し固い。

無理もない、これから初めての戦闘を行うのだ。だが、例え死の危険がないとはいえ、そちらの方がいいだろう。

玄関で靴を履き替え、外へ出る。

その途端、チリチリと肌を焼くモノがあつた。

「ふむ、どうやら待たせてしまったようだな。」「そうみたいね。」

校門へと目をやれば、人影が一つ。

あちらも気付いたのか、こっちに向かつて歩を進める。そして、校庭の半ば近くで互いに足を止める。

目の前にいるのは予想に違わない青い槍兵、そして見覚えの無い男装の麗人としか表現できない人物。いずれも戦意に満ちた目をしていた。

「お待たせ致しました。私はこの地のセカンドオーナーたる遠坂時臣の娘、遠坂凜といいます。」

「これはご丁寧に、私の名はバゼット・フラガ・マクレニッシュ。協会より派遣された封印指定の執行者です。」

「バゼット……確かに言峰に令呪を奪われたランサーの元マスターがそんな名だつたな。

「ここのではその事件は起きたのか。となると、初めから全力でくるな。

「バゼット、挨拶はそんくらいでいいだろ。俺たちや、戦いに来たんだ。

わざわざわざわざ。なあ、そこの兄さんよ。」

そう言つて、ランサーは獰猛な笑みを浮かべ、その赤い瞳で私を射抜く。

だが、私はそれに答へず凛の側でただ佇む。ランサーは乗つてこない私に些か気分を害したようで、面白くなさそうな表情に変わった。

「確かにそうですが。全く、あなたつて人は……（ハア）」

「そうね、お喋りをする為に聖杯戦争に参加した訳じゃないしね。」

そして、全員が鬪氣を高め出す。

「おっと、まづはサーヴァントだけでやらねえか？
せつかくの戦闘なんだ、俺らだけで軽く手合わせといいつや。」

くくく、成る程。ランサーらしい言葉だ。

だが、マスターの意向を無視するわけにもいかん。

私はランサーから注意は逸らさず、横田で凛を見た。

「……いいわ。アーチャー、貴方の力ここで見せて。」

言葉を受け、私は一步前に出る。

ランサーは口の武器をその手に呼び出す。それは血のようにな紅い槍。私も自己に埋没する使い馴れた武器である短剣を右手に呼び出した。瞬間、ランサーが動いた。

「ヒュッ。」

「ハツ。」

ガキン

互いの武器が甲高い音を鳴らす。ランサーはすぐに引き、構えたままの格好で口を開く。

「流石にこれくらいじゃびくともしねえか。そつくなくなっちゃな。」

「成る程、君はランサーか。」

「そう言つテメエはセイバー……って柄じやねえな。」

て事はアーチャーか。いいぜ、自分の獲物を出しな。そのくらいは待つててやるよ。」

ランサーの言葉に構わず、今度は自分から相手に向かつて行つた。一瞬虚を付かれた表情をしたランサーだが、すぐに引き締め自分の武器を振るつ。

「アーチャーが剣で戦いを挑むか！！」

鋭い槍の攻撃が私を襲う。知っているものとは違い、速さも重さも上をいく。

だが、捌けない訳ではない。

しかし、少しでも気を抜くことは許されない。そうなればやられるのは此方なのだから。

記録の中にあるランサーの攻撃パターンと今得ている情報を、それらを『心眼（真）』で分析し、槍を逸らし・弾き・防ぎ・いなす。まさか長時間持つとは思わなかつたのだろう。時間の経過と共に、ランサーが浮かべていた余裕の表情が消えていった。

それに伴い攻撃も鋭くなり、徐々に捌くのが難しくなる。そして、とうとう私の手から短剣が弾き飛ばされる。

「たわけ。」

戦闘力を削ぐことが目的の槍が私の肩口を狙う。

だが、其が肩を貫こうとする直前で、「左手」に持った短剣で防ぐ。

「なに！？ちいつ、双剣使いか！！」

そして、私は、両手、に携えた夫婦剣《干将・莫耶》を用いて戦闘を続行する。

ランサーももう余裕の表情は見せず、身体中から獣の如き鬪氣……いや、殺氣が立ち上る。

戦闘は再び先程と同じ膠着状態に陥る。

唯一違うのは、私の両手に剣が握られていることのみ。

私の手から幾度も剣が弾き飛ばされ、壊される。だが、その都度『投影』し新たな干将莫耶を手の中に呼び出す。

この、ギリギリの戦闘において『投影』の僅かなタイムラグさえも許されないが、生前から使い続いているこの夫婦剣ならば意識せずとも、ある、と思うだけで準備されるためタイムラグなど存在しない。だからこそ、剣と槍の乱舞は未だに続いているのだ。

膠着状態に痺れを切らしたのか、ランサーは大きく槍を振るつて私から距離をとった。

「27、それだけ弾いてもまだあるとはな。」

ランサーの言葉には不機嫌ながらも、その中に隠し切れない歓喜の音が潜んでいた。

「双剣使いの弓兵なんぞ聞いたことねえ。いいぜ、名前を聞いてやる。テメエ、何処の英雄だ……。」

「そう言う君は解りやすいな。ランサーのクラスは速さに優れた英雄が選ばれると聞くが、君はその中でも選りすぐりだ。英靈の中でも三人くらいしかいまい。」

その中でも獣のごとき俊敏さと言えば、恐らく一人……」

「ほっ。よく言った。」

ランサーの雰囲気がガラリと変わる。

今までも全力を出していたことに違はないだろうが、今のランサーの目は正真正銘倒すべき敵として私の事を見ていた。

「バゼット、こつからは本氣でいくぞ。準備はいいか。」

「勿論です。ランサー。」

ランサーのマスターは手にグローブを嵌めながら応えた。
私も凛に声をかける。

「凛。君の方はどうだね。」

「いいに決まってるじゃない。絶対に勝つわよ、アーチャー。」

「無論だ。」

今度はマスターも含めて相対する。

まず動くのは、やはりサーヴァントである私達。

先程は突くばかりだった槍捌きだったが、今度は払いやフェイントも交えての戦闘となる。

更には死角からもランサーのマスターの攻撃に入る。

流石と言つか…只の拳での攻撃の筈なのだが、その攻撃力はサーヴァントに匹敵するほどだった。

二人分の攻撃をいなし続ける。不利な戦闘など慣れすぎるほど常の状態であつたため、この程度では決定打を受けるへまなどしない。それにしても、何時までたつても凛からの援護が来ないのだがどうしたのだろうか。

「オラオラ、どうしたアーチャー。一人で随分と粘るじゃねえか。
「ちつ。凛、何をしている！？」

私は怒鳴るように凛に向かつて叫んだ。
しかし、凛からの返答はハツキリしないものだつた。それに僅かながら嫌な予感を覚える。
私は攻撃をいなし続けながらも、更に凛へと声をかける。

「凛…………まさか、とは思つが…………。
「ゴメン、アーチャー…………。往古、忘
れちゃつたみたい。」

戦闘の手を休めることなく、私は思いつきり顔を引き攣らせてしまつた。

ウツカリか！？遠坂家特有のウツカリなのか！？何もこじでそれを発揮しなくてもいいだろう！？

声に出さなくとも、まいづり事なき私の本音だ。

「君は、一体、何をやっているんだ！？」

「じ、準備はちゃんとしたのよ！……只、鞄に入れ忘れただけで。

だから、援護したくても出来なかつたのよ。」

ああ、そうだな。君はそう言つ人間だつたな。だが、宝石だけが君が持つ攻撃手段と言うわけではあるまい。

そもそも、君には……

「ガンドがあるだろ？……自分の持つものすら忘れたのかね、君は。

「……………ああ（ポム）」

呑気に手を叩いているが、そんな暇があれば援護の一つでもして欲しいのだが。

漸く凛の援護も貰え、押され氣味だつた形勢をイーブンへと押し戻した。先程のやり取りで少し氣を削がれた風だつたランサーとそのマスターだが、形勢を戻されたことで霸気が戻つた。そのままでいれば楽だつたものを。

状況を確認したランサーのマスターは接近戦を苦手と見たのか、ガンドで応戦する凛の元へ向かいその拳で攻撃した。

だが、凛も負けてはおらずヒラリとその攻撃をかわす。

凛の事は心配だが、体術を修めているだろ？凛ならばさう簡単にやられないだろうと思いつつ、直す。

まあ、田の前の相手がいがせてくれるとも思えんしな。

「バゼットヒヤシでやつあつ」になるとたあ、あの嬢ちゃんも可哀想だな。」

「ふつ、それはどうかな？凛だとて体術は鍛えている。

そう簡単に決着が着くとは思わないことだな。」

「…自分の獲物（宝石・魔術）を忘れちまうような嬢ちゃんがか？」

「……それは言わないでくれ。」

戦闘をやめ思わずと言つた風に凛を指差し言葉をこぼすランサー。その指摘に頭が痛くなる思いだが、事実なだけに言い返すことはできない。

ここで2対2に移行したはずの戦いは、再び一対一への戦いへと戻つた。

三章 初めての再戦（後書き）

来ました、兄貴。

私はアーチャーの次にランサーが好きみたいですね。（といつか槍弓）
が） 危険人物

でも、書けるほどの文才はないのでこの小説では
絶対に

出ませんけどね。

書けるからといって書くとも言えませんが。
うん。まあ、相変わらず頭が腐つてることで。

四章 憧れの顯在（前書き）

自分の文章力の限界を理解した！？

四章 憧れの顯在

s i d e 涼&バゼット

バゼットの拳が次々に涼を襲う。
涼はそれを避け続ける。

バゼットに比べれば力も体力も劣る涼だが、身軽さだけは負けないとばかりに動き回る。
だが、只動くのではなく、無駄に体力を使わないよう最低限の行動だけをとる。

「接近戦はできないと思ってましたが、まだまだ見方が甘かったようですね。」

要精進と言つた所でしうか。」

「冗談はやめてくれるかしら。これ以上鍛えるなんて、生きたまま英靈にでもなるつもり？」

涼の軽口にそれもいいかもせんね、と軽くバゼットは受け流した。

降り下ろされたバゼットの拳を涼はクルリと円を描くように避け、かわされたバゼットの拳は校庭の土を抉つた。

それを見た涼は、「本当に冗談じゃないわよ」と思った。

マトモに受けければ骨の一本や一本ではすまないだろ？ 最悪、内蔵破裂が起きるかもしない。

そう凛に思わせるだけの力がバゼットにはあった。

凛も自分に『強化』をかけて対応するが、宝石を使つ本来のスタイルには程遠い為押されていた。

「それにしても、口で言つほど参つてゐるよつこは見えませんが。」

「あら、当たり前よ。遠坂の家訓は、常に優雅たれ、」

どんな状況でも無様な姿は見せられないもの。」

言葉で示す通り、凛はたおやかな笑顔を浮かべいった。

凛はガンドを連続して放つ。しかしバゼットは素早く交わし、凛に殴りかかる。

凛は今度は交わさず、自分に殴りかかつてくるバゼットの腕に自分の腕を絡ませた。

そのまま、勢いを生かして一本背負いの様に投げ飛ばした。

「ぐはっ。…くつ、なかなかやりますね。」

「そうでもないわ。只、貴女の攻撃が単純なだけよ。」

「言つてくれますね。」

（仕方ありません、やはり、あれ、を使ひべきでしょうか。）

「あら、ほんとの事を言つただけよ？

（不味いわ。今まで何とか持たせてたけど、これ以上続けば確実に不利ね。）

例え不利な状況とはいえ、心中でも、負け、と言つ言葉を使わないのはたいした精神力である。凛はマイナス思考の言葉を口にした

り思つたりすれば、それを現実にしてしまうと考えていた。
なので、現状を表現するとき以外はその様な事を言わない様に心掛け
けていた。

凛がちらりと横を見ればランサーとアーチャーの戦いは拮抗しており、マスターの勝敗がこの勝負の勝敗となりうることが予想できた。凛は一か八かの攻撃を仕掛けるべく構えをとった。

バゼットも凛の気迫を感じ構え直す。

バゼットの見る先では、凛が緊張した面持ちで制服の胸の部分を握りしめていた。

バゼットは其を緊張から来る動悸を押さえるための行動だと判断を下した。

しかし、それは違つた。

交戦の最中、凛は自分の胸元で揺れるものがあるのに気付いた。それはペンダントだ。

そのペンダントは小振りなもので、本物の宝石を使用した非常用に着けていたものだった。

例のウツカリで忘れていたのだが、今回はそれがいい方に働きバゼットは凛の手元に宝石があることに気付いていない。

凛はペンドントの宝石を使うことを決意するが、今取り出しては気付かれ警戒されかねないと行動を取りかねていた。

バゼットの方も今飛び込むのは危険だと本能が警鐘を鳴らし、同じく行動を起こせないでいた。

にらみ合いの状態となり、数十秒とも数分ともとれる時間がたつた。

その時、あり得ないものが聞こえた。

それは、人の声である。

凛は驚愕から、バゼットは秘匿の観念から同時に声の聞こえた方を

見た。

しかし、二人の視線の先に有つたのは人の姿ではなく、ひとつ強烈な光だった。

side アーチャー＆ランサー

「へえ、思ったよりやるじゃねえか。あの嬢ちゃんもよ。」

「だから言ったではないか。」

警戒を解かないまま会話をを行うアーチャーとランサー。

視線はマスターの方を向いていても、お互いから注意を逸らすような愚を犯す事はない。

「さあてど。結局は最初とおんなじになつちましたが、続きといこ
うぜえ。」

「くつ、そうだな。君に負けていては凛に示しがつかんからな。」

「言つじやねえか、弓兵。」

「それがどうした、槍兵。」

二人はニヤリと笑い、動き出した。

戦いは、初めの戦いの焼き写しの様に進む。

しかし、先程と違いアーチャーはランサーの動きにほぼ対応できていた。

「はつ、弓兵の癖に剣で俺と対抗できるとはな。気に入つたぜ、テメエ。」

「ほう。君のような存在に気に入られるとは、私も存外すてたものではないな。」

「余計にテメエの正体が気になつてきたぜ。」

「私が正直に言つとでも？ 知りたいのなら自分で調べることだな。」

知る事は出来んと思うが、ヒアーチャーは声に出さず思つた。
ランサーはそんなアーチャーの返答にますます嬉しそうな表情を浮かべる。

本来の武器を使うことなく自分と相対することができるので戦闘力。それだけで自分と死合える程の物を持っていると確信し、ランサーはアーチャーを好敵手と認めた。

ランサーの宝具は『真名解放』すれば必ず相手の心臓を貫く宝具で、殺しが出来ないこの聖杯戦争で使うことは出来なかつた。
いや、するつもりはなかつた。

戦いを至上とするランサーにとって、存分に戦わないまま殺すなどあり得ないことだからだ。その相手が正面からぶつかれる相手となれば尚更である。

何時までも続けたいとすら思える戦いが進められる。

互いの武器が互いの身体に浅い切り傷を作りあつも、それ以上深い傷は生まれない。

「はは、楽しいねえ。」

「こんなことを楽しいと感じるのか？」

「あつたりめえじゃねえか。」

攻撃・防御の手は休めず会話する一人。

息すら切れてないのは流石サー・ヴァントと言つたところか。

「オメエだつて楽しいから笑つてんだろ?」

「笑つている…………？」

アーチャーは氣付いていなかつたが、正面から相対しているランサーは見ていた。

アーチャーの口許が楽しそうに笑つていたのを。

指摘されてそれに氣付いたアーチャーは、同時に自分の感情にも気が付いた。

「楽しい、か。ああ……そうかもしれないな。

確かに、君相手にここまで戦えて嬉しいのかもな。」

「はあ。その様子じや、俺の真名は本当に知られてる見てえだな。」

それも上等と、悔しさも力に変えて更に苛烈な攻撃を行う。

攻撃を捌きながらアーチャーは違和感を感じた。

何やら、感じる気配が多いのだ。その時アーチャーは衛富士郎がいるかもしれない事に思い至つた。

例え世界の根本が違つても、流れが完全に違うとは言えないのだ。

焦りつつ校舎の方へ目を向ければ人影が、二つ、。

それに動搖したアーチャーは一瞬動きが鈍ってしまった。
それを見逃さなかつたランサーはアーチャーの武器を弾き飛ばした
が、アーチャーが一瞬でも気をとられたものが氣になり自分も今気
付いた気配の方を見た。

二人の人影。それは、衛宮士郎と柳洞一成だつた。

しかも運が悪いことに、弾き飛ばされたアーチャーの武器がその二
人に向かつて飛んでいつていた。

ランサーは一人に向かつて走り出した。

例え、不可抗力での殺人が聖杯によつて許されていても、ランサー
にとつて意にそぐわない殺しは寝覚めが悪いからだ。

しかし、初動の遅れはいかんともし難く、ランサーが追い付く前に
相手に当たつてしまふことが簡単に見てとれた。

アーチャーが自分の投影品である其を消せば良いことを思い出した
のは、ぶつかる直前でありそれも間に合いそうにもなかつた。

……凜のウツカリがうつつたのかアーチャーよ。

「「うわあー!?」」

二人の人間が悲鳴をあげた瞬間、二人を中心に眩い光まばゆが走つた。

咄嗟に目を瞑つてしまつた一組の主従の開いた目に入つてきたのは、
金の髪に碧の目みのの少女だつた。

そして、手には

……箸と茶碗？

現れた少女は持つていた箸でアーチャーの武器を掴んでいた。

「（モグモグ）ここは何処ですか？（モグモグ）おや、シロウでは（パックン、パクパク）ありませんか。もしかして（モグモグ）シロウの召喚ですか？」

「あつ、多分…………って、セイバー！？食べるか喋るかどっちかにしろ――行儀が悪いぞ！？」

士郎が自分の手を確認したところ、右手に確りと令呪が浮かんでいた。

他の者達の間にはあまりもの出来事に、ベリバーな空気が流れた。

「セイバー、ですか？あれが？」

「信じられないかもしないけど、本当よ。」

「あ……まじか？」

「本当なのだろ？せつと知り合このマスターもそう言つてることだしな。」

士郎とセイバーが言い争つてるなか、今まで戦つていた四人は士郎と一緒に元に集つていた。

もう戦う雰囲気も何も無いからだ。

再び見れば、セイバーの茶碗に盛られていた山盛りの白米がいつの間にか消えていった。

言い争つてゐる間に食べたのか？腹ペコ王恐るべし…………

「それでは、私は一人の相手をすればいいのでしょうか。シロウ。」「いやいや、またセイバー。これは俺達が乱入しちゃった形になつちゃつたから、そういうんじゃないんだ。」

「むっ……そうですか。」

少々不機嫌そうに何も持っていない手をセイバーは下ろした。

「白けちまつたな。今回はここで終いにしとくか?」

「そうですね、ランサー。、モチベーションが下がつてしまつたのでこれ以上は無駄ですね。」

「しようがないわね。私たちも帰りましょうか、アーチャー。」

「…………確かに、これは仕方ないな。」

そんな彼らの会話に、士郎は申し訳なさそうにした。
直前までは部外者であり、邪魔をする気などなかつたのだが結果的に邪魔をした事になつてしまつたからだ。
それが、自分のせいではなかつたとしても。

「あの…………その、悪かつたな、邪魔しちゃつて。
お詫びで言つちゃ何だけど、今ここにいるつてことは晩飯末だだろ
?家で食つてかないか?」

その招待に四人は思わず顔を見合させる。

こちらが危険に晒したことで謝りこそすれ、自分達が謝られるなど思つていなかつたからだ。

まあ、アーチャーだけはつづら予想してたかもしれないが。

「つたぐ。そう言われちまつたら断れねえじゃねえか。ゲッシュに誓つてるからな。」

「そうでした。と言ひことは、断る理由は最初からないと言つ説ですね。」

ランサーとバゼットの二人はその申し出を快く受け入れた。バゼットの言う通りゲッシュによつて断れないからだ。まあ、それだけでなく純粹にお腹が減つていたから、と言つのもバゼットには含まれるのだが。

簡単に決まつたこちらに反して、なかなか決断が下らないのが凛とアーチャー。

アーチャーは黙して凛の決断を待つが、その気持ちは衛宮邸に訪れたいと思っていた。

理由はセイバーである。

衛宮士郎がセイバー　アーサー王を召喚するのは、繋がり故に当然の事で不思議なことではない。（そう、例え世界が違つても、セイバーと衛宮士郎は必ず出会うようになつてゐるのだ。）

アーチャーを驚愕せしめたのは、セイバーが手に持つていたもの。箸と茶碗、それは、ここに召喚される前から現界していた事を示している。

何より、衛宮士郎、が、セイバー、を知つてゐた。そして、凛も彼女がセイバーとすることを知つてゐる。

それらを含め、衛宮邸に訪れれば理由がわかるのではないかと思つたのだ。

だがアーチャーは話さないし、勿論表情にも出さない。

ただ、凜の答えを待つ。

「確かに今から帰つても」飯は作りなきやならないし……でも士郎は今敵マスターになつたから、不用意に家にいくなんて……そう言えば最近士郎の料理食べてない、って違う違う。あつ、でも動いたからお腹空こちやつたな……」

たかが食事の誘い一つです」こ恼みよつである。

一寸引きつとも士郎は凜に話しかける。

「遠坂。あつちは来るつて言つてゐるし、お詫びつて言つてゐる方向にしかしないつてのもあれだろ?」

だからさ、遠坂も来てくれると嬉しいんだけど。」

「そ、そこまで言われちゃ仕方ないわね。呼ばれてあげよつじやないの。」

満更でもなさうに承諾した凜。

「それと、一成もどうだ? 同じく巻き込んじやつたからな。」

そう、忘れていたが此処には一般人の一成もいたのだ。

‘魔術師の世界’を見られたにも関わらず、士郎…はともかく、凜もバザットも何もしようとはしなかった。

「む、タゲの招待は有り難いが…」

「土郎、説明はアンタがしなさいよ。友達なんだから。」

「わかつてると、それくらい。」

説明は家でちゃんとするからさ。」

「つむ、了解した。」

耐えることもまた修行なり、と呴く一成。

アーチャーはやはりと叫つか我慢できなくて、それとなく凛に聞くことにした。

「凛、少しいいか？」

「ん~、どうしたのよアーチャー。」

「魔術は秘匿するものだろ? いいのか、簡単にはいえ漏らしても。」

「いいんじゃない。確かに全く知らない奴だったら記憶を消してたけど、一成はそれなりに身近な人間だしね。多少説明してた方が逆に安全なのよ、ああいうタイプはね。だから、言いふりすような奴でないことも知ってるし、何ら問題なし。」

「どうか、と納得するアーチャー。」

そして、見られた場合の選択として記憶を消すことしか上がらなかつたこと、再度こここの魔術師のあり方と言つものを認識した。同時に、とてつもなく、優しい、世界だと叫ぶ」とも。

「あまり遅くなつては失礼です。そろそろ出発しましょう。」

「和むのはいいが、取り敢えずこつから動くつや。」

「そうですね。シロウ、早く戻りましょう。お腹が空きました。」

この後の動きが決定したなら早く行動に移そと声を出す二人。
と言つたか、セイバーよ。君は召喚されたとき食事をしていただろう。

「そうね、行きましょ土郎。」

「ああ。一成の家への連絡は家についてからな。」

「うむ。…………ところで女狐よ、貴様口調が違わぬか。」

一成のその指摘にしまつたと言つ表情を浮かべる凜。

反して、一成は勝ち誇つたような表情を浮かべる。

「フハハハハ。成る程、それが貴様の素と言つわけか。貴様を‘お
しとやかなお嬢様’としか知らぬ生徒が知つたらどうなることか。
‘あら、それは脅迫なのかしら？生徒会長ともあろう人が脅しをか
けるような方とは思いませんでしたわ。’

「ふん、こんなもの女狐の行動に比べれば脅迫にもならん。」

「あら、私そんな恐ろしいことした覚えなどありませんわ。」

二人は生き生きとした表情で、余人の入り込む余裕などない殺伐と
した会話を行つ。

その他の人間（一部人外含む）は一生懸命そちらを見ないよつてし
て衛宮邸への道程を歩く。

一人の背後に竜と虎が見えるのは氣のせいだろう。そこに違ひない。

物凄く精神を削られる道程をこなし、彼らはヒーリング衛宮邸に到着した。

目の前に広がるのは純正の日本家屋である。

始めて見るランサー や話でしか知らないバザットは感嘆の声をあげた。

「これは、なんとも素晴らしい。」

「面白い建物だな……っと、何だか中が騒がしいぜ？」

ランサーの言う通り、衛宮邸の中から言ひ争つような人の声が漏れ聞こえていた。

アーチャーはその聞き覚えのある、ありすぎる声に体がうち震えた。だが、それが歡喜からなのか恐怖からなのか自分でも判断がつかないでいた。感情が、思考が纏まらない。

それは、遠坂時臣を見たときに予想できた筈の事である。しかし、アーチャーはその可能性に全く気付けないでいた。或いは、あえて気付かない振りをしていたのか……

その横で、理由と言つか原因と言つかともかく、何が起きているのか理解できている士郎とセイバーはため息を吐いた。

「あ～、何て言つか……とにかく書はないから。」

「そうですね、害はありません。害は……本当にそうでしょうか？」

セイバーの最後の言葉に一寸哀愁を背負いつつ玄関に向かう士郎とセイバー。

そして、その後ろに付いていく一組の主従+。

士郎が玄関を開けると同時に叫び声が彼らを襲つた。

「離してってば。私は士郎のところにいくのー?」

「セイバーが召喚されたんだから士郎は大丈夫だよ。」

「なに言つてるの。セイバーが召喚されたって事は、シロウにそれだけの危険が迫つてたつてことじやない。私が助けに行かないと。」「だから大丈夫だつて。セイバーが信用できないのかい?きっと無事に帰つてくるさ。」

「そんなのわからないじやない。セイバーが強くても、シロウは半人前なのよ。怪我をするに決まつてるわ。」

彼らの目に飛び込んできた光景。それは、白くて長い髪をした赤目の少女を黒目黒髪の草臥れた雰囲気を持つた男が後ろから押さえている光景だった。

もしこれが個人の家の中で起きていることになかつたら、確實に警察を呼ばれていたであろう姿だ。

士郎は少女が言った、半人前、や、怪我をする、と言つ台詞に地味に傷ついていた。

だが、客人もいるからと氣力を振り絞り一人に向かつて声をかけた。

「あ～……とりあえず無事に帰ってきたからさ、玄関先で騒ぐのは止めよ。うん。」

声をかけられたことで漸く士郎が帰っていたことに気付いた二人。男の方は安心したのか、士郎の姿を見た瞬間体から力が抜けたようだった。

それを少女は見逃さず、男の手を振り払つて士郎の方へ駆け寄り……

「シロ――――!
「ぐはあつー?」

お腹田掛けて思いつきりダイブした。別名、ボーティアタック。男は仕方ないなあ、といった表情を浮かべるだけで、これがそれなりに日常の一部として展開されていることが理解できた。

「ところで、後ろの人たちはどうしたんだい。士郎?」
「お久し振りです。今日は士郎の好意で夕飯に招かれまして。」「ちょっと俺が勝負の邪魔しちゃって、そのお詫びに夕飯を作らうと思つたんだ。

一成はそれに巻き込んだじやつたから、その説明もかな?」

男は仕方ないなあ、と言つ表情をじこじこで話すのも何だからと見て客間に案内することにした。

客間にまた別の人間が座つていた。

姿は士郎のそばにいる少女にそっくりな妙齡の女性であった。

「あら、無事に帰つてきたのね。安心したわ。」

女性は士郎の姿を見るなりホンワリとした笑顔を浮かべた。
士郎はぱぱつの悪いといつた表情を浮かべ、軽く謝つた後そそくさと
台所へ向かつた。

「それで、そちらの方々はどうしたのかしら？」

「シロウがご飯に誘つたんだって！！」

「そう言えば自己紹介がまだだつたね。」

男はそう言つて座布団を用意し、人数分を机の回りにしいた。
彼らは進められるがまま席につく。

「では、招かれた私たちの方から自己紹介させていただきましよう。
私はバゼット・フラガ・マクレミッチです。」

「へえ、君が。有能な封印指定の執行者だと聞いていたよ。」

「いえ、私などまだまだです。それで、彼が私のサーヴァントである…」

「ランサーだ。少しの間だが、宜しくな。」

衛宮邸には訪れたばかりだと言つのに、二人はもう馴染んだようにな
寛ぎかけていた。

「これも屋敷と住む人間の力だろうか。

「私の事は全員知ってるからいいとして。隣のこいつが私のサーヴ
アント、アーチャーよ。」

「…………（ズズズ）」

凛がアーチャーを紹介するが、アーチャーは特に反応せずいつの間にか入れたお茶を飲んでいた。勿論人数分用意済みである。流石ブラウニー。

凛はアーチャーが無視したことの一寸イラッとした。
眞実は無視したのではなく、沸き起こる感情をお茶を飲むことで押さえていたのだが。

「ふむ、これは自分もした方がいいのだろうか？名は柳洞一成と言
う。」

一成も自己紹介を行い、次に屋敷にいた人間が紹介を始めた。
始めに口を開いたのは男だった。

「先ず、今食事を作つてるのは僕の息子、衛宮士郎。そして僕は父
親の衛宮切嗣。よろしく。」

「な！？貴方がかの有名な、魔術師殺し、なのですか！！」

「ああ、懐かしい呼び名だね。でも今は廃業してるから一寸違うか
な？」

男 切嗣の名を聞いた途端、バゼットは驚愕の声を挙げた。
それほど、男の名と二つ名は魔術師によく知られているのだ。
だが、そう言わてもあまり理解できないランサーと一成とアーチ
ヤー（演技）。だが、挨拶の途中であるため沈黙を守る。

「私の名はアイリスフィール・V・A・衛宮と言います。切嗣の妻
です。」

「私はセイバー。先程シロウのサーヴァントになりました。
「私はイリヤスフィール・V・A・衛宮よ。シロウのお姉ちゃんな
んだから。」

少女 イリヤは「王立ちでヒツヘンと胸を張る。

しかし、身長も相まって微笑ましい光景となっていた。その身長は
……主張しなければ士郎の姉とは解らない、とだけ言つておひづ。

挨拶も終わったことを確認し、ランサーは先程の紹介で疑問に思つ
たことを聞こうとした。

「なあ、一寸いいか？」

「ん？ なんだい、ランサー。」

「いや、随分と物騒な二つ名を持つてんなと思つてな。」

急に話しかけられた事に少しの疑問を覚えた切嗣だったが、質問を
聞いて納得した。

確かに聞いただけでは切嗣の一いつ名は余りにも過激であった。
少し説明しようと口を開きかけたとき、士郎が台所から戻ってきた。

「お待たせ、出来たぞ……て、タイミング悪かつたか？」

「いいや、そんなことないさ。と言つわけで、後にして構わない
かい？ランサー。」

「おお、いいぜ。つてか、皿洗うだな。」

ランサーの視線は料理に釘付けだった。
見たことのない料理の数々。そして食欲をそそる香り。
食事を終えている衛宮家の三人以外は話を後にして、目的でもあつ
た食事を先に取ることにしたのだった。

四章 憧れの顕在（後書き）

衛富家総出演です。

いやー、ことなこととして活かせるのか？自分

そして早くもこの後の展開に困ります。…

ここから結構自由に捏造しやすくなっちゃうんで、ねえ。

五章 大説明会（？）（前書き）

今日はタイトル通りとなつてます。

つまり、余り話としては進んでません。

そして再びやつちやつた……

今回で最後と思うので、うん、本当に。

9月25日

意見を頂いたため、少し改訂しました。

これで少しでも違和感が少なくなるといいのですが。

此れからも独自設定を加えつつ違和感のなるべく少ない様に書いていきますので、よろしければお付き合いくださると嬉しいです。

此れからも独自設定を加えつつお違和感のなるべく少ない様に書いていきますので、よろしければお付き合いくださいると嬉しいです。

一応チキンはーとでもあるので、お手柔らかに……

五章 大説明会（？）

Side 衛宮士郎

目の前では俺が作つた料理を食べる五人。

それにしておいて、食いつぶりたな
青いのはたしか…ランサーだ
つたよな。

セイバーもさつき食べてた筈なのに、まだ食べるんだ

でも、同じサーヴァントでも違うんだな。残りの一人、えっとアーチャーは必要ないとか言って食べる気配はないし……セイバーが其を嬉々として食べてるし。

「 そうだよ、セイバー。まさか自分が聖杯戦争の参加者になるなんて。
しかも、召喚に必要なことなんてなにもしてないのに、何故か召喚
に成功してるし。何でなんだろうな。」

と言うか、絶対すぐにリタイアするに決まつてゐる。

こんなことになるんなら、学校に残つとくんじやなかつたなあ。

—

「済まないな、衛宮。」

「いいって、これくらい。」

俺が今何をしているかと言つと、ストーブの修理だ。
学校の予算的に修理や買い直しが出来ないものを、一成の頼みで修理をしてる。

と言つても俺はあくまで素人だから、何とか長引かせる程度の事が出来ないんだけどな。

「ふう、これはもう大丈夫だ。とりあえず今年一杯は大丈夫だと思うぞ。他にはどうだ？」

「つむ、かたじけない。あと二つほど緊急を要するものがあつてな。頼めるか？」

「ああ、いいぞ。」

一成も頑張ってるが、学校の方ももう少し予算を考えてくれてもいいと思うんだけどな。

まあ、人助けをすることに否はないんだけど。人に喜んでもらえるのは俺も嬉しいし、な。

「よつと。じゃあ、次の場所に案内してくれ。」

「つむ、感謝するぞ衛宮。」

そして俺達は次の場所へ移動した。

「はあ、終わったぞ一成。」

「おお、流石だな衛宮。此で暫くは安泰といつものだ。」

「大袈裟だつて。応急処置でしか無いんだし。」

「いや、それでもだ。」

「はは、サンキュー。……つて、うわ。もう真っ暗じゃないか。」

窓から外を見れば、日はとっくに暮れていた。

俺達は慌てて帰宅の準備をし、下駄箱へむかつた。

「悪かつたな、遅くなっちゃて。」

「いや、もとは此方から頼んだことだ。此方こそ済まなかつた。」

とにかく急いで帰ろうと一成と会話を交わしながら外へ出た。
そこで不思議な音を聞いた。

なにか、金属同士がぶつかっているような甲高い音だ。

俺は一成と一緒に音が聞こえる方、校庭の中心へと向かってしまった。

そこで見たのは男女一組ずつが戦っている光景。

隣にいる一成は日常とかけ離れた目の前の映像に呆然としていたが、
俺はすぐに理解した。此が聖杯戦争の対決だと言つことだ。

「（まよい、気付かれる前に離れないと。）」

俺は一成を促してすぐに離れようとしたが、一足遅く赤い剣士（後で剣士でなくアーチャーだと知った。）の剣が弾かれ此方に向かって飛んできた。

それに、一成だけでなく俺も動くのを忘れてしまった。

硬直したかのように動かない俺達に向かつて、短剣は容赦無く近付いてくる。

俺と一成のどっちに向かつているか俺程度の力量じゃ解らないけど、確実にこっちへ向かつていた。

このままじゃいけない。俺なら兎も角、一成が怪我をするなんて。俺が修理に時間をかけたから。いや、そもそも物だけ聞いて帰つて貰つていれば良かつたんだ。（だって、聖杯戦争が始まることを知つてたのに。）

俺のせいで誰かが傷つくなんて、許すことができない。
だって、爺さんみたいな にはなれなくとも、爺さんが俺を救つてくれたみたいに誰かを救えるようになるんだから。

そう思つてはいても、硬直した身体は微塵も動いてくれない。
にたくない ぬ訳にはいかない。

「「うわあー？」」

結局動けないまま短剣が俺達を襲つた と思つた瞬間右手に激痛が走り、辺りを黄金の光が包んだ。

と思った瞬間右手に激痛

思わず目を瞑つた俺の耳に、いつまでたつても短剣が人を切る音は聞こえなかつた。

恐る恐る田を開いた先にいたのは知つてゐる姿だつた。彼女は器用に手に持つてゐた箸で短剣を握んでいた。物は氣にしない、氣にしないつたら氣にしない。

思いがけずマスターになつた俺だけど、聖杯戦争の邪魔をしたこと
に変わりはなくお詫びに食事に誘つた。

~~~~~

うん、やっぱり今日のは俺が悪いよな。

「うん。やっぱり土郎のご飯は美味しいな。」

相変わらず大食いだな、藤ねえ……

「うへ、可でーんが、藤ねえ?」

「フツフツフツ、お姉ちゃんが土郎の『』飯を逃す筈ないでしょ~。」

ああ、そうだよな。藤ねえがご飯の気配を逃す筈ないよな。  
それはもう諦めるから、せめて静かに食事をしてくれ……

s i d e   o u t

テーブルの上にある料理がなくなつて一息ついた頃を見計らい、衛宮切嗣が口を開く。

「さて、じゃあさつきの続きだけビ。」

「なあ、この姉ちゃんがいてもいいのかよ。」

ランサーが食事中に現れた女性 藤村大河が要るのに魔術のこと  
を話していいのかと言外に尋ねる。

切嗣は一寸困ったような表情をし、大河を見つめているだけだった。

「問題ナッシングだよ。実は魔術と言ひものがあること位は知つ  
てるのだ。」

エツヘンと胸を張つて大河は言った。

言葉から大河が魔術師ではない事を読み取つたバゼット達は、何故  
知つてゐるのかと首をかしげる。

「それは、今回の私達のようない事故で知られた、と言つた事なのでしようか？」

「いや、一寸言いにくいんだけどね……何て言つか。」

「ああ、執念つて恐ろしいよな……。」

何となく理解できた者や知つていた者は、同情の眼差しを彼等（衛宮家）に送つた。

大河の方を見てみれば。

「私に隠し事してた切嗣さんが悪いんですよ。それに、私だって家族のようなものじゃないですか。」

「はは、いつ言つてね……此れも一種の不可抗力かな……？」

あつと恐ろしきまでのしつゝせでついて回つたり覗き見たりしていたのだらう。

会つたばかりのバゼットとランサーにもそう思わせるバイタリティーを有していた。

「じゃあ続けるよ。何故僕が、魔術師殺し、と呼ばれてるか、だつたね。」

「そういや、俺も理由は知らないな。」

「なんと、衛宮の父上殿は仰々しい一つ名を有しておられたのか。」

「……あんまり、人に言えるような事じやないんだけどね。」

切嗣はどこか痛みを感じてゐるような、悲しみを抑え込んでゐるよ

うな表情を浮かべ言つた。

だが、その表情は洞察力に優れた人間が辛うじて解る程度なもので、気が付いたのはサーヴァントとバザットだけであった。

「僕は十年前まで、あるものを目指していたんだ。」

「あるもの?」

「それはね…正義の味方だよ。」

表現は悪いが、その幼稚さに初めて聞いたもの達は切嗣の顔を見た。しかし、切嗣の表情は真剣そのもので、それが茶化しているものではないとわかり静観する体制をとる。

「正義の味方を目指してた僕は、所謂悪者達をやっつけるために行動していたんだ。と言つても、僕の目的は法で裁けない魔術師に対してのみ何だけど。」

魔術を扱うものにとつては、一般人に知られること無く何かを成す事は容易である。

それは即ち、悪事を成したとて一般的な証拠がないと言つことである。

「最も基本な事として、魔術師が一般人に手を出すことは禁忌とされているんだ。」

魔術に関する事を今日初めて知った一成のために、切嗣は基本から話す。

それはアーチャーに軽い衝撃を与えた。

アーチャーが生前相対してきた魔術師は目的の為なら例え命であろうとただの道具としてしか扱わないもの達ばかりだったし、それが常識に近いものと記憶していた。これも磨耗の影響なのだろうか。

だが魔術師のあり方として遠いとも言えない。何故なら魔術師とはすべからく、血の香り<sup>モノ</sup>がする生物なのだから。

アーチャーは人知れず拳を握りしめていた。

「でも、決まりがあつても必ずしも守る人間ばかりじゃない。魔術の研究とは己を研磨して進めるもの、だけど人体が持つエネルギーを使って研究を行うものもいたんだ。」

「人体のエネルギー、ですか？」

「何か、嫌な予感がするよ……」

一成は不思議そうに聞き返し、大河は本能で嗅ぎとつた。

「簡単に言えば、命かな？」

更に細かく言えば魂だつたり血液だつたり、果ては生かし続けたまま生命エネルギーを摂るものだつたりするのだが、それは知らないものとして敢えて簡潔な物言いをした。

この場にいる他の魔術師にんげんも切嗣の意図を理解して口を挟むことはしなかつた。

「それで、僕はそういう人間を調べあげて正義の為について倒していくんだ。……今思うと、何てバカなことをしてたんだろうと思うよ。」

切嗣は目を伏せながら嘲つ。

気まずい沈黙が続くかと思われたが、呑気な大河の声が其を払拭した。

「切嗣さん、調べ上げたってそんな簡単にわかつたんですか？私はスッゴい大変だつたのにい。」

「それはね、魔術にいきるものはえてして科学に弱いからだよ。例え高度な魔術的防御を施していても、魔術的要素を含まないものに對しては全く無防備だからね。」

切嗣は調子を取り戻したように大河に言葉を返した。

「んでよ、それと、魔術師殺し、の異名と何の関係があんだ？」

ランサーは自分がした質問の答えがわからず、再び尋ねる。

「それは僕の魔術礼装が理由なんだ。詳しいことは言えないけど、

ある魔術を施していくてね。これを使うと魔術師が魔術師である為のもの 魔術回路を破壊することができるんだ。」

「成る程な、魔術師としての人生を殺すから、魔術師殺し、つてわけか。納得したぜ。」

その魔術礼装がどんな物であるかは解らないが、恐らくは回路を破壊するだけにとどまらなかつた事もあつただろうと非一般人は推測した。そして、それは当たつている。

衛宮切嗣の魔術礼装は銃である。普通の魔術師は科学になど頼ることはないのだが、魔術使いを公言している切嗣にとつて使うことに躊躇いはない。

銃を使うと言つことは、当たり処によつては致命傷になる。つまり、殺してしまうと言つことだ。

この事をよく知る者達は、だからこそ一つの意味で畏怖を込め、魔術師殺し、と呼んでいる。

魔術師としての禁忌とされている殺人を犯している切嗣には、本来ならば魔術協会から何かしらの手が伸ばされる筈である。だが、そこで切嗣が手を出していた人物が関係してくる。

その魔術師達は悪辣なことをしているという事は判つても、表だつた行動をせずその魔術防御により協会は証拠を掴むことは出来なかつた。だが、放置していれば神秘の漏洩に繋がりかねないのは想像に固くない。そんな魔術師達を、殺し、回つていたのが切嗣と言うわけだ。

協会は自分達の手に負えなかつた者達と対峙する切嗣を黙認する事で、対処できなかつた事実をないことにしてなのだ。

切嗣は、魔術師を殺す、が魔術回路を持たない者は魔術師とは言えない。

魔術師でない人間は協会に所属することはできず、また存在もしない。

そして存在しない人物は殺せない。つまりはそういうことだ。

「そんな事を続けていたけどアイリと出会い、十年前の聖杯戦争に参加してそれは違うと漸くわかったんだ。

ただ、自分にとつての正義を押し付けてるだけに過ぎないってね。

……聞いていい話じゃなかつたろ？」「

「そんな！？貴方の活躍は執行者な中でも語り継がれています。その様なこと仰らないで下さい。」

自らを罰するよつて言ひ切嗣だが、バゼットはそんなこと無いと遮つた。

そこで土郎は聞き覚えの無い単語を耳にし、思わず呟いた。

「執行人？」

「あれ、教えてなかつたかい？」

そして、それに素早く反応したのはやはりと言ひつか切嗣だった。

「では、私の方から説明させて頂きましょう。」

「ああ、そうだね。本人の口からの方が解りやすいと思つじ。」

バゼットは一つ咳払いをし、徐に口を開いた。

「執行者というのは、厳密に言えば封印指定の執行者というもので、言葉通り封印指定にされた魔術師に対処する人間の事を指します。」「ふむ、封印指定とは何やら穏やかではないよう思つのですが。」「う~。まだお話続くの~。」

バゼットの封印指定といふ物々しい表現に、眉を寄せながら一成はついと呟いた。

大河はさつきから続く難しい話（？）に辟易したよつて、テーブルに突っ伏している。

そこで暴れられては堪らないからと菓子（貢物（笑））を大河の前に置いた。

寧ろ、今まで暴れなかつたのが奇跡だと思うのだが。

「確かに少々表現は大袈裟ですが、そこまで大したことではあります。せん。

封印指定と言うのは一つありますて、一つは今後二度と出てこないだろう、技、を持つ魔術師を指します。」

へえ、と土郎は声をあげる。そして、そんな技を持つ奴は凄いな、なんて暢気に考えていた。

アーチャーにとつては封印指定と言つ言葉は余り聞きたくない単語であった。

それもそうだらう。何しろ生前の最後の方では自分が封印指定にさ

れ、命を狙われるのが常の状態であったのだから。

だが、魔術師の在りようが違う此処では、きっとこれも違つのだろうなど冷静に考えていた。

「技は色々ありますが、一番わかりやすいのは固有結界ですね。そんな魔術師達に、その技を後世に伝えるために情報の提供をしていただきます。勿論、すんなりと受けた頂けるのは稀ですが。その封印指定の魔術師達を迎えにいつたり、護衛をしたりするのが我々執行者と言つわけです。」

「へえ、やあほう、やら感嘆の声をあげる一成達。執行者と言つ存在がが持つであろう力量を何となくとはいふ感じたのだ。

「一つ目は禁忌を犯した者達の事を指しています。

魔術師の禁忌を犯した者はすべからく拘束され、協会本部でもある時計塔へ連行することになります。しかし、そう言つ者は全力で抵抗し戦闘になることもあります。その場合、力ずくでの対処もやむをえません。また、その様なものは魔術師としての力量も高いものばかりですので、生半可な人間では対処できません。

それに対抗する事を含め、執行者には戦闘力の高い者達だけが選ばれることになります。」

「へえ、凄いんですね。バゼットさんは。」

「おうよ、バゼットはスゲホザ。なんせ、素手で英靈とやりあえるからな。」

ニヤニヤしながら言ったランサーの言葉を聞いたこの場にいた人間は、空いた口か塞がらなかつた。詳しくは知らなくても話から人以上である存在と対等と聞いた一成達もしかりだ。

たが、さつき戦闘したばかりの凜やアーチャーは身を持つて知つたため、それほど驚くことはなかつた。逆に、あれで対峙できないと言われた方が納得出来ないとすら思つていた。

「いえ、私などただ力があるだけです。それに、一人で行えることなど限られていますし。その意味でも、全てを一人でこなしていた衛宮切嗣と言う人間は、執行者にとつても憧れに近い存在となつています。」

そう、これもまた切嗣が処罰されない理由の一つである。

‘協会’、という集団でさえ得ることの出来なかつた情報を科学技術を巧みに使って（盗聴、盗撮 e t c）入手し、封印指定の魔術師が公に出る前に対処する。

協会に属してないとはいって、執行者と同等の働きを評価しないわけにはいかなかつたのだ。

質問への回答が終わり、食事もすんだ今解散の空気が流れ始める。元々は聖杯を奪い合う敵同士なのだ。

だが、そこでアーチャーが動いた。自分の疑問を聞くにはここしかないと感じたからだ。

本当であれば他の誰かがするであろうと思つていたが、誰もその事に言及せずについたため自分で聞くことにしたのだ。

「少し私から聞きたいこともあるのだが、いいかね？」

今まで静かに話を聞き、喋ろうとする素振りすら見せなかつたアーチャーが口を開いたことに一同は軽く驚く。

そして、聞きたいことはなんなのだろうかと興味を抱いた。

アーチャーの視線は切嗣の方を向いていた。

「えっと、僕にかい？それで、聞きたい事つて……」

「そこ…………セイバーに関してのことなのが。」

「そこの、と言つ言葉でセイバーを指差しながらも、視線は切嗣に向けながら言つ。

当のセイバーは大河に『えられた筈の菓子を奪い合いながら食べていて、自分の事が話題に上つたことに気付いていない。

「セイバーがどうかしたのかい？」

「あっ、分かつた！？セイバーに一日惚れでしょ、アーチャー。だめよ、セイバーはあげないからね。」

途中でイリヤが茶々を入れるが、アーチャーは苦笑いを返すだけに留める。

その反応の薄さに、つまんない、とすぐに諦め大人しくなつた。

確かにアーチャーは士郎であつた時にそう言つ感情を抱いていた。しかし、それは、セイバー、であつて目の前のセイバーではない。同一人物であつてもアーチャーにとつての彼女はただ一人だけなの

だ。もう、余裕とは出来ないとしても……

「シロウだつたらすぐに赤くなつて慌てるから面白いの。」

「イリヤー！」「こら、イリヤ。士郎も大人しくしなさい。  
済まないねアーチャー、それで？」

「校庭でその小僧に召喚された時、手に食器を持っていたのが気  
になつてな。

あの時に召喚されたのであれば、あんなものを持つてるのは可笑し  
いのではと思うのだが。」

小僧と表された士郎はムツとし、コイツは好きになれないなど感じ  
た。

矢張と言つべきか、‘士郎’と‘アーチャー’で有る限り相容れる  
ことはないのだろう。

切嗣はアーチャーの洞察力の鋭さに流石英靈と思つた。

だが、目の前（食卓）にこれでもかと言つほどヒントが転がつてい  
たことに気付き、その指摘も当然かと思つた。

「そういうやうだな。いや、あんまりにも衝撃的だつたんで、逆に  
忘れてたわ。」

「そう言えは、遠坂のマスター「凜で良いわよ。面倒臭いから。  
では、御言葉に甘えて。」リンもセイバーの事を知つていた  
みたいですが、もしや以前から？」

アーチャーの発言で漸く思い出したランサー主従も、そう言えはと

切嗣に視線を向けた。

「まあ……やう言つことになるかな。

僕が十年前の第四次聖杯戦争のマスターだったのはさつきも言ったと思うけど、その時の僕のサーヴァントがこのセイバーだったんだ。

」

切嗣は懐かしそうに目を細めた。そして、隣にいるアイリスフィールもそんな切嗣を二三二と眺めている。

「詳しい内容は割愛させて貰うけれど、一応勝利者となつたのは僕だつたんだ。

AINZBERGが用意した聖杯に聖杯としての力が溜まり、願いを叶えるときに原因不明の聖杯の起動が起きたんだ。

「原因不明？誰か近くの者の願いを受け取つてしまつたのではないか？」

「それはないよ。聖杯に願いをかけるには色のある令呪が必要だし、何より叶つた願いが僕らとは全く関係ないことだつたしね。

関係ないこととはいつたい……いや、薄々解つてゐることに態とわからぬ振りをすることもないだろ？  
原因不明の聖杯の起動、彼らの願いとは違う願いの成就、そして恐らくはその時から現界し続けてゐるであろうセイバー。そこから導き出される結果は……

「叶つた願いとは、サーヴァントの受肉…か?」

「そうだよ。あの時放たれた強大な魔力で受肉した。セイバーは元々靈体化出来なかつたんだけど、これによつてマスター無しでもずっとといられるようになつたんだ。今じやすつかり家族の一員だよ。」

何処か嬉しそうに、同時に若干虚ろになつた目でセイバーを見つめる切嗣。

セイバーは相も変わらず食べ続けている。

切嗣の虚ろな瞳に始め意味が解らなかつたが、菓子を食べ続けるセイバーをみて理解した。

受肉をしたと言つてはマスターからの魔力供給は要らず、肉体を得たがゆえに自ら魔力を生み出すことが出来る。

しかし、肉体があるがゆえに普通の人間と変わらなくなつてしまつたものもあり、それはすなわち——食欲だ。

作つても作つてもすぐに無くなる料理と、食べるペースが全く変わらないセイバー。比例してどんどん高くなるエンゲル係数。

シロウの料理は美味しいですね。

……そう、喜んで貰えて俺も嬉しいよ。

アーチャーは引き攣つりそうになる表情を抑えるので精一杯だった。努力のかいあつて誰もアーチャーの表情には気づくことはなかつた。

「そ、そつか。私の聞きたかったことはそれだけだ。  
凛、余り長居するのもなんだ。そろそろお暇させていただくとしよ

「う。」

「そうね。いくら魔術師が夜の生き物だとしても、余り遅くなればお父様に叱られちゃう。」

凛は切嗣の微妙な表情には気付かなかつたよつで、アーチャーの言葉に普通に返していた。

「ではランサー。私達も帰りましょう。」

「そうだな。勝負がついてない時の馴れ合いはしねえほうがいいしな。」

「では、自分も。本日はお招きに預かり感謝します。」

バゼット達も丁度いいと帰ることを決めたようだ。

一成も帰宅の挨拶を行い出ようとすると、ランサー達が遅いから送ると言い出した。

確かにこの時間に一人で出歩いていれば危険であるため、快く申し出を受けた。

衛宮家の人間（+虎）は玄関まで見送りに來た。

「では、本日はお邪魔しました。士郎、勝負では手加減しないわよ。」

「うへ。勘弁してくれ。」

士郎の一寸情けない姿に、一同失笑が漏れた。

「心配ないわ、シロウ。私とバーサーカーが守つてあげるから。」

「む。それには及びません、イリヤスフィール。私がキッチリシロウの事を守りますから。」

「あら、そう簡単に……って、イリヤ、今なんて？」

「ホラホラ、早く帰らないと。じゃあね、リン。オヤスマニ。」

言葉が終わると同時に目の前で扉が閉められた。

最後の最後でもたらされた新しい情報に、凛は頭を痒き毛りたくなつたが我慢する。

平常心平常心と口に言い聞かせる。

「あの白い嬢ちゃんもマスターだったとはな。上手く騙されたぜ。」

「ええ、衛宮の人間でもありますし、一筋縄ではいかないでしょうね。」

此方は冷静に評価をしている。

誰がマスターであれ、正面からぶつかつて戦うと決めているのだからそこまで重要ではないと判断したのだろう。

「それでは、私達もここで失礼させていただきます。行きますよ、ランサー。」

バゼットと一緒に続いていこうとしていたランサーがふと振り返り、アーチャーの方を向く。

「おい、アーチャー。」

「何だね、ランサー。」

「テメエは変な野郎だな。弓兵の癖に剣を使いやがるし、それで俺と対等に戦いやがる。」

「何だね、急に。弓兵だからと言つて、弓だけを使うわけではあるまい。それが悪いとでも？」

唐突なランサーの発言に微塵も狼狽えることなく言葉を返すアーチャー。

ランサーは獰猛な笑顔を浮かべ楽しそうに喉をならす。

「いや、いいんじゃねえの。だだな

テメエの心臓は俺が貰い受ける。

それまで、負けんじやねえぞアーチャー。」

「それはこちらの台詞だ。そう簡単にいくと思わないことだ。」

「ほやけ。」

「くっ。せいぜい勝ち残れるように頑張ることだな。」

互いに不敵な表情を浮かべ、今度こそランサーは背を向けた。

全ての騎士が揃いし今夜から、聖杯戦争の時は刻まれ始める事となる。

## 五章 大説明会（？）（後書き）

次からは本格的な聖杯戦争の話……頑張らないと。

## 六章 行動の開始

昨夜の騒動から一晩経ち、放課後の時間を早くも迎えた。

【さて、凛。今後はどの様に動くつもりだ。】

「（そうね……取りあえずは残りのサーヴァントである、キャスターとアサシンの居場所を探すことかしら。）」

アーチャーの問いに、軽く考えて答える凛。

二人のいる場所は教室で今は誰も残っていないが、喋っている所を聞かれては堪らないとラインを通しての会話をしていた。

【ほひ、その理由は？】

「（一つは昨夜の事が理由よ。士郎に仕掛けてもいいけどその場合もれなくイリヤとバーサーカーもついてくるでしょうからね。セイバー達なら誇り云々で一対一でやれるでしょうけど、イリヤならそんなこと関係なく乱入してくるわ。ええ、絶対。）」

【ふむ、そう言えば凛は彼らの事を知っているようだったな。セイバーも含めて。】

「（まあ…十年近くの付き合いがあるからね。私のお父様も第四次聖杯戦争に参加していたから。だから、士郎の単純さもイリヤの性格の悪さもよく知ってるわ。）

一寸予想外だったのがイリヤがバーサーカーを召喚していた事よ。お陰で彼処には一体のサーヴァントがいるから、今仕掛けるのは愚策よ。）

確かに昨夜の話を聞いたとき、イリヤがセイバーを従えていてもおかしくはないと思った。

だが、実際にはイリヤがバーサーカーを召喚し士郎がセイバーを従えたことで、衛宮家には「一体のサーヴァントが存在することになった。

アーチャーは確かにイリヤスフィールなり、守る」と昨日宣言した通りに動くだろ?と思つた。

【そりで凛の父親も聖杯戦争の参加者だったのかね。】

「（あら、言ってなかつたかしら。

まあ、御三家の参加は決定事項なんだけじね。だから、アンタで良かったわ。）」

【む？】

急な話題の転換に流石のアーチャーもついていけなかつた。

そんな反応に言葉が足りなかつたと思い至り、凛は言葉を続けた。

「（……もうサーヴァントが決まつたから言ふことなんだけじね、私一番はセイバーが良かつたの。最優のサーヴァントと言われるし、何よりすぐ格好良かつたから。）」

それは、以前、言われた事でもある為知つていたが、いつも直接言われるところるものがあつた。

どうせ私は、と面に出さず落ち込んでいると、まるでそれを見透か

しているかの様に凜はさりと言葉を続けた。

「（でも、アーチャーが嫌つて訳でもないのよ？セイバーがダメならアーチャーが良いつて思つてたんだから。ホントよ？）」

それを聞き、アーチャーは召喚当初の事を思い出した。

確かにセイバーでないと知つたときわずかに落ち込んだ素振りを見せたが、直ぐに持ち直していた。

前は、失敗、だの言われて自分もついつい反応してしまつたと言うのにだ。

「（だつて、お父様のサーヴァントと同じクラスだもの。

本来六十年周期の聖杯戦争が今回十年と言う短期間で始まつたから  
ちょっと不安だつたのよ。しかも、間桐からの参加者はいないしね。  
でも、お父様と同じアーチャーが召喚できて一寸嬉しかつたわ。）」

凜はほんのりと笑うがそこに感じられる歡喜は間違いようもなく、  
その言葉が本当である事を示していた。

真っ直ぐに向けられる好意に慣れていないアーチャーは、無意識のうちに困惑や悲哀の様な表情を浮かべていた。

自分はそんな感情を向けられる資格は無いとでも言つようと受け取れる様な立派な存在ではないとでも言つようと……。

靈体化によりそれが見えていないのはアーチャーことつて幸いだつただろ？。

「（つて、話が逸れちゃったわね。

次にランサー達よ。あいつらの本拠地何て知らないけど、偶然にしろ探したにしろ、会つてすぐ戦闘と言つことにはならない筈よ。昨日夜まで待つてたみたいに、ね。

そう言つ氣質を知つてるからこそ、別に焦らなくともいいと思つたわけ。」

律儀と言えるあの二人なら派手な行動をしないだろ？と云つことなのだろう。

敵として相対したからこそ解ることもあると言つわけだ。アーチャーもその考えには同意だったため、特に何も言つことはなかつた。

まあ、元々知つていたと言つ反則技も有るわけだが。

「（ライダーは言わずもがなよ。令呪が浮かんだから召喚をしたけれど、桜は元々争い事は嫌いなの。

自分から戦いを挑むことは皆無よ。ライダーもマスターの桜の言つ通りにしてくれてるし。）」

相手から仕掛けられない限り戦うことはない。凛はそう言つ切つた。

「（つまり、知つている奴等より解らない奴等の情報を集めた方がいいと思ったのよ。

それに、キャスターたちが此方に気付く前に私達が情報を掴めば、奇襲だつてしまふくなるしね。）」

【奇襲か…。】

「（何よ、文句あるの？奇襲だつて立派な戦略よ。）」

【いや、文句はないわ。それがマスターの下した判断なら私は従おう。】

技量比べに奇襲と言つ言葉は似合わないな、と思いつつも反応してしまつたアーチャー。

その経験から実践的な思考が深く根付いているからこそ余計にだ。

【では、今日はこれから他サーヴァントとそのマスターの搜索か。「（やうよ。まつ、そう簡単に手掛かりが掴めるとは思わないけど、塵も積もればなんとかやる。やれる」とほんとひと言やるわ。）】

今度は不敵に笑い、己の意氣込みを告げた。

そこには負けるわけがないと誓つ自負が滲んでいる。

己のマスターの勇ましさを再認識したアーチャーは、苦笑いを浮かべる以外出来なかつた。

【では、何時までも会話をしている訳にもいかんな。そろそろ行動を開始するとするか。】

「（そづね、今日は時間も早い」とだし新都の方へ行きましょう。）

【了解、マスター。】

「

そして、二人は行動を開始した。

新都は開発が進んでおり、様々な施設の建物が乱立している。そして、それなりの時間まで営業しているところもあく、日が落ちてすぐに活気がなくなると言つわけではない。

今日も例に漏れず、新都は人で溢れかえっていた。

「やつぱりこっちは夜でも賑やかね。」

【やれやれ。態々人混みの中に入るとは。】

「（あら、相手が此方に気付いていない内は有効よ。それに、いつも一般人が多い中じゃ例え気付かれても手は出せないし、相手が行動に移す前に此方の準備も完了するでしょう。）」

【ふむ、なるほど。確かに理にかなってはいるな。だが凜。今日は大丈夫なのかね？】

アーチャーは意味ありげに呟いた。

それが何を指しているか瞬時に凜は理解し、多少吃りながらもアーチャーに言葉を返す。

「（ぐつ。だ、大丈夫に決まってるでしょ。ちゃんと宝石は持つてきてるわ。同じ失敗はしないわよ。）」

118

【ククク、それは頬もしいな。だが、昨日の慌てている凛も中々に可愛らし「五月蠅い！？」

アーチャーの言葉に凛は思わず立ち止まって大声で返した。  
だが、回りにいるのは普通の人間。突然大声を出した少女に奇異の視線が集まる。

いたたまれなくなつた凛は、早足でその場を後にする。

その頬が朱に染まっていたのは、果たして羞恥のせいなのか照れのせいなのか。

アーチャーはそんな凛のすぐ後ろを楽しそうな笑みを浮かべつつ付いてしていく。

「（ああもう、あんたのせいで恥ずかしい思いをしたじやない。）

【ふむ、それは済まなかつた。だが、実際に大声を出したのは君だらう。】

「（出させたのは誰よ……）」

【まさかあの程度で自制心を失うとは思わなくてな。精進したまえ。】

そう言われると恥ずかしさであつたり自制心を手放す結果となつてしまつた凛は何も言えなくなる。

魔術を使用する際に何よりも自制心は大切であり、重要なことだからだ。

「（…………やつせと行くわよ、アーチャー！？）」

口論でアーチャーに敵わないと理解した凛は、Iの話はこれで終了とばかりに締めくくった。そして、‘女子高生の買い物’をし始めたる。

凛の行動を静かに見つめるアーチャー。

凛の目は油断なく周囲を見渡し、それとなく辺りに違和感がないかを確認している。だが、商品を見回り欲しいものがあつたとき目を輝かせ、辺りを見ていたときは別の真剣な眼差しで見つめる姿は、その辺りの普通の女の子と変わらない姿だった。

前の凛ならば確実に心の贋肉と切り捨てるな。と何とはなしにアーチャーは思つ。

その様に不自然にならない程度に新都を歩き回るも、異常らしい異常はどこにもなかつた。

残るキャスターとアサシンがアーチャーの知る存在なら、恐らく口の神殿から出てこないであろうと確信するも、それをマスターに言うつもりはなかつた。

言えば会つたことも無いのになぜ知つているのかと問い合わせられるのが火を見るよりも明らかだからだ。

それに、殺し合いをする必要がない以上、一参加者として楽しんでみるのもいいかもしないと考えていた。

「（ん~……今日のところは収穫なしね。まつ、初日なんだしこんなものかしら。）

【初回と言ひことは、明日も此処に来るのだな。】

「（当然よ。たつた一回で効果が得られるわけないじゃないの。）  
（言つものはじっくりいかないと。）」

【ふむ。だが新都にマスターがいるなら時間をかけるといひながらは  
不利だわ。】

寧ろ、誘導させられて待ち構えられてる可能性が高いぞ。】

戦略として考えられる可能性を上げるアーチャー。

だが、凛はそれがどうしたと言わんばかりだ。

「（挑むといふよ。それなりそれで探す手間が省けて良いじゃない。  
それとも何？勝つ自信がないの？）」

【それは心外だな。私はただ考えられる可能性をあげたに過ぎん。  
もしも、を考えていて損な」とはないからな。  
それに、自信ならある。】

「（ホントかしら～？）」

凛は弱氣に聞こえるアーチャーの発言に一瞬だけぽかりと突っ込んだ。  
その顔はやつと有利に立てたとでも言つよつて、生き生きとしていた。  
だが、アーチャーの方が一枚上手だった。

【本当だとも。私は君が呼び出したサーヴァントだ。それが最強で  
ないはずがない。】

告げられた内容に凜は面食らつた。

もしこれが軽い調子で言われたのなら凜だとてすぐ反応できただろうが、その声が思いの外真剣な響きを含んでいたからだ。

凛はつまく言葉が出てこなくなり、つこつこ長い溜め息を吐いた。

「（あんた…………それ、素で叫つてるの？）」

【ムジ、なんの「J」だ?】

「（素と言つた方がいいかしらね……）何でもないわ。お腹も空いたことだし、さつさと帰るわよ。」

そして、二人は帰途についたのだった。

家に着いた凛達を迎えたのはお帰りと言う母親の声や自分達を確認しに来た父親の姿ではなく、珍しい桜の叫び声だった。

「ライダーの馬鹿…………！？」

その声に何があつたのかと慌てた凜は、靴を脱ぎ捨てて桜の声が聞こえたリビングへ走つていつた。

を睨み付けてる桜と、それを困ったように見つめるライダーと言つ光景だつた。

一見緊迫した空気が流れているように思えるが、そばにいる遠坂夫妻の、困ったなあ、というのんびりした空気がそれを打ち消していった。

「えつと……何がどうなつてゐるの？」

「私に聞かれても解るわけなかろう。」

状況のつかめない凛は思わずアーチャーを振り返り尋ねるが、ずつと凛と一緒にいたアーチャーに解る筈もなく一人して疑問符を飛ばした。

声を出したことで一人が帰つてきたことに気付いたのか、ライダーはあからさまにホッとした表情を浮かべた。

その視線は、眼帯で見えないながらもアーチャーを見つめていることが解つた。

「ああ、帰つてきたのですね。」

「たつた今帰り着いたところだ。しかし、何があつたのかね。」

帰つて早々怒鳴り声とは少々驚いたぞ。」

ライダーはスママセン、と謝り再び桜の方を見る。

視線を外している間、どんどん桜の機嫌が落ちていったからだ。

「お父様、お母様。ただ今帰りました。  
それで、これは一体どうしたんですか？桜があんな大声を出すなんて……。」

当事者に聞いても答えは得られそうにないと考えた凛は、恐らくこの原因を見ていたであろう両親へと問いかけた。  
アーチャーも興味を引かれ、耳をそばだてた。其ほど桜が大声を出すのが珍しかったのだ。

時臣は話す気がないのか黙りを決め込んでおり、その代わりなのが葵が口を開き話始めた。

「ちょっと仕方が無いことなのよ。」

困ったように、しかしどこか慈愛や期待も滲ませたような声で話す。

「最初はね、単純にお洒落の話をしていたのよ。どんな服が似合うとか、今のお化粧はどんな風になってるとか。  
ライダーさんはスタイルもいいし、どんな服でも似合いくつても話していたの。」

確かにライダーならどんな服も着こなしそうだと凛は思つ。  
だが、それが何故今の状況になつたのか繋がらず、まだ続きがあるんだろうと静かに聞く。

その手には、いつの間にか紅茶が用意されていて、同じく葵の手元にもセットされていた。

……もうなにも言ひまー。

「でも、ライダーさん身長が高いでしょう？家にある服はライダーさんにとって小さいから、現代の服を着せたくても着せることが出不来なくて。

ならショッピングするのもいいわね、て話になつたのだけれど……」

ここまで来れば凛にも何となく理解できた。

多分、ライダーが拒否かそれに近い発言をしたのだろう。

そして、アーチャーも時臣が話す「気がないのではなく、つまべ話せないから黙っていたのだと理解した。

女性特有の話題は、口にしにくうことの上ない。

「ライダーさんの魔眼がねえ……

素顔で出るわけにはいけないし、でも靈体化しての買い物は桜が嫌がるのよ。一緒に買い物したいってね。」

それはどうしようもない事だ。

流石に魔眼を解放したままで秘匿も何もない。

桜も理解はしているだろうが、感情が追い付かなかつたのだらう。

そこで凛はあれ？と思つた。

確かに家には魔眼封じがあつたのではないかと思つたのだ。

その確認を行つべく、凛は父親へと尋ねる事にした。

「お父様、質問があるんですけど……こいでしょうか？」  
「なんだい、凛。」「ウチには魔眼封じがないのですか？あればライダーも歩けると思つのですが。」

時臣は気まずそうに口を泳がせた。

……いや～な予感がする。だが、凛は追求を緩めず続けて問い合わせる。

そつすると観念したのか遂に時臣が口を開いた。

「ああ、確かにあつたな。」「では、それをライダーに貸し与えれば……」「だからあつたんだよ、凛。」

そう、あつたのだ。

確かに魔眼封じと呼ばれるものが遠坂家には存在していた。つい数カ月前までは。

その日、時臣は魔術品を整理すべく掃除をしていた。

流石に魔術品が詰め込まれたこの部屋を葵に掃除させるわけにはいかず、自ら行つていたと謂う訳だ。

手際はあまり良くとも着実に整理が進んでいたのだが、ほぼ終わりに差し掛かった時それは起こつた。

大きい荷物を持ち、視線をほぼ塞がながらも移動しようと一歩足を進めた途端、足の裏に何か硬い感触がした。  
恐る恐る下を見ると、完全に壊れた道具 魔眼封じがあったと言う訳だ。

「では、いま家に魔眼封じは。」

「ああ、存在しない。」

無いものをねだつてもしょうがない、と桜に申し訳なく思つも説得しようと彼らはした。

アーチャーは見ていた。記憶の桜よりも明るく、感情豊かな彼女を。その顔を悲しみに歪ませたくないと思つてしまつた。  
救うことの、気づいてやることの出来なかつた桜のかわりかと問われば、アーチャーは反論することは出来ないだろう。  
だけども、笑顔でいてほしいと思つたのだ。

だからアーチャーは覚悟を決め、多少魔力は食つものそれを投影することにした。

「凛、桜、ライダー。」

アーチャーが声をかけると三人が一斉にアーチャーを向く。  
ライダーは同じくサーヴァントであるアーチャーが何か援護をしてくれるものと期待していた。まだ僅かしか会話をしていないもの

の、その頭の回転の早さはライダーも認めるところだからだ。だが、アーチャーの口から出た言葉は、予想だにしない物だった。

「魔眼封じ、それがあればいいのだな。」

「そうだけど……何するつもりよ、アーチャー。」

「なに、こうするのや。」

投影開始トレス・オン

最後の皿<sup>ひざま</sup>に埋没するための呪文を口のなかだけで呴き、皿の手の中にとある眼鏡を投影した。

アーチャーの手の中に突然武器以外の物が現れたことに、回りの人間は驚愕を露にした。

そして、手に握られているものを見て再度驚く。

「嘘、その魔力。まさか本当に魔眼封じ！？」

「なっ、アーチャー君は一体。」

何故そんなものを持つているかと問い合わせたくなる彼らだが、アーチャーに記憶がないことを思いだしどうにか踏みどどまつた。

ライダーと桜も急な展開についていけないよつて皿を白黒させていた。

「ふむ、魔眼封じときいてなにやら気になつたのだが、どうやら何かしらの関係はあつたみたいだな。」

「……魔眼に関係する奴がつて、ホントに偉い英雄よ。」

アーチャーは眼鏡型の魔眼封じを桜に渡した。  
桜はまだ現状が理解できていようで、渡されるまま手に持ちそれを見つめていた。

「どうした、喜ばないのかね？」

「えつ、あつ、でもこれ……」

「なに、私にとつては大したものではない。魔眼も持つていらないしな。

ああ、ただ衝撃には弱いのでね。あまり乱暴に扱わないことだ。」

時間がたつ毎にじわじわ理解していったのか、桜の顔が笑顔へと変わつていった。

同時にライダーも何処か安堵の表情を見せた。

「ありがとうございます、アーチャーさん！」

ライダー。これでライダーと一緒にお出掛けできるね。」

「良かつたわね、桜。」

ライダーに抱きついて喜ぶ桜、そしてそれを笑顔で見つめる凛。

そんな娘達を暖かな眼差しで見つめる遠坂夫妻。

その光景を見届けた後、アーチャーはひつそりリビングから出でていった。

遠坂家の屋根の上、そこにアーチャーはいた。理由は見張りである。本当はそんなことをしなくてもいいのだが、時間をもて余していたのと癖のようなものでしていないと落ち着かないのだ。

「必要ないと理解はしても、染み付いた習慣と言つものは抜けないようだな。

全く、因果なものだ。そつは思わないかね、ライダー。」

始め独り言のように呴いていたアーチャーだが、最後の方で後ろに向かつて言葉を投げ掛けた。

そこにはアーチャーの言った通りライダーが佇んでいた。

「それで、何か用かね。君はとっくに眠っていたと思つたのだが。「基本的にサーヴァントに睡眠が必要ないのは貴方も御存知でしょう。」

振り向きながら言つたアーチャーに大きな反論はせず、ライダーはほんの少しアーチャーに近付いた。

隣にいかないのは、未だ敵であるのを踏まえての事だ。  
それに内心苦笑いする。

現れたときの言葉から一向に話し出す様子を見せないライダー。

ただ静かに見つめ合う時間が過ぎる。

「……先程の事、感謝いたします。」

やっと口を開いたライダーから出たのは、感謝の言葉だった。  
それが何を指しているのか理解し、その律儀さに今度は表情に出して苦笑いする。

「偶々持つていただけだ。感謝されるようなことではない。」

「いいえ、貴方のお陰でサクラを悲しませずに済みました。」

私には何も出来ませんでしたから。だから貴方に感謝を。」

既に使つている魔眼封じに触れながら、ライダーは微笑した。  
もう魔眼封じが変わつてるのは桜が言い出して変えさせたのだろう。  
直ぐにでも素顔を見たかったに違いない。

「お役にたてて何よりだ。」

だがさつきも言った通り強い衝撃は厳禁だ。せいぜい気を付けたまえ。」

「ええ、解りました。」

……これは一応借りにしておきます。いくらマスター同士が姉妹とはいえ、敵である貴方の手を煩わせてしまいましたからね。この借りは、いずれお返します。」

言いたいことは全て言つたのか、ライダーはクルリと踵を返した。

「それだけです。では、私は中に戻させていただきます。

貴方も入つたらどうですか？」

「ふむ、そうか。君がそこまで言つならいつか返して貰うとしよう。  
……生憎との様に警戒しないと落ち着かなくてな。悲しい弓兵の性かな。

なに、君が言つた通り我々に睡眠は必要ない。夜明けまで此処にいるわ。」

そうですか、とだけかえしライダーはその歩みを進めた。  
それを認めたアーチャーも向きを戻し、再度街を眺め出す。

「やつやつ、いい忘れるところでした。」

もう、話しかけられないだらうと思つていたアーチャーは、未だ何があるのかと言つ疑問を持ちつつ顔だけ振り向く。

さつきよりも遠い場所にたつてゐるライダーが、同じ様に顔だけ振り向いてゐるのがアーチャーに確認できた。

「未だ何かあるのかね？」

「ええ、食事に関しての事です。」

食事、それは摂れなくもないがマスターからの魔力供給がしつかり

存在する今、特に必要なことではないとアーチャーは考えている。ならば自分が作った料理に何か問題でもあつたのかと思ったが、凛の好みをバツチリ知っているためそれはない筈だと思い直す。

考へても何も思い付かないアーチャー、それが感じ取れたのか今度はライダーが苦笑いをした。

「アーチャー、貴方は食事をとつていないのでしょう。  
それがリンは気にくわないみたいですよ。」

「しかし、魔力供給があるので何かを食べる意味がないが。  
「我々に意味がなくともサクラ達にはあるのでしきう。  
サクラも何で食べてくれないのかと心配していましたから。」

だから私も一緒に食事をとらせて頂いてますし、とライダーは続けた。

しかし、と渋り続けるアーチャーにライダーはそれ以上言ひ気はないのか、最後に一言だけ言つて家の中に入つていった。

「リンの怒りが爆発しないといいですね。」

ライダーにとつては召喚されてから知つた凛の性格を考慮しての言葉であったのだろうが、アーチャーにとつてトラウマに近いものがあつた。

例えば、絶対服従であつたり、ガンドの嵐であつたり……  
アーチャーには乾いた笑いしか出てこなかつたのだった。

## 六章 行動の開始（後書き）

と言つわけで、取り合えず探査をはじめました。

これから複雑な話になつていいく筈です。恐らく、きっと……

七章 驚愕（前書き）

ゴーク10000  
栄  
100突破  
ありがとうございます。

こんな小説でも読んでくださる方々がいると喜びのせ、嬉しいもの  
です。感謝感謝。

一週間で作るページ数はほぼ固定しそうですが、もし良かつたらま  
たまだ見てやってください。

時間は毎、学校の屋上に彼等はいた。

「うん、これも美味しいわ。また腕をあげたわね、土郎。」

「そんなことない。遠坂の弁当だつてかなり美味しいじゃないか。なあ、桜。」

「そうですね、先輩。でも、作ったのは姉さんだけではありませんけど。」

屋上では数人の人間がほのぼのとした時間を過ごしていた。また、お互いの弁当のおかずを交換するなどして、料理の腕を軽く競つたりもしていた。

そして、彼等の視線はとある一方を見なによろしくしていった。

「流石アーチャーですね。時間を置いたものでも味が落ちないとほ。

「なんと…?これはアーチャーが手掛けたのですか……シロウ以上腕前とは素晴らしい。」

「いや、必要だったから身に付けたに過ぎない。そう言われるようなことではない。」

勿論そのサーヴァント達もこのときばかりはゆっくりとした時間を過ごしていた。

そして、彼らもマスター達と同じようにある一方となるべく見な

じよひにしていた。

アーチャーは夜の会話から、なるべく一緒に食事をとるよひにした。それは起きるかもしれない凛の怒りの恐怖ゆえではない……とは言い切れないのが悲しいところである。

そんな風に食卓につくようになつたアーチャーに、桜はもとより凛も嬉しそうな表情を浮かべた。

だが、この場にいるのは彼らだけではなかつた。

彼等が一生懸命見なじよひにしている方向、そこにそれはいた。「こちらも食べてみてください。一生懸命勉強して作りました。」

「うむ。」

「どうでしようか、美味しいですか？」

「うむ。」

「本当にですか！？ 嬉しいです。」

「うむ。」

寡黙な男性とその男性にベタ惚れしていると解る女性。

二人は所謂、あ～ん、をして食事をしていた。……それが、見ないようにしていた理由だ。

中々にシユールな光景である。そう、顔が引き攣りそつた程に。

何故聖杯戦争中といつなかに、こんな風に一緒に食事をとつているのだろうか。

元々凛たちは聖杯戦争中と言つこともあり、他のマスター（土郎や桜）との過度な接触は控えるよひにしていた。出来ているかどうかは別として。それは各々が己の力量を示すために必要なこととして、自力で情報を得ようと決めたからだ。

だが、予想外の事が起こり、一旦話し合いを行つべく集まつたと言うわけだ。そして、その予想外の事というのがこの男女に關係している。

「まだまだありますので、沢山食べてください。宗一郎様。」「うむ、頃二う。キヤスター。

男女の正体、それは凛の担任である教師の葛木宗一郎と、そのサー  
ヴァントのキャスターである。

これだけであるなら問題はなかった。只の聖杯戦争の参加者と違うだけなのだから。

と並んでいた。

葛木宗一郎はとある暗殺技能を有した、かなり高い戦闘力を持つ人間だからだ。

ニヤ、口の、と皿のとせ出ししない。

魔術回路を持たないということは本来マスターになり得る筈はなく、また直接姿を表す機会が殆どないと考えられるキヤスターがサーヴァントである以上知られることもなかつた筈である。では何故それを知ることが出来たのか。時間は少しだけ遡る。



時間は四限の授業も後半に差し掛かっていた。

凛は授業を真面目に聞きつつも、心はアーチャーが作ったお弁当に向いていた。

【凛、どうした。授業に集中できないぞ。】

「（え、つ。そ、そんなことないわ。）」

【……私の作ったものを楽しみにしてくれるのは嬉しいが、弁当は逃げたりせんぞ。】

「（だから違うって言つてるでしょ、バカアーチャー。）」

そう返答していくも昼御飯の時間が待ち遠しいのは違いない凛であった。

それは、アーチャーが一緒に食事をとるようになったからだ。

必要ないと書いて呟喰の日より食事をしようと思はず、何かを口ににするとしても飲み物ばかりであったアーチャー。

確かに魔力供給をしつかり行えていた以上食事など無駄な行為かもしれない。

しかし、それに凛は寂しさを覚えていた。ライダーが食卓についてるだけに尚更その感覚は強かつた。

まるで、自分と交流する必要はないと言われてるようだと。

だが、今朝から一緒に食事をすると言われ、凛は少し嬉しかった。

凛の気がそろになつていつているとき、アーチャーは不思議な気

配を知覚した。

【む、これは……？】

「（……。つて、どうしたのアーチャー。）」

【いや、今何かの気配がした様な気がしてな。】

「（「何か」の気配？……アーチャー、一応確認してきて。）」

何かとしか言わず、断言しないアーチャーに凛は少し考え込んだ。

英靈であるアーチャーですら完全に知覚できない気配。それが何をもらたすのか、確認すべきだと凛は判断する。

それが何かしらの害をもたらさないとも言えないからだ。

思考を一瞬で魔術師のそれに変えた凛は、時間や状況を冷静に考察した後アーチャーに指示を出した。

【ふむ、離れてしまつてもいいのかね。】

「（ええ。流石に一般人の多い屋間に、事を起こすとは思えないから。）

なら、逆に今のうちに確認だけでも済ました方がいいわ。

後、確認した後の判断はアーチャーに任せる。ただし、報告はすぐにしてね。）」

【ア解、マスター。】

凛の指示を聞いたアーチャーはすぐに行動に移った。

アーチャーにとつても正体がハッキリと解らないそれに懸念を抱い

たからだ。

アーチャーが気配を感じていた方向　学校の正門であった　に向かっていると、同じく移動している存在があった。

「やはりあなたも気づきましたか、アーチャー。」

「と言つことは君もか。」

それは、自分の様にマスターの側にいるようにしているライダーだった。

回りは授業中ということで人の気配はなく、故に一人は声に出して会話をっていた。当然、靈体化したままで。

もし此処に人がいたなら、声だけ聞こえるという状況にパニックに陥つたに違いない。

そして、学校の怪談に加わったことだろう。

怪奇、授業中に突然会話が聞こえる廊下…………微妙だ。

「ええ。サクラに言つたといひ、どうしても確認してきて欲しいと言われまして。」

「ああ、それは彼女らしいな。」

苦笑いして告げるライダーに、アーチャーも苦笑いを返した。

恐らく凛のように魔術師マジシャンに関係があるものだと判断したのだ。だからこそ、他に影響が出る前にライダーにお願いしたのだろう、とアーチャーは思った。

だが、きつと本当は行つて欲しくなかつたに違ひない。何故なら、傷付く可能性があるからだ。

心優しい桜の事だから、怪我をしてしまえばきつと自分を攻めるに違ひない。

行って欲しいとお願いしたせいで、と。

だから二人はなるべく遠目での確認に勤めよつと思つた。

正門にたどり着いた二人は門の側で一旦足を止めた。そして、注意深く辺りの気配を探つた。

「矢張正確にはわかりませんね。一体何なのでしょうか。」

「解らん。だが、確実に言えるのはその気配の主が学校に近づいてきているということだ。」

改めて気配を探つても、その正体に当たりをつけることは出来なかつた。

だが、確実に言えるのはアーチャーの言つ通り学校に向かつてきているということ。そして、魔術関係者だと言つことだ。

英靈である彼らが気配を感じ取れても詳しいことがわからない。それが、魔術以外の何だと言うのだろうか。

アーチャーとライダーは気配がゆっくりながらも確実に向かってきていることを認め、門のところに待ち伏せることとした。

「さてさて、鬼が出るか蛇が出るか。それとも、別のものか。」「少なくとも蛇ではないですね。此処にいるのですから。」

二人は軽口を叩きつつ待つ。

そして、数分と待たずその気配の主が彼らの前に現れた。

それは現代の服に身を包んだ女性だった。手に大きめの鞄を下げ、笑顔でこちらに向かっていた。

その姿を目にした途端、一人は理解した。サーヴァントだと。

その女性は一人に気付くことなく横を通りすぎようとした。いや、それは演技だろう。

同じサーヴァントである以上、ここまで近くにいてわからない筈がない。

これだけでこのサーヴァントに事を荒立てるつもりがないのは理解できたが、アーチャーはそんな彼女に声をかけることにした。何故なら、彼女の足が校内に向かっていたからだ。

逆に声をかけられた女性は見えない場所に冷や汗をかいた。知らない振りをすれば昼間といつこの場では、見逃して貰えるだろうと思っていたからだ。

戦闘とまではいかなくとも、この場で何かをされれば彼女に抗う術は存在しない。

ただでさえ2対1である上に、彼女のクラスが大きな理由だつた。

彼女のクラスは接近戦に適さず、遠距離攻撃を得意とするキャスターである。

故に魔術以外での攻撃方法など殆ど存在しない。あつてもこの場で使用できるものでもない。

「それで、学校に何の用かね。」

「返答によつては強制的に移動させて貰いますよ。」

「こつなつては仕方ないと、キャスターは答える。が、全てを正直に話すつもりは毛頭なかつた。

「一寸関係者が中にあるの。その人が忘れ物をしたから渡しに来ただけよ。」

ふむ、とアーチャーが考え込んだ。磨耗した記憶の中からキャスターの事を思い出しているのだ。

ライダーは自分でも情報を鑑定しているが、主な決定はアーチャーに任せることもりでいた。

前にも言つた通りアーチャーの思考能力を認めているからであり、凛の方が真摯に聖杯戦争にあたつているからだ。

アーチャーは思い出そうとするも出てくる情報は殆どなかつた。辛

うじて思い出せたのはキャスターのマスターが学校関係者であったはず、だということだ。

それをもとに考えるが、すぐにおかしいことに気づく。

学校には凛達意外に魔術師は存在しないのだ。

「キャスターのマスターは一般の人間か…………？」

意図せずアーチャーの口から言葉が溢れ出た。

それに、ライダーは一般人がマスターと言つことに、そしてキャスターは少ない情報から的確に自分達の事を言い当てたように見えるアーチャーに対し驚愕の表情を浮かべた。

「何を根拠にそんな事を。」

「いやなに。キャスターである君が直接神殿を出で赴くなぞ、マスター関連意外にあり得んと思つてね。」

口にするつもりはなかつたアーチャーだが、最初からそのつもりだったとしても言つようにしてシレツと言葉を続ける。

しかし、アーチャーが軽度ながらもうつかりをするとは…………遠坂のウツカリでも移つたのだろうか？

遠坂一族、恐るべし…………

「キャスター？」

「ああ、そうだ。残つているのはキャスターとアサシンの一いつ。アサシンならばこの様に表での行動などしないはず。なら、残るは一

つ。

「成る程、だからキャスターなのですね。」

アサシンであれば昼間だけでなく、夜の時ですら表に出てへくるのは珍しい。

その事からキャスターであると看破したのだな、とライダーは思つた。

「……そこまで知られて認めないわけにはいかないわね。  
ええ、確かに私はキャスターのサーヴァントで今のマスターは一般人よ。」

「今のはですか？」

ライダーは今のと表現したキャスターに不振を覚えた。  
だがそれをアーチャーが遮つた。

「ここに話しかけるのも何だ。もうすぐ昼飯の時間になることだし、  
マスターを交えての話し合いといこうではないか。」

一般人がマスターであると知った以上、我がマスターに言わんわけにはいかんしな。」

「あら、何故貴方のマスターに会わなければならないのかしら？」

「すぐに知れると思うので言いますが、私達のマスターはこの地のセカンドオーナーであるトオサカの人間です。」

開催者一族である彼女等に会つておるのは、貴女にとつても損にはならないと思いますが。」

アーチャーの言葉に警戒を露にするキャスターだが、ライダーの言葉に思ひ立つとこらがあつたのか迷つ様子を見せた。

「なに、今は屋なのでどういふよつと言ひわけではない。場所も学校と言ひ立つとこらだしな。」

その言葉が決め手となり、キャスターは会つことを決めた。

「解つたわ。こちの不利益になることも無せそうだしね。

それで、何処に赴けばいいのかしら?」

「では、マスターを連れて屋上までおいで願おう。昼食もそこで摂るといい。」

屋上であれば人が来ることは全くと言つていいほど無い。それに入払いの結界でもかければ、実質的な密室の出来上がりである。故に、其処ほど適切な場所はないと思つてアーチャーはその場所を告げたのだった。

アーチャーより早く召喚されていたライダーもそれを理解しているのか、特に異議を唱える事なく集まる場所はすんなりと決定した。

「解つたわ。それじゃ、届け物もあることだし先に行かせていただくわ。」

そう告げてキャスターはスタッフと校舎に向かつて歩いていった。残される形になつたアーチャーとライダーは、この後の行動を簡単に決める。

「では、私はサクラに教えてきます。」

「頼む。私は同時に衛宮士郎にも伝えるよう凛に言つておこう。なので直接屋上に向かつてくれ。」

「ええ、ではまたあとで。」

二人は己のマスターの元に移動を始めた。

アーチャーはこの後凛に報告するかの様に話していたが、実際のところその必要は無かつた。

何故なら、会話と同時に凛にもラインを通して伝えていたからだ。

よつて凛は既に知つてゐるためアーチャーにやることではなく、強いてあげるとすれば士郎を屋上に連れていいくことだらうか。だが、それも凛がやるだろ。きっと首根っこを掴んで引き摺つていくこと間違いない。

その光景が頭の中に浮かび、また昔の自分と重なつて思わず田の端に光るものを見かべるアーチャーだった。

「（お帰りアーチャー、「」苦労様。…………どうしたの？何か元気がないみたいだけど。）」

【いや、気のせいだ。（キッパリ）】

「（そう？…………それにしても、正体不明の氣配の主がキャスターだったなんてね。でも、何ではっきり解らなかつたのかしらね……）

【さあな。だかこの後会うのだ、直接キャスターに聞くといいだろう。】

「（それもそうね。一般人がマスターになつてゐることも一緒に問い合わせないと、ね。）

フフフフフフ…………）」

【……張り切りすぎんよつにな。】

一見ニコヤかに笑つてゐるよつに見える凛。近くの席に座つていた数人の男子生徒は偶然その表情を目撃し、軽く頬を染めた。

勘違ひするな！？確かに見た目は可愛らしいかもしれないが、中身は猛獸、いや悪魔だぞ！と声を大にして言いたいアーチャーだったが、諸々の理由により自制する。

「（アーチャー、今、変な事、考えてなかつた？）」

【はつはつはつ。そんなわけ無いだろう、マスター。】

一句一句丁寧に発言した凛に恐怖を感じるしか無かつた。

返答するアーチャーの言葉は棒読みに近いものであり、凛が尚もい募ろうとするが一度チャイムが流れた。

これ幸いとばかりに即時行動を促す。

凛もアーチャーより会う時間の限られてるキャスターの方を優先して、弁当をひとつかみ教室を後にする。

ついた先は士郎の教室。凛は躊躇い無くドアを開け、士郎を呼んだ。

「衛宮君はまだ教室にいるかしら？」

「これは遠坂さん！？衛宮ですか、いますよ。

おーい、衛宮。遠坂さんからの呼び出しだぞ。」

その声は教室中に響き、（主に男子の）視線が一気に士郎へと集まる。

士郎はその視線を気にすること無く凛へと声をかけた。

「ん、どうしたんだ、遠坂。何か用か？」

「ええ、今日は自信作なの。久し振りにどうかしら？」

自分のお弁当箱を掲げて言つた。

これは以前からたまにある出来事で、その都度注目されれば嫌でも慣れると言つものだ。

注目の割に嫉妬の視線が少ないのは、幼馴染みであることが知れていながらだらう。

若しくは、士郎の鈍感振りにそれはないと断定してゐるか。ありそつである。

なんにしろ、相手が士郎でなかつたら他の人間（主に男子）の視線で殺されていたかもしない。「冗談抜きで。

「おう、いいぞ。ちよつと待つてくれ。」

そう言つて、通常の鞄とは違う大きめの鞄を手にして凛へと歩み寄る。

士郎の鞄に違和感を感じるものは皆無だ。  
何故なら、士郎＝工具箱と言つ図式が先生を含めた全校生徒に広まつているからだ。

そうして、一人（+）は連れ添つて教室から離れていった。

「んで、ほんとほんなんだ。」

防音の魔術を張つたことを確認した後、士郎は凛へと尋ねた。

「ちよつとした問題がね。アンタもマスターだし、一応呼んビニウ  
と思つて。」

「……やっぱり優しいんだな、遠坂は。」

「マスター」と言つ葉を使うといつては、問題とは聖杯戦争に関係することだと察した。

だからと書いて自分に正直に教える必要はない筈なのだ。それも立派な戦略の一つであるのだから。なのに凛は情報を共有しようとしている。それ故に出てきた言葉だつた。

言われた凛に特に変化は見られなかつた。

アーチャーに対しても付き合いが数日と浅いこともあり咄嗟に反応することは出来なかつたが、士郎に関して言えば十年近い付き合いつがある。

士郎の天然タラシ発言にも慣れたものだ。

ハイハイと軽く返答するだけで流す。

そして、屋上の扉に到着した。

「アーチャー、もう実体化していいわ。」

その言葉を今更に黙つてついていつていたアーチャーが姿を表した。

「どうやら我々が一番手のようだな。」

屋上を見回しても、まだ人の姿は無い。だが、一つだけこの場にはじめからある気配があつた。

士郎は鞄を下ろし口を開きながら気配の主へと声をかけた。

「飯の時間だぞ、出てこよセイバー。」

屋上の気配の主、それはセイバーだった。セイバーは靈体化出来ないため、この様に隠れているしか出来ないのだ。

「やつとですか、シロウお腹が空きました。」

次の瞬間には三人の前に田を輝かせて…訂正、毛いりつかせてくる、獸、が姿を表していた。

最速の英靈足るランサーもかくやといつスピーデだ。

「悪い悪い。でももうちょっとだけ待つてくれ。桜達も来るからさ。

「む……それはでは仕方があつません。」

すぐに食事にあつつけないと見るや、みるみる萎んでいつたセイバー。

すぐとなりでは土郎が鞄から弁当を取り出していた。鞄の大きさそのままのお弁当　重箱を。

「……相変わらずね。」

それを見てため息をつく凜。羨ましさが滲んでいるのはしょうがない、女の子だから。

出し終わると同時に桜達も到着した。

手には複数の弁当箱があり、凜の手には弁当箱が一つ。

「え~と、それって……」

「はい、アーチャーさんの分です。姉さん、忘れて行っちゃってましたよね？折角アーチャーさんも一緒に食べてくれる事になったのに。」

桜の言い分に言葉も返せない凜。

だが、桜には深く突っ込む気はなかつたのか、すぐに別の話題を口にした。

「えっと、キャスターさんは、まだ来ていらないみたいですね。」

そわそわと体を動かしていたセイバーは、何故此処にキャスターが来るといったのかと訝しげな表情になつた。

キャスターが来る前にと、士郎とセイバーに少し前の出来事を説明した。

二人は納得しセイバーが口を開こうとした瞬間、ガチャリと屋上の扉が開いた。

キャスターが来たと思い見てみれば、そこにいたのはキャスターで

なく教師 葛木宗一郎だつた。

自分達だけが屋上にいるのなら何とか誤魔化せれたが、今サーヴァントも現界し姿を見せているため彼等は慌てた。

「あつ、先生これはその……」

「君達がキャスターの言つていた人物か。」

言い訳しようとしていた言葉を遮つたのは宗一郎だった。  
宗一郎の言葉に鳩が豆鉄砲を食らつたような表情になつた。

学校にいるのは何も生徒だけではないのだが、無意識に生徒だろうと考えていたからだ。

「え！？では、葛木先生がキャスターの？」

「ええ、宗一郎様が私のマスターよ。」

そして、宗一郎の後ろからキャスターも姿を表した。

困惑は收まりきれないが、昼休みの時間は限られているので早く食事を済ませるために食べ始めた。

そして、冒頭に戻ると云つ訳だ。

キャスター達のラブ・ラブ光線（死語）に耐えながら食事を済まし、漸く話し合いの体制に入るのだった。

## 七章 驚愕（後書き）

今日は此処で一旦切り。

あんまりキリはよくないですが（汗）

やつぱりもう少しぐらいページ数を増やす努力を……

八章 状況把握（前書き）

アーチャーの影が薄くなつてしまつた――――――――！？  
ちよつ、自分。主役はアーチャーだろ。アーチャー大好きなんだろ。

自分で解らん

文章つて不思議デスネ。

そして、何だか説明文が多かつた気がする。  
う~む.....。

反省反省……つて毎週している気がする。いい加減勉強しろよ、自分よ……

「さて、と。じゃあ時間もあまり無いことだし、さつさと本題に移りましょうか。」

食べ終えた弁当箱を片付け、全員が輪状になつて座る。

凛達は思考を魔術師のそれに切り替え、真剣に聞く体制へと入った。凛に関して言えば、辻褄が合わない部分がないかをしつかり探るつもりですらあつた。

最初に口を開いたのはセイバーだつた。

先ほど答えを得ることが出来なかつた疑問を解消したかつたのだろう。

「それで、何故この場にキヤスターがいるのですか？」

それに、先程その男性をマスターと表してましたが、魔力を全く感じることができないのですが。」

「キヤスターがこの場にいることに関しては、彼女が学校に偶々向かっていたのを私達が関知し、聞き捨てならない情報を手に入れたためだ。

君も昼前に不思議な気配を感じなかつたか？」

「…………ああ、そう言えばそんなものを感じたような。」

セイバーの問いの一部を答えたのはアーチャーだつた。

自分達も感じたのだから、セイバーはもっと早く解つていたのではないかと思ったが、セイバーははつきりしなかつた。

昼前と言つ条件により空腹だったセイバーはそのとき感じた気配を歯牙にもかけていなかつた。

実力ゆえに何があつても対処できるからと言えば聞こえはいいが、単純に頭が回らなかつたのだ。そんな事でいいのか、セイバー。

「もう一つの疑問であるマスターが何故魔力を持たない一般人が、と言つのは私たちもこれから聞くことだ。

と言つわけで、早速経緯を教えてくれないか、キャスター。」

アーチャーの促しの言葉にそのつもりだからこの場にいるんじやないの、という表情を隠そつともせず語り始める。

「私を召喚した人間はちゃんとした魔術師だつたわ。ただ、そいつが何に所属していたのか、なんの目的だつたのかは全く知らないけどね。すぐに逃げ出したから。」

キヤスターを召喚したのは、それなりに年齢を重ねた中肉中背の魔術師だつた。

始めキヤスターはちゃんと己のマスターとして扱おうと考えていたが、当の魔術師がそのチャンスを打ち碎いた。

キヤスターだと！？こんな役立たずを召喚してしまうとは、運がない。

精々私を守り抜け。わかつたか。

それが、クラスをいつた直後にキャスターに向かつてかけられた言葉だつた。

その瞬間、キャスターにマスターとして敬おつといふ気持ちは粉微塵に砕け散つた。

数日ほどは共に行動したが、召喚者（マスターと呼ぶことすら、嫌悪した。）は何を思ったか戦闘すらしていないと言うのに役立たずだと何度も罵り、あげくの果てに手まであげようとした。恐らくは女性と言ひ外見であつたことも影響したのだろう。

だが、いくら非力なキャスターと言えどもその身は英靈。ただの人間が叶う筈もなく、逆に堪忍袋の緒が切れたキャスターに返り討ちにあい氣絶した。

その隙にキャスターは主従契約を切り、記憶消去の魔術と今後物忘れが激しくなる魔術（嫌がらせ）をかけ逃亡したと言う。

「何と言つか、最悪ねその魔術師。

マスターとして冬木に入つてきてなくて助かつたわ。」

「大変、だつたんですね。キャスターさん。」

「そいつ最低だな。キャスターは女性じゃないか。なのに暴力を振るおうとするなんて。」

マスター達はその魔術師に対する批判を口にする。

しかし、方向性は違うものの士郎が口にしているのは、その魔術師の思考とあまり変わらない事に気付いていないのだろうか。

「愚かですね、クラスだけですべてを判断するなど。

確かに私達のように対魔の高いクラスには不利かもしませんが、それは戦いの方次第でどうにかなりうることだと語つのに。

本当に魔術師マイガスなのかと疑いたくなります。」

「全くです。しかし、中々にいいものを仕掛けましたね、キャスター。」

「私は止めた方がいいですね。気分が悪くなりそうです。」

「やれやれ、英靈をなんだと思っているのだろうな、その魔術師は。まつ、自業自得といったところか。」

「逃げ出したはいいんだけど、契約も切ったからすぐに消えても可笑しくない状態だつたの。」

「ちょっと待つて。何でサーヴァントの方から契約が切れるの？」

「あら、私だつて魔術師キャスターよ。そう簡単に自分の手の内は話さないわ。」

「ぐつ、それもそうね。」

「……でも、要警戒と言つた所かしら（ボソッ）」

凛が話の内容で気になつたことを尋ねるが、内容が内容の為簡単に口を割らない。

念の為に聞いただけであつた凛だが、僅かながらも警戒を強固にした。

そして、キャスターの話は続く。

「森のような場所で私は殆ど消えかけていたわ。何も出来ないで消えるのは嫌だつたけれど、魔力もマスターもない状態で残れるなんて普通思えないしね。

でも、そこにこの方が現れたのよ。」

キャスターはうつとりと頬を染めながら明後日の方を見つめた。どうやらその時の光景を思い出してるようである。

表情はまさに、恋する乙女であった。

逆に、宗一郎の方は動搖の欠片もなく、冷静沈着であつた。事実である以上、特に口を挟む必要性を感じなかつたのだ。

「彼は消えかかっている私を見ても、眉一つ動かさなかつたわ。だから始め魔術師のかつて思つたけど、すぐ違うって解つたわ。魔力が全くなかつたんですもの。

そんな人だから一か八か聞いてみたの、私のマスターになつてもらえないかつて。魔力だけなら自力でどうにかできる可能性があつたから。」

キャスターは体が透けている自分をただ見つめるだけの宗一郎に、魔力を持たない一般人であつても聖杯戦争に参加出来うる力量があると思った。

だから、受け入れられようと拒否されようと一度聞いてみよつと思ひ聞いたのだ。

願いが叶う聖杯を得る戦いに参加してみないか、と。

そのときの宗一郎が何を考えていたかは定かではないが、その提案を受け入れた。

詳しい情報など話していないにも限らずだ。

その時からキャスターは宗一郎に惹かれ始めたといつても過言ではない。

散々人生を弄<sup>もてはや</sup>され果ては裏切りの魔女とまで言われたキャスターにとつて、すんなり受け入れられたと言つだけでも心に響くものがあったのだ。

「本当に、あの時に来てくださったのが宗一郎様で良かったわ。そのお陰で私はこうして今も現界していられるし、幸せを感じることが出来ているんですもの。」

ホウツと息を吐き話を切るキャスター。

キャスターが宗一郎との邂逅を熱っぽく話しているのに対し、隣にいる宗一郎はどこまでも変化がなく落ち着いていた。

これだけ見るならばキャスターが一方的に思いを寄せているよう見ええるだろう。

だが、そんなことはない。宗一郎とて少なからずその様な感情を抱いていた。

暗殺術を教え込まれていた葛木宗一郎は、愛情と言つものがよく解らなかつた。

そして何事にも効率の良し悪しで考えてしまつ節があり、そこに自

分の考えを挟むことは希だつた。

そんな彼がキャスターに出会ったのは偶然である。

習慣の鍛練を行うべく人目につかない場所を歩いていたとき、それを田にした。

顔を驚きに染めるそれを一瞥ただけで自分の行動に影響の無いもの、と断じた宗一郎は、気にした素振りも見せず止めていた足を動かそうとしていたときそれは声を発した。

その提案を受け入れたのに理由など無い。そう、気紛れ以外の何物でもなかつた。

宗一郎は聖杯を欲しいとは思わなかつたし、またかける願いも存在しなかつた。

自分でも理由なき判断をしたのに驚いていた。

行動と共にすることとなり家に帰ると、キャスターをつれていくのに婚約者と言つ設定にした二人。

何故かと言うと多くの人間が同じ敷地内に住んでおり、宗一郎はそこの一室を借り受けて住んでいる人間だつたからだ。

自分を慕う言動をするキャスターに、始め演技をしているものと宗一郎は思つていた。

だが、キャスターの瞳は真摯そのもので、鍛えられている観察眼はそれを真実と判断した。

これには流石の宗一郎も困惑した。自分は最低限のやり取りしか交わしていないと言つのに、なぜ自分に好意を寄せるのだろうかと。

宗一郎は変わらず寡黙で素つ氣ないとすら言われるような態度を取

り続けるが、キャスターはめげる所があります情を深くしていった。そんなキャスターを見ている内に、宗一郎の胸に暖かいものが灯るよつになつた。

それがなんのか解らないが、放つておく事も出来ないと分析し始める。

その結果、たゞり着いたのはそれが愛情若しくはそれに近しい感情であると言つことだつた。

理解できないと思つていた感情を自分が持つたと言つて宗一郎は驚愕する。

だが、悪くないとも思つた。

「私達は今の生活が維持できればそれで文句はないわ。だから、聖杯戦争に参加する意思はもうないの。」

「ふうん。ホントかしら。」

キャスターの言葉に懐疑的な反応を示す凜。

言葉を鵜呑みにするのは危険と知つてゐるからの反応だ。

それはキャスターとて理解している。が、やはり本音を疑われるのはいい気がしない。

証拠の代わりの魔術的公約が必要かと考えていたキャスターに、思わぬところから助けが入つた。

「リン、キャスターの言つていることは恐らく本当でしょう。」

「なに、セイバー。解るの？」

「ええ、私の勘は本当だと告げています。それに、キャスターなら結界をはって強襲することも可能のはずですが、それをしていいないことが何よりの証拠でしょう。」

それに凜は納得した。セイバーのスキル直感から派生する日常での勘も信頼に値することを知ってるし、キャスターとして呼ばれるほどの腕前なら結界 + 強襲も十分可能であることを認めたのだ。

「解ったわ。キャスターの言葉を信じましょ。」

「あら、有難う。」

あつ、一つ忠告しておくれど、本拠地に巻き込まれないよう防衛手段を備えているか。」

不用意に近づいて怪我をしても知らないわよ。」

それは当然の処置といえるだろ。例えそのつもりがなくても戦闘狂が仕掛けてこないとも言えないからだ。

ほぼ全員がその防衛手段を魔術結界の類いだと捉えていた。敵意があるものに対してものみ発動するのだろうと。

だが、そうではないと一人だけ正確に推測しているものも存在した。

「ふうん。まつ、仕方ないわね。鍛練の一つとでも考えておきましょ。」

「えっと。気を付けます。御忠告ありがとうございます、キャスターさん。」

魔術師のうち二人は特に氣負う様子を見せなかつたが、一人に関しても冷や汗を流していた。

その人物とは……お分かりだらうが衛宮士郎だ。

「え」と…………俺、物凄く不安なんだけど。

そういうのまだよく解んないし……」

「何言つてるんですか、先輩の方がすごいじゃないですか。」

「凄いって、何がさ。」

「あつきたれ、まだ自覚してなかつたの？」

あんた人工の物にしろ自然の物にしろ、結界とかの空間異常に人一倍敏感じやないの。」

そう、士郎に使える魔術は少ないが、何故か空間の歪みとも言えるものを感知する能力が高かつた。

本人はそれがどれだけ凄いことなのかよく理解してないのだが。また、士郎が発動できる魔術で一つだけ特殊な働きをするものがあるのだが、今は関係ないのでおいておくとする。

「どうか? だつて何となくわかんないか?

なんか変な空気がするとか、この辺りは見にくいなどか。」

「魔術を使って調べない限り、士郎みたいにハツキリと解んないわよ。」

「ええ、ですのでシロウの身から事前に危険を遠ざけるには好都合です。」

嫌な気配を感じた場所に一人で近づかないでくださいね。シロウは無茶ばかりしますから。」

セイバーの言葉に視線を泳がせる士郎。

純粋に自分の身を心配するセイバーにいたたまれなかつたのだ。

自分がそれなりに無理をしてしまう人間であることは、士郎とて理解している。

例えば風邪を引いているのにバイトに行つたり、自分の用事を後回しにして人の頼みを聞いたり。

これから聖杯戦争と言う形で魔術が深く関わつてくるので、その無茶が怪我に繋がりかねないかセイバーは心配なのだ。

だが、理解しているのと自重できるかはまた別問題である。士郎にとつて人を助けると言つことは恩返しの意味も含まれるのでから。

「そう言えば、キャスター。貴女の気配が感じられにくいのは何故なのでしょうか？」

支障がなければ是非疑問を解決したいのですが。」

「私も不思議に思つてたのよ。サーヴァントが気配を読みきれないつてあり得ないわよ。」

取り与えず区切りがついたと判断したライダーは、邂逅時から疑問に感じていたことを尋ねた。

同じく気になつていた凛とアーチャーもキャスターへと視線を向けた。

桜は特に気にならないようで合わせて見ていると言つ雰囲気を出し

ており、土郎とセイバーは深く考えていなかった。  
考えていない方向性は違うが。

「ん~……まあ、それくらいは話してもいいわね。

別に大したことではないわ。ただ、認識阻害の魔術に手を加えて、  
気配を人間に近くしただけよ。」

十分に大したことである。流石はキャスター、魔術に関してはお手  
のものと言ったところか。

「結果から言えば失敗ね。

サーヴァント対策だつたんだけど、逆に田立つちやつたみたいで  
すもの。」

心底残念そうに呟いたキャスター。

そこで、昼休み終了の予鈴が響いた。

「もう時間か。まあ、知りたいことは知れたりし、これでヨシとしま  
しょう。」

「そうだな、欲張るのは預けん。最低限の情報は得られた。それで  
十分だ。」

教室に戻ると凜達が立ち上がりてドアを見ると、まだ宗一郎がそ  
こに立っていた。

教師である宗一郎は授業の準備があるため早く行かなければいけないはずなのだが、どうしたのだろうか。

全員の、いや生徒三人の視線が自分を向いたことを確認した宗一郎は、徐に口を開いた。

「…お前たちはこの学校の生徒で私は教師だ。」

「……………はい。」

何が言いたいのかよくわからない。

だが、宗一郎の表情は真剣で（何時もだが）時間を気にしながらも真面目に聞いていた。

「…参加する気はないにしても、参加の資格は有している。  
困ったとき手伝ってくれるよ。」

不器用ながらも真つ直ぐな優しさに、三人は感動してしまった。宗一郎はそれだけ告げてさっさと中に入つていった。だが、キャスターはまだ残っていた。

「ああ、宗一郎様ったら、何でお優しい人なんでしょう。  
宗一郎様がそう仰るなら協力してあげないこともないわ、魔術師の  
基本を守つてさえくれれば、ね。」

魔術師の基本、それは等価交換である。

どんな関係であろうと、魔術師であれば当然だ。

冷酷な魔術師の表情で告げるキャスター。しかし、セイバーを見つめ一気にそごうを崩す。

実は屋上にきてセイバーを見た瞬間から、緩みそうになる頬を一生懸命押さえていたのだ。

「まつまあ、もし何もないって言つんだつたら、セイバーを一寸貸してくれるだけでもいいわ。」

「うえ！？いや、流石にそれはちょっと…………」

そう、いくら戦つ氣がないと言つても、脱落していない状態で己のサーヴァントを貸し与えるなど言語道断。

だからこそ断りなのだが、キャスターは一気に落ち込んでしまった。

実はキャスターは無類の可愛い物好きなのである。

そのキャスターにとって、セイバーは正にクリーンヒットな存在だったのだ。

先程の感動も緊張も吹っ飛び、その場に残つたのは脱力感だけだった。

学校も終わり、凛と桜は帰宅していくひるいでのいた。

「ハア～、なんか今日は疲れたわ。」

「お疲れ様、マスター。」

そんな君の為にリラックス効果のあるハーブティーをいれてみたのだがどうかね？」

「んつ、ありがと。貰うわ。」

アーチャーの手元から立ち上る薫りだけで、凛は疲れが軽くなつたような気がした。

紅茶を一口含めば強すぎない香りが口内に充満し、美味しさを最大限に引き出しつつ渋味が全く出でていない味が身体中に染み渡つた。

「なによこれ、スッゴク美味しいじゃない。」

アーチャー、あんた料理だけでなくこんなことも出来たのね。」

「なに、体に染み付いていたのだらう。以外と自然に動けたからな。桜、君も一杯どうかね？」

「では頂きます。ありがとうございます。」

桜のかップに紅茶を注ぐアーチャーを見つめる凛。

アーチャーの動作は流れるように洗練されていて、まるで執事のようだった。

「（アーチャー、て言つよりホントは執事のサーヴァントなんじや  
バトラー

なこの、ここへ……って、そんなことがあるわけ無いか。」

凛は余裕が出てきた思考でつい下らないことを考えるが、すぐに打ち切った。

こんな美味しい紅茶があるのに、変に患者に没頭してしまっては勿体無いと感じたのだ。

凛は今だけ何も考えず、只紅茶を堪能することにした。  
紅茶を飲み干し休みである明日の計画を部屋で話し合おうと凛が椅子から立ち上がったとき、桜が凛に声をかけた。

「あ、あの。姉さん。」

「どうしたの、桜？」

「明日お休みなので、ライダーとお買い物に行こうと思つて。」

「あら、いいじゃない。好きにしなさい。」

以前から楽しみにしていたショッピングに行くと言つ桜だったが、それを凛に告げてきた。

仲の良い姉妹だがマスターとしてある程度行動を隠した方が良い筈なのだが。

「それですね、あの……その……」

「？」

言い淀む桜。一寸赤くなつてもいる。

何が言いたいのか全く推測できない凛は、ただただ首を傾げるばか

りだった。

魔術関係において察しのいい凛はあるが、日常の事となると途端に鈍くなる。

傍観していたアーチャーは桜が何を言いたいのか判り、仕方ないとばかりに手を差しのべることにした。

「凛。桜は君とも一緒に行きたいのだ。だらう？ 桜。」

「は、はい！ 一緒に買い物に行きましょう、勿論アーチャーさんも。」

「

期待の眼差しを向ける桜。  
その眼差しに凛は唸つた。

桜の困ったような、そして懇願するような眼差し。凛はそれにめっぽう弱かつたのだ。

狼狽えて答えを返せずにいると、桜が俯き落ち込み始めた。

「そうですよね。駄目、ですよね」

「…………っ！？ わかった、一緒に行くから、泣かないの桜。」

聞いて、満面の笑みを浮かべる桜。

姉さんと出掛けの久しぶりだ、とはしゃいでいる。

「で、ライダー。桜のあの行動は天然かね、わざとかね？」

「私にも判りかねます。ですが、桜が喜んでいるなら私には問題ありません。」

的確に凜のツボを押さえている桜の行動に、アーチャーは桜もやっぱり魔術師だと認識した夜であった。

パタパタと小走りの足音が邸内に響く。

「桜、準備できた？」  
「はい、大丈夫です。姉さん。」

玄関先でお互いをチェックしあう一人。  
その傍らに各々のサーヴァントが立っている。

ライダーは魔眼封じの眼鏡をかけ、服装は簡単なTシャツにジーパンと言つたラフな格好だった。

ライダーが着ても違和感なく、かつ人から見てサイズが気にならない様な格好を選んだらこうなつたのだ。

アーチャーは黒のシャツに同じ色のスラックスをはいている。  
肌の色も含めて黒尽くしである。だが、これがまたにあつていた。  
アーチャーの服に関しては、遠坂家の物ではなくいつの間にかアーチャーが身に付けていたのだ。

父親の服で着せ替え人形にしようとした凛は、そのとを残念そうな表情をしていた。

そして、いつか現代の服を使って実行しようとした決めたのだった。

「よし。忘れ物もないし、そろそろ出ましょーつか。」

「はい。いこーう、ライダー。」

そして、二コ二コと行動を見守っていた母親に顔を向けた。

「ふふ、楽しんでらつしやい。英靈のお一方も今日はゆっくつしてきてくださいな。」

葵も本音を言えれば一緒に行きたかったのだが、家事の事もあり断念した。

代わりに、帰つてきた沢山買い物の様子を話して貰おうと考えた。

「それじゃ、気をつけて行つてきなさい。」

そうそう、最近通り魔みたいなのがいるらしいから十分に気を付けるのよ。

反撃にしてもやり過ぎては駄目よ。解ったわね。」

「「はい。」「

いや、心配する箇所が違つ。普通襲われること自体を心配するものだろ？。

……自分の子供を十分に理解してるとも言えるが。

「やつ過ぎ、ですか。見ている限り否定できないのが何とも言えませんね。」

「その場合は我々がすぐ対応した方が良さそつだな。血が上った凜は何をしでかすか解らん。」

頷きあう二人。

その会話は漏れ聞こえないよう潜めて行われていたのは、言つまでも無いだろ。

「それでは行つてきます、お母様。」「お土産も買つてきますね。」

楽しそうに会話をする一人を眺め、アーチャーは珍しく穏やかな気持ちになった。

大変だつたが、今日はきっととても良いくらいなるだつたと感づつ。

だが、楽しむビリルが疲れはしてしまつことは、誰も予想できなかつた。

## 八章 状況把握（後書き）

次回までは日常な感じで、そろそろ本格的な戦闘を書かないと。

一応自分なりに伏線的なものを今までのも含め書いてみたんですが、どう書けば伏線と判りつつも予測できないものになるかは難しいですね。

ちゃんと回収しないと。

## 九章 休日の騒動（前書き）

時間がかかった上に構成が甘くなってしまったかもしません。

息抜き話的なものとして多田に見てもらえたると思います。（汗）

## 九章 休日の騒動

家から出た四人は様々な箇所へ行くための交差点に足を向ける。凛と桜は笑顔を浮かべ、とても楽しそうな雰囲気を醸し出していた。

「ふつ、じつしてみるとそういうのめでて居るの少女と変わらんな。」

「そうですね。」

アーチャーとライダーはそんな一人を後ろから見つめつつ、ついていた。

自分達のマスターを見つめる田は、限りなく暖かかった。

前の聖杯戦争を知るアーチャーはひとしおだ。

確かに一度は絶望し、過去の己を殺そうと考え…………実行した。だが、自分とは違う、自分、から答えを得ることができ、再度信念を持ち直し貫くことが出来た。だが、それでも掃除屋としての仕事は変わることなどなく、守護者として殺戮の中に身を置いてきた。

そんな自分が守護者として派遣され続けていても考えていた幸せ……

そんな幸せが詰め込まれた様なこの世界、……

召喚されて数日たつが未だに消滅間際に見ていく夢なのではないかと思つときがある。

「どうしました、アーチャー？

何やうほんやりとしている様ですが。」

「いや、何でもない。」

慌てて思考を振り払うアーチャー。

現実にいる以上答えがないことを考えていても埒があかない。

ふと、近くにサーヴァントの気配を感じた。

よく知つていて、あまり知らない気配。

「ライダー。」

「ええ、この気配は彼等ですね。  
どうしましようか?」

「ふむ……まあ、このまま放置で良いだろ?」

問題があるよ今は思えん。」

「やうですね。私もその考えに同意します。」

「のまま行けば丁度良いタイミングにならうですしね。」

とつとう道路の交錯地点に到着した。

和風の住宅街に繋がる道から姿を表したのは、士郎とイリヤそしてセイバーだった。

靈体化して姿は見えないが、バーサーカーも側にいることとも気配でわかる。

他のサーヴァントならともかく、バーサーカーが実体化してのお出掛けなど出来よう筈もない。外見的に。

「…………あつ。」「」「」

出合つて声をあげたのはマスターである四人だけだった。  
どうやら、セイバーも察知した上で放置していたようだ。

「あら、リンとサクラじゃない。貴女達もお出掛け？」

「、も、ってことは士郎達もなのね。」

「買い物か？この言ふ風に会うのは珍しいな。」

「はい、ライダーと買い物に行きたくて。」

仲良く喋り出す彼等。……一応聖杯戦争中何ですけどねえ。

「それにしても、一人だけで出掛けるなんて珍しいわね。」

「いや、イリヤがついていくつて聞かなくて。今日はお詫びとして  
一成を誘つて出掛けようつて思つてたんだけどな。」

「なによ、シロウつたら。たまには一緒に買い物ぐらい良いじゃないの。」

「士郎…あんた、お詫びつていつて前に夕飯ご馳走したじゃないの。」

「あれは遅くなつた分で、今日は巻き込んだ分だ。全然違つた。」

士郎の返答に頭を押さえる凜。

桜は先輩らしい、等と微笑んでいる。

イリヤとセイバーに至つてはいつもの事だと、氣にもしていないうだ。

ライダーは興味無さげな顔で不干涉を貫き、アーチャーは私はこんなに馬鹿だったか、と凜のように頭を抱えたい気分だった。まあ、

そんな感情は微塵も表に出していないため、誰も気付いてはいないが。

「遠坂達も新都に行くんだる。どうせだから一緒にいかないか？」

「あんた、それほん……つて、そうに決まってるわよね。そういう言つ奴なんだから……。

桜、どうする？それでも良い？」

「あっ、私は……」

チラツとライダーを振り返り、「サクラのしたいよひこ」とでも言うような笑顔を見て己の考えを述べた。

「私は、良いと思います。それに、みんな一緒にの方が楽しそうですし。」

凛は、この買い物は桜が立案者だからと桜のしたいよひこをせるつもりだ。

それは、言い出した本人が楽しめなければ意味がないと考えていたからだ。

桜の返答を聞いた後に、士郎はイリヤへと声をかける。

「イリヤもそれで良いか？」

「ぶー、決めた後に聞かれても反対できないじゃない。」

仕方ないなあ、私はお姉ちゃんなんだから、シロウのお願い聞いて

あげる。」「

イリヤはよく、お姉ちゃん、と言つ言葉を使つていた。  
見た目だけなら逆に見えるため、他の人へのアピールも含まれているからである。

話が一応纏まつたのを見計らい、アーチャーが移動を促す。

「話が纏まつたところで移動を開始するぞ。話は移動しながらでも出来るが、時間は待ってくれんぞ。」

それもそうだと、一成のいる柳洞寺へ向かい始めた。

柳洞寺へ初めて来たライダーは目を見張った。

「これは……凄いものですね。」

ライダーが驚いたもの。それは柳洞寺に張り巡らされた一種の結界である。

柳洞寺は龍脈の溜まり場の一つであり、その影響かは知らないが鳥居の入り口以外は結界が完全に覆っていること。

そして入り口以外から侵入しようとする場合、サーヴァントを含む靈的存在に負荷がかかることなどを説明した。

「成る程。それにしても、中が窺えないとは自然の物にしてはかなり強固な結界ですね。」

石段を登りながら呟くライダー。アーチャーは誰にも解らないよう、少しだけ警戒を強めた。

恐らくこの先で待っているであろう存在を知っているが為に。

この世界であることと毎間であることを考えれば、そうなる可能性は限り無く低い。

だが、低いだけで無いと言い切れないからこそ、慎重すぎる予測の上の行動を行なっていた。

石段の頂上にたどり着き鳥居を潜るゝとした瞬間、それは来た。

ヒュッ  
カン

鳥居の影から現れた男が無造作に、しかし素早く手の木刀を降り下ろしてきたのだ。

念のためと警戒していたアーチャーが素早く動き、投影した双剣の片方（瞬時に武器を見極め、刃は潰してある）で防ぐ。

それに、ほつと相手の男　袴に似た着物を来た、長髪をポニー

一  
ルに纏めている　は感嘆の声を溢す。

「いやはや、油断の無い御仁よ。」

「ふむ、影撃ちが君の得意技かね？　たいした特技だな。」

男の言葉には反応せず、いつものように皮肉な物言いをするアーチ  
ャー。

鷹の目とも評されるその鋭い目は更に細まり、威圧感を持つて相手  
を見据えている。

だが、相手もその程度で怯むようなことはなかつた。

他の者達も結界が関係ないほど近くに寄つたため、その男の正体が  
何であるか理解した。

「うそ、サーヴァント！？」

「何でこんなところにいるんだ。」

なぜこんな場所にサーヴァントがいるのか。近くにマスター（らし  
き人）の気配がしないためその驚きは大きかつた。

「いかにも、我が名は佐々木小次郎。アサシンのサーヴァントだ。」

男　アサシンの言葉に、彼等は思わず脱力した。

隠すことが基本である真名を会つてすぐ明かすなど誰が予想出来よ

うか。

僅かながらも交流を持つセイバー達とですら明かしていないというのに。

「……アサシン、そう簡単に真名を明かしていいのか。」

「なに、我が望みは強者との戦い。故に問題はない。」

しつと言い放つアサシン。

「うん、珍しくもないかもね、戦いだけが目的なら。」

「そう言つもんか？イリヤ。」

「多分。十年前の聖杯戦争でも、堂々と名乗るサー・ヴァントがいたつてお母様がいってたし。」

一人の衛宮の会話を聞いて納得する一人の遠坂。

凛達もその話は聞いていたからだ。

「理解もしたところで続きと「アサシン殿、客人に斬りかかつてはならぬとあれほど言つたでしょ？」「……いけぬようだな。」

声のする方へ皆が向くと、此方に走り寄る一成がいた。

それを認めたアサシンはオモチャを取り上げられた子供のような様な表情だった。

そこから、どれだけ手合せと言つてもに渴望しているのが窺えた。

「つと、寺への客人ではなく衛宮だったのか。」

「ああ、一成。お早う。」

「つむ、おはよ。して何用なのだ？」

疑問を投げ掛ける一成。アサシンはその後ろで鳥居の側に床つた。

「いや、もし今日暇だったら一緒に出掛けないかと思つてさ。無理ならないんだけど……。」

「なにーつむ、問題ないぞ。是非行こうではないか。」

ウキウキとしながら、準備をするため家に戻る一成。他の者達は何とはなしについていっていた。

「なあ、一成。さつきの事だけや。……」

「アサシン殿の事か？」

歩いてる間無言のままと黙つてもアレなので、士郎は一成に話しかけた。

内容はアサシンに関することだ。なぜいるのかは勿論、それなりに親しそうな関係もだ。

「名からすると彼もサーヴァントと言つものなのだろう？」

「なんだ、気付いてたのか。じゃあ聞くけどさ、何でサーヴァントがいるんだ？」

一成は士郎の友人であり魔術師でないため、教えて貰えるだろうと思ひ聞いた。

「彼は今家を間借りしている方が連れてきたのだ。今思えばその人が魔術師であり、ここに来てから召喚したのであるつな。」

「何? と言つことはここに魔術師がいるわけ?

セカンドオーナーの家には何の報告も来てないわよ。挨拶もないなんてどんな目にあっても仕方ないってわかってるのかしら。」

力ある靈地には管理を任せられている一族が存在する。もし、その土地に魔術師が入る場合管理者であるセカンドオーナーに挨拶をするのが基本である。

それがなかつたため凜は憤つているのだ。

触らぬ神に祟りなし、とばかりに士郎は会話を続ける事にする。

「それで、その人はどんな人なんだ?」

「ふむ、彼女はとても優しそうな方だな。僧たちにいつも気を配つ

てくれておられる。

それに、我が兄代わりの人の婚約者でもある。「

「へえー、彼女って言う事は女人なんだ。」

それに、兄代わりってのは初めて聞いたな。」

「そりだつたか?話していたと思つたが。」

雑談を交えつつ歩みを進める。

後ろで士郎達の会話を聞いていた幾人かは、ん?と何かに気づいたようだ。

「サクラ達、いきなり黙り込んでじりじりやつたのよ。」

「いえ、こんな話をどこかで聞いたような気が……」

住居部にたどり着き、皆を待たせて軽く準備を済ませたとした時中から声がかかつた。

「あら、一成くん。今からお出掛け?」

「はい、友人と。すみませんが家の事をお願いしても良いでしちゃうか、メディアさん。」

現れたのは昨日学校で話し合つたキャスターだった。  
キャスターと凛達の間に沈黙が落ちる。

「えーと、何でここにいるのかしら?」

「いや、一成とは友達だし。」

キャスターはそんなことを聞いていた。

「ふーん、貴女の真名メテイアって言つんだ。‘裏切りの魔女’かあ。」

「イリヤ、昨日ちゃんといつたる。キャスターは戦わないんだから手を出したらダメだぞ。」

「解つてゐわよシロウ。」

意味ありげに呴いたイリヤに不安を覚えて、土郎は念を押した。

「スミマセン、キャスター。我々はただ買い物の誘いをしに一成を訪ねただけですので。」

セイバーの姿と買い物という言葉にキャスターは反応した。

それにアーチャーは嫌な予感がした。

可愛い物好きのキャスターがこいつの機会を見逃すはずがないと思つたからだ。

「お買い物つて、どんなものを買つか決めているのかしりへ。  
「……ええ、基本、服屋を回ることになつてますが。」

服と聞いた途端、キャスターの田が子供のよつに輝いた。  
それはもう、キラキラと。

「アーチャーは口許がひきつりそつになるのを必死に堪える。

キャスター様子に気づいた他の者も、思わず一歩下がっていた。

「ねえ、私も同行してはダメかしら？」

私もそろそろ服がほしいと思っていたところなの。良かつたら意見  
を貰いたいわ。」

うふふふふ、と笑いながらいうキャスター。

言った言葉が本当の目的でないのは明らかだが、なんといつか断れ  
ない空気が流れていった。

ジ―――

「わ、私に聞かれても、その……」

ジ―――

「それに貴女は、ここの人で……」

ジ―――

「そもそも、サーヴァント同士があまり馴れ合つのは……」

ジ―――

「…………シロウ、イッセイ。助けてくださいーーー。」

ひたすらセイバーを見つめるキャスター。  
セイバーは自分が決めることが出来ないと、拒否の言葉をいつがそれでも視線は揺るがない。

見つめる。見つめる。見つめる。ひたすら見つめ続ける。  
それに半泣きになりセイバーは助けを求めた。

その時、「泣き顔も良いわね」という言葉が聞こえた気もしたが、  
聞かないふりをする。

そつ、聞いてないと聞こえさせる。

「むう。じうする、衛宮。自分も誘われる身だからな、そちらが決めてくれ。」

「えへ、と言われてもな。」

チラシ、と十郎が同行者に目を向ければ、キャスターの反応にもうひとつでも良いくんじやないと言つ反応が帰ってきた。

「ああ、うん。良いんじやないか。一緒にいっても。  
「（パアッ）ありがと。じゃあ準備してくるわね。」

士郎の言葉を聞いた瞬間、きびすを返したキャスター。それに続き、一成も部屋に戻つていった。

「…ねえ、桜。」

「…何ですか、姉さん。」

「昨日の時点で気付いてはいたけど、キャスターってホントに可愛いもの好きなのね。」

「そうみたいですね。まさか、あれほどとは思つていませんでしたけど。」

それに皆がうんうんと頷く。

反応がないのは、昨日の話し合いにいなかつたイリヤだけである。

準備が済んだ二人も合流し、再び新都に向けて出発する。

鳥居に差し掛かつたとき、キャスターはある方向に声をかけた。

「アサシン、お留守番お願ひね。あと、一成くんに聞いたけど、今度人に襲いかかつたらお仕置きよ。」

「やれやれ、僅かな楽しみですら取り上げるのか。だがまあ、一応承知しておいつ。」

この会話と一成の言葉から、眞実が見えた。

それを、全員が理解した。

「ふむ。信じがたいが、矢張アサシンは君が召喚したのかね、キャスター。」

「ええ、そうよ。私も魔術師、出来なぐは無いと思ったからね。」

アーチャーがキャスターに聞くと、すんなり認めた。  
言葉から確信に満ちた響きが認められたのだ。

キャスターとは魔術を極めたものが呼び出されるクラスである。  
その為、サーヴァントの身であっても召喚は不可能ではないだろうう  
と思い、またキャスター程の力があれば不足があらうと他の部分で  
補えると判断したのだ。

故に、身を守る手段のひとつとしてアサシンを召喚したのだ。

「不用意に入り込んでしまえば、彼に排除されてしまうと言つわけ  
ですね。」

結界でなくサーヴァントと言うのが予想外でしたが。」

笑みを深めるキャスター。

彼らが勘違いしていたのを理解して、あえてそういう方に仕向けていたからだ。

直接会つた今となつては、もつ意味はないが。

そして、新都に到着し、先ずは昼御飯を取ることにした。

「それで、何処にいくのだ？凜。」

「そうね、結構人もおおいし、ファミレスが一番良いかしら。」

辺りを見ながら考えを巡らせる。

他の人間も一応考えるだけは考えるが、約一名だけは違う。

セイバーはうつとりしながら辺りをみていたのだ。  
それを理解していたもの達は放置を決め込む。

近くのファミレスにいき、席を確認するが時間もちょうど昼時のため空き数が足りなかつた。

他何件かも回るが、同様な結果だつた。

セイバーが目に見えて落ち込んだ。

彼女にとって現代の食事はいくら食べようと飽きることはなかつた。  
だから毎回毎回、食事と言つものは楽しみであつた。

今回は滅多に無い外食と言つこともあり、楽しみも大きかつた。の  
で、反動もすごかつた。

「（シヨン）……」

「大丈夫よ、もうちょっと探しましょ。」

「そりですよ、すぐ見つかりますから。」

「俺、あそこも聞いてくるな。」

「セイバー、よしよし。」

卷之三

マスター・ズは一生懸命セイバーの「機嫌をとろう」としていた。サーヴァント達と言えば、アーチャーは過去の経験から無言を貫き、そんなアーチャーを見てライダーも口をつぐむ。

「（ああ、可愛い可愛い）。落ち込んだ姿も可愛いわ。シャシンと並ぶものにして残しておきたい…… はあはあ。）」

うん、  
自重しろ。

幸いなのは表情に出ていないことか。

だが完全に隠しきれてはないようだ。

不穏な空気を感じてかアーチャー達はキヤスターから少し離れた位置に立つており、人の流れも僅かにそこは少なかつた。

士郎が戻つてくるもやつぱり席を確保できなかつたようだ。  
こうなつてはファーストフードしかないかと言つ流れになつたとき、  
事態は動いた。

「そんなところに何を突つ立つておるのだ。」

声をかけてきたのは金髪でライダースーツを着た男だった。

アーチャー達は人でない気配を感じとり、僅かに警戒をにじませる。

「アーチャー！？あんた、こんなところにいたの！」

その男は第四次聖杯戦争において、アーチャーのクラスで呼ばれた男だった。

「何だ、トキオミの娘達か。こんなところで何をしておる。」

「それはこっちの台詞よ、家にも帰らないで。」

事態を理解できないキャスターは近くにいるアーチャー達に尋ねた。

「ねえ、アーチャーって貴方の事じゃなかつた？  
なぜ彼がアーチャーと呼ばれているの？」

「奴がアーチャーと呼ばれているのは、前回アーチャーとして呼ば  
れたかららしいのだが……」

「ええ、なぜいるのでしょうか。」

「……もしや、例の話し、セイバーだけではなかつたのではないかと言つ

疑問符を浮かべるキャスターに、セイバーから聞いた話を伝える。  
キャスターもライダーと同じ結論に至った。

則ち、四次のサーヴァント全てが現界しているのではないかと言つ

「…………」

証明するのは聞くのが一番だが、今は聞ける雰囲気ではないため議論は一旦ここで終わらせた。

「何故我が言つことを聞かねばならん。私は王ぞ。」

「…………言つても無駄か。」

「ふん、理解したか。」

むつ、そこにはセイバーではないか。成る程、我に会いに来たのか……か……。」

「…………」に来て凜達の後ろにセイバーがいることに気づいたアーチャー（金）だが、いつもと様子が違つた。

沈んだ表情に潤んだ目、今にも壊れそうな雰囲気を醸し出していた。その様子はアーチャー（金）心臓を貫いたのだった。

「…………、どうしたのだ、セイバー。

何故そんな顔をしておる。」

「アーチャー、ギルガメッシュですか。」

セイバーはアーチャーと言おうとしたが、紛らわしくなると思い真名を呼ぶことにした。

「なんだ、特別に我が力になつてやらんでもないぞ。言つてみるが

「いい。」

「いえ……その…………」

「昼飯を食べよつと思つてたんだけさ、どじも一杯で入れなかつたんだよ。」

言つてくわうとするセイバーの代わりに土郎が答える。

「なんだ、そんなことか。特別に我的店に招待してやひつ。なに、我の奢りだ。」

ギルガメッシュはこゝかとばかりに懐の大きいところを見せよつとした。

これで我的事を見直す筈。そしてゆくゆくは……と思つてゐ辺り懲りない男である。

全員がギルガメッシュがオーナーを務める店に移動し、昼食を済ます。

味は、流石高級店の一言だった。

そして、流れ的にギルガメッシュもついてくることになる。だが、いつもを取り戻したセイバーが鋭い一言を放つ。

「それで、いつまでついてくる気ですか。ギルガメッシュ。」

「つれないぞ、セイバー。我とセイバーの仲ではないか。」

「ええ、だから言つてるのです。昼食にかんしては感謝しますが、

「いつまでもつこひになつてゐる。迷惑です。」

だが、いへり無下に扱われてもギルガメッシュは引く」とはなかつた。

「衛宮、ギルガメッシュ殿はセイバー殿に懸想しておられるのか？」  
「そうなるのかな？十年前から求婚され続けてゐるつて言つてたし  
な。」

「フムフム。サーヴァントと眞つ存在にもやはつやうにう感情はあ  
るのだな。」

セイバーとギルガメッシュのやり取りは徐々に視線を集め出していく  
り、そろそろ止めなければ完全な見世物になつてしまつ。

「セイバー、お脣もいゝ馳走になつたし今口づらいはいいんぢやない  
か。」

「うむ、雑種もたまにはいふことを言つではないか。」

「それは……仕方ありません。今日だけですよ。」

こつして、総勢11人（バーサーカー）で行動を開始した。

「きやあ、これ可愛いわ。」

「姉さん、ライダー。これ、おそれこで買いませんか？」

「いえ、じつは言つものは私には…………」

とあるファンシーショップでは、可愛いアクセサリーをつけられそうになつたライダーが逃げ出そうとして失敗したり。

「これも似合つわ。ねえねえ、これも着てみてくれないかしら。」

「き、キャスター。流石にじつは言つものは…………」

ある可愛い服を売つている店ではキャスターがセイバーを着せ替え人形にしたり。

「セイバー、我のためにこれを着ける。」

「天誅————！」

ある下着売り場ではギルガメッシュがセイバーに下着を押し付けて、セイバーが宝具を解放しかけたり。

（セイバーは士郎が宥め、ギルガメッシュはアーチャーが後ろから念のために羽交い締めにした。

因みに、二人の顔は場所が場所なだけに真っ赤だったと言つ。）

兎に角、女性陣は楽しそうだが、一部の男性に取つては疲れがますばかりだった。

「一成、今日は悪かつたな。」

「いやいや、なかなかに体験できぬことが多く、有意義な一日だつたぞ。」

遊び疲れたのか眠つてしまつたイリヤをおんぶしながら土郎は一成と話す。

一成の言葉に嘘はないようで、笑顔で答えていた。

彼等の後ろではまだセイバーにちよつかいを出しては殴られるギルガメッシュがいたが、もうだれも看めようとはしなかつた。

別れ道へと到着し、彼等は別れの挨拶をする。

「それでは、今日は楽しかつた。またな。」

「充実した一日だつたわ。また機会があれば誘つてね。」

一成とキャスターは柳洞寺への道へと進み。

「じゃあな。遠坂、桜」

「リン、サクラ、アーチャー、ライダー。今日は色々と迷惑をかけすみませんでした。」

士郎達は和風の住宅街に繋がる道に進み。

「なら、我もうここで別れる。トキオ!!には戻る気はない」と云えておけ。」

ギルガメッシュは新都へと再び足を向けた。

「つたく、あの金ぴか。サーヴァントの癖で、お陰で疲れたわ。」

「……疲れたのはこひらの方だ。」

「でも、楽しかったです。」

「それは良かつたです。サクラ。」

そして、彼等もまた、自宅へ向け歩き始めた。

「「ただいま。」

「お帰りなさい、一人とも。今日は楽しかった？」

「はい。楽しかったです。」

「色々と大変だったけど。」

今日の出来事を話ながら家の中へ入っていく。

いつもして、騒がしい一日が終わったのだった。

## 九章 休日の騒動（後書き）

実は今回の話に外道麻婆神父を出そうと思っていたのですが、終わつてみれば出番がなかつたと言つ牒。なぜだ。

いずれ本編に捩じ込む形で出すよつこします。

そろそろ戦闘開始しないといけない空氣が……

## 十章 激突（前書き）

戦闘はしなくてもいいのではないかと意見を頂きましたが、戦闘に  
関することが今後微妙に関わってくるので書かせていただきました。  
あまり自信はないですが……

そして徐々に遅れてくる投稿時間……土曜日中に投稿できたからい  
いと言うことで（ダメですか（汗））

騒がしかつた買い物を終えた日の夜、疲れてはいたが軽く情報を整理しようと凜とアーチャーは部屋で話しあっていた。

今日の外出で思いの外重要な情報を得られたためもある。

「さて、一応全部のサー、ヴァントは解つたわね。思いの外早く知れたのは僥倖だったわ。

あとは、どんな風に攻めていくかね。」「考えはあるのかね？」

「一応現状では一通り考へてるわ。

一つはアサシンに仕掛けること。キャスターが不参加を表明しているから、手を出してくることはないとと思うの。だから、一対一でやれる筈。」「

手を出してこないと断定するのは甘いと考えるアーチャーだが、キャスターから聞いた話と今日の様子を省みればそう断じてもいいかと考えた。

「二つ目は桜に協力してもらつてセイバー達に仕掛ける。

セイバーとバーサーカー、どちらに仕掛けるにしろ片っ方が黙つてみてくれるとは思えないから。押さえておく位はしてもらえないかなって。」「ふむ、だが桜が了承するかな？」

「だから只の案の一つよ。ランサーの拠点なんて解らないし、わかっている奴らから攻めた方がやり易いもの。」「

確かにそれを考へるとこれが現在取りうれる策である。

「それで、どちらにするのかね？」

「…………どっちがいいと思う？」

「…………マスター。基本的にそれを考へるのは君の役目だったと思つただが。」

「いいじゃない、意見を聞くべから。」

軽くあきれながらアーチャーは告げる。が、凛に堪えた様子は見られない。

いや、と言つよりも疲れが先だつて他に思考を回す余裕がないように見受けられた。

「ふう…………どちらにもメリット・デメリットは存在する。故に、一概にどちらがいいとは言えん。

つまり、凛がどのよつて考へてどちらを先に攻めるか、と言つたりとだな。」

「結局どちらがいいとか言つてないじゃない。」

「当然だ。精々悩むがいい、マスター。」

アーチャーは以前決意した通り、凛の勝利の為に力をつくすつもりである。

だが、だからと言つて全てを自分でやるつもりもない。

凛が考へ又は判断した上で勝ち、凛自身の勝利としたいからだ。

アーチャーの性格からして、素直にやつぱつと云つたり態度で表すことはないのだが。

「ほりほり、どうするのかね？」

悩んでころひねりに他のもの達はキチンと策を考えても知れんぞ。

「

追い討ちをかけるように更なる言葉を紡ぐ。  
アーチャーの表情がイキイキとしてるのは、恐らく田の錯覚ではないだろ？  
それこれはまた別、と言つて（？）一例だ。

ベッドの上に寝転んでいる凛は、唸りながらぐるぐると転がっている。  
何度も行つては来てを繰り返し、唐突にやむ。

見守つていた（ ）アーチャーは何事かと方眉をあげ、ベッドを覗きこむ。

そこにはとうとう睡魔に抗えなくなつたのか、眼をトロンとさせた  
凛がいた。

これにはアーチャーも苦笑いを溢し、話を進ませようとしゃがたと  
反省するのだった。

「アーチャー……眠い。もう無理…………。」

「そうだな、今日は騒がしい一日だつたしな。  
続きは明日にするとして、ゆっくり休むといい。」

「ん~…………おやすみ、アーチャー…………」

「うなつては話し合いなど望むべくもないと、アーチャーは凛を休ませた。

凛がしつかり眠ったことを確認しアーチャーは、何時ものよつて警戒のため屋根の上に移動した。

屋根の上でアーチャーは今日一日を振り返った。

今日出掛けた中で、新たに知った事がある。

それは、大災害の中心となつた筈の場所に公園がなく、代わりに建造物があつた事だ。

以前どこかで公園になる前、とある建設計画が進んでいたと聞いたことがあつた。

だが、聖杯の泥が溢れ出て焼かれたとき、公園になつたのだと聞き及んだ。そこからこの街は泥に焼かれなかつたと推測できた。

つまり、この世界において、この世全ての悪<sup>アンコ・マガ</sup>、に汚染された聖杯が存在していないと言つことを示していた。

それに気づいたとき、アーチャーの心に複雑な感情が湧き出た。

「衛宮士郎、の歪みの原因が無くなり、切嗣の死と言つ結果の回避。それに喜べばいいのか。

多くの死人が聖杯戦争によつて出なかつたことを安堵すればいいのか。

他の、衛宮士郎、の様な苦悩を知らない衛宮士郎を すれば  
いいのか。

「そりだ……こここのヤツは何も知らない。苦悩も、‘己’の特異性も。  
何故、ここだけ……何故、私にそれを見せる。」

考えれば考える程解らなくなり、思考の迷路に陥つていく。  
多くの平行世界のエミヤシロウの記録も識つてはいるが、ここによ  
うな歴史などアーチャーは識らない。

だからこそ、此が現実なのか夢なのか何度も考えてしまつ。  
現実か夢か、まるで胡蝶の夢の様だ。

「 矢張、私は…俺は…」

凛の笑顔、桜の笑顔、一成の笑顔。

笑つてゐる。楽しそうに。

ライダーの笑顔、セイバーの笑顔。

望んでいたもの。ずっと見たかつた光景。だが…

士郎の笑顔、イリヤの笑顔。

思って出す毎に湧き出る」の感情は……

ポツリと頬に何か当たった感触でアーチャーは我に返った。  
そして、考えていた事を振り払つかのようにかぶりを振った。

「バカな……何を考えている。

私は答えを得た。そんな気など、とうになくしただろ。」

ポツリポツリと、段々と降つてくるもの 雨 が多くなつてくる。

「やれやれ。知らない歴史を、世界を知ったからと言つて簡単に搖  
りあすきだ。」

ドクドクと心臓が煩いくらいに鼓動を刻む。

それに呑わせるかのように、何か不安のようなものが沸き上がりつ  
てくれる。

それをアーチャーは心の奥に押し込んだ。

幸せと言ひ可能性に満ちたこの世界で、不安になるものなどないと。

雨が強くなる中、アーチャーは敢えてその身にそれを受ける。

それはまるで、雨がこの不安を洗い流してくれる事を願つているか  
の様だった。

アーチャーは知らない。

考え込んでいたときの表情が虚ろであり、目に光がなかつたことに。

アーチャーは気付かない。

それは、どこか陰鬱な雰囲気を纏つていたことに。

「朝か……下に戻らないとな。」

雨は日が昇り始めた時点で完全に止んでいた。

アーチャーは濡れ鼠の状態で、普通の人間であれば完全に風邪を引く格好だった。

しかしそこは魔力で肉体を作りだすサーヴァントである。

本当の肉体を持たないがゆえに風邪を引く理由はなく、姿も一度靈体化しさえすれば元に戻るのだった。

下に戻ったアーチャーは朝食の準備を行う。

初日にやつて以来、朝はアーチャーが作ることになったのだ。

他の理由のひとつとして、食事を一緒に摂ることになつたので、ただ食べるだけと言つのが自分で許せなかつたと言つこともある。サーヴァントは睡眠を必要とはしていなかつから、朝早くとも問題ないと言つこともある。

因みにライダーは料理をする処か、台所に寄り付くこともない。それにはちゃんとした理由が存在する。

ライダーも一度だけだがアーチャーに触発されたのか料理を行おうとした時がある。

そこで惨状が繰り広げられた。

材料を切ろうとすれば、切るのではなく潰し。

フライパンで焼こうとすれば、黒焦げ若しくは火が吹き上がり。

煮込もうとすれば、何故かどりどりとしたあり得ない色をしたペーストの様なものが出来上がる。

使った道具もただ重ねるだけにして雪崩を引き起こし、それにより壊れてしまつたものもある。

これが、結果である。この事から、ライダーは料理に関して全くの無干涉を貫くことにしたのだ。

……ライダーは見事に格の違いを見せつける事となつた。

壊したものや変形したものは魔術によつて修復したため、実質的な被害が食品だけだったのが幸いだつた。

そんなことを思い出しながらもアーチャーの手は休まることがない。手際よく六人分の朝食が用意されていく。

メニューは遠坂一族の好みを考え、洋風であつらえられている。

先ず葵が起きテーブルや食器の準備を行う。

次に時臣が現れ、目覚めの一杯の紅茶を飲みながら準備が終わるのを待つ。

ライダーと桜はその後一緒に現れ、桜が葵の補助に入る。

最後に凛だ。まるで幽鬼の様な表情で登場し、足を引きずるよう歩いてテーブルにつく。

その瞬間を見計らいアーチャーが凛の前に紅茶を起き、それを口にすることでの表情がましになるのだ。

此がここ数日の朝の光景である。

今日も一日が終わり、学校も下校時間を過ぎた。

道に存在するのは凛とアーチャーの一人だけである。

アーチャーは靈体化しているため、端から見れば凛一人だけだが。

「今日も終わりか。早く帰らなきや。」

【早く帰る、か……………決めたのかね?】

主語が抜けた言葉だが、二人の間ではそれで十分だった。

凛は笑顔で、しかしその目には確りとした力強さを湛えて返す。

「（ええ、今日一日じっくり考えて決めたわ。

帰つたらすぐ準備して、日が落ちたと同時に出るわよ。）

【了解した。キッチンと確認はしてくれよ？マスター。】

「（解つてるわよ、いちいち煩いわね。

そんなへマするわけないでしょ。）

「

【「ハンサーの時もあるからな、信頼するには些か不十分だ。】

それを出されるとぐづつの音も出ない凛。  
墓穴を掘る前に話題の転換を図った。

「（それにしても、何も聞かないのね。）」【なに、信じているからさ。うつかりがあれど、君が下手な判断を下すはずがない、とな。】

皮肉げなアーチャーの言葉だが、不思議とすんなり凛の中に入つていいく。

だからこそ、頑張ろうと叫び気持つが凛の中に出てくる。

そう、ウツカリさえ無ければ凛は最高のマスターと言えた。  
なので、アーチャーの言葉にも自然と凛を認める発言が多くなるのだ。

「（ふん、当然でしょ。私は遠坂凛よ。）

この程度で下手な判断なんて下す筈ないでしょ。）

隠しきれない照れを持ちながら、凛は家へとたどり着いた。

帰ると凛は直ぐに元の部屋へと直行した。

そして、武器となる宝石を準備し始める。

アーチャーに準備するものなど無いため、戦力把握もかねて凛の行

動を見つめる。

凛は宝石を一つの袋にすべてを入れると言つことはせず、発現する効果毎に纏め取り出しやすいよう服のあちこちに仕込んでいった。準備が終えたのを見計らつたかの様に、太陽も地平線へと沈み徐々に闇が強くなつていく。

「日も暮れたわね…………行きましょう、アーチャー。」

「ああ、わかった。」

凛は家族に何も告げること無く家を出たのだった。

両親である時臣と葵は聖杯戦争のマスターである凛たちの行動に口を出す真似はしないようにしていた。

全ての行動がマスターとしての行動・作戦と踏まえ、本人の力量で対応させるためだ。

なので、夜遅くだろうが朝近くになろうが、聖杯戦争中は口出しをしない。

それで負ければ弱かつただけの事なのだ。

薄暗い道を静かに進む。

分岐点に到達し、凛が足を向けたのは

やはりか、とアーチャーは思った。

柳洞寺。

行き先は告げられてなかつたが、誰にも言わず家を出たときから薄々は感じていたことだつた。

「ふむ、アサシンに仕掛けるか。」

「ええ。やつぱり一人の魔術師としての力試しなんだから、先ずは自分の力やサーヴァントでやらなくちゃと思つてね。」

「ほう。確かに道理だ。」

「そう考へれば、桜に力を貸しておひらのは最後の手段。その時まで残つていたらの話だけじ。」

そう、拠点がわからないランサーの事もある。戦局がどう傾くなど完全に予想できる筈もない。

今あるカードで最も良いと思われる行動を取るのみだ。そして彼等は柳洞寺の石段の下へと到着する。辺りにピリピリとした空気が漂つていて。

「着いたわ……」

「ああ、そして既に氣づかれているようだな。」

「そうね、こんな風に殺氣…………いえ、鬪氣ね。それを巻き散らかすなんて、挑発としか思えないわ。」

「実際そうなのだろうな。恐らく、戦いに飢えているのだらう。登りきつた瞬間始まるやもな、昨日のよつた。全く、血氣盛んなことだ。」

ホントね、とお互に軽口を叩きながら登つてこき、一番上に到達した。

だが、すぐにアサシンが攻撃してくることはなかつた。

アーチャー達の田の前に彼はいた。

姿は時代を感じる着物で、手には獲物『物干し竿』。仄かな笑みを浮かべ、待ちきれない様子だった。

「おや、待たせてしまつたかね。」

「いやいや、勝手に待つていただけの事よ。」

久方ぶりの戦いとあつて、押さえきれぬでな。」

アーチャーの手にもいつの間にか黑白の双剣『干将・莫耶』が握られていた。

二人の間に緊張が走る。

「それで、二人共に来るか？これはそういう戦いなのだから、それでも文句は言わぬ。」

「あら、讐めないでもらえる？

貴方のマスターのキャスターが参加しないのは聞いてるわ。」

二人から距離をとりつつ話す。

「そつちのマスターが参加しないなら私も参加しないわ。これで条件はイーブン。」

それに、二対一だなんてまるで私たちが弱いみたいじゃない。」

「ああ、成る程。そう聞こえてしまつたか。」

それは詫びよう。」

アサシンが望は緊迫した戦い。そのための発言だったが、浮かれ相手がどう思つか考えが巡らなかつたようだ。

「それに、アーチャーは私が呼び出したの。  
それなのに…………負ける筈ないでしょ？」

自信満々に言い切る凛。

この発言にアサシンも思わずカラカラと笑つた。

「大した自信よ。

ならば楽しめそうだな。行かせて貰うぞ、アーチャー。」

アサシンは剣を正眼に構える。

「と言つわけだから、勝ちなさい。アーチャー。」

「クツクツクツ。ああ、精々期待に応えるとしよう。  
ゆくぞ、アサシン。」

アーチャーは両手を垂らす構えをとる。

誰も動かないまま緊迫した空気のみ高まっていく。

ランサーの時とは違う空気。凛はしきりず睡をのみこむ。

ガサ

キン

木々のざわめき。それを合図にしたかのように同時に動き出す。

鎧迫り合いは一瞬。

直ぐに離れ、次の攻撃へ移る。

アサシン 佐々木小次郎の剣筋は鋭く、セイバーに迫るものだつた。

それをアーチャーは受けるだけしか出来ない。否、しない。

守つて守つて、相手の隙をつき反撃する。それがアーチャーの戦闘スタイルだ。

鋭く、素早く、時にフェイントを混ぜて繰り出されるアサシンの攻撃。

それをアーチャーは巧みに双剣を使用していなし続ける。

「ほらほら、どうした。

防御ばかりでは倒すことなどできぬぞ。」

「言われなくとも理解しているだ。」

攻防の最中に会話をする余裕を見せる一人。

これから、本当の意味で全力でないことが伺えた。

そして、その時が訪れる。

アサシンの攻撃をいなした瞬間、ほんの僅かだがアサシンの体が流れた。

それは直ぐにたて直され一瞬にも満たない間だつたが、相手のにはそれで十分だつた。

これを機にアサシンとアーチャーの攻防が入れ替わった。双剣である利点を利用して、アーチャーは手数で攻める。

元より、アーチャーは今回召喚された中で力のステータスは高くな  
い。むしろ低い。

キヤスターが参加していないま、アーチャーが一番力がないサーヴ  
アントとなつていて。

……体格は一番田に確りしてゐるのに。

息もつかぬ攻防。アサシンは流れを変えるべく、浅い傷覚悟で力任せに物干し竿を振り抜いた。

それを察知したアーチャーは攻撃を中断し、自ら下がり距離をとる。

「なかなかの剣さばき、見事なものよ。」

「ふつ、受けのことしかできぬ剣だ。称賛される様な物ではない。」

アーチャーの言葉にも発言を撤回する様子は見られない。

何故ならアサシンはアーチャーの剣の腕だけではなく、その中身にも感銘を受けたからだ。

剣を生業としているものならばすぐにわかることだ、アーチャーに才能といったものが感じられないと言つことな。

それでも、剣がすべてであつた自分と同等の戦いを繰り広げられることが出来る。

それだけで、アーチャーがどれ程それを積み重ねてきたかわかると言つものだ。

「くくく、真に楽しそうだ。出来るならば長く剣を合わせていたいものよ。」

「そこまで評価して貰えるのはありがたいが、時間をかけすぎるとここでは回りに迷惑がかかる。

残念だが、早々に決着を着けさせて貰おう。」

そう告げるアーチャーの手には、いつの間にか剣ではなくクラス名通りの洋弓が握られていた。

この世界に来て、アーチャーは初めて弓を握った。

「むつ。」

「確かに剣も使えなくはないが、本来私は弓を使う存在だ。  
悪いが本気で行かせて貰おう。」

構えた弓から流星のごとく次々と矢が放たれる。  
使つるのは普通の矢で、単純な構造のものばかりだ。

アサシンは自分に当たりそのものだけを選んで落とし、牽制のも

のは避けて対応する。

アーチャーはそれを気にすること無く矢を放ち続ける。

「些か驚いたが、これも同じ。これだけでは倒せぬぞ。」

それにアーチャーはふつ、と笑った。

訝しげに見るアサシンだが、次の瞬間疑問は氷解する。

「フローケンファンタズム  
壊れた幻想」

辺りに散らばった矢が魔力を解放して爆発する。

しかし、唯の矢にたいそれた魔力がある筈もなく、軽く土ぼこりをあげ視界を塞ぐだけだ。

‘視界を塞ぐ’、これを考えた瞬間ハツとした。これが目的だったのだと。

正解とでも言つようアーチャーのいた方から高まる魔力を感じた。

視界が晴れた直後にアサシンが目にしたのは、捻れた剣を矢として構えたアーチャーだった。

魔力は十分蓄えられ、放つだけの状態。そして

「フルンディング  
赤原猶犬」

放された。

剣は一直線にアサシンへ向かう。

一本だけだったこともあり、アサシンは迎え撃つ。

剣の勢いに負けそうになりながらも、何とか弾くことに成功する。隙を見せまいとアーチャーに向き直るが、当のアーチャーは不適に笑っていた。

その時ヒュンと音が聞こえ、本能のままに避けるとさつき弾いた箸の剣が田の前を通りすぎた。

「何！？」

「その剣は追尾機能がついていてね。敵を殲滅するか使用者が命ずるまで敵を追いかけるぞ。」

驚くアサシン。

そして追い討ちをかけるよつて再度簡単な構造の矢を投影し、次々放つ。

流石のアサシンも焦りの色を見せる。

「流石に多いか……致し方なし。」

と、アサシンは異なる構えを見せた。それは、アサシンの奥義を出す構え。

「……『秘技・燕返し』」

迫る矢を三つの斬撃で払い、連續して技をだし今度は三つの斬撃全てを剣に叩き込み剣を破壊した。

間を置かずアサシンはアーチャーに迫り斬りかかる。手の洋弓を投げつけることでわずかに時間を作り、再び双剣を手に持つ。

「予想はしていたが、やはりこれだけではダメだつたか。」

「いやいや、見事な策だった。確かに押しのが弱かつたのは否定できぬがな。」

アサシンは宝具と言える技を見せたためか、斬り合いの最中にも燕返しを使い始めた。その為、防ぎきることが難しくなり、少しづつアーチャーの体に傷が増えていった。

凛はそれを心配そうに見つめる。

途中押していたようにも見えたため不利になった今の状況に不安になつたのだ。

だが、それを振り払うようにアーチャーに向かつて大声をだした。

「何やつてるのよ、アーチャー。」

あんたは最強なんでしょう…？サッサとケリつけなさいよ。」

思わぬ激励の言葉にアーチャーだけでなくアサシンも苦笑いをこぼす。

「何とも豪胆なマスターな事だ。」

「ふつ、お転婆が過ぎるがな。」

アーチャーの言葉に対する文句が聞こえた気がしたが、聞かない振りをした。

「マスターの命令もある。此方も手の内の一つを披露しよう。」

鶴翼、欠落ヲ不ラズ《しんぎ、むけつにしてばんじやく》」

アーチャーが双剣をアサシンに向かって投げる。

武器を投げるのは何をバカなと思いながらアーチャーを見ると、投げた筈の剣がその手にあった。

「 心技、泰山一至リ《ちから、 やまをぬき》」

再び剣を投げつける。

先程と同じように剣を弾くアサシン。

剣はまた、その手にあった。

「 心技、黄河ヲ渡ル《つるぎ、みずをわかつ》」

三度剣を弾き、また来るだろ?とアーチャーを見れば……  
確かにその手には双剣が握られていた。

しかし、それは大きさが違った。

本当に同じ剣なのかと尋ねたくなるような大きさになつており、まるで鳥の羽の如く広げられていた。

「 何と……」

「 此がこの剣のもう一つの姿だ。」

鶴翼三連!?

そのままアーチャーはアサシンに突っ込み、その剣を振るう。  
完全に振り抜いた剣は、耐えきれなかつたと言ひ様に崩壊する。

その一撃に耐えたアサシンは、獲物がなくなつたアーチャーに迫ろうとして……

「 これで終わりではないぞ、アサシン。」

「 ちい。」

足を止めた。

何故なら、アサシンを取り囲む様に弾いた双剣が浮いていたからだ。

「 唯名、別天二納メ《せいめい、りきゅうにとどめ》  
両雄、共二命ヲ別ツ《われら、ともにてんをいだかず》！？」

全ての剣が一斉にアサシンに向かつて飛ぶ。  
アサシンは再び燕返しで一気に落とそうとするが、それはさせまい  
とアーチャーが動く。

「 壊れた幻想」  
ブローケンファンタズム

「 ドガアン！！！」

アサシンの剣が触れるか触れないかのタイミングで魔力を解放する。  
その爆発はかなりの威力を有し、余波の風だけでも凜の場所に叩き  
つけられたのだった。

至近距離で爆発を受けたアサシンはボロボロの体に鞭打つてすぐそ  
の場から離れる。

「 ……見事なり。拙者の敗けだ。」

だが、既にそれを予見していたアーチャーが回り込み、死角からア  
サシンに剣を突きつけて決着が着いたのだった。

爆発の威力に関してはアーチャーも予想外の事であった。  
思いの外強かつた爆発が考えていた以上に土埃をたたせ、それが先  
程と同じ状況……いや、それよりも思考を巡らせにくい状況を作り

出した。

後はさつきのように見えない状態で矢を放たれでは不味いと考える  
だろうアサシンがでで来るだろう位置、正反対の場所に回り込んで  
だと言つわけだ。

ここに、始めての対決の決着がついた。

アサシン vs アーチャー

勝者：アーチャー

残り五組

## 十章 激突（後書き）

はい、戦闘描写ダメダメだつた――――――！？  
むつかしいよう

今回の叫び、終わり

## 十一章 異変の起<sup>ハ</sup>じ

「ヨツシヤー、勝つた。  
よくやつたわ、アーチャー。」

戦闘が終わつたので一人の側に駆け寄る凛。  
表情は満面の笑みである。

そして、近づいてくるのは彼女だけでは無かつた。

「あら、決着がついたのね。  
それにして騒がしくやつたわねえ。」

キヤスターがサーヴァントとしての姿で現れた。  
どこが、あきれを含ませた雰囲気を纏つている。

「まったく、私が念のためと思つて防音の魔術を張つていたから良  
かつたもの……」

そこで彼らは思い出した。なんの対策もとらぬまま戦闘を開始して  
いたことに。だと言つのに誰も戦闘に気付いた様子がなかつたのはそう言つて

だつたのだ。

「すまない、キャスター。

私としたことが、思い至らなかつたようだ。助かつた。」

「拙者の場合は女狐がマスターなのだ。

問題あるまい。」

「……」

アサシンはキャスターが自分のマスターなのだから、そんな対応をするのは当然だと言つた風体だ。

また、アーチャーは素直に感謝の言葉を言つが、凛は一瞬ハツとした表情をしたと思つたら気まずげにキャスターから視線をそらした。

キャスターはこれといつて追求する気はないようで、すぐに話題を変えた。

「それで、満足したのかしら? アサシン。」

「ふむ。アーチャーの剣も面倒を強さをひめており、確かに楽しい手合せではあった。

まさか、アーチャーでありながらあそこまでやりあえるとはおもわなんだ。」

アーチャーが剣で相対した理由。其を確りアサシンは理解していた。

一つは勿論戦略の内と言つことである。

前日の昼出会つた事で、アーチャーと言つことは既に知られている。

出会い頭の襲撃こそ剣で防いだものの、アーチャーと言づクラス名から「で攻撃していくという先入観があるだろう事は予想された。故に、始めに同じ剣を持っていることでフェイントに見せかける事も可能だつたと言つわけだ。

（実際、アサシンはすぐに距離を詰めてきた。）

そして、もう一つの理由。これは途中から気付いたことだが、アーチャーは敢えて剣をメインに交戦していた。勿論、前述の理由もあるだろうが、まるで自分に会わせるかのようだと感じたのだ。

（そもそも、アーチャーの戦闘スタイルが双剣メインであるのだが。）

アーチャーの宝具も知らぬままに終わった戦闘。本来なら侮辱だと手加減だと思うところかもしぬないが、剣から感じる年月が本物だけに意外と悪い氣はしていないアサシンだつた。つい先程のことを思いだし、軽い笑みを浮かべつつ続ける。

「だが、まだ満足とは言えぬな。此度は様々な強者つわものがあるようなのでなあ。」

一応の欲求は満たされたようではあつたが、セイバー・ランサーと言つた純粹な戦士と剣を交えていなかったためそれとも戦いたいと言う願望がまだ存在した。

これだから戦闘狂は、とでも言いたげなキャスター。召喚したのは失敗だつたかしら、とまで思つていた。

「しかし、残念ながらここで負けたゆえに、これ以上の戦闘は望め

ぬやも知れぬな。」

「ふつ、そうとも限るまい。

敗退したサーヴァントの戦闘禁止の取り決めなどないだろ？  
相手の合意を取りさえすれば問題ないと思うが。」

既に敗退したサーヴァントを相手にするかどうかは当人たちが決めることがだが、ヒアーチャーは締めくくる。

残念そうに呟くアサシンに、アーチャーは思わず助言ともとれる発言をした。

いや、実際に助言だった。

その事実に、自分も丸くなつたものだとしみじみ思つ。

「おお、確かに。それならば問題ないな。

相手が近くに来るのをのんびり待つとしよう。」

アーチャーの言葉により思ひ至つた事柄に期待を隠せぬよつで、アサシンは若干嬉しそうな表情を浮かべた。

だが、皮肉な物言いを付け足すのもまたアーチャーだった。

「まあ、近くに来たところで柳洞寺の結界で気付かない可能性の方が高いがな。」

普段いる場所だからからこそ気付かなかつたことに、再度アサシン

の顔が思案げになる。

「むつ、確かにそうであった。

ならば、自分の存在を相手に知らせる方法などはないのか？」

「知らせてどうするのよ。

それに、普通は隠すものなのよ、あるわけないじゃない。」

「ならば、この結界を一部解除など……」

「無理よ。これは自然に出来たものだから、このままか全部消すかのどちらかよ。

それに、例え消すにしてもこんな靈地に自然発生した結界は結構強力だから、その場合かなり魔力を消耗しちゃうわ。  
まつ、しないけど。」

ここから動けないアサシンは相手をここに呼び寄せる方法を考えるが、大していいアイディアは思い浮かばない。

思い付いたことを挙げても、直ぐにキャスターに却下されてしまう。

それにもしても、柳洞寺の結界を消すのが、出来ない、でなく、しない、とは……  
さすがキャスターのクラスで召喚されただけはあると言つものだ。

見る人が見ればコントのようなやり取りに見えなくもないやり取りをしている一人に、アーチャーは帰還の意を告げるため声をかけた。先程の戦闘時の疑問は、帰つてから検討してもいいだろうと今は考えないことにしたのだ。

この場を無言で立ち去つても良かつたのだが、声をかけたのは何となくそれは憚はのつかれたからだ。

つづり律儀な性格である。

「すまないが、私たちほそろそろお暇こさまさせて貰もらおう。  
凛は学校もあるからな。」

アーチャーの声に掛け合いを中断し、一人は顔をこちらに向けた。

「あら、そうだったわね。  
宗一郎様に迷惑をかけてはいけないし、早く帰るといいわ。  
「ふむ、そうか。  
機会があればまた手合させ願いたいものだな。」

キヤスターは払うよつて手を振りながらい、アサシンは再戦の言葉を投げ掛けた。

そんなアサシンの言葉に、機会があればな、とはぐらかしながらアーチャー達はその場を後にするのだった。

家路の途中での凛は、鼻歌を歌いそうな程ご機嫌な様子だった。  
アーチャーが勝つのがよっぽど嬉しかったのだろう。

「『機嫌だな、凛。』

「当たり前じゃない。私のアーチャーが勝つたのよ、しかも剣で。」

アーチャーは肩をひょいと竦めながら凛に返す。

「アーチャーだからといって剣が全く使えないわけではない。  
私なら構わないが、対戦相手にそれを当てはめ無いことだ。  
クラス名だけで判断すれば、いずれ痛い目を見るぞ。」

アーチャーの言葉に少し機嫌が悪くなる凛。  
だが、反論しないのは確かに思い込みとも言えるものを初めに抱いていたからに他ならない。

「…解ってるわよ。何しろ、その代表と言える存在が目の前にいる  
んだから。」

「代表か。確かに普通でないのは認めるべきかな。  
(そう…私と言う存在も、生きてきたあり方も……)」「

「これで真名が判れば戦略も立てやすいかもしねりないんだけれど…

「…

見えないよう自嘲の笑みを浮かべ、すぐに消すアーチャー。  
凛は歩きながらアーチャーを振り返る。

「……………残念ながら、まだ思い出せん。」

「んつ。まあ、大して期待はしてなかつたから。」

真名の事を話すアーチャーの声も表情も固いものであつたが、その変化は僅かなものであつたため年若い凛はそれに気付くことはなかつた。

アーチャーはこの世界（歴史）を知れば知るほど自分の真名は明かすべきではないと、絶対に明かしてはいけないと思った。程度はどうであれ衛富士郎と言う存在は、アーチャーにとって氣の食わない存在であることに代わりはない。

だが、一つくらい人間らしく生きている衛富士郎がいてもいいのではないかと考えられる位になっていた。

せっかく歪みのない（少ない）衛富士郎がいると言つのにもし自分の存在が知れたら、英雄に成れる可能性を己が秘めていると知つたらどうなるか解らない。

最悪、力が働きその道に矯正される事すら考えられる。

こいつ考えるも、それは本当に、最悪の可能性、でしかない。寧ろ、起こらない可能性の方が高いだろ。

しかし、それでもアーチャーは自分のような存在を知るべきではないと思つたのだ。

「例え真名を知らなくても強いことは分かつたし、解らなくとも問題ないわ。」

「そうか、ならば私もゆつくり思ひ出す」とこじょう。

さて、と前を向いてしたとき、凛は奇妙な感覚に襲われ足を止めた。

それはアーチャーも同様だったようで、視線だけ鋭く辺りを見渡していた。

それはアーチャーを持つてしてもほつきとしなかった。空気が変わったと言つわけでもなく、周囲に異変が起きたと言つわけでもない。

ただ、本能だけが異常の存在を告げていた。

「なに、これ。何か、ざわざわするわ。

アーチャー、何かわかる？」

「いや、すまないが解らない。

だが、何やら危険な感じがする。」

凛は鳥肌が立つたときのように手で一の腕を擦っていた。

「最近の通り魔が関係あるのかしら……？もしかして、そいつが魔術師とか。いえ、お父様の所に挨拶に来てないし、わざと来てなくてもお父様が察知できない筈がないわ。」

「……。」

凛は気を紛らすかのよつて考へつる可能性をあげ連ねていた。

その横でアーチャーは静かに警戒し、油断なく何時でも動ける体制を取っている。

数十秒だつたらうか、数分だつたらうか。

それは唐突に収まった。

それでも警戒を解かずにいたが、再び変わる様子が無かつた為ようやく一人は警戒を解いた。

「…戻ったの、かしい。」

「……どうやらそのようだな。」

訳の解らない異変。

それに一人は困惑するも、理由も解らなければヒントすらない。ただ、先程の雰囲気を思い出しては身震いするのみであった。

アーチャーは考える。

周囲には何の変化もないと言つのに、まるで纏わりつくようにあつた雰囲気。

それが、どこか引っ掛けた。

それにある感覚。そう、例えるなり

アチコチから監視されているような

「アーチャー、取り敢えず早く帰りましょ。」

凛の声に思考を中断する。

確かに、あんな異変を感じた以上、いつまでもこんなところに何んでいると言つ危険行為をし続けるわけには行かない。

「そうだな、いつまた異常が起きるとも解らん。どんなものが相手であれやられるつもりはないが、ここは早く帰<sup>モ</sup>した方が懸命だな。」

「ええ、それにお父様にも報告しておかないと……。  
この土地に何かあれば大変だし。」

アーチャーの声には、無意識だろうが警戒の響きが存在した。  
それは、この異変がいづれ関わってくるとでも言つよ。」

凛は管理者である父に今感じたものを報告しようと考えていた。  
言葉にした通り、もし今感じたものが冬木に悪影響をもたらすものならば大変であると思つたからだ。  
また、父親ならもしかしたら何かわかるかもしれないといつ思いも存在した。

二人は心持ち足を卑め、家に向かうのであった。

このときのアーチャーの頭からは、柳洞寺で感じた疑問の事がすっかり抜け落ちていた。

そう、その生き様ゆえに多くの事を記憶し、生き残るための戦略に活用してきたアーチャーである。

忘れたことに気付かずに、否、気付けずに凛に従つて遠坂邸へ足を向けるのだった。

帰宅した凛達は、一直線に時臣の私室に向かつた。  
一刻も早く報告をするためだ。

コンコン

「お父様、凛です。」

『凛か、入りなさい。』

「失礼します。」

凛と一緒にアーチャーも時臣の私室に足を踏み入れた。

アーチャーについては何も言つてはなかつたが、サー・ヴァントがマスターと共にいるのは当たり前と捉えているのか時臣の表情に変化は見られなかつた。

凛たちが入室したあとそちらを向いた時臣。

見た瞬間、少し険しい顔に見える一人に怪訝な表情を浮かべた。

「どうしたんだい、凛。 そんな顔をして。」  
「お父様に報告したいことがあります。」

「報告、かい？」

取り敢えず座りなさい。」

時臣は椅子に座った凛に向直った。

今日戦いにいつた事の報告に来たのかと初めは考えたが、それならばこんな風に改まって言つ筈はない。

また、時間が惜しいとでも言つよう帰つてすぐ来たと思われるタイミング、そして凛の真剣な表情から違つことがわかつた。

何も聞かない内に考えを巡らせて無駄だと、先ずは話を聞こうと視線で凛に話すのを促した。

「報告したいと言つのは、帰宅途中であつた異変のことです。」

「異変…」

「はい。魔力の高まりもなく、なにか目に見える変化があつたと言うわけではありませんが、よく解らない違和感があつて…」

冬木におきた異変と聞き、時臣の表情にも真剣さが増す。  
家にいる時臣には何も感じなかつたが、ここまで訴える凛にそれが嘘とは思えなかつた。

それに、アーチャーですら真面目な表情で見つめているとなれば決定的である。

「アーチャー、君の意見も伺いたいんだが。」

「私にも特に解つたことはない。あれは本能で察知するような感覚だつたが。

強いてあげるなら、我々一人に纏わりつくように異変が存在したようを感じられた、と言つことか……」

「纏わりつゝように…………何が原因かは解らないんだね？」

「ああ。」

「はい。」

少し考えた時臣だが、やはりこれだけで判明することはなくすぐには思考を切り上げた。

「とりあえず今日は休みなさい、凛。

異変については地脈の調査や魔力探索で調べておく。  
それと、もしまだ異変を感じたら報告に来なさい。」

「はい、解りました。失礼します。」

異変が何を示しているかは解らないが、時臣は土地の調査から行うことを決めた。

それにより、一旦いる必要のなくなった凛に、夜遅いため休みなさいとつげる。

二人が出ていったあの部屋では、調査の準備を行う時臣だけが残つた。

「異変が、一体何が…………  
もしかすると聖杯戦争の短期開催による影響か？」

時臣は時臣で考えられる可能性を一人ブツブツと呟く。

一番考えられるのはやはりと言つた今回の聖杯戦争の影響だと言つことだった。

十年前にも聖杯の誤作動とも言える形での発動があり、それは考えられなくもない。

十年前のあれで蓄えられていた魔力を使いきつて無かつたから、今回は十年と言う短い周期で起きたのだろう。そう考えたのだ。

もしそうであれば地脈等にかなりの負荷がかかつていてもおかしくないと、早く調査を行えるよう準備を進めた。

「そうだ、もしやうなら彼等も呼んでだ方がいいかもしれん。」

時臣は調査のための準備とはまた別の事をはじめた。  
それは保険をかける為の行動。

今冬木にいる魔術師とサーヴァントでも異変に対応するのに十分だと思っている。

だが、時臣の魔術師としての勘がそれを否定していた。

それだけではダメだと。それでは危険すぎると。

それが何を示しているのかは判別はきかないが、この勘によつて危機を脱したこともある時臣はそれに素直に従つた。

「…何も、起きなければいいんだが。」

それはないだろ?と思いつつ、願わずにはいられない時臣だった。

side ???

‘それ’は目が覚めた。

以前より包まれる様な何かに漂っていたが、唐突に自分のナニカが  
流れる物を感じたのだ。

今まで感じたことのない変化に、‘それ’は戸惑い、戸惑うと言つ感  
情が生まれた事に驚いた。

今まで存在するだけであり、自我も感情も何も無かつたのだ。

そんな自分の変化を不思議に思い探ろうとするが、ある意味では生  
まれたばかりの‘それ’はどうすればいいかわからず結局何もわか  
らなかつた。

ただ、一つだけ、‘それ’のなかに浮かんできた物があつた。

それは“飢え”。

ナニカが流れたことで、‘それ’の中にタリナイと言ひ感覺が沸き起  
こつた。

何がタリナイのか、それが全く解らないままにタリナイものを埋め  
たいと、‘それ’は動き出す。

‘それ’が動ける範囲は然程広くない。

その上、行動は酷くゆっくりとしたものだ。

だが、確実にタリナイ物を補うべく、その感覚を延ばす。

そして、‘それ’は遂に捉えた。

捉えたものが何なのかは、‘それ’には理解できなかつたが、それが

自分にとつて必要なものだと言つことは理解できた。

だから、それを食らうべく己を伸ばし、捕まえた。

それは暴れていたが、少しずつ取り込んでいる内に段々と抵抗が弱くなり、ついには動かなくなつた。

それ幸いと、暴れていたときよりも早いスピードで喰らい続けた。

喰らい終わったとき、‘それ’のタリナイ部分が完全ではないものの充たされた。

充たされた事で再び、‘それ’にまどろみが襲い掛かり、それは眠りについた。

再度の飢えで、‘それ’は再び目が覚めた。  
そして、同じ様に飢えをしのぐ為の行動を開始する。

目標は以前とらえたものと同じモノ。

それを探し、影を伝つて情報を集め 気付いた。

前日覚めたときわからなかつた事が出来ていることだ。

何故だろうと考えるがやはり解らない。

なので気にして侵攻を再開した。

それはすぐに見つかり、同じように喰らった。

今度は直ぐにまどろみは訪れず、自分から目覚めた場所に戻る。

そこは、暗い昏い場所。

光溢れる外とは違い、闇だけしか存在しないトロロ。

だが、「それ」にとってはこの上なく落ち着ける場所であった。

自分と同じモノで満たされ、自分を優しく包むゆりかご。

戻った瞬間に、「それ」は安堵と言つものを覚えた。

そして、そのままゆりかごで跳びの中に落ちていった。

また、「それ」を飢えが襲つ。

「それ」は今度も影を使って“見た”。

影から情報を貰うだけでなく、映像も見れるようになつたのだ。

「それ」は解つた。

飢えが訪れ表のモノを喰らひ度こ、出来ることが増えていくと呟つことに。

それに、考えることも出来るようになり、感情と言ふものがすり増えてきた。

‘それ、はゆりかごから動かず、影を使った映像だけで獲物を探す。そして、見つけた獲物を影の中に沈めるように喰らつた。

獲物は恐怖に歪んだ顔を浮かべ、苦しそうに影の中へ沈んでいった。

それを見ていた、それ、の中に愉しいと言ひ感情が生まれた。

そして、自分がそう言つものなのだと唐突に理解した。

それを喰らつた後も動く余裕があり、まだいかと辺りを探し始めた。

そう時間もかからず、それ、は一人組を見つけた。

自分に気づいたようで辺りを警戒する一人組。  
その片方から、それ、は目が離せなかつた。

感じたのだ。自分と限りなく似た存在であると。  
何故そう感じたのかは理解できないが、そのことは、それ、の心に  
確りと根付いた。

接触を試みたかったが、警戒されている上そろそろまどろみが訪れていた為仕方なく諦めることにした。

ゆりかごで、それ、は先程の存在について考えていた。

始めてみたのに懐かしく、以前より知つてゐるような感覚。

そして、見たことで触発されたかのように、グルグルと魔力が渦になり定まらないでいる。

なれない感覚に翻弄されそうになるが、一度眠りにつければ収まるだろうと本能で察知していた。

そして、今以上に知識がつくであろう」とも。

新たな変化を愉しみにしながら、また眠りにつくのであった。

## 十一章 異変の起じつ（後書き）

今回は何時もより少しけれども、文章量での投稿です。

油断すれば段々減ってきそうな予感があるので気を付けないと……

…（汗）

そして、ついにあれの登場！？

ふふふ、盛り上がってきたぜ……私だけ。

さあ、どうぞ妄想するぞ！（違）

## 十一章 動きの激化（前書き）

ひとつひとつ栄が200を突破しました！？  
ありがとうございます。

趣味と言つか何と言つか、あまり計画性なく投稿した小説だったんですが、自分でも定期的に投稿できて実は驚いています（笑）

これも読んでくださる皆さんのお陰です。  
まだまだ頑張りますので、よろしくお願ひします。

## 十一章 動きの激化

父である時臣に報告を終えた凜達は、そのまま己の自室に戻った。本来ならすぐ桜とサーヴァントであるライダーに異変の事を伝えるべきなのだが、現在の時間や同じ家に住んでいたことから明日の朝にしようと思ったのだ。

「ハア……取り敢えずお父様に報告はしたけど、あれ、一体なんだつたのかしら……」

「さて、な。だが、姿が見えない敵ほど厄介なものはない。私も警戒はしておへが、君も注意はしておきたまえ。」

アーチャーの言葉に、解つてるわよ」と返す凜。表情は異変を感じてから冴えない顔のままだ。

異変を感じたあのとき、凜はまるで自分が消えてしまうような感覚を味わっていた。

全ての感覚が段々と無くなつていも、「口と舌つ物すら確固たるものとして存在出来無くなる様なイメージ。

ジワジワと何かが己に入つてくるような。それが自分の中身を食い荒らしているような。

立っている地面すら感じられなく、すべてが崩れ落ちていく。そんなイメージに侵食されていつていたのだ。

たかがイメージとは言え、魔術師にはそれは重要な要素である。もし、凛がそのイメージに支配されていれば、どうなつていたことか……

凛はチラリと口の隣に立つてゐるサー・ヴァントを見た。

あの空氣に醒されてなお口を確立し、辺りを警戒していた。

自分は立つてゐるのでさへやつとだつたと言つて、この皮肉屋な英雄は意にもかいさず確りと戦闘体制を維持していた。英靈となりうる存在にとつて、あの程度の空氣はたいした重圧となり得なかつたのだろう。

そこに、英靈と言つ存在の凄さを改めて認識した。

「ん? どうしたのかね、凛。」

「何でもないわ。」

今日は疲れたから、もう休むわね。」

凛の視線に気付いたアーチャーが何かあるのかと凛に聞くが、ただ見ていただけで何もなかつたため差し障りのない返答を返す。それに、疲れているのも事実なのだ。その為、もう寝てしまおうと考えていた。

「ああ、そうだ。あの事は桜だけでなく他の参加者達にも一応教えにいくわよ。」

「そうだな。その方が良さそうだ。」

「でも、ランサーだけは相変わらず居場所が解らないのよね。」

「…………まあ、彼は生き汚い事を自負するよつた奴だ。やう心配する」とあるまい。」

アーチャーは呆れを滲ませた口調で言った。

まるでランサーの事をよく知っているとでも言ひよつた口振りに、凛はアーチャーがランサーの真名に見当をつけていたことを思い出した。

「そういえば、アーチャー。あなた、ランサーの真名本当に解ったの？」

「ああ。何だ、教えて欲しいのか？」

アーチャーの言葉に、凛は口を噤ふぐんだ。

そのまま教えてくれるものと思つていたのだが、アーチャーは簡単に教える気はないようだ。

こんなときに浮かべる皮肉げな笑みは、アーチャーが何を考えているか悟りせない。

このままやり込められるのは癪な凛は、応戦を開始した。

「あら、自分のサーヴァントが解つたことを知つておくのもマスターの義務よ。

だから、解つたのならそれを知つておこうと思つただけよ。本当に解つたのなら、ね。」

「ふむ、それは済まなかつたな。だが私とてマスターを考えての事だぞ？」

ただ情報を『えられるのではなく、少なにヒントから答えを導き出せるようにと思いつい敢えて告げなかつたと言つのに。  
それが伝わらなかつた様で残念だ。』

笑顔で見つめ合つ一人。

「口二口と言う擬音が似合ひそつたと言つて、バックには竜と虎  
いや、象と蟻？月と鼈？」<sup>スッポン</sup>（大違＆阿呆）が浮かんでいた。

何処かで甲高い鐘の音が響いた。

「そんなに深い考えを持つてたなんて思いもしなかつたわ。ご免な  
さい。

腐つても英靈ですものね。口先だけでは無いわよね。」

「いやいや、私も悪かった。

経験を積んでない以上、そつそつ答えを導き出せないと言つひとを  
失念していた。

そうだな、仕方のないことだつたな。」

「ふふふ、本当に口が悪いわね。」

「年長者としてのアドバイスだ。聞き入れない程狭量だとは思つて  
もいなかつたが。」

後はもう喧喧囂囂のいい争いだ。<sup>けんけんこうこう</sup>

笑顔のままなのは変わらず、一見口喧嘩をしていないよう見える  
のがまた恐ろしい。

声が響かないように小さくしているのが微妙に笑えるのだが。

そして、そのまま幾ばくかの時間が過ぎる。

約30分後

凛は荒い息をついていた。

これの勝者は、まあ当然と言つかアーチャーだった。

人生経験も浅く語彙も少ない凛が気の遠くなる時間を過ごしたアーチャーに敵うはずもない。

「……はあ、はあ。

ムカつく……。」

言い負かされながらも悪態をつくことは忘れない凛。

アーチャーと言えば、思いの外熱くなってしまった自分に多少の驚きを感じていた。

前も多少ならばこんな風に言い合いつことはあったが、徹底的とは言わないがここまでやることもなかつた。

ある程度主張し、妥協する。そんなやり取りばかりだったと云つのに。

「悪かった、凛。

やり取りが楽しくてついつい言い過ぎてしまつた。」

凛は胡散臭そうにアーチャーを見た。

言い合いをしてるときのアーチャーが素にしか見えなかつたからだ。

「そんな顔をしないでくれ。悪いと思ったのは本當だ。」

「じゃあ、ランサーの真名をちゃんと教えなさいよ。」

「了解した。」

元々言ひ氣ではあつたアーチャー。

ただ、凛の言葉に過剰に反応して反発してしまつたのだ。

ここに来て、感情の動きが大きくなつたなどアーチャーは感じていた。

「恐らくランサーの真名は『クー・フーリン』。アルスターの光の御子だ。」

「つて、ケルト神話の！？」

「て言つことはあの紅い槍は……」

「ああ、魔槍。<sup>ゲイボルグ</sup>必ず心臓を貫くと言われる槍だらう。」

「因果の逆転……反則じゃない。」

凛は頭を抱えた。

まさかそれほどの存在とは思わなかつたのだ。

ゲイボルグ。放てば必ず心臓を貫くと言われる槍。

そんなものを相手にするのはアーチャーでは不利だと凛は考えた。

確かに、校庭の一戦はほぼ対等に戦っていたが、それはランサーが宝具の解放をする気配がなかつたからであり、改めてやり合えば確実に宝具の解放をするだらうと凛は思ったのだ。

「殺しは御法度だけど、サーヴァント間での宝具の効果によるものや不可抗力なものは例外ですものね。」

凛は重いため息をついた。

考えるのが億劫になつてくるが、今ある程度考えていなければ動けなくなる為思考を止めることはない。

「…ランサーは後回しだった方が良さそう。  
先に他のサーヴァントと戦わせて脱落するならそれでは。そうで  
なくとも、魔力は削れるはず。」

アーチャーが凛に戦略等を考えることをさせていたためか、先ずは自分でキチンと考える凛。  
整理しやすいように口に出して考察しているが、それを聞いてアーチャーが動いた。

「……凛、頼みがあるのだが。  
「うん、だつたら……て、頼み？アーチャーが？」  
「ああ、出来ればランサーと戦いたいんだが……」

アーチャーの頼みと言つ言葉とその内容に凜は驚いた。

自分で考えろと言つたアーチャーが、自分の望みを初めて口にしたのだ。

「どうしてもつて言つなら考えるけど……珍しいわね。」

「いや、なに。決着を着けたいだけだ。」

決着と言つ言葉に凜は納得の表情を見せた。

ランサーとの対決は乱入者の為にウヤムヤになつてしまつたが、それが心残りだったのだろうと理解したのだ。

勿論それもあるが、アーチャーにとつてはそれだけではない。

更に前の二回分（校庭と教会前）も含め正式な決着が着いてないからだ。

そう、教会前のあれも決着がついたとは言えないとアーチャーは思うのだ。

初めて邂逅したときは、ただ殺されるだけしか出来なかつた自分。あの槍が己の心臓を貫いた感触は未だに忘れることが出来ない。あの矮小な存在でしかなかつた自分が、どれだけ成長したのか。どれだけ追い付くことが出来たのか。

この感情に関してはセイバーも当てはまる。自分を鍛えてくれた彼女。彼女とは違う存在であると理解はしていても、セイバー相手にどれだけ戦えるか楽しみにしている自分もまた存在しているのだ。

「これで真名が解つたのは四人か。

アルスターの光の御子、クー・フーリン、  
裏切りの魔女、メディア、  
日本の武士、佐々木小次郎、  
そして、かつてブリテンを治めし王、アーサー・ペンドラゴン、…  
セイバー。」

「後はバーサーカーとライダーか。

既に大半の真名が解つているとは早いな。」

この時点で四人の真名が判明している。

その半分は自ら名を名乗ったといふか、主張したと言つか……そんな感じだが。セイバーに関しては前回の後告げられたので凛は知っていたのだ。

「ライダーはともかく、バーサーカーの真名は早めに知りたいわね。もし、ぶつかる事になれば、知っていた方が動きやすいし。」

凛はまだ直接バーサーカーを目にしたことはないが、理性を代償に力を得ているバーサーカーと対峙するのが困難なのは目に見えている。

故に、少しでも勝率を挙げるため情報が欲しいのだ。

「後、重要なのは此方の真名を知られないようにすることだが、私の場合は心配することはないな。  
主にマスターのお陰で。」

「さー、もう休みましょうか。話し込んで遅くなっちゃったしね。」

注意はしていてもそう簡単に癖は抜けないためか、皮肉な言い方をまたしてしまうアーチャー。

しかし、凛も流石に慣れたのかアーチャーの物言いを華麗にスルーした。

冷や汗は隠しきれなかつたが。

そして、漸くの事床につき休む凛だつた。

アーチャーは何時もの如く屋根の上に移動したが、ふと考えた。このまま周囲を警戒するのもいいが、皆が寝静まつている間に町に異変がないか見回るのもいいのではないかと。

既にこの時間に奇襲をかけてくるような存在がいないことは解つている。

家中にライダーもいる以上、少し側を離れても問題ないだろうと思つたのだ。

そして、アーチャーはその身を闇に沈む町の中に踊らせたのだった。

明け方近くにアーチャーは遠坂家に戻つてきた。

深山町から新都にかけて一通り見回つたが、特に異状らしい異状は見当たらなかつた。

それについては一安心であるがだからと云つて氣は抜けないと気持ちを引き締めつつ、朝食の準備に向かつた。

時間は過ぎ、学校の昼休みの屋上。前回と同じように彼等は集まっていた。

ただし、葛木宗一郎は先生であること、魔術に関しては素人であることからキャスターに直接伝えたほうがいいと呼んでいない。

また、予定を変更して桜に伝えるのも一度にした方が効率がいいと、朝食時に話すのを控えたのだ。

他にも、母親の葵に余計な心配をかけたくないと言つ心理も働いており、それを察してか時臣も朝食時にその話題をあげることはなかった。

「それで、今回はどうしたのですか？私達を呼んだと言つことは何があるのでしょうか？」

食事を終えセイバーが凛達に向かつて口を開いた。

その言葉に凛は表情を引き締めた。

それにはかなり重要なことなのだとここにいるもの達は理解した。

「ええ。重要……かどうかはまだ解らないけど、警戒はしておいて貰わないとね。」

「警戒ですか？一体……」

士郎達だけでなく桜達も疑問の声をあげたことに、士郎達は思わず

顔を見合せた。

「桜も聞いてないのか？」

「はい、朝はいつも通りでした。」

「お母様にはあんまり言わない方がいいと思つて。」

魔術の事なら話しても問題ない筈なのに、あまり耳に入れたくないと言つ凜に悪いことなのだと察した。

ならば、はやくちやんと聞いた方がいいと、凜に話すのを促した。

「昨晩出でていたんだけど、その帰宅途中に異変があつたの。」

「異変ですか？それは一体どんなことでしょう。」

「何も起つてはいないわ。でも、異変を感じたの。」

何も起きていないのに異変があつたと言つ凜。

上手く理解できず、一緒にいた筈のアーチャーへと一緒に視線を向けたのは仕方ないことだろう。

「私とてそうとしか言えんぞ。」

もつと言つながら、それは視覚で認識する異変ではなく、本能で理解する異変だと言つてぐらうか。

その正体と言えるものは全く解らんが……

「アーチャーでも解らないのですか？」

「ああ、私もまだ異変だとしか感じ取れなかつた。」

サー、ヴァントを持つてしても異変だと言つこと以上は解らなかつたと言つことにライダーとセイバーは驚愕した。そして、その深刻さを認識したのだった。

「そう言つことだから、夜はいつも以上に注意してね。それと、もし異変を感じたらすぐに連絡してほしいの。」

「ええ、解りました。心しておきましょ。」

勿論、キリツグ達にも伝えておきます。」

「ええ。お願ひね、セイバー。」

ちゃんと伝わったことが解つた凜は、満足そうに笑い、何時もの調子に戻つた。

「こう言つのは士郎の得意分野だから、期待してるわよ。」

「得意分野って。なんだよ、それ。」

「だから、前も言つたように、こう言つ空間異変に人一倍敏感だつて事よ。」

「そうですよ。頑張つてください、先輩。」

凜はからかうようこそ、桜は真剣に言った。

どちらにもビデウとは返しにくく、困惑するだけの士郎だった。

そして、チャイムがなり各自が教室へと移動し始める。

そこで、思い出したかのように凜は足を止め士郎へと向き直つた。

「せうせつ、慎一にも伝えていてね。

あそこも魔術師の一族だし、もし何か解つたらやつやすいし。」

「解つたよ。慎一に言つとけばいいんだな。」

返事を聞いて、今度こそ教室へと凛達は向かったのだった。

そして放課後、凛達は柳洞寺からの帰り道にいた。

「（やっぱりキャスターは凄いわね。）

【ああ、既に察知していたとはな。】

既に説明を終えたのだが、キャスターは昨夜の異変を僅かながらも察知していたことが判明したのだ。

その為説明も簡単ですが、思いの外早い時間ですんだのだ。

「（今日はこのまま帰りましょ。

昨日戦つたばかりだし、異変の事もあるし。

ランサーはまた明日以降ね。）

【ま、仕方ないな。】

話していると昨日の場所に到着し、思わず足を止めてしまった。田のある今何か手がかりはないかと田を凝らすが、やはりと言つか何も見つからなかつた。

【そろそろ移動を開始しないと、奇異の日で見られるぞ。マスター。】

「（そうね。何もなさうだし、ここに手がかりはないとした方が言いかもね。）」

この時間は人通りが少ないが皆無ではないため、立ち続けていると周りの人におかしい人物という田で見られてしまう。それは本意ではないため何も見付からない事を確認し、その歩みを再開したのだった。

夕食時珍しく全員揃つての食事に、葵は嬉しそうであつた。

「今日は出ないのね。凜。」

「はい。あまり毎日と言つのも疲れが溜まるばかりだと思ったので。

「そうよね、たまにはお休みを入れないとね。うふふ、久しぶりに全員揃つての夕食で嬉しいわ。」

言葉の通り、『機嫌な様子で準備を進める葵。

張り切つて一人で全部行つと主張したため、他の者は各自椅子に座つたりテレビを見たりと寛いでいた。

『……と言つ』としました。

次の二コースです。開発中の新都に新しいレジャー施設が誕生しました。

「へえ。新しい施設か。」

「どんなものなんでしょうね、姉さん。」

『この施設は完全室内型温水プールで、様々な種類のプールを楽しめることです。』

「完全室内型のプールか。面白そうね。」

「行つてみたいですね、ライダー、姉さん。」

凛と桜は時臣がつけていた二コースと一緒に見て、新しいレジャー施設の誕生にはしゃいでいた。

逆に時臣は静かにテレビを見ていたのだった。

それを更に背後から見守るアーチャーとライダー。

アーチャーはテレビがあるのかと感心していた。だつてねえ……

『この施設の名は、わくわくざぶーん。それでは支配人のギルガ メッシュさんから一言お願いします。』

『フハハハハ。雑種ども、我的プールで存分に遊ぶがいい。』

『はい。と言つ訳で、わくわくざぶーんの紹介でした。』

凛とアーチャーは思わず吹き出し、桜とライダーはポカンという表情をしていた。

肝心の時臣と言えば…固まっていた。

ある意味行方知れずの己のサーヴァントが突然テレビに現れれば仕方ないことだろう。

「さ、流石に今のは驚いたわ。流石金ぴかね。」

「支配人って、凄いね…」

「…………一体何をやっているんだ。」

漸く我を取り戻した時臣だが、そう咳ぐだけで精一杯だった。

心配なんてしていなのは、黄金律のスキルで確実に生きているのは予想できたからだ。

かといって、ここまでものは予想できなかつたようだが。（当然か……）

それにもしても、ギルガメッシュの言葉を気にしないどころかそのまま放送するテレビ局も凄いような気が。

溜め息をつきたいのを堪えていると、葵から声がかかつた。

「準備ができましたよ。早く席についてくださいな。」

「はーい。」

「ああ。」

テレビを消し忘れて食卓につく彼等。

『……昨夜再び人の失踪が起きたようです。』  
『恐ろしいですね。皆さんも夜の外出には十分注意してください。』  
『それでは、次のニュースに移りましょう。』  
『…………』  
『…………』

彼らの耳に届く事のなかつたニュース（ヒント）。  
これがどんな影響をもたらすのか……今は誰もわからない。

side 衛宮家

夕食の時間が過ぎ、士郎とセイバーは今日の暁説明を受けたことを報告していた。

「見えない異変、サーヴァントでも解らない、か……厄介だね。  
魔術関係なのは間違いないんだね、士郎。」

「ああ、らしい。」

真剣な顔で話し合つ衛宮家。

こちらでは全員で話し合つていた。

「やつぱり、前回の影響かしら……」の靈地に損傷をうえているかも知れないです。」

「貴女もそう思いますか、アイリスフィール。」

「そつちはセカンドオーナーの遠坂時臣に任せんしかないね。」

前回の聖杯戦争に参加した切嗣とアイリスフィールも原因を考えるが、時臣達と同じ答えしか出てこなかつた。

今まで異変などなく聖杯戦争が始まつてから起きたことにより、それが関係あることは明白なのにそれ以上が解らない。それに、少なからず不安を覚えた。

「」の異変がどれだけの事がまだ解らないけど、最悪の場合には御三家が集まることも視野に入れないとね。」

「そうね。家同士の秘匿なんて言つてる暇はないものね。」

「えつと、取り敢えず今は注意してることでいいのか?」

先の事を話始めた一人に現在の事の結論を確認する土郎。それに先を急ぎすぎたと反省する一人だつた。

「そうだね、いまはそれしかないかな。」

僕達も原因がはっきりするまで夜に外を出歩かない方がいいみたい  
だし。」

「そうね、キリッグ。

子供達にはサーヴァントがいるから、私たちよりかは大丈夫でしょ  
うし。」

「だからと言つて警戒は怠らないよう。

解つたかい？士郎、イリヤ。」

「解つてるよ。」

切嗣の言葉に士郎は返答するが、イリヤからの答えはなかつた。  
そつ言えば、初めから発言をしていなかつた様な……

イリヤを見てみれば、「ツクリツクリと船を漕いでいた。

「……あれえ、お話終わつた？」

「こら、イリヤ！！

ちゃんと聞いてなきや駄目じやないか。

「だつて、難しい話解んないんだもん。」

目を覚ましたイリヤに注意する士郎だが、イリヤはビリ吹く風と受け流した。

切嗣とアイリスフィールは流石親と云つか、苦笑いで済ましていた。

「危険かもしれないから話してるんだぞ。」「大丈夫よ。だつてバーサーカーがいるから。」

よつぽどバーサーカーを信頼しているのだろう。  
イリヤの言葉には不安が少しも見られなかつた。

「あつ、そつだ。私がバーサーカーと一緒にパトロールしてあげる。

」「なつ。駄目だつて、危ないじゃないか。」「

「ダイジヨーブだつてば。シロウつたら心配性なんだから。」「

「ああもう。爺さんとアイリさんも何とかいってくれよ。」「

言葉を撤回する様子の見られないイリヤに、切嗣達に助けを求める士郎。

苦笑いを浮かべながら切嗣が発した言葉は、求めたものと正反対の言葉だつた。

「危ないと感じたらすぐ戻つてこれるかい?」

「勿論よ!—」

「怪我をしないようにね。」「

「はあい、お母様。」「

それじゃ、いつてらひしゃいとイリヤを送り出した。  
それはあつといつ間の出来事だつた。

何故そうしたかと言えば、イリヤの頑固さを知つていたからに他ならない。

下手に反論して口をソソり出でていかれるよりはと判断したのだ。

それを言われて、士郎も渋々ではあるが納得したのだった。

「やっぱり夜は気持ちがいいね、バーサーカー。」

「

住宅街が多い深山町ではこんな時間に出歩いている人などいなかっため、イリヤはバーサーカーを現界させて一緒に歩いていた。

「異変かあ、どんなのだろうね。」

「

「まあ、私にはバーサーカーがいるから怖くなんて無いけどね。」

イリヤの疑問にバーサーカーは解らないという事を首をかしげることで表した。

一つ一つちゃんと反応を返してくれるバーサーカーに、イリヤは嬉しそうに笑うのだった。

そして、バーサーカーもイリヤが向けてくれる信頼に嬉しそうな空気を纏うのだった。

バーサーカーと言つクラスは理性を代償に力を得るクラスであるため、本来なら此のような反応を返すことはない。

それが可能なのはイリヤの莫大な魔力で狂氣を押さえ込んでいるか

らだ。

「ううん、これといって異変は無いみたいね。  
これ以上回つても無駄だしそろそろ戻りつか、バーサーカー。」

「

」

雄叫びのような声をあげ、バーサーカーはイリヤを肩に担ぎ上げ衛  
富家へと足を向けた。

だが、バーサーカーは途中でその歩みを止める。

命令していないのに急に立ち止まつたバーサーカーに、イリヤは声  
をかけた。

「どうしたの？バーサーカー。」

バーサーカーはイリヤの声にも反応せず、一つの方向を向いて唸り  
続けるだけだった。

それによつと氣分を害しながらも、視線の先が気になりそつちを  
向いた。

いた。

そこには何も居なかつた。

だがイリヤには解つた。バーサーカーが何に反応したのか。

「そつか。それなのね、バーサーカー。」

「

「うん。じゃあ、行こつか。」

バーサーカーは再び足を動かし始めた。

その先は衛富家とは少し違う方向を向いていた。

イリヤの表情は楽しそうで、バーサーカーはその身より鬪氣を発していた。

イリヤとバーサーカーは明確な目的の元に移動を開始したのだった。

## 十一章 動きの激化（後書き）

ザブタイをつけるのが段々と難しくなってきました……  
投稿直前にビビりつかってな感じでつけてます。

そして、今山場を書きたい症候群に襲われてます。  
いやね、色々な山場のネタが頭の中でグルグルと回ってるんですよ。  
後はこのネタを忘れない様にメモをしておいて、この熱が冷めないと……

## 十三章 槍兵 v s 狂戦士（前書き）

今回も難産でした……

しかも、今までのなかで一番遅い投稿時間 o\_r\_n

ほんと、付き合ってくださる方には感謝ですね（涙）

## 十三章 槍兵 vs 狂戦士

街が闇に染まるなか、一組の男女がその中を歩いている。

「にしてもよ、あれ以来全く敵に会わねえな。  
腕が鈍つちまうつてんだ。」

「仕方ありません、ランサー。」

相手の情報が解らない今、敵にかち合つるのは運頼み何ですか！」

その人物達とはランサーとバゼットであった。

彼等はアーチャー達と剣を交えた日から夜な夜なこのように敵を求めてさまよっているのだが、運が悪いのか全く遭遇する気配がなかった。（ランサーの幸運はEだからね）

衛宮家や遠坂家の位置は知っている筈だが、そこに襲撃するようなことは無かった。

それは、ランサーが真っ正面からのぶつかり合いを望んでいるからに他ならない。そう言ひ意味でランサーは眞の武人なのだ。

多分に食事を共にしたゆえの情の移りも否定できないが。

「あ～あ、折角全力での戦闘が出来ると思つたのによ。  
まだたつたの一度だけだぜ？しかも、途中終了。」

ハア～と大袈裟に溜め息をつくランサー。

召喚当初から変わらないランサーの言動に、バゼットはクスリと笑みを溢す。

バゼットことヒーランサーと共にいるだけで満たされるものがあった。

それは、クー・フーリンと呼ばれる英雄が例えよつのない憧れの存在であるからだ。

昔から何度も耳にしてきた彼の英雄譚。そんな存在を召喚でき、尚且つ方を並べて戦うことができる。

魔術視としても彼等の末裔としても、こんなに誇らしことはない。

「マジでそろそろ誰かと会わねえかなあ……

暇すぎて死にそうだぜ。」

「……？何を言つてるのです、ランサー。

貴方は英靈なのですから、もう死んでいるではないですか。」

「いやな、バゼット。ただの言葉のあやだつて何度も言つてるだろ。

」

ランサーの溢した愚痴に真面目に反応するバゼット。

その元来の生真面目さから、なかなか冗談を冗談として受け取ることが出来ないのだ。

なので、ピントのずれた返答をすることも屢あり、その度にランサーは脱力感に襲われていた。

見た目はいい女だつてのに、何でいう余話が噛み合わないのかねえ。それがランサーが思つてることである。

「つたぐ、もうひつと冗談かそうでないかぐれえ察せぬよ！」  
よ。

「ひつ……すみません、ランサー。」

「まつ、ゆつくりでいいから」

言葉を途中で止め、ランサーはあらぬ方を見た。

疑問に思いバゼットがランサーを見たところ、その顔には歓喜が浮かんでいた。

ランサーは何を感じたのか。

それは、今の自分と似た気配。即ち サーヴァントである。

サーヴァントと言つ存在は他のサーヴァントを感知することができ  
る。

だが、相手が近くにいると認識してない場合、近づかない限り察す  
ることは難しい。

しかし、ランサーは距離があるにも関わらず相手の存在を察知して  
いた。

それは、戦士であるがゆえの気配の察知能力と組み合わせて、辺り  
の探索を行つていたからだ。

バゼットはランサーが何を感じ取つたのか理解しつつも、敢えて尋ねた。

「ランサー、どうしたのです。」

「「」の氣配……間違いねえ、サーヴァントだ。  
漸く見つけたぜ。」

ランサーはバゼットの問いに返してゐるのか、独り言なのか解らない  
口調で呟いた。

堪えきれないとでも言つよつた、獰猛な笑みを浮かべて。

「バゼット、行くぜ。」

「ええ、行きましょう。」

そうして、二人はわざと氣配を出しながら、軽やかな足取りで素早く  
移動を始めたのだった。

そうして、槍兵と狂戦士の主従は邂逅した。

「今晚わ、ランサーにバゼット。数日ぶりね。」

「よう、嬢ちゃん。オメエだったのか。」

「ええ、お久し振りです。イリヤスフィール。」

あの晩はお世話になりました。」

彼等は気安く会話を交わす。これから戦うとは思えなことの多い軽さである。

しかし、そんな会話を行いつつも、どちらも隙を見せるよつたことはなかつた。

お互い油断なく構えながら会話を続ける。

「偶々外に出たんだけど、丁度会ひちやうなんて思わなかつたわ。

「へえ、偶々ねえ。俺達にや珍しくついてるじやねえか。  
で、解つてんだよな？」

もう少しこのよつた会話が続くかと思われたが、ランサーが雰囲気をガラリと変えて問いかけたことで空気が張り詰めた。やつと巡ってきた機会に逸る気持ちを押さえきれなかつたのだ。たまりにたまつた戦闘願望は爆発寸前だ。

普通の人間なら氣絶か、良くて腰が抜けるであつた氣の中、イヤはそれを真っ向から受け止める。

それどころか、笑顔さえ浮かべていた。

「勿論わかつてるわ。じゃないとこままで来ないわよ。」

「はつ、よく言つた。だが嬢ちゃんは参加できんのか？」

「むう、私だつて魔術師よ。」

ランサーはイリヤが戦闘に参加出来るのかと思い、つい聞いてしまつた。

見た目に惑わされてはいけないことを理解しつつも、やはり気になつてしまつたのだ。

それにイリヤは不機嫌だと言う顔を露にした。  
己の魔術師としての力を示す場であるのに、そんな力がないと言わ  
れているように感じたからだ。

と言つても、アインツベルンの魔術にはあまり戦闘手段がないた  
め、サーヴァント頼みになるのは間違いないのだが。

「それに、サーヴァントの戦闘は兎も角、マスターは主に魔術でや  
りあうんだから見た目とかは関係ないでしょ。  
リンみたいに魔術でなく殴り合いの戦いなんて野蛮だし、これの意  
図と外れてるじゃない。」

バゼットは目を泳がせた。数日前の校庭で、まさに意図に外れた行  
動をとつていたからだ。  
思い起せば、確かに魔術は身体強化ぐらいで体術ばかり使つてい  
た。

そんなバゼットにイリヤは気付き、ビックリ呆れたような視線を寄越  
した。

「ど、とにかく始めませんか？何時までも話し込んでいるわけには  
いきませんし。」

視線に耐えきれず、バゼットは開始を促す。

「……まあ、いいけど。」

「んじゃ、やりあうかね。泣いてもしんねえぞ。」

「あら、大丈夫よ。バーサーカーは最強だもん。」

「人がかりでも負けないわよ。」

自信溢れる台詞に、ランサーはますます楽しげに笑った。  
そこまで評されるようなサーヴァントなら、予想以上の戦闘が出来  
るのではないかと期待したからだ。

「はつ、よく言った。なら……いくぜーー！」

「行つて、バーサーカーーー！」

「…………！」

ランサーはその手に槍を呼び出し、バーサーカーに向かつてつき出  
した。

それをバーサーカーは己の石斧で弾き防いだ。

弾かれると同時に追撃ができないよう即座に下がったランサーだが、  
そのあまりもの力に手が軽く痺れていた。

「つてーな。流石バーサーカーってか。その怪力はちーと厄介だな。  
バゼット、一人がかりでつて言つのはあながち間違いじやねえ見て  
えだぜ。」

「そのようですね。」

バーサーカーの力。たった一撃でそれを理解したランサー達は、その顔に緊張の色を滲ませた。

油断なく構えた二人に、バーサーカーもいつでも動けるような体制をとる。

イリヤはその後ろに少し離れて立つており、楽しげな雰囲気を隠しもせずランサー達に話しかけた。

「ふふ、だから言つたじやない。

一人いっぺんに来てもいいわよ。ビッグセバーサーカーが勝つんだから。

「… そうですね。では、お言葉に甘えさせてもらいます。」

そう言つやいなやバゼットはバーサーカーに殴りかかった。

だが、バーサーカーはそれに構わず石斧を左後ろに向かつて振り上げた。

ガキン

石斧が受け止めたのは紅い槍。

バセットが飛び込むと同時にランサーがバーサーカーの後ろに回り込んで攻撃したのだ。

槍を受け止めたことで無防備になつたバーサーカーの腹部に拳が決まるが、まるで堪えたようには見えなかつた。

「へつ、まるで岩を殴つてのよつた感触ですね。」

すぐにバーサーカーのそばから離脱し、そう呟いたバゼット。  
彼女が言つ通り、バーサーカーの体は鋼のように固いのだ。  
だか、一度効かなかつたからといって諦めるわけにはいかない。  
ヒットアンドアウェイの戦法をとりつつ、バゼットは攻撃を続ける。

ランサーも似た様なやり方をとつていた。

己のスピードを駆使し攻撃を定められぬようバーサーカーの周囲を  
駆け、顔・胸足元に向かつてその槍をつき出す。

そんな攻防が幾ばくか続いたが、ランサー達が大きく距離をとつた。

「一体どうなつてやがる。」

「全く効いたよつには見えませんね。」

何度も攻撃してると言つのにバーサーカーには傷ひとつ見当たらなかつた。

確かにランサーの攻撃は、何度もガードを越えて当たつたはずである。

しかし、血を流さない処かかすり傷さえついていないのだ。

「どうしたの? もう諦めちゃうの?」

「はつ、んなわけあるか。

ますますやりがいがあるつてもんだよ。」

そうかえすランサーだが、表情は先程より厳しくなつていて。それはそつだらつ、普通の攻撃は通らないと証明された様なものなのだから。

「ランサー……どうします。」

「こいつなつたら、使う、しかねえな。」

「……そうですね。」

「たどえどんな勝負であろうと、俺は負ける気はねえからな。」

ランサーの言葉に、バゼットも腹をくくつた。殺すかもしけないと言つ結果を。

バーサーカーに生半可な攻撃が効かないと言つのはすでに判明している。

そのバーサーカーを倒すと言つことは、致命傷を負わしかねないと言つことだ。

そして、再度攻撃を始めた。

ランサーは身を低くしてバーサーカーの足元を主に攻撃し始めた。

巨体ゆえに低い攻撃は対処しづらい為、バーサーカーの攻撃は大降りなものになつてしまつ。

ランサーの攻撃に対処するためつい田で追つてしまい、バーサーカーの意識がランサーに集中する。

敏捷のスキルは同じ高さであるため、確認だけなら容易い。小回りは効かないが。

それを待っていたとばかりにランサーがバーサーカーの目前から姿を消し、代わりに現れたのは拳だった。

下を向いていたバーサーカーの顔面にそれはクリーンヒットし、炎の爆発がそこを襲った。

ルーン魔術である。拳に炎と風のルーンを宿し、インパクトの瞬間に一気に発動させたのだ。

傷をあうことはなくとも、その衝撃までなくすることはできない。

バーサーカーは体ごとのけ反った。

「ランサーーーー！」

「おうよーーー！」

バゼットと入れ替わったランサーは即座に後退しており、まるで獸がごとく地に這っていた。

片手に己の槍を構えており、バゼットの声と同時に槍に魔力が集中し出す。

ランサーはバーサーカーに向かつてその槍を振りかぶり。

「 刺し穿つ《ゲイ》 」

放つた。

「死棘の槍ボルグ！！」

それは紅い閃光だった。

目映い朱がランサーからバーサーカーに向かつて突き進む。力一杯投擲されたそれは、ろくに狙いも着けていないものだつた。だが、真名を解放された槍は秘められた概念に従い、バーサーカーの心臓に向かつて突き進む。

余裕の態度を崩さなかつたイリヤもこれには流石に驚いた。

「なつ、バーサーカー！？」

そして槍は体勢を崩したままのバーサーカーに当たつた。  
ランサーとバゼットは勝利を確信する。

これを避けるのはよほどの幸運を持つ者でしかなし得ない。例えバーサーカーが高い幸運を持つていようと、動くことのできない状態から避けることなどできない。  
それ故の確信だった。

ランサーとバゼットはイリヤに目を向けた。

「ワリイな、嬢ちゃん。俺達の勝ちだ。」

「ええ、宝具を解放した以上、ランサーの勝ちです。」

その言葉にも反応せずバーサーカーを見ているイリヤ。

それを、自分のサーヴァントが負けたのが信じられないためだと彼等は思った。

ランサーはもう一度イリヤへと声をかけた。

「嬢ちゃん、信じらんねえのかも知れねえが、奴は死ん「それはどうかしらね?」……何?」

ランサーの言葉を遮るイリヤ。

先程までの驚愕を消し、再び余裕を取り戻した彼女がそこにいた。

それを疑問に思う間もなく、ランサーの背に悪寒が駆け抜けた。本能に従い、バゼットを抱えてその場から飛び退いた。

直後……

大きな音が辺りに響き渡った。

ドゴオオオン

さつきまでランサー達がいた場所にあつたのは石斧。

それを持っているのは、倒したと思ったバーサーカーであった。

心臓部を見ても槍は刺さっておらず、見れば地面に横たわる槍があった。

ランサーの槍は、バーサーカーの心臓を穿てなかつたのだ。

「なん……だと？」

「まさか、宝具が効かないなんて。」

今度驚くのはランサー達の番であつた。

「うふふ、驚いた？でも、私もビックリしちやつたからオアイゴね。

」

クスクスと笑うイリヤ。

「何で効かなかつたか知りたい？」

「教えてくれんのか？」

「それならば是非聞きたいものですね。」

イリヤの意図は読めないものの、教えて貰えるならば聞くだけだと耳を傾ける。

そこに攻略のきっかけがあるかもしれないとなれば尚更である。

「聞きたいんだ。なら教えてあげる。

私のバーサーカーはね、どんな攻撃でもB以下の攻撃は全て無効化しちゃうのよ。勿論法具だつて例外じゃないわ。」

クルクルとその場で回りながら説明する。

内容にランサー達は納得がいったと言ひ表情になった。

ランサーの宝具のランクはB。

つまり、無効化の効果内に入ってしまったのだ。

「ちつ。成る程な、それがこいつの宝具って訳か。」

「そのような宝具なら、クラスに関係なく発現できると言ひわけですね。」

悔しそうに四つん這いになつたランサー達だが、それは違うとイリヤは四つん這い。

「それはね、本来の宝具から零れる効果のよ。それが宝具じゃないわ。」

その言葉に冷や汗を流す。

攻撃の無効化だけでも凄いと言つて、それが宝具の効果の一部だと言つのだ。

驚かない方が無理である。

「どうせだから言つちやおつか。バーサーカーの宝具の名前は十一  
の試練。<sup>トトロ・ハンド</sup>

例え殺されても、十回は生き返るの。もつと分かりやすく言つたら、命のストックを持っているのよ。」

予想以上の情報に驚くランサーとバゼット。

思つた以上の情報がもたらされたからでもあるが、何よりその情報から導き出される英雄の名

「十一の試練。<sup>トトロ・ハンド</sup>まさか、バーサーカーはかのギリシャの大英雄……」

「そんな有名な奴だとはな。キヤスター以外のどのクラスにも当てはまるらしいが、バーサーカーで現界していたとは思わなかつたぜ。なあ、……」

ヘラクレス

それが、バーサーカーの真名である。

「やつぱりすぐにわかっちゃつたね。

それで、ランサーの宝具は効かないって解つたけどまだやる?」「舐めんじゃねえぞ。このくらいで諦めてたまるかつてんだ。」

イリヤが戦闘続行について尋ねるが、ランサー達はその鬪気を薄れさせることはない。

寧ろ、上等だと言わんばかりだ。

「ふーん、じゃあ、やつちやつて、バーサーカー。」

それを念図に、バーサーカーがランサーに向かつて突っ込んでいった。

バーサーカーはその石斧を振り回す。

ランサーはその攻撃を受けることなく、避けることに徹した。

一度でも受けてしまえばただじやすまないのは目に見えている。

だが、その風圧だけでもすごいもので、完全に避けていくと言つのに肌が斬れ血が流れていた。

バゼットも援護するが、今度はバゼットの拳もつまへいなし先程のように受けることはない。

そして、とうとう石斧がランサーを捉えた。

「がつ。」ズザザ

「ランサー。」

受けれるも飛ばされるようなことはならず、確り足で大地を踏み締

める。

再度バーサーカーが接近し攻撃しようとするが、ランサーは足を傷つけてしまったのか軽く引きずっている。

「あら、最速の英靈なのに動き回れなくなつたんじゃおしまいね。」

「たわけ、この程度で終わるか。」

チラリとバゼットを見るランサー。

それに頷くバゼット。

「頑固ね。死んじやつても知らないから。」

バーサーカーが動こうとする前に、ランサーがルーンを発動させた。

「――？」

雷がバーサーカーを襲う。

流石に電気を生身の体で防げるはずもなく、バーサーカーが膝をつく。

「嘘!――? いつの間にルーンを書いたの。」

ランサーが発動したことはわかつたが、ルーンを書く暇などなかつた筈なのに使えたことに驚きイリヤはランサーを見た。

それをつけ、ランサーはニヤツと笑い、地面（下）を指差した。

バーサーカーの足元に引き摺つたような跡。

それで、イリヤは気付いた。

「まさか、地面に……」

「当たりだ。」

先程足を引きずつていたのは怪我をしたからでなく、これを書くためだつたのだ。

だからこそ、違和感のないように攻撃を敢えて受けっていたと言つわけだ。

イリヤは余裕の表情を消した。

余裕ぶつていては足元を掬われてしまつことを理解したのだ。

イリヤは奥の手を使うことを決めた。

「バーサーカー、狂いなさい！！」

「！！」

イリヤは令呪を使い、バーサーカーを狂化させた。

今のように比較的理性のある攻撃はできなくなりただ暴れるだけの存在となつてしまつが、負けるよりはいいと判断したのだ。

だが、それは一足遅かつた。

「ハアアア  
。。。」

バゼットのいた方から宝具級の魔力を感じたイリヤはそちらを向く。あつたのは宝具、級、等ではなく、正しく宝具であった。

「うそ、何で宝具を持つてるの。いや、あるの！？」

「そりや、あれがバゼットの一族に伝わる現存する宝具だからだ。」

イリヤの驚きに答えるランサー。

バーサーカーの情報を教えてもらつた代わりのようなんだ。

「いきます、切り抉る戦神の剣！！  
〔フラガラック〕

バゼットが放つた宝具が炸裂する。

この宝具の別名は、後より出でて先に断つもの《アンサラー》。  
その二つの名の通りの効果を有している。

本来のままでランクの低い宝具だが、迎撃に使用した場合ランクがAにあがり最強の迎撃用宝具へと変化する。そう、相手の攻撃より先に断つという結果を引き出すことで、その攻撃を無かつたことにするのだ。

そして、迎撃の発動条件は相手が奥の手と認識している手段を使うこと。

イリヤの態度から十一の試練ゴッド・ハンドがそれに当たると判断したバゼットは、常にその宝具が発動している状態なのだと判断した。なので、自分の宝具を使用すれば迎撃状態となり、相手の守りを貫けるのではないかと考えたのだ。

剣は一直線にバーサーカーに向かい

バーサーカーの命を刈り取つた。

「うそ……バーサーカーを一回殺した……？」

呆然と立つイリヤ。

英靈の宝具で殺せなかつたバーサーカーを、現存する（人が使う）宝具が殺したのだ。驚きは大きかつた。

バーサーカーは肉体を修復している。

それを見ながら体勢を立て直すランサー達。

先に宝具の情報を知つていてる以上当たり前の行動である。バーサーカーの修復が終わり、再開するかと思われたその時……

「私達の負けよ。」

イリヤが敗けを宣言した。

「「は？」」

思わず間抜けな声を出すランサー主従。息がピッタリだ。

「えーと、嬢ちゃん今なんてった？」  
「だから、私達の敗けって言ったの。」

顔を見合わせるランサーとバザット。

イリヤ達は言葉を証明するかのように戦闘体勢を解除する。

「一回殺されちやつたし、お母様達に無理はしないって約束したから。」

そうイリヤは言つが、ランサーたちはまだ納得のいかない表情だ。  
それもそつだるう、一回殺されたからと言つてあのまま押しきれば  
ランサー達の方が危険であつたし、ランサー達は知らないが一度受けた攻撃の耐性付とも存在するのだから。

「納得いかないって顔ね。」

「あー……まあな。」

「一回殺されたからと云ひのは……英靈の宝具は英靈の一部でもありますし。」

自分達が勝つたと言つのに素直に受け取れないなんて、とクスリとイリヤは笑う。

「いいのよ。勝ちは勝ちなんだから、素直に受け取りなさい。」

そこまで言つて、やつとランサー達は受け入れたのだつた。

バーサーカー→ランサー

勝者：ランサー

残り四組

## 十三章 槍兵 vs 狂戦士（後書き）

イリヤーズ、一回殺されたことで敗けの宣言。  
これも一応伏線的なものになるのかな？

自分のなかでは攻めて30話位はいきたいなと考えています。

が、予定は未定。  
先人の言葉は偉大だ……

## 十四章 戦闘のあと

勝敗が決まったからか、彼らの間にあつた先程までの張り詰めた空氣は霧散していた。

「それにしてもホントに驚いたわ。  
まさか現存する宝具があつて、しかもバーサーカーを貫いちやつた  
んだから。」

イリヤの言葉にバーサーカーも肯定の意を示す。  
バーサーカーもまさかそんな宝具が存在するとは思つてもいなかつ  
たため、バゼットへの警戒は最低限のものにしていた。  
そこを突かれる形となってしまったのだ。

苦笑いを浮かべながら、バゼットは漏らしても問題ない程度の事を  
口にする。

「先程ランサーも言つたように私の一族に伝わる宝具ですので。  
あまり外に知られていないのは確かですね。使う機会も限られてま  
すし。」

それにイリヤは納得した。  
封印指定を捕獲する仕事の時に使うならば相手は知るだろうが、す  
ぐに捕獲されるだろう人間が知つてもそれ以上情報が広まるこ  
とはない。

それに、執行者はあまり他の魔術師と交流をとるような時間がない為（主に保護対象の警護などで）、知る機会もないと言つわけだ。他にも執行者は単独任務が多いことも理由の一につに挙げられる。

「それに……意外と使い勝手が難しい宝具ですので、一族の者も使わない人間の方が……」「……」

「ああ、確かにそうよね。

相手の切り札がなんなのか解らなければ使えない上に、間違えたらランクは低いまま発動しちゃうし。

一度使っちゃえば狙いがなんなのか理解されちゃうものね。」

そうなのである、前情報がない場合相手の切り札など推測できず、そのまま解放してしまえば狙いがカウンターであることなどすぐにはれてしまう。

下手な奴が使うならば、発動すら難しいだろう。

ゆえに使い勝手が悪とイリヤがいつているのだ。

「そう言えば。その宝具バーサーカーに使っちゃっても大丈夫なの？現存する宝具なんて、かなり貴重なものでしょう。」

「問題ありません。私たち一族は所有しているだけではなく、作り出すことができますから。」

フーンと頷いたイリヤだが、今何か聞いてはいけないような情報を耳にした気がし一瞬動きを止めた。

バゼットはそんなイリヤに疑問を覚え、自分の発言によつて動きを止めたのが明白なのでよくよく自分の言葉を思い出してみた。そして、バゼットもピシリと固まつた。

「宝具を作る」。自分は確かにそういうてしまったのだ。

宝具を作れるなど、そつそつ口にしていい事実ではない。

他の魔術師達に宝具の存在を知られていないのはあまり使わないのもそうだが、その事を隠す動きがあるからこそ広まることがなかつたのである。

一族の土地より距離のある東洋の地で思わず口を滑らしてしまったバゼットは焦る。

オロオロと落ち着きのない行動をとつ、僅かながら田が潤んでいる。「ど、どうしましょ。流石にこの事を口にしてしまつのは……いや、作れると言つ事実だけなら未だなんとか。製法等などを口にしてたわけではありませんし。でも、これがばれたら確実に怒られてしまつ。」

そんなバゼットを見て、イリヤは逆に冷静になつた。  
他人が慌てているのを見ると、自分は落ち着いてくるものだ。

「落ち着きなさいよ、それでも魔術師なの？」

しかも、執行者になれるだけの実力があるんだから。

「う……で、ですが。」

「安心しなさい、別に言いふらしたりしないから。」

「安心しなさい、別に言いふらしたりしないから。」

イリヤの言葉にバザットの表情は明るくなる。  
この場にいるのは自分達だけであり、イリヤさえ黙つていれば自分が口を滑らしたことがばれることはない。

口封じを行わずにすんだこと、不安堵の行きを吐く。

(口封じとは所謂肉体言語である(しかも、一族共通))

だが、次の一句に再び不安に襲われた。

「た・だ・し、それだけじゃあれよね? 魔術師なんだから。」

「う、……等価交換、ですね。」

「そのとーつ。黙つてこる見返りはちやあんと貰わなきゃね。」

弾むような声でイリヤはつげる。  
バザットはますます不安を煽られた。

イリヤの表情はとても楽しそうで、こちらが困つてこるので楽しんでいるようにしか見えない。

それに、等価交換とは言つがどんな無理難題を吹つ掛けてくるのだろうかと、バザットはつい身構えてしまった。

「それじゃ、なんにしようかなあ。」「…………」「うへん……、せうだーー!」

黙っている条件を考えるイリヤ。

バゼットはそれを黙つてみていることしかできない。

少しの時間考え込んでいたイリヤだが、バゼットの方をチラリとみて何か思い付いたようだつた。

そして、イリヤは条件を告げた。

それを聞いたバゼットは一気に肩の力が抜けた。

イリヤの出した条件は確かに難しいものであつたが、無理難題と言えるものではなかつた。

自分のみでそれを決めてしまつていいいものかと言う考えが頭をよぎつたが、背に腹は変えられないとその条件を受け入れたのだつた。

「うふふ、交渉成立ね。」

「ええ、本当に御願いしますね。」

「解つてるわ。一度約束したことは破らないから、安心して。」

こうして、ダメッ…ゴホン、バゼットの一寸した失敗は何とか收拾できたのだった。

バゼットとイリヤが話している間一言も口を挟まなかつたサーヴァント達はといふと、少し離れた場所でこれまた話し込んでいた。

「ギリシャの大英雄の名は伊達じやなかつたな。

だけどバーサーカーつてのが、ちいとばかし残念だつたぜ。」

「…………」

ランサーの讃め言葉に、バーサーカーはふと笑みを溢す。  
その表情はランサーの腕を称えているようにも見えた。

「どうせならまた戦り合いたいもんだ。

剣技もまともだつたら戦うこと無しなんだが……まつ、それは贅沢つてもんか。」

「…………」

理性がキチンとあり、正当な剣を操るバーサーカーと戦いたかつたと言つランサー。

バーサーカーと言つクラスでさえ自分を高ぶらせたのだから、もし他のクラスであつたのならそれこそ限界、ギリギリの戦いが楽しめたのではないかと思つたのだ。

ランサーの言葉に同意するかのように、バーサーカーも少し残念そ  
うな表情を見せる。

彼もまた己の技がどれだけ通じるのか、どれだけ相手の攻撃を防ぐ  
ことができるのか試してみたいと言つ気持ちが湧き起つっていたの  
だ。

そう、バーサーカーとて戦士なのだ。  
気が高ぶらない筈がない。

だが、今回はバーサーカーとして召喚された以上、望むべくもない。

不満と言つわけではないが、ただし残念だった。

「つと、マスター達も話し終わつたみてえだな。  
そんじや、戻りますかね。」

「…………（コクツ）「…………」

マスターのもとこ歩み寄るランサー達。

これらの戦いの一部始終を遠くから見つめる一対の目が存在した。

「まさか、こんな場面にかち合つとは。  
私にしては運がいいと言ひべきか?」

そう、アーチャーである。

元より視力が良く『千里眼』のスキルも有する彼だからこそ、当人

達に気付かれることなく戦いを見ていることが出来たのだ。

その目は戦い初めから外されることなく彼らに注がれていた。

何故アーチャーがここにいるのかと言えば、昨夜と同様に簡単に冬木の町を見回っていたからだ。

目を『強化』し辺りを見回しながら動くアーチャーの目に止まつたのがイリヤだった。

その後すぐランサー達も発見し、お互いが近づいていっているのを確認したアーチャーは戦闘を確信し、大人しく彼等を見続けていたところわけである。

「バーサーカー対ランサーはランサーの勝利か。  
だが、命を一つ使つただけで敗けを宣言するとは、イリヤらしくないが一体……？」

アーチャーの知るイリヤなら、一度死んだくらいではそう簡単に負けたなど言わない。

なので、今の結果に首をかしげていた。

考えても答えは出ず、そういうものなのだろうと思いついた。

なんの情報もないのに考えてはそう言つものと納得する。

最近、そういう結末で終わる思考が増えてきたなとアーチャーは思つた。

どうせそういう結論に至るなら初めから考えなければいいのだが、それでも考え込んでしまうのがアーチャーがアーチャーたる所以だらう。

アーチャーの見つめる先でマスターはマスター同士、サーヴァントはサーヴァント同士で話していた彼等が集まつた。  
恐らくこれを最後に帰るのだろうなと考えた。

予想に違わずそれ別れようとし、アーチャーは何か嫌な予感がした。

戦士の勘とも言つべきそれに従い辺りを警戒する。しかし、これと見て変化は見当たらない。

氣のせいかとも思つが、頭の中の警鐘は消えない。再び周囲を見渡していた時、ゾクリと悪寒が走った。

それは覚えのある感覚だった。

しかし、多少の違和感がありあのときは違つ感覺がした。まるで、多少距離があるかのように。

アーチャーはハツとして慌ててランサー達の方へ目を戻した。  
ここに居るのは自分だけではない、多少距離があるとはいえランサー達も居るのだ。

あの異変がまた自分の近くに起きるものと思い込んでいた自分に疑問を抱きながら、もしもの場合に備え頭を戦闘用のそれに切り替えた。

ランサー達を見れば、彼らも戦闘体勢をとっていた。

そして、その周囲に黒い蠹くものをアーチャーは確認したのだった。

それは、例えるなら‘闇’であった。

影よりも深く、夜よりも暗い。そんなものが出現していた。

「あれは……何処かで……」

アーチャーの頭に、ノイズ混じりの映像が流れます。

赤い世界。その中に混じる黒。  
回りには誰もおらず、何もない。

……………つい、……………よ

その光景の中に存在するナーカ。そのナーカが見えないのに、ある  
'とわかる。

唯一の動くものが足を踏み出した時……

「（ズキン――）…ぐうつ。」

ひときわ酷い頭痛が襲つた。

それにもとないノイズ混じりの映像は消え、頭痛もその一度だけで  
直ぐに引いたのだった。

「今…………のは、一体…………」

考え込みそうになるも、今はそんな場合ではないと余計な思考を振  
り払う。

再度ランサー達の方を見れば、‘闇’に囲まれ身動きができないくなつていた。

‘闇’は攻撃を仕掛けることなく取り囲んでいるだけで、それ以外の行動を見せるのは今のところ無いようである。

ランサー達が攻撃を仕掛けないのは様子を見てるだけなのか、しうにも出来ない状況なのか……

アーチャーはランサー達の活路を作り出すべく、その手に弓を取り出した。

「トレスオング  
投影開始」

現れるは漆黒の洋々。それを矢をつがえることなく引き絞る。

「 I am the bone of my sword . ≈  
身体は剣で出来ている 」

弓に剣が現れる。

先ずは様子見と考えたのか、現れた剣は銘などないものだった。だが、その剣に込められた魔力はそれを差し引いても目を見張るものがあった。

アーチャーは一度溜め、その‘矢’を放つ。

‘闇’の一角に当たった剣は、その一部を吹き飛ばした。

アーチャーは、それでこの方法が有効であることを確信した。

ランサー達は自分達に援護する存在に気付き、何時でも囮みから離脱できるよう体勢を変えていた。

それを確認し、アーチャーはまた弓を引く。

次に作り出すは先程の剣よりも込められた魔力の高い一品だ。さつきの剣でも一部は吹き飛んだが、囮いを完全に壊すには至らなかつた。

その為、より威力の高いものを選んだのだ。

多少威力が高過ぎたとしても、サーヴァントが側に居るならば多少の危険は回避できるだろうとも考えたからでもある。逃げれないよりは良いだろうと。

「 I am the bone of my sword . ≪  
我が骨子は捻れ狂う ≫」

アーチャーは造り出した剣に魔力を込めていく。ランサー達にもその魔力は感じられたのだろう。いつでも動けるように姿勢を低くしていた。

そして、大いなる破壊力を込めた剣が放たれる。

「 偽・螺旋剣！！」  
カーラドボルク

多くの魔力を込められた剣は、光の早さで飛んでいった。その姿は、まるで彗星のようであった。

剣は、闇に突き刺さり、ズタズタに引き裂いていった。だが、何か抵抗したのか完全破壊には至らなかつた。

故に、アーチャーは止めの一言を放つ。

「 壊れた幻想」  
ブローカンファンタズム

魔力解放の衝撃により、闇の一 角は完全に破壊され、ソコからワニサー達は脱出していった。

それを確認したアーチャーもまた、素早くその場を離れようとしたときだつた。

ドクンと鼓動が跳ねたかと思えば、強烈な脱力感がアーチャーを襲つた。

心臓の辺りを掴み、崩れ落ちないようになに踏ん張る。何が、と思つアーチャーに驚くことが起きていた。

「 な、んだと。」

だが、驚いたのは一瞬。直ぐにそれを受け入れた。

「 そうだ、驚くような事ではない……」これは予想して然るべき事だつたのだ。」

段々と落ち着いてきたことを確認したアーチャーは、今度こそその場から離れたのだった。

ランサー達はランサー達で、バーサーカー達はバーサーカー達で別々に逃げだしたあと、戦闘場所よりかなり離れた位置でランサー達は漸く安堵の息を着いていた。

「取り敢えず、追っ掛けでは来ねえみたいだな。」

「その様ですね。……あれは一体、なんだつたのでしょうか……」

バゼットの言葉に、さつきまでの事を彼等は思い返した。

お互に雑談が終わり、いざ別れようかとしたときそれは現れた。

それは突然だった。

いきなり悪寒が駆け抜けたかと思えば、回りの闇が息を持ったかのように動き出したのだ。

「ひつ……な、何よこれ。」

「見るだけで恐ろしい、なんて。」

「バゼット、離れんじゃねえぞ。」

「 。 」

‘闇’を見たイリヤ達は冷や汗が止まらなかつた。  
ただそれを見ているだけだと言つのに、言い知れぬ恐怖感が沸き起  
こつてくるのだ。

サーヴァントのマスターを庇つよつに立ち、最高級の警戒をと  
つた。

恐怖感はサーヴァントである彼らも襲つてゐるが、生前戦場に身を  
おいていた彼等には大して効いた様子は見られなかつた。  
だからといって全く無いわけでもなかつた。

人は生きるために恐怖を感じる。

その根本的な恐怖をその‘闇’は引き出しているのだ。

ランサー達はすぐさま離脱したいと思つてゐるが、このまま攻撃す  
るのは危険だと本能が訴えていた。

その為手が出せず、周囲を囲まれたまま膠着状態に陥つた。

「まさか、これが凛の言つてた異変？」

「な、凛は嘘つきね。ちゃんと見えるじゃない。」

イリヤは自分を奮い立たせる様に、いつもの様な口調で喋る。  
それをバゼット達が聞き咎めた。

「イリヤスフィール、言つていた異変とはなんなのですか？」  
「嬢ちゃん、あれを知つてんのか？」

そこでイリヤは氣付いた、ランサー達はあの話を知らなかつたことに。

今動きがないとは言えいつ事態が動くとは限らない。

出来うる限り簡潔に要点を纏めて、バゼット達に自分が聞いた話を伝えたのだ。

「見えない異変ですか。

だと言つのに、目の前で起つてゐるのは見える異変。」

「異変が成長でもしてゐてか？

笑えねえ話だな。」

見えなかつたものが、闇と言つ肉体を得て見えるように変化する。

‘成長’。確かにその言葉が相応しいと感じた。

このまま動かすにいるのは不味いと感じたランサーは、一点突破をしようかと考えた。

何故なら徐々に、ほんの僅かずつではあるが、闇の包囲網が狭まつてきているのだ。

多少の事ではびくともしない自分達が先に行き、そのあとをマスターたちに付いてこさせる。

それしかないとランサーが動かつとしたとき、彼等の目の前の、闇

、を何かが吹き飛ばした。

「何？あれ……」

「あれは……剣、ですね。」

‘闇’の一部を吹き飛ばした剣は、彼等の前で霧散して消えた。

「この魔力……アイツか。

人の戦いを盗み見てるたあ、いい趣味じやねえか。」

「成る程、アーチャーですか。」

確かに見られていたのは少し遺憾ですが、今回は助かりましたね。」

剣が‘飛んできた’こと、それに内包された魔力からこれがアーチャーの仕業であることを理解したランサー達。

同時に自分達が気づかないほどの距離から見られていたと言う事実に、アーチャーとしての力を垣間見て感服するのであった。

イリヤは良く解らなかつたものの、ランサー達の様子から悪いものではないと推測し緊張をほぐした。

「嬢ちゃん、すぐに動けるよ！」としどけ。」

「ええ。」

「バゼット。」

「解つてます。」

イリヤはバーサーカーの肩に乗り、バーサーカーはいつでも走り出せるような体勢をとつた。

バゼットは自分の体に『強化』の魔術をかけ、素早く動ける準備を終える。

ランサーもいつでも動けるよう、軽い前傾姿勢をとつた。

彼等は解つてゐるのだ。先程の剣が威力偵察に過ぎないと言つことを。

どの程度、闇、に力が効くことを確認した後は本番がくる。

それに合わせ突破するのだ。

数拍の後、離れた所より立ち上る魔力を感知した。

それに、ランサー達は身構える。

爆発的に魔力が高まつたと思つた瞬間、再度目の前に剣が飛来してきた。

今度は捻れた剣であり、「闇」の一角を吹き飛ばしたもののが完全に消すには至らなかつた。

「何よ、駄目じゃない。」

「いや、これだけの筈がねえ。」

落胆と非難の声をあげるイリヤだが、ランサー達はまだ何かあると予測していた。

それは、一度戦つたから故の勘だった。

アーチャーは白兵戦もこなせるようだが、本来は頭を使う戦をする

やつだとランサー達は見抜いていたのだ。例え不利な条件・状態であれど、幾重にも策を巡らし徐々に追い込む。そんな戦いをすると。

だからこそ、そんな奴がこれだけで打ち止めになる筈がないと考えたのだ。

そして、それは正解だった。

見つめる先で剣がその神秘を解放し爆発した。それにより完全に、闇、の一角は破壊された。

その好機を見逃さず、すかさず彼らはその中より脱出したのだった。

思い返しても良く解らないことばかりであった。

何故あんなものが現れたのか、何故あの場に出現したのか。それが、全くわからない。

「しかし、あれは本当になんだつたのでしょうか。」

「さあな。だが、軽く見ていい事態じゃねえってのは確かみたいだな。」

「ええ、これからはあれに十分注意しなければなりませんね。」

イリヤの説明では、彼女がそこまで危険なものと思つていなかつたと言つ考へが随所に見られていた。

だが、あれを田の当たりにした事で理解したらしく、一瞬の恐怖のあとの眼差しの強さはかなりのモノだった。

田の当たりにしたことでの危険度を理解したのはランサー達も同様である。

それにより、夜の徘徊にあたって今までよりも警戒しておくことを決めた。

出歩かないと言つ選択肢がないのは、どんな状況であれ今が聖杯戦争の最中だからだ。

「取り敢えず、こいつの攻撃が効きそうなのは確認できたんだ。もし、また田の前に現れりや、蹴散らしてやるわ。」

「そうですね。頼りにします、ランサー。

……ですが、あのアーチャーの攻撃も凄いものでした。」

「ああ。つたく、剣を飛ばすなんぞ、どんな奴だよ。真名が全く解らねえ。」

話題はアーチャーが飛ばしてきた剣へと移る。

ランサーは不服そうな言葉とは裏腹に、その表情は物凄く嬉しげであつた。

それは、アーチャーにまだまだ手が隠されていることを知ったからだ。

あの時は黑白の夫婦剣で応戦してきたが、アーチャーである以上が本来の獲物である。

それは当然の理だが、つがえるのが矢でなく剣ときた。これは予想外の事であった。

自分は今の戦いに勝ち残り、アーチャーもあの場にいた以上まだ残つていると考えるのが妥当だ。

となれば、まだやりあえる機会が残つていると言つわけだ。

「そんじゃ、今日は戻るか、バゼット。

一応気い抜くんじゃねえぞ。」

「わかつていますよ、ランサー。

あれは油断などしてはいけないものです。

何故あんなものがここにいるか知りませんが、『氣は抜きません。』

ランサーは、バゼットの言葉に良くいったと笑い足を進めた。

再度アーチャーと会いまみえることの期待を胸に、警戒を怠ることなくランサーはバゼットと共に夜に溶け込んでいった。

## 十四章 戦闘のあと（後書き）

あれの再登場です。

まあ、これから出番は増えていくわけですが。

そしてアーチャーにもふりかかる異変。

一体何が起こったのか。

それは今後のお楽しみです。

それにしても、本当に時間が遅くなってきたなあ。  
頑張らないと。

## 十五章 新たな動き（前書き）

毎度ながら遅い時間 WWWWW

うん、ダメダメだな○'z

## 十五章 新たな動き

遠坂家のとある部屋。

朝も早い時間に話し合う人物達がいた。

「…………と言うのが、昨日起こつたことのあらました。」

「そう。バーサーカーとランサーが戦つて、ランサーが勝つたのね。  
そして、異変の顕在化、か……」

お分かりだろうがその人物達とは、凛とアーチャーである。  
何時もならギリギリの時間まで起きることのない凛だが、今日は何  
か予感がしたのか何時もより早い起床と相成っていた。  
その為、これ幸いとの間に昨日の報告をしているのだ。

「バーサーカーの真名が解つたのは嬉しいけど、敗退したんじゃも  
う意味はないわね。」

「確かに、そうだな。」

昨日のことを知る限り事細かに説明したアーチャー。（たたし、と  
ある一点を除いて。）

だが、彼は重要なことを忘れていた。それに気づく様子は今のところ  
ない。

「それで、他に言つ」とはないかしらアーチャー。」

「むひ、他にか？いや、特がないと思つが……」

「あひ、そうなの……」

アーチャーを見る凛の目。それは危険な色を有していたが、未だ昨日の事に思考を馳せているアーチャーは気付かない。

「そう、本当に何もないのね……」

「うつ、凛？」

ここに来て、漸くアーチャーは凛のオドロオドロした雰囲気に気付く。だが、なぜそうなったのか、いくら考えても思い至ることがなかつた。このときばかりは、アーチャーの鍛えられた頭脳も空回りするばかりだった。

理由はわからないがまづ謝りうとしたが、もつ遅かった。凛は己の部屋に防音の結界をはり、衝動のままに動いた。

「ぬあに、一人で、無断で、出歩いてるのよー！」

このアホサーヴァント

「グハアー！！」

叫んだ凛は拳をアーチャーの鳩尾に叩き込み（魔力で強化済み）、その衝撃で僅かながら下がった顔にガンドの嵐をお見舞いした。

哀れ、アーチャーは星にな……る訳もなく、床の上でピクピクと痙攣している。

凛はそれを一瞥するとフンと鼻をならし、ベッドの上に腰かけた。そして、もう一度だけ問い合わせた。

「それで、私に言つことは？」

「その、勝手に行動したりして済まなかつた。」

「ふん、解ればいいのよ。」

彼女は勝手に動かしたこと、相談もされなかつたことに怒っていたのだ。

何か行動を起こすなら一緒に動くと考えていたため尚更。

確かに、異変については今父親が調べてはいるが、その間街に影響があるかどうかは解らないし心配もある。

だからといって、何も言わずに一人だけで見回らなくてもいいではないかと凛は怒っていたのだ。

「また行くときは必ず私にも声をかけなさい。私もいくから。  
それと、アンタは私のサーヴァントなんだから、勝手に行動するんじゃないわよ。」

「ああ、わかった。次からは一緒にこいつ。」

遠坂家は、今日も平和だった。

そして、時間は流れ学校の屋上。  
またまた彼等は集まっていた。

凛は朝アーチャーに聞いていた為、何故呼ばれたのか予想がついていた。

しかし、桜は例の「ごとく教える」ことが出来なかつたため疑問符が浮かんでいた。

そして、以前とは違つことが一つ。

「それで、僕まで呼んで一体なんなのさ。  
詰まらないことだつたら怒るからな。」

この場に、間桐慎一がいることだ。

例の話をするにあたり、結果をただ伝えるよりも話し合ひの場にいてもらつた方がいいと思ったのだ。

例え魔術が使えなくとも彼は魔術師だ。

しかも、彼は御三家の一つの家の嫡男でもある。今の状況を知つて貰つているに越したことはない。

「慎一、例の異変の事は覚えてるよな。」

「聞いたばかりの話を忘れるわけないだろ。僕を馬鹿にしてるのか？で、それがどうしたのさ。」

確認のために聞いた土郎につっけんどんに返答する慎一。

面倒臭いと言う感情が態度にありありと現れていた。

それに苦笑いしつつも、ちゃんと聞いてくれるのが慎一のこことこだよな、と思う土郎。

しかしそれを表に出すことはない。言つたが最後、怒鳴つて立ち去つていってしまうことが解つていたからだ。

「うん、その異変の事なんだけど。

昨夜遠坂に聞いたことを説明したら、イリヤが見回りに行くつてきかなくて実際に行つちゃつたんだ。」

それを聞いて、慎一はやや呆れの表情を呈し、桜達は行動の早さに驚いた。

「危険かもしけないって所に自分から突っ込んでいくかい？普通。と言つか、よく止められなかつたね。」

「寧ろ送り出してたぞ。言い出すと聞かないからって。」

「ええ。それにバー・サー・カーもいますから、大事には至らないと判断したのでしよう。」

思わず肯定の頷きを返す。

付き合いの長い彼等も、イリヤの性格は重々承知だからだ。

バーサーカーに関しては見たことがないため判断できないが、知っているだろうセイバーが強く諫めていなかつたことからその実力が予測できると言つものだ。

「それで、何か見つかつたんですか？先輩。

あつ、それともまた異変が起きたのでしょうか？」

なかなか鋭い指摘をする桜。

だが、自分ではその可能性は低いと思っているのか、本当に何気ない口調だった。

聖杯戦争が始まつて暫くして現れた異変が、昨日の今日でまた現れるなど普通に考えれば可能性は低い。

だから、特に意識せずに出た言葉だつたのだろう。

士郎は桜の言葉に表情を引き締めた。

それに、桜達は軽く目を見張つた。

視線をすらせばセイバーも士郎と同様な表情をしており、その目は真剣だつた。

まさか、と言ひ思ひが強くなる。

「……実は、その通りなんだ。」

「はい、イリヤスフィールは異変に襲われたといつていきました。」

「ん……？異変に、襲われた、？」

聞き逃せない一言を聞き、慎一はその言葉を繰り返していた。  
何故なら、前聞いた話は見えなかつたといつてはいたのに、今はハツ  
キリ襲われたと言つたのだ。

「そんな！！イリヤさんは大丈夫だつたんですか？」

「それで、どんなモノだつたんだい。」

桜はイリヤの身を心配し、慎一は相手がどんなモノだつたのかを尋ねた。

イリヤから聞いた状況の説明を始める士郎達。  
なるべく分かりやすい様にと意識しながら言葉にする。

この場にいる全員が事態の重要さを理解している為、静かに話に耳  
を傾けた。

「最初は特に異常はなくてある程度見回つたから帰ろうとしたらし  
いんだけど、ランサーの気配を感じたからそつちに向かつたんだ。」

「異常事態が起きているとはいえ今は聖杯戦争中です。」

戦いの時間である夜に遭遇したならば、己の信念と誇りのため向か  
い合つ」とは必然ですから。」

フムフムと頷く聞く側の者達。

参加者同士がぶつかるのは当然で、そこに異常など存在しない。

その中でアーチャーだけは誰にも悟られないよつて苦い顔をしていた。

セイバーは誇りと信念のために向かい合いつてこつていて、アーチャーにとつてはそんなことはない。

信念には同意できるとしても、誇りと言つのはアーチャーにとつて必要ないものであるのだ。

勝つためならどんなこともやるし、どれ程非常な策であろうとも実行してきた。

そつ、勝利のためならどんな泥であろうと被つてきた。

そこに誇りなど存在せず、ただただ結果のみを求める姿がそこにはあつた。

だからこそアーチャーは誇りなど理解できなかつたし、しようとも思わなかつた。

そして、そんな生き方をしたからこそ英靈と言つむのにたどり着いてしまつたのだ。

そこまで考えて、矢張そつそつ変わるなどできんか……と心の中で自嘲した。

そんな考えをおぐびにも出さず真剣に聞き入つていてる態度を貫いていた為、アーチャーが違つことを考えていた事に気付くものはいなかつた。

「イリヤのバーサーカーとランサーが戦つたあと一寸話して、いざ別れよつとしたときに異変が現れたらしいんだ。」

話は続く。

核心の部分に差し掛かったからか、士郎とセイバーの表情は一層引き締まつた。

「現れたそれは、イリヤ曰く影みたいだつたつていつてた。」

「影……ですか？」

「それだけじゃ解らないだろ。もつと詳しく述べりよ、衛門。」

慎一の言葉に、解つてゐるよ、と返す士郎。

だが、上手く言葉が見つからないようで、どう説明しようかと逡巡していた。

それは、イリヤの説明にも原因がある。

帰ってきたイリヤは興奮し混乱していたのか、説明もに纏まりがなく支離滅裂だつた。

かわりにバーサーカーが伝えようとも言葉を話せず、また文字も書けないため説明することができない。

イリヤは一通り喋った後疲労が表に出てきたのか、すぐに寝入つた。そして今朝士郎達が学校にいく時間になつても、起きてくることはなかつた。

だからこそ士郎達もキチンと理解できているわけではなく、自分達なりに纏めて話すしかできないと言つ訳だ。

「私達も昨夜イリヤスフィールから何とか聞けた程度ですので、これ以上詳しくなると……申し訳ありません。」

自分が悪いわけではないのに、実直に謝罪の言葉を口にするセイバー。

真面目であるからこそ、正確に伝えることができない事に申し訳なさを感じているのだ。

それを見て、僅かに懐古の念にアーチャーは駆られた。  
彼女らしいと思つ心に、チクリとした痛みが襲う。

この場にいるセイバーが、彼女、ではないことは理解している。  
それでも、同じ存在、あるが故に重ねてしまう瞬間があるのだ。

「仕方ないわね。

アーチャー、影のことで貴方がわかる限りの事をここで話して。

黙つて聞いていた凛が突如話だし、アーチャーに話を振つた。  
彼等はその内容に一様に驚く。

話せ、と言つことはつまりアーチャーが知つていて言つた……

そこで、士郎とセイバーは何かに思い至つた様だ。  
ハツとした表情になつた。

「そういえば、襲われているとき誰かに助けられたって言つてたな、

イリヤ。

「どうか、あんただつたのか。ありがとな、助けてくれて。」「と言つことは、飛んできた剣と言つのは貴方の攻撃だつたのですか。

成る程、納得しました。

「イリヤスフィールを助けていただいたこと、私からも感謝します。

飛来する剣の正体がアーチャーによるものだとわかり、納得の意を表す。

「アーチャー」であるなら、そのようなことも容易いだろうと。

二人はアーチャーにイリヤを助けてくれたことに対する感謝を笑顔で述べた。

セイバーは兎も角、士郎からも素直に感謝の言葉が出てきたことに内心アーチャーは驚いていた。

自分達がエミヤシロウであるかぎり、お互に相容れない存在の筈だからだ。

衛富士郎がアーチャーを知らなくとも本能の部分で拒絶を行い、互いに反発し合つ。

自分も含め、今まですべからくそうであった。

だが、ここではそれがないようだ。

自分はその歴史ゆえにその感情を抱かずにはいられないが、奴は自分に対し忌避の感情がない。

「名前が同じだけの他人」。そんな考えがアーチャーの脳裏を過つた。

実際にそれに大きな違いはないだろうと思つ。

衛宮士郎が、‘衛宮士郎’として産まれた起源がある大火災なら、それがなかつたことでは衛宮士郎はエミヤシロウではない。……なり得る筈がない。

内心の動搖を押し隠し平然を装いながらアーチャーは口を開いた。

「……いや、感謝されるような事ではない。

遭遇したのは偶然で、一般の人間を襲わないと言つ保証もないから行つただけだ。」

顔を逸らしながらのそれに、他の者達は照れ隠しなのだと認識した。アーチャーの性格からして、そう考えるのが妥当だからだ。

アーチャーもそれに気付いたが、あえて知らんぷりを決め込む。勝手に勘違いしてしてくれるなら、それに越したことはない。まあ、照れていると思われるのも癪はあるが。

「なあに、アーチャー。照れてるの？

いいことしたんだから別に照れなくとも良いじゃない。」「別に照れてなどいない。」

凛がからかうように言う。

アーチャーは反論するが、それも勘違いを助長させるのを理解した上での言葉だ。

桜はそんな凜を宥めるよつに動き、慎一はコント何てしてなこでさつと話せとばかりにイライラしていた。

昼休みの時間も少なくなってきたこともあり、アーチャーは話を進める。

「はあ……それで、例の影のことなのだが……」

その一言で、さつきまで緩んでた空気が張り詰めたものへと戻る。

「そりだな……敢えて言葉にするなら、負のモノが闇や影と言つた物を借りて実体を持つた様なもの、と言えばいいのだろうか。攻撃が効いていたことから、実体があるのは間違いないだろ?」

「負のモノ、ですか……それでイリヤスファイールが憔悴きみだったのですね。」

セイバーは昨夜のイリヤの状態を思い出しながら告げた。

イリヤは困惑していただけでなく、疲れているようにも見えたのだ。

それが、影による影響であるならば確かに納得がいく。

影から発せられる負のプレッシャーがイリヤには堪えたのだ。

「それに、直前までランサー達が気付いてなかつたことを考えると、そつ言つものを伝つた移動ができるとも考えた方が良さそつだ。」「ええ、そうね。あのランサーなりそつでもない限りスグに気づきそうだし。」

「成る程、ですから突然現れたように感じると言つわけですね。」

更に状況から推測できる「こと」を口にするアーチャー。

この中でランサーを知るものはアーチャーと凛しかいない為判断がつきかねないが、その口ぶりには聞いている者達も納得させるだけの響きがあった。

「私は遠目に見ただけなので、これ以上言えるようなことはない。もつと情報がほしいなら、直接対峙した者達に聞くことだな。」

その言葉でアーチャーの台詞は締め括られた。

これでも十分な収穫と判断したのか、異を唱えるものは存在しなかつた。

そこに、タイミングよく昼休み終了の鐘がなった。

「もう時間ね……ねえ、これからは毎日昼休みに集まらない? 何かあつて集まるのも大変だし、効率が悪いでしょ?」

教室に足を向けながら凛がそんな提案をした。

一瞬呆気にとられた一同だが、確かにその方がいいと思えるだけの理がありこれも反論らしい反論はなかつた。

明日からは異変が終息するまで毎日昼休みに集まることが決定したのだった。

言わずとも知れたことだが、勿論聖杯戦争に関する手の内を話すことはない。あくまでも異変への対策であるからだ。

更に時は過ぎ、放課後へと移る。

凛と桜が一緒に歩いていた。

「それにしても、一人だけで行動するのは久し振りですね、姉さん。」

「そう言えばそうね。いつやって待ち合わせでもしない限り、時間が合わないしね。」

厳密には靈体化したサーヴァントもいるのだが、見えない以上いなものとして行動していた。

なぜ二人で帰っているかと言つと、昼の話から異変は主に夜に現れる可能性が高く、今の時期は日が落ちるのが早いため念を押したことだつた。

桜にはライダーがいるため大丈夫だとは思うが、矢張心配だつたのだ。

サーヴァントが2体いれば、大抵のことにも対処できるだろうと考えたのも大きい。

本来であれば家が同じ方面である慎一も誘ったのだが、それは拒否されたのだった。

曰く……

『お誘いはありがたいけど断らせてもらつよ。僕は女子皆のための存在だからね。

一人だけ贔屓は出来ないのや。』

あまりにも自信満々に言い放ちさしあと帰つた慎一のその言葉に、

凛と桜そしてライダーが閉口した。

ただ、アーチャーだけは苦笑いを浮かべていたが。

だが理由はそれだけではない。

魔力を持たない自分なら襲われる心配は無いだらうと判断してのことでもある。

楽観視し過ぎていると言えなくもないが、彼等の知る限り魔術師の前に現れていたため仕方のないことだらう。

反論の言葉がなかつた凛達を尻目に、足早に帰つていった。

そして、慎一はこうもいついていた。

一族の書物も漁り異変のヒントになりそうなものを探す、と。

例え魔術回路が途絶えてしまつても、伝わる魔術の知識まで無くなるわけではない。

魔術が使えないとも魔術師足りうと言つ慎一の覚悟の表れでもあつ

たのだ。

「まつ、慎一がマキリの書物を調べてくれるって言つなんなら言つ」とないわね。」

「（クスクス）頼つているならそいつ言ってもいいんですよ、姉さん。」

「誰がよ、桜！私はただ調べる人間が増えれば楽になるなつて思つただけよ。」

珍しく桜が揶揄するように言葉を放つた。

凛は赤くなり否定するが、発している言葉が頼つていると言つことを如実に表していふことを本人だけが気付いていないのだった。

気持ちを落ち着かせるために凛は一旦深呼吸をし、軽く自分の妹を睨んだ。

「桜、アンタ口が達者になつたわね……」

「姉さんのお陰です。」

「まあいいわ。」

つてそつだ。桜、私達今夜から見回りに出るかい。」

凛はアーチャーと決めていたことを桜に告げた。

始め心配させまいと伝えずによつたのだが、それでは逆に心配されるだとアーチャーに指摘されて云々ておくれとしたのだ。

凛が言わんとしてることを察し、桜は一瞬目を見開いた。ついで、不安そうな表情をする。

「見回り、ですか？」

「そつ。聖杯戦争もまだ続いているし、それも兼ねて、ね。」

桜の反応にヤツパリかと思いながら、殊更何でもないようこ凛は言った。

桜はほんの少し考え込んだかと思えば、決意を瞳に込め凛に告げた。

「では、私もいきます。」

思わぬ宣言に、凛が呆気に取られたと言つ表情をした。

見回りにいくと言つのは、戦闘しに行くも同義である。なので、人を傷付けることを嫌う桜がこんなことを言つとは思わなかつたのだ。

「なつ、桜。アンタ何をいつてるのか解つてるのー？」

「はい。私も皆を、この町を守りたいんです。」

ライダーには悪いかもせんが、その為なら私だつて戦います。

「

【サクラ、私のことは気にしないで下さー。サクラが望むなら、私は戦いましょう。】

ありがとう、と小さく呟く桜に、ライダーも同じ気持ちなのだと凛は理解した。

凛は厳しい表情になり、もう一度だけ桜に聞いた。

「ほんとにいいのね？」

異変の調査だけでなく、聖杯戦争の参加者とも戦うことになるのよ。

「解ります、姉さん。

その覚悟はあります。参加を辞退すればいいのかもしませんが、自分で召喚しておいて戦わずにそつするなんて出来ません。」

桜の決意は固く、凛がどんな言葉を発そつとも翻すことはなかった。桜は意外と頑固であり、一度決めたことを途中で放り出すことは皆無であった。

故に、きっと今回もそつだらうと解りつつも、説得せずにほいられなかつた。

遂には凛が折れ、それを認めた。

一連の流れを見ていたアーチャーが、流石は姉妹よく似ている、と声なき声で呟いていた。

会話の終わりに一度家の前に到着した。

凛と桜は今夜から巡回することを報告すると共に、現時点ではわかっていることはないか尋ねようと父親の部屋に行くことを決めた。

玄関を開け、帰宅の声をあげる。

「「ただいま」。」「

奥の調理場から、葵のお帰りと言ひ声が届く。

アーチャーとライダーは廊下の上で靈体をとき、実体を纏つた。

凛達が靴を脱ぐ動作をしていたとき、一人同時に、それ、に気付いた。

「どうした、凛？」

「何かあつたのですか、サクラ？」

少しだつても上がつてこない凛と桜に、アーチャーとライダーが疑問の声を上げた。

凛達のもとへ行き、視線を巡ればそこには……

「……靴がどうかしたのですか？」

ライダーは尚もわからず声をあげるが、アーチャーにはわかった。

確かにそれは何の変哲もないただの靴である。

ただし、今まで全く見たことがない、事を除けば。

新しく買ったにしては使い込まれており、そうではないことを主張していた。

つまり、最も可能性が高いのは客人と言つことだ、この時期の客人と言つことはつまり……

顔を見合させた凜達は、恐らくこの客をもてなしてゐるだらう父親の元へ向かつたのだった。

## 十五章 新たな動き（後書き）

う～ん、引きがいまいちだなあ……

それに、言いたいことや言わせたいことを入れるのも難しい……つて、ここまで書いておいて今更なきもしますが（笑）

来週は土曜出勤と忘年会が重なつてしまつたので、怠りげに曜日の投稿になります。

## 十六章 会合（前書き）

まさかこんな時間になるとは……

昨夜少し位は書こうとしたが、帰宅早々寝入ってしまった。  
今日も眠気がとれず、いつの間にかそのままの執筆。

このままでは駄目だ……何れ決めてる投稿日に投稿できなくなる。

頭鍛え直してきます！

（ダッシュで逃亡）

## 十六章 会合

s i d e 遠坂時臣

凛から異変の事を聞いた日よつゝ日、時臣は今日もその事について調べていた。

調べることと言えば、やはり龍脈の流れである。  
この土地に魔術的異変が起こった場合、最も考えうる原因であるからだ。

だが、大した発見は見当たらなかつた。  
強いてあげるとすれば、龍脈に流れる力が僅かに強くなっていることである。

だが、これは十年での開催による影響だひとつとあまり重視してなかつた。

「……龍脈に異常は無し、か。

とすれば、外部の仕業か？聖杯戦争に乗じてこの地に入り込んだとも考えられるが……」

龍脈を利用した簡易的な結界の反応がなかつたため、それもないかと考え直す。  
あれこれ考え方を巡らすが、一人ではやはりこれと言つたものは思い浮かばない。

さて、どうしたものかと考えていると、遠坂邸に張つてある結界が反応したことを察知した。

しかし、自分の元に向かってくるそれに悪意を感じる」とはなかつたため、そのまま到着をまつ時臣。

そう時間をおかず現れたものは、魔術師が使役する使い魔だつた。そして、それに時臣は見覚えがあつた。

「やれやれ、何のようだね。

いくら知り合いとはいえ無断侵入は頂けないな、衛宮切嗣。

『悪いね、遠坂時臣。こっちの方が直接赴くよりいと思つてね。』

それは、衛宮切嗣の使い魔だつた。

ここは冬木を治めるセカンドオーナーの家であるため、無断で入り込んだ切嗣に対し苦言を呈す。

しかし、そこまで本氣で言つていらない事を察しているのか、切嗣はサラッと受け流した。

言つても無駄だと言つことを理解している時臣はその一言だけで打ち切り、サッサと本題に入ることにした。

「それで、用件はなんだい。わざわざ使い魔での連絡と言つひとは、それなりに重要なことなのだろう?」

『ああ、なんだ。

息子から聞いたんだけど異変が起きてるんだろ? それに関する事

なんだ。』

時臣の表情が一瞬で真剣な物へと変化した。  
わざわざそれを伝えに来たと言つことは、恐らく自分が知らない情報  
報を掴んだことに他ならないと考えたからだ。

それならば話し合いに時間がかかるため本人が直接訪れた方が効率  
よく、魔力だつて無駄にならないはずだ。  
しかし、切嗣はそれをしなかつた。

それは、知つているからだ。葵に心配をかけたくないと言つ時臣の  
心境を。

だからこそ、滅多に訪れない自分が向かえば何か大変なことが起  
つているかもしないと教えることになりかねないと、使い魔によ  
る訪問となつたのだ。

勿論、魔術師の本拠地に行くわけにはいかないと言つ理由とてある。  
いくら交流があるとはいえ、他の魔術師を工房やそれに近い場所に  
入れるなどあり得ないことだ。

それならば、魔術使い、を自称する己の家に来てもらつた方がいい  
と切嗣は判断したのだ。

それらすべてを理解した時臣は一瞬顔を緩め、すぐに真面目な表情  
に戻した。

「では、毎過ぎこでモ向かわせて貰つよ。流石に今すぐと言つのは  
狂のひつよ

無理だからな」

『うん。じゃあ、待つてるよ。』

後程の訪問を取り決めた彼らは一旦話し合いを終了し、時臣は切嗣の使い魔が出ていくのを見送った。

そして、完全に結界の範囲内から出たことを確認したあと動き出したのだった。

昼を過ぎ、時臣は言った通り衛宮家を訪れていた。

寛いでいる様子はないものの余り緊張したようではないことから、信頼関係が見えると言つものだ。

「すまないね、わざわざ来て貰うことになつて。」

「いや、こちらの方が都合がいいのは間違いない。」

アイリスフイールがお茶を置き、切嗣の隣へと座る。

そして、人が少ないのでバーサーカーも現界して部屋の中にいた。

時臣はその事を不思議に感じ尋ねた。

「バーサーカーのマスターはどうでした？」

「イリヤは部屋だよ。」

まだちょっと辛そうだから、休ませてるんだ。詳しいことは例

の事を説明しながら。」

そう言って、切嗣は昨夜起きたであろうことを伝えた。

内容はほぼ同時に学校で行われていることと変わらない。

ただ一つ違うのは、当事者でもあるバーサーカーがいるため確認をとつやすこと言つことだ。

「異変が目視できるようになったと言つのか……」

「ああ、らしいんだ。

たつた数日でこの変化は異様だと思うんだけど、セカンドオーナーの調査ではどうだったか出来れば教えてもらえないかい?」

少しだけだとしても情報があるか無いかでやれることは全然違ってくる。

それは、攻めだけではなく守りについても同様だ。

家族を守る為ならどんなことでもしようと切嗣は決意を固めている。

だからこそ、情報が必要なのだ。

時臣とてその気持ちはある。

それに、土地の管理者として町の人間も守らなければならぬと言う責任まで存在する。

それらを踏まえ、管理者だけの情報だ等と言つわけにはいかないと、時臣は知る限りの情報を伝えようと決断を下す。

とは言つものの、現状で知り得た情報はさして多くないのだが。

「現状では有益な情報はない。辛うじて龍脈を流れる力が上がつていることを確認はしたが……」

「異変との関連性は解らないって訳だね。」

「そもそも、六十年周期であるはずの聖杯戦争が、たった十年で始まつたことも異常だ。」

龍脈に関してはそちらの影響と言つ方が説得力がある。」

「確かに、そうだね。」

それに、十年前の聖杯の誤作動とも言つべき働きも考えれば、その時から異常があつたとも考えられるしね。」

ポンポンと意見を言い合つ一人だが、それらは現状での打つ手の無さが露になるだけだった。

異変の正体も現れた原因も全く解らないことに、同時にため息を吐いた。

アイリスフィールも力になりたいと考えてはいるが、そこまで魔術の知識を有しているわけではないため口を挟むことはなかつた。喋れないバーサーカーは言つまでもないだろう。

「やはり、異変に関する情報は殆ど無いか。」

「そうだね。今に伝わる魔術での探索じや神秘の面からも難しいし……そうだ、キャスターに協力を仰げないかな?」

切嗣の言葉に思いもよらなかつたと言う表情をする時臣。

だが、よく考えればそれほどの案はないと理解した。  
しかし……

「確かにキャスターとして召喚されるほどの中存在なら、かなりの魔術を知り扱えるだろうが……今は聖杯戦争中だぞ。」

それに今度は切嗣が何をいつてるんだと呟つ表情をした。

「あれ、知らないのかい？  
キャスターは聖杯戦争に参加していないんだよ。だから、その理由で断られることはない筈だよ。  
最も、協力してくれるとも限らないけどね。」

始めて聞いた情報に驚くが、すぐに冷静になり確かにそれならば問題ないなと思う時。

結局、異変の対応はこれから調査を進めると共に、経過を観察するしかないと呟つことになった。

「それでも、異変が目に見えるようになつたと言つのは危険だな。」

「そうだね。攻撃が効いていたらしくから実体があるのは確実だし、下手をすれば一般人にまで被害が出かねないよ。」

話題は異変 자체の考察へと移る。

「それに、イリヤの様子から何らかの精神干渉の力も持っているようだしね。」

バーサーカーを見て呴けば、切嗣の言葉を肯定するように頷いていた。

その精神干渉が何であるかを時臣は聞く。

「その干渉がどう言ったものであるかは解るのか？」

「多分何だけど、恐怖何だと思う。」

恐怖、と繰り返す時臣。

バーサーカーも先程と同じように頷いていた。

「昨夜イリヤが帰ってきたとき気丈に振る舞つてはいたけど、体が震えていたしバーサーカーに抱きついたまま離れなかつたんだ。」

「そうね、あんなイリヤは久しぶりに見たわ。

眠らせるときも、私にしがみついたまま離れようとしなかつたですし……」

切嗣ぐに続き、アイリスファイールも昨夜のイリヤの様子を告げた。それを聞いて、確かに恐怖と言つのが妥当だと感じた。

「成る程……恐怖を感じさせる異変か。  
つまりは、負の感情を押し込めたようなものか。」

口にした内容は、アーチャーが言つたことと殆ど同じであった。

「結局はまだ詳しい」とは解らないことだね。」

「ああ……頭のいたい問題だな。」

切嗣は他人事とばかりに頑張つて、と軽いホールを送る。

それに多少恨みがましい視線を送るもの、実際時臣だけで処理しなければならないことも多くため息をつくことどめたのだった。

手元のお茶を飲み干し、話は終わりだと時臣は席をたつ。

見送りのため切嗣とアイリスフィールも立ち上がり、玄関へと向かう。

バーサーカーは口のマスターを安心させるべく、イリヤの白室へと向かった。

「では、今日はこれで失礼させてもらつ。」

「今日ははわざわざ来てもらつて本当にすまなかつたね。」

「対したおもてなしもせず、『免なさい。』

玄関についた彼らは別れの挨拶を交わす。

「一応、これからも異変の情報が入れば今日のようない報告してもらつてしまふ。」

「了解したよ。情報と頭脳は多い方がいいからね。」

最後に情報交換について簡単な取り決めをしていたとき、時臣は話題に出ただけではつきりと決めていなかつたものを思い出した。

「そうだ、キャスターの事をまだ決めてなかつたな。どうするのだ？」

「おつと、忘れるところだつたよ。

うへん、そうだね……土郎に行かせるかな？キャスターのいる場所的にも、その方が違和感も無さそうだし。」

キャスターがどこにいるかは知らないが、この点に関しては自分より知っている切嗣がそういうのだからそつなのだろうと時臣は思つた。

なのでわかつた、というだけで今度こそ衛宮家を後にしたのだった。

外に出てみれば話の進まなさに反して時間がたつていたようだ。日も暮れかかり、辺りは赤く染まつていた。

まだ明るいと言えるこの時間に異変が現れるとは思わないが、それも絶対とは言えないため早足で帰宅する時臣。他にも、学校帰りや買い物帰りであらう人が多く歩いている。

「平和、だな。」

今起きている異変を知らない町の人々はすべからく笑顔で歩いている。

それを歩きながら見ている時臣はこの町を守らなければいけないと、異変に平和を壊されるわけにはいかないと再度決意を固めた。

その為に、家にあるすべての文献や魔術道具をあさり、何か役に立ちそうなものをこれから探すことを決めた。

そつ考えているうちに、時臣は血色にたどり着き玄関を開けた。

「葵、今帰った。」

「おかえりなさい。」

お客様が先程からお待ちですよ。」

客がいると言つ言葉に時臣は面食らつた。

それは客がいたからではない。

何故なら己が呼び寄せた人物であるからだ。

驚いたのは、外部から来た以上冬木の結界が反応する筈だが、それに気付かなかつたことだ。

それほど話し合いに集中していたと言つことだらうが、魔術師として少し情けないと思つ時臣だった。

「客はリビングかい？」

「はい、たつた今ついたらしいので取り敢えずお茶をお出ししました。」

客が今どこにいるかを尋ね、その場所へ向かつ。

リビングには言われた通り客がお茶を飲んでいた。

時臣が一步足を踏み入れると、片方の男がそれに気づき時臣に一礼した。

それにもう片方の男も家主が帰ってきた事に気づき、手にしていたカップをおいて振り返った。

「久しぶりだな、遠坂時臣。」

「そうだな。長らくぶりだな。

ケイネス・エルメロイ・アーチボルト、それとランサー…は紛らわしいので、デイルムッド・オティナ。」

そう、客とは十年前に相対したランサーの主従だったのだ。  
以前呼ぼうと時臣がいっていたのは、十年前の聖杯戦争に参加したものたちだったのだ。

そして、ランサー。彼がいることで、数日前にアーチャー達が受肉したのはセイバーだけではないと推測したのが事実と証しがことが解る。

あとどのくらい受肉を果たしているかは、時臣が呼び寄せた事で何れ解ることだらう。

「済まないがここで話すのも何だ、私の部屋にこいつ。」

「ああ、いいだろう。いくぞ、ランサー。」

「はつ。」

時臣はケイネスとテイルムッシュを伴い自室へと向かった。  
また、葵には話を聞かせないようにお茶は要らないと言つのも忘れない。

時臣の部屋に移動し、ケイネスはすぐに話を切り出した。

「それで、ワザワザ呼び寄せた理由を教えて貰おうか。」

ケイネスは尊大な態度で時臣に尋ねる。  
本来なら頭に来る態度だが、そういう人間だと知っているため苦笑  
いに留める。

そして、今冬木で起つてゐることを一人に説明した。

「影の異変……薔てのキャスターの海魔の様な姿でしょうか?」

「ふん、厄介なことが起きているようだな。だから我々に助力を願つたと言つわけか。」

現状の厄介さを理解し顰めつ面になる彼ら。

なぜ発生するか、いつそれが襲つてくるのかわからないものほど厄介なものないと知つてゐるからだ。

「恐らく魔力を持っているものを襲うのではないかと思っているのだが……そう言えばソラウ殿はどうした？」

「アーツならホテルだ。結界は入念に張っているから問題ない。」

ふと、この場にいない人間を思い出し、時臣はケイネスに尋ねた。ディルムツドに供給する魔力はソチラからされているのを知つており、一緒に行動している事を確信しているからだ。

結界がどこまで効くのかは解らないが、ある程度の効果は認められるだろうとそれについての話は終わらせることにした。

「どうか、それで今のところ余り解っている事がないため、異変に対する見回りと起きたときの対処・報告をお願いしたい。頼まれてくれないか。」

「ふん、仕方ないな。十年前の事にも関係してくるかもしれんと聞かされてはやらんわけにはいかん。

いいな、ランサー。」

「はい。主の仰る通りに。」

時臣の要請に渋々ながらも頷くケイネス。

突っぱねることとて出来たが　寧ろ性格的にはそちらの可能性が高かった　自分の関わったことで異状がそのままになつていてることが許せなかつたのだ。

「助力感謝しよう。」

「ただの気まぐれだ。」

そして、細々としたことを話しあうと、時臣はもう一つの事が気になった。

ついでとばかりに、それを聞く時臣。

「そうだ、もうひとつ気になることがあるのだが。」

「む、何だ?」

「いや、君の弟子とは一緒に来なかつたのかと思つてね。」

同じ時計塔から來るのだから、一緒にものだと思つていたのだが。」

時臣の言葉にケイネスは重いため息を吐き、「テイルムッシュは困惑したような苦笑いをした。

それに、何となく起つたことがわかつた時臣だった。

「もしかして、またかい?」

「ああ。全く、マスターなりが「このカードが一回のカード」というふになつてゐると言つのだ。」

あれから十年たつてゐるのだぞ。私の弟子を名乗るもののが情けない。

「ケイネス様、流石にの方を完全に御す事は難しいかと……」

ケイネスは相変わらず自分のサーヴァントに振り回されてばかりいる弟子に対して悪態をつく。

そんなケイネスを宥めるよつてイヤルムッシュは言へ。

実際、誰であるうと行動を制御できるとは思えなかつたのだ。  
かのサーヴァントとは、そんな存在なのだ。

十年たつて少しきらい成長したかと思えば、自分のサーヴァントの  
突拍子もない行動にあたふたしている弟子の姿を思い浮かべる。  
彼等一人のやり取りは、ある意味時計塔の名物コンビとなつていた。  
その面白さや凸凹さで。

このように弟子にたいして悪いとこばかりあげるケイネスだが、自  
分が制御できるかと聞かれればそう断言できない。

今思えば、自分のもとに届く筈だつた最初の聖遺物を弟子が横取り  
していつたことに、逆に感謝をしてもいいくらいと思つていた。  
いや、本当は業腹物じゅわぶつなのだが、そのお陰で今の従順なランサーを得  
たことと、召喚する筈だつた存在を比べるとどうしてもそちらに考  
えが傾いてしまうのだ。

「変わらず振り回されているとは……大変だね、ウェイバー君も。  
いや、この場合は現代に馴染みすぎたライダー……イスカンダルに  
さすがと言つべきかな。」

時臣の言葉にもあまり力はなかつた。

ケイネスの弟子とはウェイバー・ベルベットと言つ名であり、その  
サーヴァントは征服王とも言われるイスカンダルである。  
このイスカンダルを知るもの悉く脱力せることとは、イスカン  
ダルが現代に馴染みすぎていると言つことだ。

さらに詳しく言つのなら、現代日本が誇るサブカルチャーである漫

画やゲームを気に入り、それに没頭していると言うのだ。

挙げ句の果てに、キャラクターが描かれたシャツやグッズを集めているのだから相当なものだ。

今回も呼んだのが日本の時臣と言つことで、これ幸いとばかりに東京の秋葉原によっているのだ。

だから、ここにいるのはケイネス達だけと言つわけである。イスカンダル、彼はもう立派なオタクの一人と化していた。

しかし、受肉した際は再び征服に乗り出すと言つこうなことを言つていたはずなのだが、いいのだろうか。

……まあ、本人が幸せそうならそれでいいのだが。

ただ、付き合わされるウェイバーは可哀想であるとしか言えない。

「では、彼が到着するのは明日と言つわけか。」

「なのだろう、詳しくは知らん。」

素つ気ないケイネスの態度だか、四六時中彼等と関わっているのだから仕方ないなども思う。

と、デイルムッドが唐突にあらぬ方を向いた。

「どうした、ランサー。何か感じたのか？」

「いえ、サーヴァントの気配が近付いてきたもので、つい気になりまして。」

ランサーの言葉に、時臣が答えた。

「ああ、それは家の娘のサーヴァントだらう。」

ほう、とケイネスは呟いた。

だが、デイルムッドは晴れぬ顔をしていた。

「何だ、まだ気になるのか？」

「はい、その……サーヴァントの気配が一つあるもので……」

来れにはケイネスも一いつと首をかしげた。

真相を知っている時臣に向ければ、笑いを含んだ表情でじりりと見ていた。

何も言わず見ていれば、隠す氣もなかつたのだらう。すぐに答えが得られた。

「デイルムッド、君の感覚は正しよ。家には一人のサーヴァントがいるからね。」

「なぜサーヴァントが2体いるの……そう言えば、お前には一人娘がいたな。つまりは……」

「そう、一人ともマスターになつていてると言つわけだ。」

ケイネスは感嘆の息をはいた。

いくらこの町にいる魔術師が少なくとも、一つの家から一人マスター

ーが出るなど稀有なことだからだ。

例え本人が自覚していないにしろ、魔術師の才能を秘めた人物だと  
ている。

十年前もそんな人間が参加していたと言う実績もある。  
その中で選ばれたと言うのなら、かなり才能を秘めていると言つことになる。

衛宮家でも同様なことが起きているのだが、到着したばかりのケイ  
ネスはまだ知ることはない。

会話をしている内に、ケイネス達にも気配が解る程度に相手が近づ  
いてきていた。

部屋の前に到着した彼女たちがどんな人物なのか楽しみにしながら、  
ドアが空くのをケイネスは待つ。

『お父様。来客中済みませんが今宜しいでしょうか。』

時臣はケイネス達に視線を送り、問題ないことを確認したのち返答  
した。

「ああ、大丈夫だ。入ってきなさい。」

ドアを開けて入ってきたのは時臣の娘と解る一人の少女。それとそ  
の後ろに付き従う鋭い目付きの紅いサーヴァントに眼帯をした長い

髪のサーヴァントだった。

## 十六章 会合（後書き）

逃亡と叫ぶのは嘘ですみません。

でも、もう少し余裕を持たせるために鍛え直さなければいけないのは本当かも……

頑張ります……

## 十七章　一つの交わし

帰宅した凜達は迷っていた。

帰宅してすぐ報告し夜の準備を行おうと考えていたのだが、来客中の今部屋に訪れていいものかどうか解らなかつたのだ。

「どうしましよう、姉さん。 異変に関する」となら報告していた方がいいと思つんですけど……」

「そうね。何時まで時間がかかるか解らないから、今すぐ報告だけでもしておきたいけど……でも、下手に入つて邪魔するのもいけないし。」

取り敢えずリビングに移動し、今すぐ時臣の部屋にいくかどうかを話し合つ。

アーチャーとライダーは話し合つまでもないことに気が付いていたが、凜たちもすぐに気付くだろうと黙つていた。  
だが一向に気が付く様子がない。……これもウツカリの一種なのだろうか。

見るに見かねて、ヒルヒルライダーが口を出した。

「サクハ、リン。 悩む必要はないと思つのですが。」

「えつ？」

「どうしましよう。」

凜達はまだ解らず、疑問符を浮かべている。  
ライダーは少し溜め息を吐きたくなつた。

一つの事に集中するのはいいが、その分他のところに考えが及ばなくなるのはどうなのだろうかと、ついついライダーは思つてしまつ。そして、自分よりもこう言う説明に向いてる筈なのに、黙つているアーチャーに対しても恨み言を言いたくなつた。

アーチャーが黙つてゐるのはこう言う本人が気付かなかつたことを指摘した場合、自分であれば照れ隠しと言ふ名の攻撃が向けられることを経験で知つていたからだ。

そして、ライダーであればそれがないことも。理不尽だと思わなくもないが、今更だとアーチャーは達観の域に達していた。

「ですでの、今の時期の来客なら十中八九トキオミが呼んだ人物だと予測できるはずです。

そして、呼んだ理由も例の異変に關する事であらう」とも。ならば、その異変に關することを報告しに行くのに、何ら問題は無いと思つのですが。」

ライダーはハツキリと、だが台所にいる葵の耳には届かぬよう告げる。

それを聞き、二人とも自分の考えの至らなさに気付き、凜は空笑いをし桜は恥ずかしそうに顔を赤らめた。  
そして、恥ずかしさを振り払うように、少し大きな声で答えたのだ

つた。

「そ、そう言えればそうよな。私つたら何迷つてたんだろ。」「そうでしたね。じゃあ、すぐに行きましょう、姉さん。」

二人は早足で移動を始めた。

その後に苦笑いのアーチャーと柔らかい笑みのライダーを伴いながら。

時臣の部屋の前に到着し、呼吸を落ち着けて声をかける。  
どんな状態であれ、家訓である、常に優雅たれ、を疎かにするわけにはいかないからだ。

「お父様。来客中済みませんが今宜しいでしょうか。」

一拍おいて、返答が来た。

『ああ、大丈夫だ。入ってきなさい。』

失礼します。

そう声をかけ凛が入り、その後に他が続く。

凛達の目に入つたのは、尊大な態度で椅子に座る男とその傍りに立つ美丈夫な男であった。

アーチャーとライダーは立っている男 ディルムッシュの姿を認め  
た途端、思わず警戒体制を取っていた。  
それは反射に近いものだった。

それも仕方のないことだろう。

受肉した英靈の気配は当人が誇示しない限り人のそれと同じである。  
故に、ここまで接近しても、気付くことができなかつたのだ。

しかし、すぐ目の前にいるとなれば別だ。

いくら氣配が普通の人間に近くても、肉体を得ていたとしても、サ  
ーヴァントはサーヴァントを感じすることができる。  
そう聖杯から力が与えられているのだから。

そんなアーチャー達に凛達は驚き、ディルムッシュは困ったような笑  
みを浮かべた。

「ちよつ、一寸。何やつてるの、アーチャー。」

「ライダーも、一体どうしたの?」

「凛、あの立つている男はサーヴァントだ。」

「ええ、そうです。まさかこのように近付くまで気付かなかつたと  
は、不覚です。」

アーチャー達の言葉に、再び驚く。  
しかし、そこで一つ疑問が浮かび上がる。

「あれ?でも、今回のサーヴァントは全部揃つてたわよね。」

そうだった、と構えを解くアーチャー達。

そして、前回の休日の際に話題に上がったことを思い出した。

男に目を向けたアーチャーは確信した。第四次聖杯戦争に参加したサーヴァント全てが受肉したのだううと言つ事を。

「つまり、君は前回の聖杯戦争に参加したサーヴァントであり、受肉によつてここにいると捉えていいのだな？」

「ええ、その通りです。」

確認の意味を込めたアーチャーの問いに、デイルムッシュは素直に頷く。

内容に間違いはなく、特に隠すよつなことでもないからだ。

ふと、アーチャーはこの男のクラスは何なのか聞きたいと言つ好奇心に駆られた。

気づけば口を開いていた。

「ただ的好奇心なのだが、君は何のサーヴァントなの……だったのかね？」

「私ですか？私のクラスはランサーでした。」

フム、とアーチャーは頷き、自分の知るランサーとは大違いだなとつりともなく思った。

今回のランサーは好戦的で野性的。よく言えばおおらかで前向き、悪く言えば大雑把で楽天家。  
そんな存在だ。

しかし、今日の前にいる男は柔らかな物腰で、礼儀正しいと言つ印象を受けた。

本当の騎士と言つのはこんな存在を言つのだらうなど、相手をよく知らないまでも漠然とそう思った。

軽く考え込むアーチャーを尻目に凛が緊張した面持ちで口を開いた。

「前回参加者でランサーのマスターといつて、もしかして時計塔の方ですか？」

ああ、と頷くケイネス。

凛達一人は時計塔の魔術師に会えたことに歓喜の念を滲ませる。時計塔は魔術師にとって最高峰の場所なのだ。

「お喋りはそのへりにして、用事を聞こじやないか。二人とも。

」

凛達の様子を仕方ないと理解しつつも、話が進まないと促した時田。その言葉に部屋に訪れた理由を思い出した彼女達は、やっと本題に入った。

「はい、例の異変に関する件なんですが、今夜から見回りに行こうと思い報告しにきました。

勿論、聖杯戦争とは別件の行動として、です。」

「私も、姉さんと同じく見回りに出たいと考えています。」

時臣は一人の娘を見つめる。

姉の凛は負けず嫌いな性格の持ち主で、魔術師らしい考えを持ちながらも人の心も忘れない。

今回は負けず嫌いと人らしい思考に触ることがあつたのだろうな、と時臣は考える。

一方、妹の桜はどちらかと言えば好戦的と言える凛とは違い、争いなどしたくない避けたいという優しい心を持っている。

今回マスターに成りはしたが、主に戦闘が行われる夜は全く出歩くことはなかつた。

だが、戦闘を避けられるとは断言できない夜に、それを覚悟で出歩こうとしている。

……桜の決意を垣間見た。

ケイネスは興味深そうに見つめるだけで、口を挟むつもりは毛頭ないようだ。

「アレの事は全く解っていない。危険だぞ。」

忠告の言葉を口にするが、聞き入れるとは始めから思っていない。  
それでも魔術師として、親として言わざにはいられなかつた。

「はい、解っています。」

「それでも、私も姉さんも少しでも力になりたいんです。」

まっすぐ時臣の手を見つめ返す。

「一人に共通すること。それは一度決めたことはやり抜くと言ひ頑固  
れだ。

この事は凛はよく知られているだろうが、桜に関しては意外に知ら  
れていない。  
その穂やかさに隠されているからだ。

黙つて見つめ合つていると、横から笑い声が響いた。

「十年前にも思つたが本当に氣の強い娘だな。しかも妹の方も同類  
のようだ。

面白い育てかたをしたものだな、遠坂時臣。」

そして、また笑いだした。

凛は十年前と言つ言葉に思い至ることがなかつたのか、不思議そつ  
に首を傾げた。

凛がわからないのも無理はない。

実際、会つたと言つより一方的にみただけと言つ話なのだ。

「二人の覚悟は分かった。どうせ止めてもやるのだろうからな。」

見透かした時臣の言葉に罰の悪そうな顔をしながらも視線は逸らさない。

それが、何よりも時臣の言葉を肯定していた。

「それに、止めると云つことは英靈である彼等の力を信じないと言うこともある。

流石にそんな恐れ多い判断は英雄相手に下せない。

そう言うわけで、娘達を頼んだ。ライダー、アーチャー。

「勿論です。サクラは私が全力を持って守ります。」

「……マスターを守るのはサー・ヴァントの役目だからな、せいぜい頑張るとしよう。」

時臣の言葉にライダーはすぐさま返し、アーチャーは一瞬躊躇った後肩を竦めながら返答した。

アーチャーが躊躇つたのは時臣の、英雄相手に恐れ多い、と云つ言葉に気をとられてしまったからである。

本物の英雄相手であればその考えも当然かもしけないが、まさか自分も含まれるなど思わなかつたのだ。

アーチャーとて英雄であること間に違ひはない。

しかし、真に己の力のみで英雄になつた彼等と、英雄にさせられた

自分は違つモノと言つのがアーチャーの考え方である。

そう、‘なつた’のではなく、‘させられた’。

確かに英雄になることを決め、受け入れたのは自分の意思だ。しかし、そこに世界の意思が働いていたのもまた事実なのだ。

自分は純正の英雄<sup>ホンモノ</sup>とは違つ、ただの掃除屋<sup>ヒヤウ</sup>なのだから……

そんなアーチャーの葛藤に気付くよつなことはなく、話は進む。

「ふん、ならついでだ。ランサーも見回りせしやる。」

「感謝する、ケイネス。

ああ、そうだ二人とも。出るならせめて夕食の後にしなさい。」

凛達はハイツ、と返答し退室していった。

「では、我々も帰るとしよう。」「

「分かった。何かあつたら連絡をくれ。」「

ケイネスは背を向けたまま反応することなく出ていき、デイルムッドが主の代わりとでも言ひよつて丁寧に頭を下げたあとケイネスの後についていった。

下では、帰ろうとするケイネスに葵が見送りに出ていた。

「夕飯も食べていけば宜しいですのに。」

「いや、ソラウをホテルに待たせている。」

「あら、一緒にでしたのね。それでは無料なお誘いでしたわね。では、途中お気をつけて。」

ケイネスとランサーは帰つてこき、葵は夕飯の支度をするべく家中へ戻つた。

リビングにいくと、凛と桜がテレビを見ていた。

そのくつろいでいる様子から、今日は出ないとおもい声をかけた。

「今日も出ないのかしら？」

「はい、今日も家にいます。あつ、でも夕飯食べたら部屋で鍛練するので、桜と一緒に。」

「じゃあ夕飯作るわね。」

一緒に鍛練？ そういうのは、一人でするものじゃなかつたかしら？」

今日も食べると聞き、嬉しそうな笑顔を浮かべる葵。その後一緒に鍛練をするといつ葉に疑問を覚えた。

それに答えたのは桜だ。

「もう、姉さん何いつてるんですか。鍛練じゃなくて、理論構築だつて言ってたじや無いですか。」

「いつ叶うのは話し合わないといい理論が出ないからつて。」

「そうそう、それそれ。あはは、間違つちやつた。」

葵はまだ疑問に思つところがあつたが、本人達が言つならうだらうと台所に向かつた。

葵の姿が完全に隠れたあと、凜達は盛大な溜め息を吐いた。

「じめん、桜。助かつたわ。」

「姉さんは、いつもうつとつとの事に弱いですよね。」

私も、あんまりつまづきませんでしたけど。」

もつね分かりだらうが、夕飯後に部屋にこもると言つのは嘘である。家にいなくとも不審に思われない理由として挙げたに過ぎないのである。穴だらけである理由であったが、魔術に詳しくない葵だつたからこそ通用したのだらう。

何とか凌げた彼女達は安堵したと言つわけである。

因みに従者達と言えば、何も言わず壁の華となつていた。

『御馳走様でした。』

食事が終わり、軽く片付けを行つ。

片付けの手伝いは女の子としてのたしなみだ。

ある程度綺麗になつたところで、凛が桜に声をかけた。

「こんなもんかな。桜、そろそろ行きましょう。」

「はい、姉さん。」

「準備が終わつたら私の部屋に来なさいね。」

「はい。いい、ライダー。」

「ええ。」

「私達も行くわよ、アーチャー。」

「了解した。」

凛達はそれぞれ己の部屋に向かつた。

葵はサーヴァントを引き連れていつたことにまた疑問を感じたが、一緒にいることが当たり前なのだからと片付けに戻つた。

そして時臣は一連のやり取りを紅茶を飲みながら静かに見つめていた。

凛の部屋では、凛が宝石の準備を行つていた。  
手持ち無沙汰なアーチャーはそれを見つめている。

もちろんただ見ているだけではない。

凛がどこかでうつかりをしない様に見張っているのだ。

そう、遠坂のウツカリとは「」一番と言ひとせにしでかすことが多いのだ。

そんな事態にならないよう、出来うる限り自分も見てていなければならぬ。

「よし、こんなもんかな。」

「何も忘れてはいなーいな?」

「大丈夫よ、今回はバツチリよ。」

今回はと言つ言い回しに乾いた笑いしか出ない。自覚があるだけましと思つべきなのか。

ウツカリのフオローは自分に回つて来るのだがと思つが、これも生前からの運命かと諦めるアーチャー。

その時、コンコンヒドアをノックする音が響いた。気配からそれが桜とライダーだと言つことは既に解つている。

アーチャーは凛を見た。

「いいわよ、入れて。」

凛が許可を出したためアーチャーがドアを開け、桜とライダーを招き入れた。

入ってきた桜の表情は今までの優しげなものだけではなく、強さが新たに加わったようにアーチャーは感じた。

「桜、準備はできた？」  
「はい。」  
「そ、じゃサッサと行きましょうか。」  
「でも、どうやって外に出来てしまう。」

困ったと桜は言つ。

いつも母親の葵はリビングにいるため、玄関に向かえばその横を通りなければならずばれてしまつ。それで意味がない。

凛はニンマリと笑う。

アーチャーはそれを見て、予測が確信に変化したことをしつかり感じ取つた。前回のアレか、と。

「何いつてるのよ、桜。そこにいいものがあるじゃない。」「これ、ですか？」

凛が言いながら指したのは、窓だつた。

桜はさつきより更に困つたと言つような表情をする。  
大きさは十分あるため、出れなくもないが……

「で、でも姉さん。私靴を持ってきてないですよ。」

「へーむとこはそこなのか！！」

アーチャーは思わず心の中で突っ込んでいた。  
桜も中々にすれている。

「それは問題ないわ。アーチャーに持つてこさせてるから。アーチ  
ャー。」

「ああ。」

と言つて、桜の靴を差し出した。

用意の良さに、桜は笑みを浮かべるしかない。

窓のそばに紙をしき、その上で靴を履き準備完了だ。

因みに、凜の部屋は一階である。

そのまま飛び降りても問題はないが、地面には小さな石が散在して  
いるため怪我をする可能性があるし、大きな音がたちそれでもばれ  
てしまうかもしれない。

そうならないようじつするかと言えば。

凜は窓枠に足を掛け、外に飛び降りる。

その身には既に重力操作の魔術を掛けており、着地も軽やかに行う。

一緒にでたアーチャーは横から凛に声を掛ける。

「流石だな、マスター。」

「ふふん、私にかかればこのくらい軽いわよ。」

そして二人は桜とライダーが降りてくるのを待つ。

桜の場合いつも言う行為に慣れていないため、窓の前で動けずにいた。迷つて迷つて、そして覚悟を決め飛び降りようとしたときだった。

ヒヨイ

「無理はしないでください、サクラ。」

「ふえ、ライダー？」

目の前にライダーの顔が現れた。自分を見下ろせば、ライダーの両手にしつかりと抱えられていた。

それは、俗にお姫様抱っこと呼ばれているのだ。

英靈とは言え女性にだっこされる恥ずかしさに、桜の顔が真っ赤になる。

「ら、ライダー。大丈夫だから。自分で降りれるから。」

「そうですか。ですが、私の方が心配でどうにかなりそうですのですが、ここは私に任せて貰えれば嬉しいのですが。」

桜に笑みを向けながらライダーは告げた。

男らしい言動に、「ライダー、かつこいい」と桜は見惚れた。

桜が大人しくなったのを了承の証と受けとり、ライダーは桜を抱いたまま窓の外に躍り出た。

そのまま降り立つたライダーは自分を含め一人分の体重を支えていると言つのこと、まるで重さを感じさせず羽根のようだった。

外に出た四人はここで話すのは不味いと言つことで、取り敢えず家から離れるために移動を開始した。

ある程度離れた位置で立ち止まり、凛は桜に向き直った。

「ここまでは一緒に行動したけど……」

「解っています。私も、今は聖杯戦争のいちマスターですから。」

全部告げずとも解っていると返す桜。

凛は満足そうな、そしてどこか寂しそうな顔をした。

桜が成長しているのは嬉しいが、頼られなくなるのが寂しいといったところだらう。

「解ってるならいいわ、ここで別れましょ。もしこの後会つたとし

「でも、手加減はしないからね。」

「はい。でも、私だつてそう簡単にほやられませんよ。」

桜も負けじと言い返し、一人は正反対の方へ歩き出した。

「くくく、まるで子離れ出来ない親のようだな。」

「……誰がなんですって？」

桜と完全に離れたところで、アーチャーはやおら口を開いた。  
内容にカチンと来た凛は凄んでみるが、アーチャーは変わらず喉を  
ならして笑い続けている。

「いや、だれと明言したつもりはないのだがな。」

「くつ、相変わらず口が減らないわね。アンタ。」

「これはこれは、マスターに誓めてもらつて何よりだ。」

「そんなわけないじゃない。」

アーチャーのいつもと同じ態度のこのやり取りによつて、凛もいつもの調子を取り戻していた。

そんな気配りを察しながらも、誰が感謝なんてしてあげるものですか、と凛は思つていた。

アーチャーと凛は新都に向かうべく、深山と新都を繋ぐ橋に向かつていた。

二人の間にアレから会話はないが、その沈黙も悪いものではなかつ

た。

アーチャー達が橋の脇の公園のような場所にたどり着いたときだつた。来た方向より一つの魔力の進りほとほりが感じられた。

「これは……もしかして桜達かしら……」

「だろうな。方向的に見て彼女達が向かつた方向だ。

そう考える方が妥当だろ？」「

魔力が感じる方を見ながら言葉を交わす。

凛の顔には、心配だと言つ気持ちが素直に現れていた。

アーチャーはそれを見て見ぬ振りをする。

いくら魔術師でも、感情を殺し慣れてるなど悲しいことにはさせたくない。

「しかし、運がないな。見回りの初日に敵と遭遇するとは。

「そうね。戦争の残りは私達も含め後四人。

除けば一人しかいない内の一人に当たるなんてね。」

心配なのは変わらないが、それで自分のやることをおろそかにする訳にはいかないと、気持ちを入れ直す凛。

再び新都に向かうべく足を動かそうとしたとき、アーチャーは更に告げた。

「運がないのはコチラも同様みたいだがな。いや、この場合は運がいいと言つべきかな。」

凛が向き直ると、アーチャーが闇の一部に向かつて話しかけていた。アーチャーの手には既に夫婦剣が握られており、体から鬪気が滲み出していた。

それを確認した凛も、頭が理解する前に戦闘体制をとる。アーチャーと同じ方を睨み付けていると、そちらから声が響いてきた。

「さあな、俺に聞かれてもしらねえよ。やりあいたい奴と会えたってんなら、今の状況は俺にとっちゃ運がいいと言えるがな。」

そこから現れたのは、数日前校庭で刃を交えた青い槍兵だった。己のマスターを従え紅い槍を出している彼の表情は、ようやく会えた『』兵に對して歓喜の表情を隠せずにいた。

あの日つけれなかつた決着を着けることをアーチャーだけではなくランサーも望んでいたのだ。  
そんな相手に会えて喜ばないはずがない。

「さてと、折角お互いに敗退しないまま会えたんだ。

この場で決着つけようじゃねえか、アーチャー。」

「それはコチラも望むところだ。

負けたところで言い訳は聞かんぞ、ランサー。」

二人の闘志が最高潮にまで高まり、決着を完全に着けるべく彼等は己の力を振るい始めた。

## 十七章 一つの交わし（後書き）

壁の華（笑）

勿論アーチャーも含みますよ。寧ろ私にとつてはそっちが本命だつたり。

だつてアーチャーは私にとつて燃えで萌え！－

そして再会するランサーとアーチャー。

もう一人揃うだけで悶えます。

問答無用で押し倒しち（r y

自主規制

佳境に入つてくる物語。

どれだけ上手く表現していけるだろうか……

## 十八章 信頼と光

side 桜&ライダー

凛達と別れたあと、桜達は深山の町を歩いていた。

凛が向かつた方向から新都に向かつたであろう事を推測し、ならばと自分達は深山を回ることにしたのだ。

全く別のところを見回つた方が効率がいいからもあるが、覚悟を決めたからと言つて直ぐに対峙できるほどの整理がついてないのだ。そんな桜の思いが手にとるように分かるライダーは、慈愛に満ちた笑顔を浮かべていた。

そして、聖杯戦争の相手だろ？と異変相手だろ？と、必ず桜を守り抜こうと誓つた。

「それでサクラ。具体的に何処を回りましょ？」

「そうね。……取り敢えず学校とその周辺に行こうかな？」

今はまだ宛もなくふらついている状態なため、ライダーは何処に行くのかを尋ねた。

桜は指を額に当て少し考え込んで、学校にいくと答えた。

ライダーは首をかしげた。学校であれば、初めの頃に凛が一度見回つている筈だからだ。

なのに何故今更行くのだろうかと思つたのだ。

「クスクス、何でつて思つてるんじょ。ライダー？」

「ええ、まあ。学校はリンが見てるはずですし、私達も昼間聞いて問題なかつたように思つのですが。」

桜はライダーが考へているであろう事を指摘し、ライダーもその事を肯定する。

ライダーの言つことは尤もある。

学校は既に凛の手によつて検分は終わつてゐる。

「うん。でもね、学校に人がいる状態だと完全じゃ無いと思つ。異変が起きてからは姉さんも夜に出てはいないし。」

「ふむ、そうかもしませんね。」

「だから、今夜一度じっくり見ておきたいなつて思つたの。

……もし、何かあつて皆が傷付くのは嫌だから。」

「偽善なんだつてわかつてゐる。私は他人の人よりちょっと多く知つてから、守れる気になつてゐるだけなんだつてことも。弱い私に出来ることなんて殆どないのに。」

「サクラ……」

「そう、ただ異変が起きてるつて知つてゐるだけ。それが恐ろしいん

だつて知つてるだけ。

でも、それに対処する方法は知らないし、そんな力もない……つて、  
御免ねライダー。こんなこと言つちゃつて。」

「構いませんよ、サクラ。」

ライダーは桜が眩しかった。

自分の思いを正確に理解し、それに目を逸らすことなく受け入れる。  
弱いだなんてとんでもない。単純に魔術ちからと言つものがあまりないの  
かもしけないが、それでも桜は強いとライダーは思った。

それに、魔術ちからが無くとも力ちからはある。

そう、ライダー（わたし）と言つ名の力が。

桜に召喚された自分は、まさしく桜の力なのだ。

「サクラ、貴女にも力はあります。」

「そんな……お世辞はいいよ、ライダー。」

「いいえ、そうではありません。私が貴女の力です。

サクラがサクラ自身の力で召喚した私こそ、サクラの力と言えます。

だから、貴女に力がない筈はありません。」

自分を力だと言つライダー。まるで己を道具のように表現するライ  
ダーに怒鳴ろうと振り返り……やめた。

それはライダーが浮かべていた表情のせいだ。

ライダーは桜の力となれることが心底嬉しいと言つ表情をしていた  
のだ。

そこに、卑下と言つた様な負の感情は感じない。

純粹に力になれるこ<sub>ト</sub>を喜んでいたの<sub>だ</sub>。これ以上否定するの<sub>は</sub>逆に侮辱であると思つた桜は、ライダーの気持ちを受け入れる事にした。

「……ありがとう、ライダー。頼りにしてるね。  
「任せて下さい、サクラ。」

そして、いつの間にか止まつていた歩みを再開し、学校へと向かつた。

学校に到着した二人がまずは校舎を調べようと足を向けた時だつた。校舎より一人の人影　高校生程度のものと小柄なもの　が出てきたのだ。

「あれは？誰なのでしょうか。  
このよ<sub>う</sub>な時間にまでいるとは……」  
「ライダー。見つかったらいけないから隠れないと。」

桜が見つけられる前に隠れようとしたとき、先に人影から声を掛けられた。

「あれ、桜じゃないか。何やつてるんだこんな時間に。」

聞き覚えのある声に目を凝らしてみれば、大きい方の人影は見慣れた赤銅色の髪をした人間　衛宮士郎だった。隣にいるのはこれまた見慣れた金髪をもつ少女　セイバーだ。

どうやら、今のセイバーは気配を押さえていたらしく、ライダーも田にするまで一人であることに気づけなかつた。夕方のデイルムッシュの時と同じである。

「あつ、先輩こそどうされたんですか？こんな時間に。」

「イリヤの代わりだ。アイツ、毎晩回るんだって言つてたけど、今夜は無理そつたからな。

だから俺がセイバーと一緒に出てきたんだ。」

らしい、と桜は思った。

他人を思い他人のために行動を起こす。衛宮士郎とはそんな人間だからだ。

きっと今回の事も駄々をこねるイリヤを諭し、代わりに自分が行くと言い出したのだろうなと桜は容易に想像できた。それはきっと間違いではない。

クスクスと笑う桜に不思議そうな顔を浮かべつつ、士郎は尋ね返したのだった。

「それで、桜は？女の子なんだから、あまり夜遅くまでいると駄目

だぞ。」

「大丈夫ですよ、先輩。ライダーがいますから。

私達も先輩と似たようなものです。」

「そつか。桜たちも町を見回ってるのか。あまり無理しちゃ駄目だからな。」

「それはコッチの台詞ですよ、先輩。

無理するのはいつも先輩じゃないですか。」

心配から出た言葉だが、桜に正論で返され返す言葉を失う士郎。口じゃ敵わないなど常々感じていてることをまた実感していたのだが、先程から自分と桜しか喋つてない事に気づいた。

セイバーと桜は仲が悪いと言つわけではなく、寧ろいいと言える。会えば料理等の話題で盛り上がり、話し込むこともしばしばある。だと言つのに、今は一言も発する気配がない。

何かあるのかと思いセイバーを見れば、ライダーと睨みあつていた。より正確に言えば、お互いの動向を警戒しあいながら対峙していた。桜は争いを嫌うため聖杯戦争に参加していない筈なのに、何故そんな状態になつているのか士郎は理解できなかつた。  
だから、士郎は思わずセイバーに大声で声を掛けっていた。

「セイバー、何やつてるんだ!! 桜は戦わないんだぞ。」

「いえ、そんな筈はありません。」

「何でそう断言できるんだ。桜は自分で戦わないと云つてたんだぞ。」

「それは、今此処にいるのが何よりの証拠だからです。」

自分がマスターであることを理解した上で戦いの舞台である夜に外にいることとは、戦うことを受け入れ覚悟を決めたからに他なりません。」

士郎は驚き桜を見る。

桜は動搖の欠片も見せずに見つめ返した。

その行動が、何よりもセイバーの言葉を肯定していた。

士郎は狼狽えた。まさか桜が自分から戦いに飛び込んでくる等思つてもいなかつたのだ。

そして、桜が戦つ覚悟を決めていると囁ひことは……

「では、やりましょうか。ライダー」

「ええ。そうですね。」

そう、参加者同士としての戦いが始まると囁ひことだ。

セイバーは空手をまるで剣を持っているかのように正面に構え、ライダーは釘剣を口の手の中に呼び出した。

その一人から一步下がった位置にいる桜からある提案が挙げられた。

「先輩。本当ならマスターの私も一緒に戦いたい所なんですけど、私には余りそう言うことができません。  
だから、サーヴァントだけの対決で決着をつけませんか?」

「……ああ、俺もそっちの方がいい。」

それは士郎にとっても願つてもないことだ。

士郎は桜と戦うことなんて出来ない。

士郎にとって桜は守るべき対象なのだ。

なのにどうしてその相手と戦えようか。

士郎はセイバー達から距離をとり、桜も同様に離れた場所を位置どつた。

自分達のマスターが戦闘の影響を大きく受けない程度に離れたのを確認し、ライダーとセイバーは今度は正式に戦闘体勢をとった。

「セイバー、空手のままでいいのですか？」

「問題ありません、かかってきなさい。」

からば、とライダーは牽制を込め釘剣を飛ばした。

自分に迫つてくるそれにセイバーが手を振ると、カキンという金属音をたてて弾いた。

「成る程、見えない武器ですか。間合いがわからないと言つの意味では厄介ですね。」

セイバーは空手ではなく、見えない剣を持つていただけなのだ。それを理解したライダーは、剣を手元に戻しながら苦言を呈した。

間合いがわからない以上、迂闊に近付くことは出来ない。

その上、クラスの関係上地力も違うのだ。

ライダーはセイバーの周囲を駆け出した。

それに、セイバーは驚愕の声を洩らした。

それも当然だ。このライダーの俊敏は最速の英靈であるランサーに匹敵するものを持っているのだから。

セイバーは騎乗兵が乗り物に乘らず自身のみでこのスピードを出した事に驚き、僅かに隙を晒してしまった。

ライダーはそれを見逃さず死角となる位置から釘剣を放つ。

当たる

そう確信したライダーだが、直前でそれは弾かれる。

セイバーの直感だ。

例え見えなくともセイバーの直感が様々なことを教え、危険を回避させるのだ。

本人もその直感を多大に信用していた。ライダーは一度弾かれても気にすることはなく、絶えず動き回り死角となりうる位置から何度も釘剣を飛ばしては攻撃をする。

セイバーはライダーの動きを田で追うような愚は犯さなかった。感じる気配と空気の流れ、そして直感によって対処していた。

足元を狙つて投げた釘剣は揺うように振るつた見えない剣で払われる。

だが、ライダーは鎖を握り、その鎖をセイバーの体に巻き付けた。

「捕まえましたよ、セイバー。」

「くっ、しまった。」

ライダーは鎖を強く引き、セイバーを地面へと叩きつけた。抜け出せる隙をとれないよう、スキルの怪力を使い何度も地面へと叩きつける。

「セイバー！！」

士郎が何も出来ずに叩きつけられるセイバーをみて思わず声を出す。その声を聞き、セイバーはサーヴァントとしてマスターに心配かけるわけにはいかないと想い、どうにかしなければと考えを巡らす。

巻き付けられた鎖によつて武器は振るえないが、手首より先は辛うじて動かせる。

この状態で出来る事、それを実行できるタイミングをはかり機会を待つ。

何度も叩きつけられるが、その程度ではダメージらしいダメージはさほど受けない。

セイバーは耐えて待つ。そして、その時は来た。

「ハア！！」

「なつ。」

セイバーは鎖から抜け出した。

セイバーからライダーに繋がる鎖。それを捕まえるタイミングを図つていたのだ。

セイバーの手元に来る確率は低く、その時も一瞬だ。  
だからこそわずかな受け身も取らず、鎖のみに集中していたのだ。

抜け出したセイバーは同じ轍てつを踏まないよう、一気にライダーへ接近した。

見えない剣を振りかぶり、ライダーへと降り下ろす。

ライダーは釘剣で受け止めるが、受けきれずに飛ばされてしまった。  
かなりの距離を飛ばされ、校庭の脇の木にぶつかりとなる。

「どうしました、ライダー。貴女の実力とはその程度だったのです  
か？」

「言つてくれますね、セイバー。

ですが、このままでは貴女に分があると言う事実は認めないわけにはいきませんね。流石は最優と言われるだけはあります。」

敵わないなど口にしつつも、戦意は全く衰える様子のないライダー  
にセイバーは警戒を続ける。

まだ宝具の解放さえしていないので。  
何か手があると考えるのが当然だ。

ライダーはこのままでは勝てないと言つてよく理解していた。

だからと言つて敗けを甘受するつもりもない。負けるのならば打てる手を全てだし、それを打ち破られたとき。

それが、戦うと決めた桜の決意に対する、自分の取るべき行動だと感じていたからだ。

そして、今取れる行動の一つ。

このまま無理ならば、相手が自分のステータスに近づいて、もらえばいいのだ。

ライダーは己の眼帯に手をかける。

セイバーは何かやるつもりであることを察し身構える。

「ですので、少し墮ちてもらいますよ。

〔キュベレー石化の魔眼〕」

ライダーは魔眼を解放した。

警戒のためにライダーを注視していたセイバーは、その目を直視してしまった。

瞳孔が四角形をしており、仄かに光っている。  
そんな目に見つめられたセイバーの 体が重くなる。

セイバーは高い対魔力を持つ。

故に本来なら石化するところを免れた。だが、完全にレジスト出来たわけではない。

「これは……ステータスがワンランク下がつただと……」「フフフ、いくら高い対魔力でも、私の魔眼からは逃れられませんよ。」

ライダーは魔眼を解放したまま自分からセイバーに突っ込んでいった。体と意識の齟齬が起きているセイバーの体から、動きのキレが消え失せた。

「……とにかくこのスピードをいかしライダーは果敢に攻め立てる。正面からやつあえれば負けるのは必至。なりばこの隙をつくしかない。」

だが、セイバーもそう簡単にはやられない。  
思考と体のすれにあえぎながらも、ライダーの攻撃に対抗する。

「くっ、やはり、そう簡単には、いきませんか。」「当然です。我が剣は容易く折れません。」

セイバーは徐々にではあるが、今の体の状態に慣れてきた。  
それに併せ、剣にも鋭さが戻ってきた。

始めライダーが押していたが、感覚を取り戻したセイバーが押し返す。

この程度ではだつたかと、更に手札を出すことに決めたライダー。ギンツと剣を強く弾きセイバーから距離をとった。

「どうしました、ライダー。」  
「降参ですか？」

「まさか、そんな筈ありません。

戦うと決めたのですから、勝ち負けに関係なく全力を出させてもらいますよ。」

ライダーの目にはまだ諦めは無かつた。

セイバーもそれを認め、軽く笑みを浮かべる。

それこそ戦うに相応しい、と。

だが、次のライダーの行動に度肝を抜かれた。

「なので、出させて貰いましょうか。あの仔を。」

そう言つたライダーは、己の喉に釘剣を突き刺したのだ。  
ライダーの喉から赤い血が飛び散る。

セイバーだけでなく士郎も目を見開き絶句していた。  
行動だけ見れば自殺としか受け取れない。

戦うと言つておきながらのちぐはぐな行動に、思考が停止してしまつたのだ。

そんな彼女達の目の前で更に驚く事が起きた。  
ライダーの喉から溢れた血。本来なら地面へと滴り落ちる筈のそれが中に浮き、陣を書き出したのだ。  
そして、その陣に魔力が集まり光だした。

まるで脈打つかのように光る血の陣。

その奥に、'ナニカ'があるとセイバーは直感で理解した。

「さあ、出てきなさい。」

その一言を引き金に、陣から白い光が飛びってきた。  
正面にいるセイバーは迎え撃とうと剣を構えたが、本能が警鐘をならしたためそれに従い回避行動をとった。

白い光が通過した場所を見てみれば、通った後に合わせて地面が抉れている。

そこまでの破壊力があつたと予想出来なかつたセイバーは、回避行動が正しかつたのだと思い知らされた。

こんな攻撃を幾度も放たれては堪らないとライダーのいた方向を見るが、その場所にライダーは立つていなかつた。  
ではどこに、と辺りを見回すがいるのは士郎と桜のみ。  
やはりライダーの姿は見えなかつた。

そのセイバーの耳に、バサリという羽ばたきの音が届いた。  
音に導かれるがままに逃れば、月をバックにそれは存在した。  
セイバーは再度身を驚愕に染めた。

「ペガサス！？それが、貴女が騎乗兵足る理由ですか。  
しかもこれ程の威力を有するとは、まさか神代のペガサスなのですか。」

「ええ、その通りです。この仔は神代にいました。」

なので、その後に出てきたモノ達とは格が違います。  
私の仔を侮らないことをお勧めしますよ。」

白い光、それは攻撃でなくペガサス（生き物）だったのだ。  
ライダーはそのペガサスの背に乗っていた。

セイバーはこれ迄のライダーの言動からその正体を考察した。

「石化の魔眼にペガサスですか。それに、‘私の仔’と言つ葉。  
ライダー、貴女の真名がわかりましたよ。」

「まあ当然でしょうね。個々まで手札を晒したのですから。」

「その通りです。貴女の真名、それは‘メデューサ’ですね。」

断言したセイバー。

答えるようにライダーは笑みを深めた。

その行動が、正解であることを示していた。

だが、それが解ったとしてもセイバーがとる行動に変わりはない。  
己の剣で対応するだけだ。

ライダーはペガサスに股がつたままセイバーへと突進する。  
体当たりである。

セイバーも対抗しようとするが、その素早さに翻弄されてしまう。  
ライダーはセイバーの攻撃に当たらないよう、ヒットアンドアウェイに専念しているからだ。

かなりの神秘を込めた存在の攻撃はすさまじいもので、校庭にはい

くつもの大きなクレーターが出来あがつた。

「先程までの威勢はどいつしたのですか、セイバー？」

ライダーが挑発するも、セイバーは答える余裕がなかつた。

攻撃の余波だけでもかなりの衝撃があり、回避にていっぱいな為だ。  
このまま少しづつ削られるのは不味いとセイバーは思った。  
一撃の威力は確かにあり、このままこの方法を続けられれば先に自分  
の体力が尽きてしまう。

ならばどいつするか。

セイバーはライダーにある提案をすることにし、回避の足を止めた。

突如動きを止めたセイバーを疑問に思い、ライダーは空中に身をと  
どめたままセイバーを注視する。

「ライダー、提案があります。」

「……何でしようか。」

「この戦略を取られたままでは私には手も足も出ない」と認めます。

その上で言います。お互い最高の一撃で決着を着けませんか？」

その提案を受けライダーは考えた。

今そのまま攻めればセイバーの言つ通りこちらの勝ちは揺るがないだ  
るつ。

だが、それで勝つたとしても桜の信頼に応えたと言えるだらうか。

否。確かに勝ることは喜ばしいが、全力で向かい戦つてこそ、本当に信頼に応えたと言えるのではないか。

そう結論を出したライダーはセイバーの提案を受ける事にした。

「いいでしょう。その提案受け入れます。」

「では、次の一撃で決めましょう。」

ライダーはその手に手綱を出した。

そして、その手綱をペガサスへと取り付けた。

「！」の仔は本来戦いを嫌います。だからこうでもしないと全力が出せませんから。」

セイバーは全力を出すために剣に纏っているものを解放した。

セイバーの剣を中心に暴風が巻き起こる。

その風は離れてみている士郎や桜の元にまで届き、ペガサスの飛行にまで影響を及ぼした。

風が強くなると共にセイバーの剣が少しずつ露になつていいく。セイバーの手から現れたのは黄金の剣だ。

「相変わらず、セイバーの剣は凄いな。」

「……綺麗。」

その剣から溢れる輝きは、見るもの全ての目を引き付けた。例えるなら、全ての星の輝きを詰め込んだ様な光。そんな、神秘的な光景だった。

「……それが、貴女の剣ですか。」

「そうです、これが私が誇る剣。  
そして、覚悟はいいですか？」

「ええ、私が勝つという覚悟なら何時でも。」

軽口を言い合いかながら、各々が己の宝具に魔力を込め始める。

ライダーの宝具には変化らしい変化は訪れないが、セイバーの剣には劇的な変化が現れる。

セイバーが魔力を込めるにつれ、その剣から黄金の光が溢れ出す。その輝きの強さはとどまることを知らず、辺りを瞬間にのように照らし出した。

互いに魔力を最高潮にまで込め、お互いの視線を絡ませ会つ。どちらともなく顔に笑みが浮かぶ。

そして、示し併せたかのように宝具を解放する。

「騎英の『ベルレ』」「約束された『エクス』」

士郎と桜は息を飲んで見守る。

これが最後の一撃になることを言われずとも理解していたからだ。

二人は自分のサーヴァントが勝つこと以上に、自分のもとへ戻つてきてくれるこ<sup>ト</sup>を願つていた。

そして、セイバーとライダーの宝具が衝突する。

「〔手綱〕！」<sup>フオーン</sup>

「〔勝利の剣〕！」<sup>カリバ</sup>

二人の衝突は、校庭を白と金の光で埋め尽くした。

## 十八章 信頼と光（後書き）

フフフ、今回はアーチャー達の決着の前に此方の激突です。楽しみって後にとつておきたくないですか？えつ？ 少数派ですか？

そして、相変わらず戦闘描写は難しいです。  
もっと動きのあるものをかけないものか……

来週は年末の出勤調整のため、また土曜出勤……しかも代休なし。ですので、多分また日曜更新となると思うので、悪しからずご了承ください。

## 十九章 蓄積する不安（前書き）

ななんと、お気に入りの登録が300人を越えました。本当にありがとうございます。

しかも、それに到達した日が24日とは。大人の私にもサンタが来ましたよ！！

これ、なんてクリスマスプレゼント？

稚拙な文ですが、読んでいただいている方には本当に感謝です。

次の更新は年明けとなるので、この場で挨拶をさせて頂きますね。

今年、これを読んでいただいた方には感謝の念が尽きません。皆様によりお年が訪れる事を願っています。

## 十九章 蓄積する不安

セイバーとライダーの激突による衝撃は凄いものであった。激突している点を中心に、衝撃波と暴風が巻き起こっている。

士郎と桜も離れてはいたが、校庭の範囲内でしかない距離であるためすぐ間近も同然だ。

故に、二人は荒れ狂う空氣の中で一生懸命足を踏ん張っていた。そして、風や光に負けじと目を見開き、セイバーとライダーがいるであろう場所を見つめ続ける。

白と金の光のせめぎ合いは、一人にはとても長く感じた。

一瞬とは言わないがほんの十秒程度であつたろうそれが、まるで数分続いたように感じたのだ。

だが、いずれ終わりは訪れる。

暴風と言えた風は微風にまでなり、光も昼間のような明るさから徐々に弱まってきている。

しかし、中心にいる一人は見えず、どちらが勝ったのか解らない。

士郎と桜は目を凝らし続ける。

舞い上がっていた土煙も晴れていき、二つの人影が露になっていく。

「……ライダー。」  
「……セイバー。」

己のサーヴァントを呟く。

人影はピクリとも動かず、勝敗の行方はまだ解らない。

光は收まり土煙も完全に晴れた。

セイバーとライダーは共に己の足で立っていた。

あれほどの力のぶつかり合いでも勝負はつかなかつたのかと、英雄と呼ばれる存在の規格外さに閉口するしかなかつた。

そう、彼女達の宝具の衝突は完全に相殺しあつていた。

セイバーはライダーの魔眼を受けランクが落ちていたこと、そして潤沢な魔力を持たない士郎がマスターであつたことにより本来の威力が出せなかつたのだ。

それに対し、ライダーはこれが始めての戦闘であり魔力が十分にあつたこと、上空からの降下で勢いがつき威力が上がつていたためにセイバーの聖剣と対抗したのだ。

力の余波によるものか小さな切り傷が多くあるが、二人に大きな傷は見られない。

だが、二人とも魔力がほぼ尽きかけていた。

その証拠にセイバーの剣からは輝きが失せており、ライダーのペガサスは、戻つて、しまつている。

「まさか、我が剣を耐えきられるとは思いませんでした。」

「私こそ、ここまでやれば押しきれると思つていたのですがね。」

お互ひ、押し切れなかつたという事実に苦笑いをする。

そして、再度構えを見せるセイバー。

確かに魔力はほぼ底をつきかけてはいたが、動けないほど消耗しているわけではない。

己には生涯をかけ鍛えてきた剣がある、真実全力を出すまでぶつかる腹積もりなのだ。

そんなセイバーとは裏腹に、ライダーは構えを見せる様子は無かつた。

手に持っていた釘剣も消し完全に緊張感を欠いていた。

「どうしたのです、ライダー。まだ決着はついてませんよ。」

挑発するように言葉を発するセイバー。

だが、それにもライダーは特に反応することはなかった。

ライダーはマイペースに桜を見て、自分の状態を確認するかのように身体を見つめ、最後にセイバーの方を見てこつと言った。

「私の敗けです、セイバー。」

セイバーは何を言われたのか最初理解できなかつたようで、数度目を瞬いた。

そして、内容を理解した途端、カクツとセイバーの肩が落ちた。

「はっ？ちよ、何をいつてるのですか、ライダー。  
貴女はまだ戦えるのでしょうか。」

自分はまだ戦<sup>や</sup>る気に満ち溢れているところに、早々に敗北宣言をしたライダーに不満を隠せないセイバー。

ライダーはそんなセイバーをものともせず、自分の主張をした。

「確かに、まだ戦えるには戦えます。」

「なら……」

「ですが、このまま続けたところで結果は見えているでしょう。」

ライダーの言いたいことがわからず、セイバーは眉根を寄せた。  
戦いには決まつたことなど存在しない。

戦いにおいて強者と言われるものでも必ず勝てると言つわけではない。

例えどんなに戦局が傾いていたとしても、一寸した要因で覆りかねないのが戦いと言つものなのだ。

英雄と呼ばれた存在ならその事はよく理解している筈だと言うのに、何故急に戦いをやめるのかその理由が知りたかった。

それを表情から読み取ったのか、ライダーは更に続けた。

「戦えますが、もう宝具の維持や使用のための魔力も残っておらず、残るは体術関連のみです。」

そうなれば、私がセイバーである貴女に勝てる道理はありません。」

そこでセイバーは気づいた。己にかかつていて魔眼の効果が無くなつていると言うことに。

確かに今の状態であれば本来の剣技を十一分に発揮できる。魔力があろうと無からうと、受肉しているセイバーの動きに影響らしい影響が現れないためだ。

「それに、どうしても勝つて叶えたいと言う願いがあるわけではないので、無理に戦闘を続けようという気もありません。無理をしてはサクラに心配をかけてしまいますから。」

心配げに自分を見ている桜を横目で見ながら、柔らかい口調で告げた。

そして、解つていただけましたか?という表情をセイバーに向けた。態度や言葉の端々から桜を本氣で大切に思っていることがセイバーにも理解できた。

完全に納得はできないがその心境は理解できるため、セイバーは剣を納めることを決めた。

それに、戦いは今回だけというわけでもないのだ。

今回の鬱憤を次回の戦闘の力とすることにしたのだった。

セイバーが完全に剣を納めたことを認めた士郎と桜は決着がついたと言つことを察し、各々が己のサーヴァントへと駆け寄った。

二人の表情には大きな傷がなかつたことへの安堵が表れていた。

「すみません、サクラ。負けてしまいました。」

「いいの、ライダー。」

ライダーが私のために頑張ってくれたことが一番嬉しいから。それに、大きな傷も無くて良かった。」

「セイバー、大丈夫か？」

「ええ、問題ありません。」

「そつか、良かつた。」

ライダーは全力を出しても抗いきれなかつたことに謝罪するが、桜は勝敗よりも自分の願いで戦いに向かつていつてくれたことが嬉しいという。

先程ライダーが述べたように、彼女たちにひとつ聖杯はどうでもいいことなのだ。

聖杯を求めるために怪我をする位なら、無事で側について欲しい。そう思つてゐるのだ。

一方、士郎はセイバーに簡単な確認をとることに決めた。

それは、セイバーが自分よりも腕がたつと言つことを理解してゐるからであり、当人の事は当人がよくわかるからでもある。

戦闘が終了したこと、場が一気に和む。

「それにも、ペガサスは格好よかつたな。

何て言うか、一般的に言われるイメージの神秘的って言つか。」

「そうですよね、先輩。あの純白の毛並みがとても綺麗で、思わず撫でたくなつちゃいました。」

「それには同意します。あの輝きは通常のペガサスより素晴らしいものでした。

流石は神代のペガサスと言わざるを得ません。内包する神秘も溢れる存在感も桁が違います。」

ライダーは自分の仔を讃められ、満更でもない様子だ。

少し誇らしげに胸を張つてしたりする。

「いえ、ですが貴女の剣には負けます。

流石は、騎士王と言われたアーサー王の剣ですね。」

セイバーは当然です、と言つた顔をする。

それほど自分の剣に誇りを持っているからだ。

多少ワイヤワイヤと語り合つていたが、ライダーが帰還の意を桜に告げた。

「サクラ、私たちはそろそろ帰りませんか？」

「え……？あっ、そつか。

魔力がなくなつたからね。」

「はい。行動自体には問題ありませんが、もし例のものと会つてしまつても交戦できるだけの余裕がありません。」

現状を省みれば帰つた方がいいのは確実なので、十分な見回りが出来ていないことが未練と言えば未練だが、桜は帰宅することにした。

「セイバー、俺達も帰るか。」

「フム……そうですね。それが懸命でしょう。」

「なら、途中まで桜を送つてやんないとな。」

士郎は桜へと声をかけ、別れ道まで一緒に行動することにした。

道中の話題は、やはり聖杯戦争に関することが中心だ。

「やつにえ、勝ち残つてゐやつて、あとどのへりに残つてゐんだろ。」

「そうですね。姉さんはその事を話さないので解りませんが、もうほとんどいな」と思ひますよ。」

残り何人か気になつたのか、ふと士郎が呟く。

桜は今まで戦うつもりがなかつたため気にしていなかつたが、凛が自分が戦つた相手や結果をあまり言わないようにしていったことに今氣付いた。

それは真剣に向かつてゐるといつ事の表れでもあり、何事にも全力で向かう姉さんらしい、と桜は思つた。

士郎もやるときはトコトンといつ氣質を知つてゐるから、微妙に桜に甘い凛が喋つていな事にも理解を示す。

「それと、少なくとも今日中にあと一人は脱落すると思ひますよ。」

「ええ、彼方に戦闘による魔力が立ち上っています。盛大に使っているようですし、ライダーの言うように勝負がつくまで終わらないでしょうね。」

セイバーとライダーは新都に繋がる橋がある方を見つめて言う。

戦闘中は自分達の魔力が辺りに充満して気づけなかつたが、今であればハツキリと感じることができた。

激しい激突が繰り返されているのだろう。瞬間的な魔力の高まりが幾度となく繰り返されている。

桜はその方こうと魔力から戦っている一方が誰なのか気付いた。

「片方の魔力は解りませんが、一つはアーチャーの物ですね。

魔力の方向からしても、リン達であることに間違いはないでしょう。」

「少なく見積もつても、現時点で三人のサーヴァントがまだ勝ち残つてていると言う訳ですね。

勝負が着けば一人。まだいる可能性もありますが、他の情報から考えればいないと考えた方がいいですね。」

ライダーも既に気付いていたらしい。  
片方の魔力の正体を呟いた。

セイバーは冷静に現状を分析していた。

セイバーも十年前に比べ聖杯を得たいという気持ちが薄れていたため、純粹に戦闘というものを楽しんでいたのだ。

そう。十年前、セイバーは今からは考えられない程願望機である聖杯を求めていた。

その理由は故郷を救う為。

その為ただ我武者羅に戦いつづけ、己の身も省みることはなかつた。それはマスターであつた切嗣にも言えたことであつたが、彼は愛する人間が側にいた為次第に変わつていつた。

セイバーにはそんな存在はいなかつたが、彼等の姿を見ていのうち自分の望みに疑問を抱き始めたのだ。

私の望みは本当に<sup>かれら</sup>民の為になるのか

と。

だが、そんなことはない筈と、己に言い聞かし戦つた。

しかし、嘗て共に戦場を駆け抜けた騎士の一人と出会い、迷いがセイバーの心を満たしていった。

そう考えると、十年前の聖杯の誤作動はよかつたかも知れない。

そして今、切嗣達と家族として暮らしていくうちに、己の願いが過ちであつた事に気付いたのだ。

今では懐かしいと思えるほどのりこえ、僅かに懐古の念に囚われる。

もし、頑なにあの願いを抱き続けていたならば。  
もし、聖杯の誤作動が起きなかつたら。

……もし、誤作動でなく作動 자체せずに、今回の戦いに参加していたなら。

そんなイフを考えていたとき、セイバーの背にゾクリとしたものが

駆け抜けた。

それは一瞬の事でしかなかつたが、何故かセイバーは氣のせいだと思えなかつた。

忘れてはいけないと、まるで自分を戒めるかのように直感が囁くのだ。

その事で考え込もうとしたセイバーだが、士朗達の声で我に返つた。

「えつ、遠坂の奴も出てたのか?」

「クスクス。先輩、あの姉さんがずっと家でおとなしくしてゐると思ひますか?」

「いや、想像も出来ないな。うん、確かに。

何て言つか、行動あるのみ!-!つて感じだしな、遠坂の奴は。」

戦争の名を冠していくことは裏腹に、その中身は誰一人死ぬことなく進められている。

そんな優しい世界をみて、セイバーは感じたことを心に仕舞い誰にも告げないことにした。

だが、絶対に忘れないようにしようと決めた。  
直感が囁くのなら、そこには何か意味がある筈だと。

そうと感じさせず、セイバーは笑顔のまま

皆と一緒に足を進めた。

その胸に、少しの不安を宿しながら……

新都へ向かう橋の脇にある公園。

そこで、赤と青の乱舞が起きていた。

片方が攻め、もう片方が守る。

だが、守るだけでなく隙を見つければ反撃も行う。

そんな気の抜けないやり取りを交わしながら、青の表情には歓喜しか見られなかつた。

赤い槍と黑白の双剣が幾度となく交わる。

互い、浅い傷を作りながら動きは衰えることを知らなかつた。

息つく暇もない攻防のあと、彼等は軽く距離をとる。

「相変わらずおもしれえ男だな、テメエは。」

「おや、こんな真面目な男を捕まえて面白いことは、君の感性を疑うぞ。」

睨みあつたまま会話を行つ。

彼等のそばではマスター同士も戦いを繰り広げているが、そひて氣を向けるような愚は犯さない。

マスターはマスター、サーヴァントはサーヴァント。

無言ながらもそつ自然と別れていった。

「眞面目だあ～？なら、眞面目に弓でも使ってみたらどうだよ、弓兵。」

「やれやれ。弓兵だからといって『しか使えんよう』では、英靈などとこゝ存在には成れんと思わんかね。」

それとも、君は肩書きだけでしか人を見れないじでも？」

当てはめられたクラスだけで判断するなどでも言いたげなアーチャーの言葉に、違ひねえと悪びれた様子もなく返すランサー。

戦闘をしていくとは思えないような気安いで会話を交わしている。まるで、旧友にでもあつたかのようだ。

無論、お互いの動きに注意を払うことは忘れない。

例えどんなに軽い会話を交わそつとも、戦闘中であることに間違いないのである。

「英靈になるといやあ、てめえそんな戦い方で良く生き残つてやがつたな。

正直、正氣を疑うぜ。」

「ふつ。逆だよランサー。

こんな戦い方をしなければ、無才の身では生き残れなかつただけの話しだ。

私にとつて戦いとは常に格上の存在どだつたのでね。勝つて生きるか、負けて死ぬか。そのどちらか一つだつただけに過ぎん。」

ランサーの言ひ戦い方とは隙を見せそこに攻撃を誘い、相手の攻撃の幅を狭めるといったものだ。

そして、隙を見せる場所は首筋であつたり、心臓であつたり。生きる上で重要な機関ばかりであった。故に正気を疑うなどと漏らしたのだ。

それは一步間違えれば致命傷となる傷を負うことでもある。始めランサーはその事に気付けなかつたが、それが何度も重なればいい加減気付くと言つものだ。

そして、その巧妙さにはランサーですら舌を巻いた。

だが、生前からその方法で戦いに身を置いていたと言つのなら、慣れた動きにも気付けなかつたことにも納得がいくと言つものだ。

「はつ、成る程な。

んなやり方を続けて生き残るたあ、まだまだ楽しめるつて訳だな。  
さあ続きと行こひづぜえ！！

そして、一気に距離を詰めてきた。

ランサーの高速の突きは目で追えるようなものではなかつたが、ランサーの体の動きや今まで心眼（真）で見極めてきた予想で何とか対応するアーチャー。

本来のスピードを駆使したランサーの動きは厄介ではあつたが、それでも何度となく刃を交えれば対応ぐらいはできるようになる。手の内にある双剣を飛ばされるとなく、ほぼ完全にランサーの攻撃をいなす。

勿論、守りに徹していたからと言つことも大きい。

ランサーの赤い瞳に見つめられ、アーチャーは人であつたときを思い出していた。

磨耗して記録として残つているかでさえ定かではないが、彼女と同様にその青を完全に忘れるなどなかつた。

始めの邂逅は学校。あの赤に見つめられ、なす統べなく別の赤に貫かれた。

なんとか一命をとりとめ家に帰つたが、再度の襲撃。

……そして、彼女の出会い。一人の激突。

それが、自分の運命を決定付けたと言つても過言ではない。彼等のような存在に成りたいと、彼等のように人々を救うような力を得たいとただそれだけを目標にした。目標にし頑張り、行き着いてしまつた。

常に戦場に身をおき、助けたいと願つた人々を救い続けてきた。だが、結果は人類の尻拭いをするだけの掃除屋でしかなかつた。絶望や後悔に身を染め、全てを無かつたことにしてしまつたこともあつた。

そう、かつての彼女のようだ。

そんな英雄などと評されるには不相応な自分が、再び英雄が集つこの時代に召喚されまた彼等と刃を交える機会を得た。なんと言つ皮肉だろうか。

だが、純粹にその強さを競い合うこの聖杯戦争に参加できたことを

喜ぶ自分もいる。

それに、経過が違うため絶対に自分にならないと確信できる奴もいた。

いくら自分殺し（ヒミヤシロウ殺し）を諦めたとて本来は見たくもない奴だったが、こうなるならば話は別だ。

最期にそれを知れただけでも良かつたとアーチャーは思った。

本当に殺すことを諦めたのか？

アーチャーの身の内からそんな声が沸き起つた。  
ドクリと心臓が脈打つ。

「（……当然だ、私は答えを得ることができた。  
それに、もう奴を殺す事は意味がないことだと知った。）」

アーチャーは己の心の声に否定の声をあげた。  
自分はもう間違えないと、大丈夫なのだと。

でも、自分をしたいほど憎んでいるんだりつつ、

「（否定はできん。だが奴は私ではない。  
そんなことをしても意味はない！－）」

なぜそんな声が聞こえるのか。そもそもこれは本当に自分の声なの

か。

それに思い至ることはない、ただ聞こえたことには既定の話をするが、ことしか出来なかつた。

でも、奴もH!!ヤシロウであることは間違いないだろ。何を遠慮する事がある。自分をどうして自分との勝手だら。

確かに衛宮十郎はどうしても衛宮十郎でしかなうことの世界で理解した。

そうだ。奴もお前も結局は、同じ、だ。  
える前に、やつたことの一つぐらいやつてもいいだろ。

「（そんな……ことは……）」「  
許されない、か？それこそどうでもここことだら？」

何故なら、この戦争が終わればもう、えるだけなんだから。

囁きがアーチャーの心に染み渡つてゆく。

嘗て抱きもう捨てたと思ったはずの感情、憎悪・後悔・嫌悪と言つた感情が徐々にその体に沸き起つてゐる。

心から聞こえる声。それが甘美な言葉のようアーチャーを少しずつ侵食していく。

自由に振る舞つていいんだ。己の欲望のままにな。

その為に、全力で障害を排除しよう。

心の声の口調が変わるも、もつそれに気づくだけの余裕などアーチャーには残されていなかつた。

声の導くまま全てを斬り捨て奴を したいという感情。  
答えを得再度頑張ると誓つた決心。

それらがアーチャーの中でせめぎあつていた。

鋼の意思をもつアーチャーであつたが、それですら押さえつけるのが困難になつていた。  
思わず、歯を食い縛る。

ランサーもそんなアーチャーの僅かな異変に気付いた。

今まで無表情を貫いていたアーチャーが唐突に顔を顰めたのだ。  
気付かない方がどうかしている。

だが、一瞬の後には元に戻り、違和感を覚えるも大したことではないと判断した。

アーチャーの中に違和を抱えたまま、彼等の戦闘は続く。

## 十九章 蓄積する不安（後書き）

重なる不安。これがどう変化していくのか！！

因みに凛とバゼットの戦闘は済みませんが書きません。てか書けません。

彼女等のやり取りは皆様の脳内で想像してくださると嬉しいです。

## 一十一章 紅青の交わし（前書き）

皆様、明けましておめでとうございます  
正月の更新が無理だつた六爪龍です。

いや、更新したいなとは思つてたんですが、30日まで普通に仕事をその晩直ぐに夜行バスにて実家に帰省。  
実家は実家で遊び盛りアンデこれからお年玉盛りの親戚の相手で時間がなかつたんですよ。

ゆつくりしたかつたのに全然出来なかつた。orz

4日からまた普通に仕事で、しかも風邪まで……

一寸熱が高かつたんですがバファリン飲んだら数時間で完全平熱に下がつたんですが、薬が効いたのか優しさが効いたのか……

もしそうなら私つてどれだけ優しくに餓えてんの――――!?

## 一十章 紅青の交わり

ランサーの槍がアーチャーの右肩を狙つて放たれるが、アーチャーはそれを半身になつてかわす。

だが、アーチャーを追うようになり、槍も廻り扱うような軌跡を描く。それをアーチャーは左手の短剣で防ぎ、その勢いを利用して回転。回し蹴りを放つた。槍での防御が間に合わないと見たランサーは、槍から左手を離し腕でガードをする。

そのままアーチャー足を掴み軽く放り投げ、その身が空中にある内にと槍を突き出す。だが、アーチャーもそのまま食らつまないと槍の進路に己の双剣を間に入れガードする。

空中の身が勢いを殺せる筈もなく、攻撃の勢いのまま飛ばされ距離があく。

そしてアーチャーは危なげなく体勢を変え着地した。

「追撃をせんとは、余裕のつもりかね？」

私も嘗められたものだな。」

「そんなんじやねえよ。

テメエも感じたんじやねえのか？せつゝ何か妙な気配を感じたと思つたんだがよ……まつ、氣のせいだったみたいだな。」

‘妙な気配’、という言葉に思わずピクリと反応してしまつ。

しかし、ランサーは周囲の変化と思つていたのか周囲を見ていたため、それ見ることはなかつた。

アーチャーは例の声を徐々にだが押さえつけることが出来るようになつていた。  
もとより自分を押さえることには慣れすぎるほど慣れれているアーチャーだ。

不意打で聞こえた最初であれば兎も角、認めさえすれば意識から外すことなど容易かつた。  
とは言つても、なんの影響かいつものように完全に意識から除外することは出来ずにはいたのだが。

身の内から聞こえてくる声。押さえきれぬそれに苛まれながらも、ランサーに対応する手がぶれることはなかつた。

「そうかね。では、勘違いと解つた所で続きといこうではないか。君の事だ、決着がつくまで戦闘をやめるつもりはないのだろう?」「よくわかつてんじゃねえか。勿論そのつもりだぜ。」

ランサーが言い終わらぬ内に、アーチャーはその手に自分のクラスを表す獲物を呼び出し、矢継ぎ早に攻撃を放つ。

アーチャーとしてのスキルではなく彼自身のスキルとして、弓であれば狙つたところは外さないという類い稀なる技能が存在する。それをフルに活用し、虚実入り交じつた攻撃をする。

顔や体・足などギリギリを狙つての攻撃は並みの相手なら、見切る

ことなど出来ずに無様に逃げの姿勢をとるしかない。しかし、そこは矢避けの加護を持つランサーである。牽制の矢は自らランサーを避けるように動き、ランサーは「口に向かってくるものだけを落とせばいいだけとなっていた。

「ちつ、そういうえば君には、矢避けの加護、が存在していたのだつたな。

全く、弓兵にとつて狙つても当たらないと言つ事程厄介なことはないな。」

「ほざけ、その加護を押しきらんばかりの技を持つ奴が言つ台詞じやねえよ。」

そう、ランサーの見える場所から自分に向かつてくる矢は、本来ならば軽く動くだけで避けれれるほどのものであるはずなのだ。だが矢避けの加護の効果を踏まえた上で、アーチャーの矢は確実にランサーを狙つてきていた。

自分の槍を使って防御しなければならないほどに。

剣の時は違い、今度はアーチャーが攻めランサーが守ると言つ構図へと変化した。

そして、又もや膠着状態へとなつた。

この一人が対峙する場合、このような膠着が珍しくない様に思われる。

それほど実力が拮抗しているのだろう。いや、この場合は戦闘技術がつまい具合に噛み合つたと考えるべきだろう。何故なら純粹な戦闘力で言えば、アーチャーはランサーの足元にも及ばないのであるから。

変わらぬ状況。そんな現状に知らず知らずアーチャーの心に苛立ちのようなものが積み重なっていく。

アーチャーの頭の中に、再び声が響く。

ヤつてしまえよ。相手だって本気の戦闘を望んでるんだ。  
文句は誰からもないわ。

アーチャーの矢は外したものであっても意味のないものは存在しない。

外した矢は外した矢でランサーの動きを制限する働きをしていた。

矢の強度程度では足をとると言つことはないが、それでもランサーの機動力を削ぐと言う立派な効果を發揮していた。

故にいくら機動力の高いランサーと言つても、スピードに乗れない今は矢を防ぐのに精一杯で前に出る余裕はなかつた。

今威力の高い剣<sup>や</sup>を放てば、ランサーでもまともに食らうぞ。

これは戦いだろ？相手を倒すための行動だろ？

やるんだ、さあ……さあ……！

アーチャーの放つ矢の速度が上がる。  
そして、複数の矢を同時に番<sup>つが</sup>え放つた。

アーチャーから同時に放たれた矢は各々が別の軌跡を描いてランサーに殺到する。

あるものは変わらず正面から、またあるものは横の方から。あり得ないと思っていた動きをして襲つてくる矢に、まだ相手を甘く見ていたランサーは考えを改めた。

前からだけでなく横からも襲つてくる矢に神経を尖らせ、流石に不味いかとランサーは思い始めた。

多少の傷は覚悟の上で突っ込んで槍の間合いの中・近距離の接近戦に持ち込むかと思ったとき、ランサーの背に悪寒が駆け抜けた。

それは、戦場で鍛えられた戦士の勘とでも言えればいいのだろうか。生前の戦場でも感じたことのあるそれ。

無視をすれば確実に命を落とすだらうと予感できるほどなのだ。

ランサーは本能のままその場から飛び去った。

直後、ランサーのいた場所に真上から矢が、降つて、来た。その矢は、ランサーが動かなければ確実に頭を射抜く軌跡を描いていた。

いつの間にそんな矢を放つたのか。

それは横から襲つてくる矢にランサーが目線を送つた瞬間に放たれていたのだ。

ホンの一瞬の隙をついての攻撃にも関わらず正確にランサーを捕捉していたのは、流石アーチャーのクラスと言つたところか。

当たれば確実に死んでいたであろうそれを理解したランサーは思わず絶句した。

試合の筈の戦いなのに、これではまるで死合ではないかと。

本当の戦いならランサーは嬉々として応じただろうが、今回は殺し合ではないのだ。

アーチャーは一瞬とはいえ動きの止まったランサーを認めた瞬間、己の中よつ一振りの剣を呼び出した。

それは貫くことに特化した剣であり、多少手を加え矢として使いやすくした剣。

その言葉だけがアーチャーの頭の中に響いていた。

アーチャーの手に現れた物を見たランサーは瞠目した。何故なら形が違つても、それは彼にとつてとても見覚えのある剣だつたからだ。そう、それはランサーの親友が所持していた剣。

「なつ：カラドボルグ、だと！？」

「何でテメエがそれを持つていやがる！？」  
カラドボルグ

卷之三

ランサーが驚愕の声を上げるが、アーチャーはそれに構うことなく真名解放を行い放つ。

真名を解放した剣は驚愕のあまり動くことを忘れてしまつたランサーに一直線に向かつていつた。

いくら驚いたからとて一瞬でも現状を忘れてしまった自分を叱咤し、ランサーはアーチャーの放つた剣の迎撃を行う。何とか迎え撃てたが矢の威力は凄まじく、押しきられることはなかつたが押しきつて払うことも出来なかつた。

剣を全力で防いでいると、剣越しにアーチャーの姿が確認できた。見えたアーチャーの姿にランサーは思わず眉根を寄せた。アーチャーに表情らしい表情が浮かんでなかつた為だ。

先程までも正に鉄面皮と言えるほど表情を浮かべてなかつたアーチャーだが、それでも筋肉の動きによる僅かな表情の変化は存在した。だが、今はそれが全くなく本当の、無、表情になり、生氣すら無いように感じられた。

ふと、アーチャーの口許が動いた。  
何を言つているのかとランサーは軽く目を凝らす。

### 壊れた幻想 ブローカン・ファンタズム

そうアーチャーが呟いた直後、剣から魔力が放出され始めた。危険を感じたランサーは距離を取るため剣の軌道をずらす様にして、自分は横に飛び退こうとした。

その瞬間、剣が爆発した。

既に動き始めていたためか、飛び退く動きを追う様な攻撃でランサーへの影響は軽減された。

だが、ほぼ間近で爆発が起きたのには間違ひなく、余波がランサーを襲い感覚が少し鈍る。

視覚・聴覚が上手く働かなくても気配の察知には影響はない。

直ぐ様周囲の気配を感じとり……………真後ろにそれを感じた。

咄嗟に体を捻りアーチャーから距離をとる。

：動いている最中、ランサーの首筋にピリリとした痛みが走った。動きの止まつたアーチャーから田を逸らさず首に手をやればヌルリとした感触。

アーチャーが本気で‘殺し’にかかつてていることが伺い知れる。警戒を露にするランサーだが、件のアーチャーは打つて変わって動く様子は無く、ランサーの首から流れる血をただ見つめていた。

その顔には生氣…意思が戻っていた。

なぜそう言えるかと言えば、ランサーを見るアーチャーの顔が戸惑つているように感じたからだ。

前回の戦闘ではその気配はなかつたが、もしかして戦いになると頭に血が昇るタイプだつたのか？とランサーは思つた。

冷静そうに見えて意外とそうでもないんだな、と結論付けた。

そうランサーが感じるほどアーチャーの落差がすごいものであり、今のアーチャーが気まずげな顔をしていたのだ。

アーチャーはランサーに向けて呼び出した剣の切つ先を向けた。その際、ランサーが何かを喚いているように見えたが、内容はアーチャーの耳に入らなかつた。

ただ、相手をタオス為に剣に魔力を込め、その真名を解放した。相手はナゼ力動きを止めており、放つた剣は真つ直ぐに向かう。

剣は止められ鍔迫り合い状態となる。

それも予想の範疇だ。

どんなときでも最悪の状態を想定して動いていふこの身からすれば、今はまだましな状態である。

次の攻撃に繋げることができるのだから。

ランサーが動けない今を好機と見て、アーチャーは剣に込められた

神秘を解放するための行動に移る。

魔力を燃料に剣を爆弾にするのだ。

解放され始めた魔力を感じランサーも気付いたようだが、もう完全に逃れることはできない。

ランサーが離れるより先に剣が爆発した。

至近距離で剣の爆発を受けたランサーは、その対応のため僅かとはいえアーチャーから注意をそらしてしまった。

その隙にアーチャーはランサーの背後へと素早く接近する。爆発の影響か、ランサーはまだその事に気付く様子はない。

奴をすなら今が好機。

して今度こそ決着を着けるのだ。

その為に刀を消し、再び双剣を手の中に投影する。

目の前には無防備に首筋を晒しているランサー。

この剣を振るだけでランサーはに、勝負はつく。タオス為に最も最適な行動だ。

躊躇う素振りすら見せずアーチャーはランサーの首に向かつて剣を振り下ろした。

完璧なタイミング。だが、感じたのは予想とは違ひ軽い手応えだった。

しぐつた。

そんな思考が浮かび、再度ランサーに斬りかかるために避けた方を向く。

そして、首筋から血を流すランサーを田にした。

アーチャーはその赤を見て一気に冷静さを取り戻した。

そして、先程まで自分がとつていていた行動を思い返し、軽く血の気が引いた。

自分は一体何を考えていたのか……何をしていたのか。訳がわからなくなり、困惑するしかなかつた。

それが解つたのか直後は睨むようにこちらを見ていたランサーだが、いまは多少訝しげではあるがガシガシと頭をかきため息をついた。

この戦いでそうされても仕方ない行為をしたとは言え、やはり少しムッとするものがある。

しかし、先ずは謝罪をすべきかと思い口を開いた。

「その……すまない、ランサー。」

なんと詫びべきか迷い、結局すまないと詫びの言葉だけに止まった。

「あ～、まあ本来ならあのやり取りは嬉しいとこ何だがよ……」

アーチャーの謝罪に、ランサーは複雑な表情で応じた。  
合意の戦闘で謝罪などと言つ行為をされたから仕方ないといえば仕  
方ない。

「にしても、ムカつくほど冷静そうに見えて、意外と熱い奴だった  
んだな、お前。

まさか熱くなりすぎてああなるとは思わなかつたがよ。」「  
いや、あれは……」

アーチャーはランサーの考えを否定しようとして途中で言葉を止め  
た。

否定するのは簡単だがさつきまでの自分の状態を説明してもどうな  
るわけでもないし、証拠があるわけでもない。

それなら、肯定もしないが否定もしない事で、そう思わせていた方  
が良いと思つたのだ。

アーチャーはランサーの話に乗ることを決めた。

「まあ、そんなときとてあるだろ。私は純粹な人間なのでね。」「  
「そんなことは関係ねえだろ。つーか、オメエがただの人間だつて  
ことに驚きだつつの。」

アーチャーはビリビリとおれの言葉を放ち、肩を竦めてみせた。

ランサーはアーチャーからもたらされた意外な情報に驚いていた。

何本も同じ剣を出し続けていたことといい、自分の親友の剣を出したことといい普通の人間ができることじやないと漠然と思っていたからだ。

それが本人の口から否定されたのだ。言い分を信じるなら、ではあるが。

「つと、何時までも駄弁っててもいけねえ。仕切り直しとにかくせざ。さつきみたいなのはもう勘弁だがな。」

「心配せずとも、もうあんな風にならんよ。」

そして、ランサーはアーチャーが再び刀を取り出す前に向かっていった。

ランサーは高速の突きを繰り出す。

それをアーチャーが双剣で迎え撃つ。

今までと変わらぬ構図だ。

アーチャーは先程のよつにならないために、よりしつかりと己の意思を確立させる。

あのように自分の意思でないものに支配されるような状態など我慢ならないのだ。

生前も様々な理不尽な状況に陥ったときもあった。

だが、何れも己の意思で決めたことであり、誰かの言葉で最終的な決定をしたことなどなかった。

だと呑のに、己の世界において取り返しもつかない事をしようとしました。

そんな自分が許せなかつた。

だからアーチャーはいい慣れた言葉を心の内で呴く。自分は剣だと。自己催眠でもあるそれを呑う毎に、己と言つものを確りと取り戻していく。

…もう、あの声は聞こえない。

アーチャーは変わらず巧みに隙を作り相手の攻撃を誘導する。

ランサーは既に気付いているのだが、それでも隙を見つけて攻撃しないようにはできない。

彼ほどの戦闘者ともなれば、隙を見つけてしまうと体が動くのだ。だからこそ、このアーチャーの戦闘法は格上の存在との戦いにおいて有効だつたのだ。

ランサーは厭ぎ払いの攻撃法をすて、突きのみの攻撃に徹した。それは、突きこそが最も早く攻撃できる方法であり、槍の真髓であるからだ。

アーチャーはそれを剣の面で防ぐよつとはせず、添えるように切つ先を剃らすことに専念する。

腕力が違うためそうでもしなければ完全に力負けしてしまつからだ。

避けきれない攻撃がアーチャーの肌の表面を滑る。

突くだけになつたランサーの攻撃は、本人の素早さも加わり反撃の余地がなかつた。

だが、いくら攻撃してもアーチャーに決定打は「える」ことができな  
いでいた。

ランサーはつづく規定外な奴だと舌を巻いた。

「はつはあー。全く、この俺の最速とも言える突きに、弓兵のお前  
が剣で凌ぐなんざなあ。

本当に不思議な奴だな。」

「何度も言わせないで貰おうか。いくら後方で弓を引くのが主体と  
は言えど、前衛も出来んようではここにはおらん。  
例え相手が君のような最高の騎士であろうとな。」

ランサーは騎士と書いつ響きに、ウフっとでも言いたげな表情をした。  
この聖杯戦争で言えば確かに、槍の騎士、と呼ばれるクラスだが、  
かつては騎士と呼ばれるような上等な暮らしなどしていなかつた。  
騎士と言えばやはり上品なイメージがあり、それと自分が結び付か  
ないと呟つものも大きい。

アーチャーの言葉に辟易とすると同時に、それでこそアーチャーと  
よく知らないながらも安堵が湧くランサー。

先程のような何の感情も浮かばないアーチャーなど、気味悪いにも  
程があつた。

例えるならば鋼の様な…剣の様な、全てを無感情に切り捨ててしま  
いそうな雰囲気。

そして、そんな状態でもらしいと言つ考えすら過つてしまつアーチ  
ャーに、ランサーの背に冷たいものが走つていた。

アーチャーも困惑こそあつたがあの状態に慣れているがゆえの困惑  
と見てとれたのだ。

あれが、アーチャーにとつて不思議にも思わない状態と言つなれば、一体どんな人生を送つていたと言うのか…

暗くなつてしまいそうな思考を自分らしくないと振り切つた。  
今はそれよりも戦闘が優先だ。

気になるのなら戦闘後にでも聞けばいい」と思考の隅に追いやる。

その間も攻撃の手は休めること無く槍を操り続ける。  
槍は足元を狙つたかと思えば次の瞬間顔前へと向かつ。

アーチャーはそれを時に剣で、時に体を動かして攻撃をかわす。

「そうだな、それだけしかできな」ようじや、英雄など呼ばれね  
えか。」

「……私は君達のように英雄などと持て囃される様な存在ではない。

」

アーチャーは笑みを浮かべながら言つ。

それは陰鬱な自嘲の笑み。

アーチャーの言葉は本音である。

自分のようなものが英雄など呼ばれてはいけないと本気で思つているのだ。

自分が英雄と呼ばれては本物の英雄を汚してしまつとも。

だからこそのこの言葉。

だが、どんな理由であれ英雄と呼ばれたからこそこうやって存在していると考え、それに誇りを抱いているランサーの琴線に触れるに

は十分だつた。

「あ、あ、何言つてやがる。なら、何でテメはここにこやがる。  
英雄と呼ばれたからだろうが。

テメには英雄の誇りつてもんはねえのか。」

「誇りか……そんな無駄なもの、この身には存在しない。」

「無駄、だと？」

誇りを無駄と言い切つたアーチャーに、ランサーの目が細まる。  
ランサーは静かに、だがハツキリと怒りを抱いていた。  
誇りを大事にしているランサーにとって、己を否定されたにも等しい。

アーチャーもそんなランサーに気付いてはいたが、言葉を撤回する  
ような様子はなかった。

それどころか、決定的な一言をランサーに向かつていい放つた。

「そうだ。誇りなどと書つものは、そういうの狗にでも喰わせてしま  
え。」

ランサーの体から殺氣と言つこは生温いほどどの物が滲み出す。  
アーチャーがランサーにとっての禁句を口にしたからだ。

クランの猛犬の二つの名を持つランサーにとって、犬を侮辱する言葉  
はすべて禁句なのだ。

「Jの俺を知つて尚その事を口にするとは、覚悟は出来てんだろうな。アーチャー。」

ランサーは恐ろしいほど穢やかな声でアーチャーに語りかけた。だが、そこに潜む怒氣は隠しきれるよつなものではなかつた。

アーチャーはそれを涼しい顔で受け流していた。  
それが、ますますランサーの怒りに火をつけた。

ランサーは一気に距離を取り、獣のように地面に這いつぶまるよつな体勢になつた。

それはランサーが本気の一撃を放つ氣であると叫び、「とにかく他ならない。

ランサーの槍が暴力的なまでに魔力を貪り出す。

「いいだろう。

アーチャー、その心臓……貰い受けん……」

一步目から最高スピードでランサーは駆け出した。

始めにとつた距離の半分に到達したとき、ランサーは飛び上がりそ  
の身を限界までそらした。

それは、ランサーの槍の本来の使い方。

よく使用するのはランサーがより使いやすいよつて編み出した方法。  
ランサーの槍は本当は投擲で使用する物なのだ。

ランサーは正真正銘、全力で槍を投げ放つ。

「受けやがれ。」

「**突き穿つ死翔の槍**」<sup>ガイ・ボルグ</sup>

本来の方法によって放たれた槍は、死の予感を振り撒きながらアーチャーへと向かった。

ランサーは勝利を確信する。

アーチャーがどんな隠し技を持とうが、絶対に逃れられないという自信を持つがゆえに。

アーチャーは自分に迫る槍を見つめ、この槍を防ぐに相応しい宝具の投影を行う。選んだのは剣の丘に唯一存在する純正な盾であり、投擲武器に対し最強の守りを持つ盾。

そして、かつて同じ技を見事に防ぎきった宝具である。

ランサーと同じく、絶対の自信を持ってそれを出す。何故なら、この身に敗北はただ一つだけなのだから。

「**投影開始**」<sup>トレース・オン</sup>

「**熾天覆づ七つの円環**」<sup>ロー・アイアス</sup>

アーチャーの前に七枚のピンク色の花弁が咲き開く。それは一枚一枚が城壁と同じ強度を誇る盾。

ランサーが放った槍。アーチャーが展開した盾。  
二つの宝具がぶつかり合った。

## I-十章 紅青の交わり（後書き）

今回は槍口のバトルのみです。

いやあ、二人のやり取りは武器でも言葉でも良いですねえ。

二人さえいればもう他にはいりません！！

## 一一一章 元下山事件へ包囲（前編）

咳が……咳が止まらない……

熱は下がったのに、咳ばっかりが」の一週間出続けるんですよ。

しかも眠る前が一番ひどい……

お陰で毎日三時間程度の睡眠時間ですよ、奥さん。（誰に向かって）

そんな中で書いた話ですが、どうも……

## 一一一章 月下に響く咆哮

深山と新都を結ぶ橋の脇に存在する公園に、局地的な台風が吹き荒れる。

それは、英靈の切り札である宝具のぶつかり合いによつて発生している風。

ランサーの槍とアーチャーの盾。その衝突点が中心である。

衝突によつて宝具から魔力が迸り、その迸りが空氣に影響し震わせていたのだ。

アーチャーとランサーの肌を空氣の震えが叩く。

ランサーは目の前で展開されている光景に目を疑つた。

本来の力を出した槍の前ではどんなものだらうと貫いて見せると自負した槍が止められているのだ。

しかも、「アーチャー」が呼び出した「盾」で。

驚くなという方が無理である。

アーチャーはかつて凌ぎきつたと言つ実績はあれど、油断する」と無く盾に力を込める。

以前は魔力の豊富なキャスターをマスターにしていたが、供給される魔力は最低限に近かつた。

今回は潤沢に魔力は供給されるがマスターが「人」の為限界はある。

総合的に見れば自分の状態はあまり変わらないと見た方がいいと分析していた。

前は本当にギリギリで競り勝つた以上、気を緩めれば負けるのは自分であることに間違はない。

故に、油断は存在しない。

## バリィイインン

鏑の入っていた花弁の一枚がとうとう甲高い音を響かせて砕け散つた。

それを皮切りに一枚三枚と次々に花弁が砕け散る。

アーチャーはチッと舌打ちした。

解つてはいたが、こうも易々と破られそうになるのはいい気分ではない。

槍の勢いに押されないよう、より一層腕に力を込める。だが、槍の勢いは徐々に衰えていつている様子を見せてはいるが、アイアスに入る亀裂は止まらない。

四枚目が砕れ飛ぶ。

ランサーは止められたことに驚いていたが、アーチャーの盾を貫かんとする己の槍を認め僅かに余裕を取り戻す。

「俺の槍を受け止められるほどの盾を持つてるなんざ驚いたが、それも時間の問題みてえだな。」

「ぐつ…それは、どうかな。」

まだ破られると、決まった訳では、ない。」

ランサーの言葉に、全力を込めているために途切れ途切れに反論するアーチャー。

ランサーは虚勢とどり、鼻で一笑にふした。

五枚目の花弁が弾け飛ぶ。

押し合つて片方に傾くことのない魔力は一点に留まり高まっていく。そして、至近距離にいるアーチャーの肌を高濃度の魔力を含む風がなぜる。

盾を支えるアーチャーの右手が負荷に耐えかねたのか血が吹き出した。

いや、右手だけではなく、体の何カ所にも裂傷が見られた。魔力のこもった風。それが一時的に刃となりアーチャーを切り裂いていたのだ。

六枚目の花弁が千切れ飛んだ。

魔力の刃は衝突点より一步距離を置いているランサーまでは届かなかつた。

そして、もう一人の当事者であるはずのランサーは何もせずにただ立っていた。

正確にいうのならば何もしないのではなくて何も出来ないのだが。槍の真名を解放し放つた以上、槍が心臓を貫くか途中で推進力が無くなるかするまではランサーとて手を出せないからだ。

ランサーは自分が知る限り槍が途中で落とされる事など知らなかっため、今回の結果とて疑わずにいた。

それは、現状から導き出される答えでもあった。

しかし、最後の一枚。鱗が入つてもそれが破られる様子は一向にな

い。

当然だ。アイアスの最後の一枚、それは他の六枚よりも高い防御力を有してるのだから。

アーチャーは残る魔力を全て盾に注ぎ込む。

今まで一ヶ所に留まっていた魔力が揺れた。均衡が崩れる……一定の方向性を保つていた今までの風とは違い、乱気流が吹き荒れそれによって土埃が立ち視界を遮る。

パアアアン

乾いた破裂音が辺りに響いた。

これはアーチャーの盾が破れた音なのか、それとも自分の槍が弾かれた音なのか。

遮られた視界ではその判別はつかず、ランサーは大人しく視界が晴れるのを待った。

そして……

「オイオイ、まじかよ。」

土埃の晴れたそこには槍が貫けなかつたと言つ意味で無傷であるアーチャーと、その前に転がる己の槍と言う光景が広がつていた。ランサーの槍はアーチャーを貫くことが出来なかつた。

だが、アーチャーも無事と言つわけではない。魔力を含む風による裂傷もそうだが、盾を支えていた右手がひどかつた。

以前と違い千切れかける様な事はなかつたが、それでも満遍なく傷

がついていた。

ランサーは一息ついて戦闘の気配を収めた。

「俺の奥の手を防ぎきったんだ、てめえの勝ちだ。」

「ほら、そう簡単に決めていいのかね？」

見たところまだまだやれそうだろうに。」

「はつ、白々しいんだよテメエは。だから頭が回るやつはいけすかねえんだ。」

ランサーは氣付いたのだ。この流れがアーチャーによつて仕組まれていたことに。

考えれば会話の最後の方では、アーチャーは自分の逆鱗に触れるようなことばかり口していた。

それは自分が怒りに身を任せた宝具を使いつぶしに仕向ける為だったのだろうと今ならわかる。

そして、自分はまんまとそれに乗つてしまつたと言つわけだ。

その上で宝具を防ぎきられては敗けを認めるしかない。

「簡単に挑発に乗つちまつた俺も俺だけじよ、テメエもよくやるくな。

まさか防ぎきられることは思わなかつたぜ。こつ何度も防がれちゃ、必殺の看板は下ろすしかねえな。」

「そう落ち込むこともあるまい。今回はたまたま防御に回す魔力量があつただけだ。

証拠に、今の私の魔力はほぼ底をついている。」

「だれが落ち込むかよ。

その魔力事態も計算してたんだろ。普通に話してもマジで勘に障るな。」

和やかに、とは言わないが比較的ましに会話をする一人の耳に、不思議な音が届いた。

ズルズル  
じゅり

二人から見て横からするその音は、ゆっくりと確実に一人の方に向いていた。

「あ？ なんだ、ここの音は。」

「…………。」

ランサーは不思議そうに首をかしげただけだが、アーチャーは嫌な予感がした。

物凄く、嫌な予感が。

ダラダラと冷や汗が流れるのが止まらない。

ランサーとの戦闘の間ですら感じてなかつた死の恐怖がアーチャーを襲っていた。

こんな風になる原因は一つしかあり得ない。

ランサーがそんなアーチャーに疑問を感じ再び声をかけようとしたとき、別の声が聞こえた。

「アーチャー……決着ついたみたいね。」

酷く穢やかで優しい声。だが、それはアーチャーにとって恐怖以外何物でもない。

声が聞こえたとたん、ビクリと肩を跳ねあげた。

ランサーは特に気にすること無く声のする方へ顔を向けた。いつもやつて声をかけられたことは、あちらも戦闘が終わつたと嘆つことだ。

聞こえた声が自分のマスターでないと嘆つことは、アッチも負けたのかと何となく思った。

きっと眞面目<sup>さだめぐま</sup>なバゼットは落ち込んでるんだろうなど、殊更朗らかに声をかけることにした。

「よつ……そつちも決着がつ……た……

しかし、完全にそつちを向いたランサーの言葉は途中で途切れた。理由は彼女達の姿にあった。

ランサーが言葉を途切れさせたことで、アーチャーの嫌な予感はますます募るばかりだった。

「あ……お前等、そりやびついたんだ。」

「どうした、ですって？…………ふふ、ふふふふフフフフフ。」

問いかけに、凛は不気味な笑いを上げた。

ランサーは思わず体を引いてしまった。

英靈であるランサーをしてそうさせる何かが、笑い続ける凛にはあった。

アーチャーはまだそちらを向いてはいるが、ランサーの微妙に引き攣っている表情が逃げたいと言つ感情を沸き立たせた。  
だが、逃げることは許されない。

この場から逃げるのは容易いが、彼女が自分のマスターである以上事態を悪化させるだけだからだ。

「フフフフ…………アーチャー、何時までこっちに向かないつもりかしら？」

とうとう、凛がアーチャーに声をかけた。

向きたくない。向きたくはないが、向かなければ更に酷いことが待ち受けているだろう。

例えば、令呪とか令呪とか令呪とか…………

アーチャーはギギッと鋸びたブリキのような動きでランサーの見て  
いる方……凛がいる方を向いた。  
ゆっくりゆっくりと視界が回り、アーチャーの視線は遂に凛を捉えた。そして、凛の姿を目にする。

凛の綺麗に纏まっていたはずの髪はグシャグシャになり絡まり放題

になっていた。

服も破れてはいないものの土汚れがつき、着方も崩れている。土汚れに関しては服だけでなく顔や髪にもついている。

そしてそれは無言で隣に佇むバゼットも同様だ。  
つまりは二人ともボロボロだった。

凛はそれはそれは綺麗な笑顔を浮かべていた。  
けれど、纏う雰囲気は物凄く黒かつた。

「アーチャー、私達も近くで戦っていた事は解っていたわよね？」

「あ、ああ。

「勿論、貴方達の戦いに巻き込まれないように距離はとつていたわ。  
けど、公園内である以上距離も限られるわよね。」

「…………ああ。」

「それにしても流石サー、ヴァントよね。

英靈同士のぶつかり合いなんてそういう見学できるものじゃないけど、今回の宝具の衝突は本当に英雄と言つことを感じたわ。」

突然、讃めるようなことを言い出す凛。

本音ではあっても本当に言つたいことではないだろう事は、変わらぬ雰囲気から読み取れる。

「ホントに、すげー衝突だつたわ。簡単に飛ばされるぐらー……」

凛は徐おもむりに左手を上げた。

その手は親指と人差し指のみをピンと立て、残りの指を握り込んだ  
ような状態だった。

そして……

「もう一オーナーたちのことも考えなさいってのよ……このアホサー、  
アント…………」

凛からガンドがマシンガンのよう放たれた。

アーチャーは理不尽だと反論する余裕もなくそれを食いつ。

そして凛はアーチャーに接近し、己が使える体術で的確にアーチャーの急所を抉つた。

魔力が録に残つていらないアーチャーは体をガードできる筈もない。  
普通にダメージを食らうアーチャーは翳される痛みに悶絶する。

後に凛は語った。あの時の動きは人生の中で最高のものだったと。

凛はスッキリしたのか汗をぬぐうじぐさをして、今度は本当に爽やかな笑顔を浮かべている。

足元でピクピクと痙攣しているアーチャーが酷くミスマッチである。

ランサーはそんな凛を見て、‘アカイアクマ’と囁く単語が脳裏をよぎつた。

バゼットも一言ぐらい自分のサーヴァントに文句を言おうと思つていたが、凛の行動によつてその勢いがくじかれ流石にあはは出来ないと言だけにした。

「…ランサー。」

「…なんだ。」

「…次は注意してください。」

「……ああ、気を付けるわ。」

ランサー主従はアーチャーに憐憫の視線を向けつつも手を出すことはしない。

……触らぬ神りんに祟り（ガンダ）なし

「それで、本当に敗けでいいの？ランサー。」

何事もなかつたかのように会話をしだす凛。  
いや、事実八つ当たりと言える先程の事は何でもないことなのだろう。凛にとつて。

急に振られた会話にむきのアーチャーの様に少し肩を揺らしながらもどうにかランサーは返答した。

「お、おうよ。俺の宝具も完全に防がれちまたしな。  
‘今回’は俺の敗けだ。それでいいかバゼット？  
‘貴方がそう判断したのなら従いましょう。此方は決着がつきませんでしたし。」

今回といつ言葉を強調して叫ぶ。

バゼットはランサーに全幅の信頼を置いていたため反論することをせず受け入れた。

勿論、疑問や違和があればキチンと尋ねる。

「つかなかつたのか？」

「ええ、誰かさん達のせいでね。」

答えたのは凛。

気まずげな表情をするが、凛はもう氣にしてなかつたようだ。アーチャーをやつたことでストレスが発散できたのだらう。

彼女達の勝負は宝具のぶつかりで発生した風によつて中断されたのだ。  
それほどすごい風だつたのだ。

「それで、このあと何がやることはあるかしら？  
もしなければ協力して欲しいことがあるんだけど。」

凛の言葉に一人は何を言つたのかすぐにわかつた。  
自分達も当事者なのだから。

「あの、影、の事ですね。」  
「ええ。もしよかつたらパトロールに協力して貰えないかしら。  
そして、見つけたら教えて欲しいの。」

「つかしう」と「ランサー」達に尋ねる。

ランサーは「ヤリと好戦的な笑みを浮かべる。

「つまりは、まだやう介ひ機会はあるってことだな。喜び」とじゅや  
ねえんだろうが。

いいぜ、協力してやるよ。」

「うふふ、ありがと。」

「やれやれ、君も」苦労なことだな。懲々厄介」とに血の首を突つ  
込みにいくとは。

「どうか、厄介ごとを喜ぶのはよしたまえ。余計なことがついてき  
かねん。」

ここに来て漸くアーチャーが復活した。

ここまでかかるほどダメージを与えるとは、未恐ろしいとしかいえ  
ない。

「ああ、いいだろ？ それに、そうなれば纏めて切り捨てればいいだ  
けの事だ。」

「はあ、全く君と言う奴は自信家なのか、それともただの考えなし  
なのか……ああ、楽天家だったな。」

「ただの頭でっかちな野郎よりましだろ。考えるだけ考えて動けな  
いでいるよりかな。」

「ふむ、考えなしに動いて事態を悪化させる様な奴よりもましだと  
は思うがね。」

ランサーとアーチャーは舌戦を繰り広げながら睨み合ひ。とことん相性が悪いらしい。

そんな一人を無視し、凛はあることをバザットに聞いた。

「そう言えば、あんた達の拠点ってどこ？もしかしたら此方から連絡したいことができるかもしないし、決着はついたんだからそのくらいは教えて貰つても良いでしょ？」

「拠点ですか？それは協会から教えられたある屋敷で今は生活していますが。」

そんな屋敷が有ったかしら、と心の中で疑問に思いつつ詳しい情報を聞く。

そうして、頭を抱えた。聞いた屋敷は凛も知っているのだが、そこは屋敷と言つよりも廃墟と言う方が正確な建物なのだ。

「貴方達、よくそんなところで生活しているわね。

ガスも電気も水道も通っていないのに……食事は弁当を貰えぱいいんでしようけど。」

「そこまで不便ではありませんよ？食事は弁当ではなくて固形食料や液体食料が主ですが。」

はあ？と凛は大きな声をあげた。

アーチャーも聞こえていたらしくランサーから視線をはずし、信じられないといった表情でバザットを見つめている。

「ええっと、何かおかしいことを言つたでしょ？……？」

「……因みに、冬木に来てからの食事全部と言ひ切じやないわよね。」

「え？いや、そりですが、何か……」

恐る恐る聞いた凛の問いに、バゼットはアッサリと肯定した。

それに、アーチャーは元より士郎に食事のなんたるかを呟き込まれた凛もバゼットの言葉を聞いて絶句した。

ランサーは現代の食事事情はよく知らないながらも、招待された時の食事を考えてバゼットの食事はちょっと違うと言つことは解つていたため、アーチャー達の驚愕につんづんと頷いて同意していた。

「君は、食事と言つものと一緒になんだと思つていいのかね。」

「それは体を動かすためのエネルギー補給なのではないのですか？」

「確かにそれも一つだが、ただそれだけでは今のような食にはなんと思わないかね？」

アーチャーはバゼットの食に対する認識を変えようと説得のようなもの試みることにした。

何故なら、食事と言つものをただのエネルギー補給とされるのに我慢なら無いからだ。

アーチャーはビームでいつても、ヒリヤシロウ、だった。

「確かに食事は基本体に栄養を摂取するものだ。だが、同時に心の栄養を補給するものであるとも私は考えている。」

「心の栄養……ですか。」

アーチャーの言葉に理解できないと困ったような表情をするバゼット。

バゼットにて食事とは体を動かす為に立るだけであり、さっと取れるに越したことはないものだ。

だから聖杯戦争の期間中も携帯食料を重宝している。

「しかし、食事に時間をとつてしまえば、やるべき事がやれなくなる可能性があるのでないですか？」

「だが、キッチンとした食事をとらなければ、いざとこゝに動きなくなるわ。

そういう意味でも君の食の取り方は危険極まりない。栄養がちゃんととれていない可能性が高いからな。」

「もうかもしだせんが……」

ここまで来てもアーチャーの言葉に反論しようとするバゼット。そんな彼女に、自分も大概だと直観はしてこだが、彼女もかなり頭が堅いなとい違つことを考えた。

続けてアーチャーが何か言おうとしたが、それは凛によつて遮られた。

「バゼット、貴方士郎の家にお世話をなつたことがあります。」

「は、あのセイバーとバーサーカーのマスターの家にですか？」

しかし、家族は別として他のマスターがひとつ屋根のしたと言つて

は……」

「あら、貴方はもう敗退したじゃない。  
参加者ではあってももう聖杯を得られないマスターなら、なんの問題もないと思うのだけれど?」

そう、もう敗けを宣言したランサー達にはそう言つた面での問題はもう存在しない。

だが、生活する上でなんの問題もないのに、流石に人の家にお世話になると言つるのは気が引けるようだ。

「それに、そこについてくれた方が連絡もしやすいもの。そうしてくれた方が助かるわ。」

「流石に突然そんなことを言つても断られると思つのですが。」

最後の足掻きとして相手が受け入れないだらつとバゼットは凛に告げた。

バゼットの視線は助けを乞うようにランサーに向かっているが、ランサーはアーチャーと同様に沈黙を守っている。

どうやら、これをマスター同士の交渉の一環と捉えたようだ。  
そうでなくとも、バゼットの食事をどうにかしようとしてくれているアーチャー達に口を挟むつもりは毛頭ないのだが。

バゼットの言葉に、凛は我が意を得たりとばかりにニンマリと笑顔を向けた。

「あら、それは問題ないわ。だって士郎達はお人好しなんですもの。切嗣さんに至つてはフェミニストを公言しているから、女性と言ひただけで無下にされることはない筈よ。

寧ろ喜ぶかも知れないわね。美人が下宿に来たってね。そうそう、部屋に関しても問題ないわ。何たつて民宿並みの広さと部屋数があるんですもの。別棟も存在するから自分の魔術を秘匿したいのならそっちをお願いしてもいいんじゃない。

それで、まだ反論は有るかしら？」

怒濤の理詰めである。

バゼットは田を白黒させていた。

だが、魔術師として残している冷静な部分で、これはもう決定事項なんだな、と觀念していた。

それじゃ行きましょうか、と凛は歩き始めた。

ちゃんと衛富家に向かうか確かめるべく、分かれ道までは一緒に行動するつもりのようだ。

バゼットのよくな性格の人間が一度決めたことを反故にするとは思わないが、念のためと言つ奴である。

後ろから大人しくついていくサーヴァント二人は前を歩くマスター達を目に入れながら、辺りを軽く警戒しつつ歩いていた。

「こしてもよお……おつかねえ嬢ちゃんだな、テメエのマスターは。

」

「君のマスターも性格はともかく、色々と苦労しちゃうなマスターだな。」

わがの一連のやり取りを思いだし、ポツリとランサーが呟いた。

「まあ、ああいつ行き過ぎた合理主義つて言つのか？それがなけりやほんといい女なんだけどよ。」「

「やれやれ、君の頭には戦闘以外にはそんな考えしかないのかね。」「

「おうともよ。坊主の家にもいい女はいるが、あいつ等は範疇外だしな。」

せめてやりあえればな。」「

「なら頼んでみたらどうかね。セイバーなりば喜んで相手すると思ひ。」「

「それもやうだな。なら楽しみが増えるつてもんよ。」「

そして、彼等は分かれ道に到着した。

「じゃあ、ちやんと土郎の家ここへのよ。」「

「凛の言つ通りにしておこた方が賢明だぞ。」「

「わかつています。」「

「ちやんと俺がつれていくから問題ねえ。」「

やつして、彼等は別れた。

一つの戦いが行われた長い夜はこづじて終わりを迎えた。

学校の校庭

ライダー vs セイバー

勝者：セイバー

橋の脇の公園

ランサー vs アーチャー

勝者：アーチャー

残り二組

## 一一一章 月下に響く泡時（後書き）

今回はランサーとアーチャーの対決の完全決着の話と、その後のバゼット達の拠点を決める話でした。

しかし、これで残るはただ一組だけ。

あと一度戦えば勝者が決まります。

アーチャー対セイバー。ある意味では因縁の対決とも言えますね。

そして、バゼットの食事事情をどうにかしようとする凛達。

衛宮家にいけば確実に認識が変わること間違いないし。  
がんばってくれ、士郎。

## 一一一章 一つの輝き

夜半過ぎの遠坂邸の屋根の上、いつものようにアーチャーは見張りにたつていた。

アーチャーの目線は町を向いているが、思考は今日行なった戦闘の事に向いていた。

ランサーと交戦している時に突然聞こえてきた声。

完全に決着をつけるつもりで挑んだ此度の戦闘は、一人の戦士として高揚する戦いでもあった。

幾度も刃を交えながら着けることの出来なかつた決着。それが、着けることができる、と。

だが、途中で聞こえてきたその声に自分は搔き乱されてしまった。死闘となり得る筈の無い戦いとなる筈だったと言うのに、あれにより一歩間違えればただの殺し合いになつっていたかもしないのだ。あの声は確実に自分の過去の傷……いや、未だ持ち続けている傷を確実に抉る言動をしていた。

完全に消し去ることは出来ないとはいへ、折り合いをつけたつもりだつた感情<sup>モ</sup>。

声に引き摺られるようにその感情があふれでていった。

あの時はまだ否定することに精一杯で深く考えなかつたが、今思えばあれば真実自分の中から聞こえてきたようにも思えた。ならば、あれば今も自分が考えていた事なのだろうか。否、そんな筈ないと自分に言い聞かせる。

答えは得たし、自分ではないものにハツ当たり（そう、これはもうハツ当たりでしかない）をしても今以上に虚しい思いに満たされるだけだと解っている。

衛富士郎であつても成り立ちからして違う奴は、言い様の無い感情の波を立たせることはあつても以前のような憎悪を感じるまではなくなつたのだから。

そう再認識する事で例の声が聞こえなくなり、押さえ込むのに成功したと考えた。

だが、甘かった。

ランサーとの交戦で膠着状態に陥つたとき、自分でやら氣付かなかつた僅かな苛立ち。

それを取つ掛かりとして再びあの声は聞こえてきた。

しかも、今度はその時の戦闘に対する感情を煽るよつこ、少しづつ心に馴染んでいった。

確かに、あの時はランサーを倒すことに集中していた。

だがあくまでも、倒す、であつて、殺す、ではなかつた。

それを、どういう訳が同一視するようになり、躊躇わざ全力で殺しにかかりっていた。

微塵の疑問も抱くことなく。

首を狙つていることに気付いたであろう瞬間動いたランサーも、完全に避けることは出来ていなかつた。

もし、ランサーでなければあの瞬間確実に首を飛ばしていたに違いない。

最速の英靈だつたからこそ、首の皮一枚ですんだのだ。

そして、ランサーの首から流れ落ちる赤。それを見てやつと自分を取り戻した。

操られていたわけではない。自分を完全に失っていたわけでもない。何かに突き動かされるように動いていたのは事実だが、その事もまた事実だ。

それでも、あれは自分を取り戻したと言った表現が正しいと思つのだ。

自分でもやう捉えるほどおかしかつたことが解るだけに……

それともう一つ、あの声が聞こえたときある既視感を覚えた。すぐにそれに構えるような状態ではなくなつたため考えることは出来なかつたが、それは確りと覚えている。

感じた既視感。冷静になつた今考えれば一目瞭然だった。凛と共に柳洞寺からの帰路、バーサーカーとランサーの激突の時。その時に感じたものと一緒にだつたのだ。

なぜ、既視感を感じたのか。

普通に考えるならば同じものだからと思うのが当然だ。

それなら、ランサーを殺そうとした行動は、影、と同じ気配がするものが影響したのではないかと推測することも可能だ。

しかし、そこで新たな疑問が浮かび上がつてくる。

なぜアーチャーの身の内に、影、と同じ気配がする物が存在するのか。

「…………いや、もう知らない振りをするのはよそ。  
とつぐに解っていたことではないか…………あが「アンリ・マコ  
『この世全ての悪』」だと叫びたとせ。」

そうなのだ。アーチャーはこの世界で初めて、影の気配を感じたときその正体が解っていたのだ。

それを否定していたのは認めたくなかつたからだ。

この世界にいない筈の「アンリ・マコ『この世全ての悪』」がいると言つことを。

それによつて、この聖杯戦争が壊れてしまつかもしれないと言つことを。

だが、もつ認めないわけにはいかない。  
生前から幾度となく感じてきた奴の気配を、アーチャーが間違える筈もないのだ。

あれは間違いなく「アンリ・マコ『この世全ての悪』」だと断言できた。

そこまで解つても何故奴の気配が自分の中から感じるのが、それだけはアーチャーにも解らなかつた。

「ランサーとバーサーカーの衝突時に見た映像が関係ありそうだが……磨耗した身にはもう思い出すことなど叶わんか。」

この世界で初めてアレを目撃したとき、ノイズ混じりだが脳裏に走つた紺い映像。

きっとそれが手掛かりであるだろう事は解っていても、殆どの記憶と記録が消え去った身に思い出せるはずもなく力無く自嘲の笑みを浮かべるしかできない。

一つだけわかるのはアレがエミヤシロウが産まれた瞬間の映像だろうと言つことだけだ。

アレほどまでに紺い世界は、それ以外にあり得ない。

「結局は奴から動くのを待つしかないと言つことか。」

「アンリ・マコ『この世全ての悪』」ならば拠点となる場所は限定される。

だが、今それを告げるわけにはいかない。  
何故しつているかと言つ事になるし、何より自分だけでは勝てるかわからない。相手の今の情報が無さすぎる。

あの様に街中を彷徨いている以上大した力がないと思われる今が叩き時だと解つてているだけに歯痒い気持ちが抑えきれない。  
けれど、確実に奴を消すつもりなら今は耐えるときなのだ。

「正義の味方など愚かなものでしかない」というに、まだそんな感情が残つていたとはな……」

アーチャーは全てを救いたい等と言つ考えはとつて捨て去つてている。  
それが幻想でしかないと言つことを理解したがゆえに。  
一を切り捨て九を救う。

それがアーチャーである英靈エミヤシロウの戦い方であり、戻るつもりは無いしそんな資格も無いと考えていた。

でも、‘救いたい’と言つ感情まで無くなつたわけではない。  
いや、思い出せたのだ。

ふと、またアーチャーを脱力感が襲つた。  
全てがなくなつていくような感覚。それを目をきつく瞑り、胸を強く押さえながら耐える。

暫くの後、漸く発作が収まつた。

今回の発作は前回よりも長く続いていたようにアーチャーは感じた。

その事で自分に残された時間は少ないと悟る。

だが、聖杯戦争が終わるまで……奴を消し、この世界に不安要素が無くなるまでは意地でも現界しようとしたアーチャーは決意を固めた。

この世界の優しさについて忘れそつになるが自分にはもう座は存在しておらず、真実エミヤシロウとして最後の個体なのだ。

消える前にまた世界を救うのも悪くはない、とアーチャーは思つ。

第四次聖杯戦争で死ぬ筈だつた者達。

そしてそのサーヴァント。

全てに会つた訳ではないが、現代の肉体を得て人として生活している。

大半が孤独の中にいた第五次聖杯戦争のマスター達。

ここでは孤独など感じる事すらなく、全てが笑顔で満たされている。  
現界して今まで、欠片も悲しい表情をした時を見てもいない。

そんな世界であの地獄を、死だけの世界を再現せらるわけにはいかない。

アーチャーは自分自身に誓う。

最悪、この身に変えても守りきらう、と。

最期ぐらいは守護者と言つ肩書きに相応しいこと　自分がしたいと思えるようなことを、と。

星と少しだけ欠けた月、黒から青へのグラデーションを表している空だけが静かにそんなアーチャーを見守っていた。  
しかし、その輝きはアーチャーの決意を哀しんでいるかのような、憐れんでいるかのような印象を思わせたのだった。

次の日の昼、取り決め通りに凛達三人とそのサーヴァントは集まっていた。

だが、集まる」ことを決めてまだ初日。

特に話し合つこともなく、和気藹々と食事をとつていた。

皆の食事が終わった頃、あることを聞くために凛が士郎へと話しかけた。

「そうだ、士郎。」

「ん、何だ……って、もしかしなくてもバゼットさんのことか？」  
「ええ、そうよ。その様子じゃ、ちゃんと行ったみたいね。」

話しかけられた土郎はすべてを語らずとも理解したようで、的確に凛の聞きたかった答えを返してきた。

「ああ、でも流石に驚いたぞ。

まさかとは思つたけど、戦いに来たのかつて勘違いしちゃつたしな。

「何言つてんのよ、土郎。あの一人が襲撃紛いなことすると思ひつつ、それに、あいつ等は私達が倒したのよ。」

「ですが、リン。その事を知らないシロウがそう思つても仕方ないかと。」

事実、私も恥ずかしながら剣を向けてしましたし。」

凛は敗退したのだから大丈夫だと高をくくつていたが、それは相手がその事を知つていたらという前提の上でなりたつことだ。その前提を知らなかつた以上、そう勘違いしたところで責めることなどできぬ。

その事を凛はすっかり忘れていたのだ。ウツカリで。

凛は一瞬間抜けな顔をしたあと、フイッと顔をそらした。  
きっとそうなのだろうなと解つていた土郎とセイバーは、特に何も言つことはなかつた。

なんせ長い付き合いなのだ。

そして、そんな凛の反応にアーチャーは深い深いため息をついた。

昨夜の自信満々の発言に対し」の結果かね、とアーチャーの視線が言っていた。

勿論実際に口にはしない。昨夜の悪夢の一の舞になる気はないからだ。

ただ、凛が居たまれなくなるように見詰めるのみ。

良心（そんなものがあるかどうかと言つ質問は受け付けない）を刺激するように。

因みに、バゼットがどうやって敵意がない事を示したかと言えば、敗退すれば色が抜ける決まりの令呪を見せたのだ。

初めはそれに思い至らず慌てていて、それが余計に疑惑を深めていて、ほんとにギリギリだった。

その後で何故家に来たかの事情を聞き、一連の話を聞いてやはりバゼットの食事事情に驚いた衛宮一家は喜んでランサー達を迎え入れたと言うわけだ。

「そんなことがあつたんですか。姉さんもですけど、バゼットさんでしたつけ？その方もちょっと抜けてますね。あつ、でも大丈夫なんですか？先輩。いきなりお密さんがあひやつて。」

桜がバゼットという人物に対し自分の姉と同じく似ている等と感じていると、急に人が増えても大丈夫なのだろうかと思い士郎に尋ねた。

「ん、ああ。大丈夫だ。一人増えるも四人増えるも一緒だしな。」

家計を一手に預かる士郎の大丈夫と言つ言葉に安心するも、ん?と  
桜は首をかしげた。

立ち直つた凜も同様だつたようで、気付いたことを口にした。

「四人、て他にも泊まる人たちがいるの?」

「ああ。バゼットさんと同じ様に協会の人だつたかな。

今日到着するつて聞いたから食料に関しては多めに買つてたし、部屋は元々多いからよかつたよ。」

士郎が口にした情報で凜達にも正体がわかつた。

昨日話していたケインズの弟子でもあるウェイバーだと。

「でも何で士郎の家に泊まるの?別にそれが悪いって訳じやないけど、普通ホテルとかじやないかしら。」

ケインズが普通にホテルをとつてるだけに余計にその疑問が残る。士郎を見ると、その視線はセイバーを向いていた。  
どうやらセイバーに理由の一端があるようだ。

「えつと、何故かと言えばライダー 征服王が泊まりたいと言つて来たからなのですが……」

「だから、何でそう言つてきたかが知りたいんだけど……まあ、言えない事なら良いわよ。無理して言わなくとも。」

「いえ、そう言つわけではないのですが……」

そう言つ割に、セイバーの言葉は要領を得ない言葉しか出てこないでいた。

「あ～、とか、う～、とか呻き、視線はあちこちを迷っている。

このままではらちが空かないと判断した凛は、事情を知つていてるだろう士郎へと話をふつた。

士郎も仕方ないなどといった体で話始める。

「いや、何て言つか俺の料理を食べたいらしいんだ。」

「士郎の? 何で相手が士郎の料理を知つててるの。」

「セイバーとイスカンダルは何度かやり取りを交わしていたらしいんだけど、その時俺の料理が話題に上がつたらしいんだ。」

やり取りと言つても当然だが手紙ではない。

イスカンダルがウェイバーに使い魔を放つて貰つたり、他の用事についてに会話を交わさせて貰つたりと様々な魔術的要素を用いて行つていた。

その際にセイバーが士郎の料理の腕を自慢し、セイバーがそこまで絶賛する士郎の料理に興味を引かれたイスカンダルがこの機に泊まらせて貰つようとしたのだ。

ウェイバーの許可なしで。

後でその事を知ったウェイバーは怒りもせず、ただ遠くを見つめていたらしい。

変わらず「己」がサーヴァントに振り回されているウェイバーが不憫である。

「セイバーさん達にそこまで評価されるなんて、流石先輩ですね。」

桜の言葉にセイバーは真っ赤になる。

どうやら、士郎の料理の事で熱弁を交わしたことを探られるのが恥ずかしかったので話せなかつたらしい。

今さらだとは思うのだが。

「一気に十人に成るわけか……料理とか大変になりそうね。」

「そうだな。でも、美味しく食べててくれるならそれはそれで作りがいがあるさ。」

人数が増えて大変ねと言つ言葉に、寧ろやりがいがあるとでも言いたげな士郎の言葉。

一瞬、魔術師やめて料理人になれと言つ言葉が浮かんでも仕方ないことだと思う。

「夕方にはもうライダーとそのマスターは到着してゐるのかしら。」

「え?……よくわからないけど、着いてるんじゃないかな?」

何だ、遠坂。会いに行きたいのか?」

凛の質問に、何なのだろうかと凛を見る士郎。

からかい混じりに過去の王様に会いに行きたいのかと口元した。

「あら、士郎の割には感がいいじゃない。勿論そのつもりよ。」

「冗談のつもりの言葉に素直な肯定が来て士郎は目を瞬いた。  
凛がミーハーではないことは知っているから、理由が浮かばないのだ。

「顔見せのようなものよ。早めに挨拶していた方が動きやすいでしょ。」

「ああ、そうか。

確かにその方が良いよな。」

「ふむ。で、そう尋ねると言つては今日行くつもりかね、マスター  
一。」

挨拶にいくと言つた凛の言葉にアーチャーが応える。

それに凛は当然と返した。

凛が何時ごろかを聞いたときから予想はついていたので、アーチャーもそつかの一言で終わらせた。

「だから桜、アンタも一緒にいくわよ。」「はい、解りました。」

顔見せなのだから、当然桜も行くことを叫げる凜。

桜もその方がいい事を理解しているので、否はなかつた。

それに、桜達にとつてはウェイバー達だけでなくバゼット達とも会つてないのだ。

衛宮家にいる今いく方が効率もいいので、ついでに挨拶しておこうと考えていた。

「よし、じゃあ放課後に集合ね。」

「場所はどうしますか？」

「やっぱり校門が一番いいんじゃないかな？」

何処に集まるかを話し、校門が一番楽だつとなつたのだがそこで問題が一つだけ浮かび上がつた。

セイバーだ。

他のサーヴァントと違いセイバーは靈体化出来ないため、コッソリと付いていくことが出来ない。

そのまま付いてくるにも何故迎えに来たのかといらん噂を流されてしまつたものではないと却下せざるを得ない。

どうするべきかと頭を悩ませていると、アーチャーから案が出された。

「我々サーヴァントは外から集合するよりこじてはどうかね。無論、私達も姿を見せるようにしてだ。」

「確かにそれならば一緒に行動できますが……」

「なに、セイバーだけでなく我々もいることなどどの様にも理由付けは出来るだろ?」

町案内などな。そのついでに迎えに来たとでもしておけばいい。」

つまり、アーチャーは衛宮家に訪れてきた外国の友人を町案内しているとき、丁度よく迎えに来たと言うことにしてしまえ、と言つことだった。

外国暮らしが長かつた切嗣に外人の客が訪れることに違和感はない。その事を知らないにしても奥さんが一見して外国人であることは解るため、その関係とも受け取れる。

それならば確かに違和感もなく、不自然さも少ない。  
僅かな時間でそこまで考えたアーチャーに尊敬の眼差しを送り、皆  
はアーチャーの案でいくことにしたのだった。

放課後。士郎達三人が集まつた頃、セイバー達も姿を表した。  
それに、士郎が驚いた様な表情を浮かべる。

「あれ、どうしたんだ? セイバー。」

「士郎ですか。いえ、友人が訪ねてきたので町を案内していたところです。」

セイバーも士郎の演技に合わせるように言葉を紡ぐ。やり取りは自然であり演技とは思えない。

感情を制御する事に長けた魔術師だからこそ、この程度の演技はお手のものと言うわけである。

また、回りの人間の耳に入りやすいように少し大きめの声で話されていた。

「ああ、そうなんだ。

じゃあ何でここに来たんだ。こつちは学校しかないぞ。」

「丁度案内し終わつた頃でしたので、どうせなら一緒に帰ろつかと思いまして。」

「偶々、時間が重なつたから来ただけだ、と言つことを強調するかのように告げるセイバー。

いつもしないと身の危険があるので。主に士郎の。

校門で会話をしている彼等は周囲の視線を一心に集めている。

一番の理由は矢張その外見である。

只でさえ校内美女姉妹との付き合いがある士郎は嫉妬の対象にされやすい。

それに外人の美少女にまで迎えに来て貰つたとなれば、本気でパンチになりかねない。

本人はその事に気付いておらず、無意識でそんな事態を回避してい

ると言うのがまた凄い。

今回は一行の中にアーチャーという男性が居たことも大きいだろう。少なくとも、全員が女性であつたら別の意味で修羅場になりかねなかつた。

「あら、外国の方々ですか？」

「ええ、国は違いますが。」

「あら、そうなんですか。でしたら是非お話ををお聞きしたいですわ。」

「私も聞きたいです。いいですか、先輩？」

凛が興味津々な態度を隠さず話しかけた。

そして、この後衛宮家に行つても問題ないよう話の流れを持つていった。

周囲は彼らの会話に少しの疑問を抱くこともなく見送ったのだった。

「上手くいきましたね。」

「そうみたいね。士郎、アンタ助かつてよかつたわね。」

凛が意味深に呟く。桜も苦笑いしながら肯定も否定もしない。士郎はそんな一人の反応が理解できず、ムツと眉を寄せた。

二人には解っているからだ。士郎が周囲に嫉妬混じりの感情を向けられていることを。

知らぬは本人ばかりなり。

「やれやれ……どうでもいいが、さつさと移動するぞ。」

アーチャーはそんな彼らを尻目に足早に移動を開始した。

そのアーチャーを慌てて追いかける三人。

そして、六人で歩き真っ直ぐに家に向かつたため直ぐに到着する。

彼等が家に入ろうとしたときだった。

家中から豪快な笑い声が響いてきた。

六人は顔を見合せた。

片方はランサーの声であることはすぐに解った。

と言ふことはもう一つの声は恐らくライダーであることに間違いなく……

士郎達もいることなので、彼等は遠慮なく家へと上がり込んだ。

上がり込んだ彼らの目に写つたのは向かい合つてご機嫌で酒を飲む二人のサーヴァントと、部屋の隅で膝を抱えて座る一人の華奢な男だった。

## I—I章　一つの輝き（後書き）

以上、アーチャーの決意と四次ライダー主従との邂逅話でした。因みにウェイバーの姿は第四次聖杯戦争のときの姿でお願いします。

今日は何氣に五次ライダーが空氣でした。  
気付いたら一言も喋つていなかつた罷（誰のせいと）

いやはや、これからどうなつていくのか。  
どんな展開になるんでしょうね～

え、作者だらうつて？

書いてるうちに徐々にプロットからずれていつひやつてるんですよ  
ね

大筋はまだなんとか範囲内なんですが。

なにはともあれ、完結目指し頑張ります。

## 一十一章 脱力の宴（前書き）

いや、スミマセン。

田を越えての投稿になつてしましました（汗）

地の文では四次サーヴァント達は真名で、五次サーヴァント達はクラス名で書いていきます。ある時期までは。

ある時期と言つのはその時が来れば解ると思うので……

そして、評価の総合ポイントが1000を越えたことに感謝を……！

本当にありがとうございます……！

## 一十三章 脱力の宴

昼を少し回つたぐらいの時間帯。

衛宮家の門前に一人の男が立っていた。

一人はそれなりに整つた服を来た細身の男で、もう一人は巨大な体躯を誇る男である。

彼等はとある情報を聞き、助力になればと駆けつけてきたのだ。

挨拶をするべきセカンドオーナーにはつい先程話を通し、あとは目の前にある家の家主達に挨拶をするだけなのだが……華奢な男の方は既に疲れきった雰囲気を纏っていた。

何故かと言えばもう一人の男が原因だ。

理由は大柄な男の格好を説明すればお分かりいただける筈だ。

その大柄な男の格好はTシャツにジーパンと言つた、一見するとごく普通のそれである。  
…それだけであれば。

実際の所、Tシャツにはあるアニメキャラがでかでかと描かれており、それを隠す処かよく見ると言わんばかりに胸を張つて歩いていた。

それが、彼等の拠点からずっと続けられていたのだ。

周囲の視線の痛いこと痛いこと。

本当に普通の格好をしているもう一人の男まで同類であるかのような視線を向けられていた。

大柄な男ほどの凶太い神経を持ち合わせていないもう一人の男は、

移動だけで精神を削られる結果となつたのだ。

そして、理由はもうひとつ存在する。

大柄な男の両手に握られている荷物だ。

その荷物とは紙袋のことだ。

その中身と言えばとあるキャラのグッズであつたり、はたまたゲームのカセットであつたり……

所謂、そういう系の物が大量に入っていた。

それらはまだビニール等に覆われており、それが意味することは購入したてと言うことだ。

そう、本来ならばケイネスと同時に着く筈だった彼等は巨漢の男の強い要望により、オタクの集う街に寄つて来たがためにこのように遅れて到着したのだ。

「……やつと、着いたな。」

「そうじやな。騎士王に会つのも久しぶりであるし、楽しみだのう。」

「

短い旅路である筈なのにまるで長旅をこなした旅人の様な雰囲気を醸し出し、やつと着いたことの安堵を込めた言葉を吐く細身の男

ウェイバー・ベルベット。

巨漢の男 第四次聖杯戦争にライダーとして喚ばれた男はそんなマスターに気付かず、これから再会するであろうセイバーに思いを馳せていた。

いや、ライダーの事である。気付いていたとしても気にしないに決

まっている。

なんと言つても破天荒を絵に描いたような男なのだ。

ウェイバーはそんなイスカンダルの言葉をなるだけ気にしないようにして、目的地である衛宮家へと入つていった。

「……お邪魔します。」

「おうおう、邪魔するぞーー！」

他の魔術師の家に入るのは緊張するのか恐る恐るといった風に声を出すウェイバー。

それとは逆に大声をあげ返事が返つてくる前に、どかどか上がり込むイスカンダル。

性格の違いが如実に表れている。

「つて、勝手に上がり込むなよ。」

「わははは、小さいことを気にするでない。余は気にせん。」

「気にしろよーー他人の家だぞーー！」

構わずズンズンと家の中を進むイスカンダルを慌てて追いかけるウェイバー。

そう時間も掛からず彼等は客間に到着した。

そこではウェイバー達のお茶が既に用意され、会話を漏れ聞いたのか苦笑いを浮かべた士郎以外の衛宮家が揃つて二人を迎えていた。イスカンダルの性格を知ってるがゆえに、声が聞こえても迎えにい

かずにお茶の準備をしたのだ。

そして、訪れてきた一人にとつて見慣れない人物達がそこにいた。  
昨夜この家に来たバザット達である。

「なんじゃ、見慣れん奴等があるの?」

「うわー。や、サーヴァント。」

ウェイバーはもう参加者ではないにも関わらず、相手がサーヴァントと解った瞬間腰が引けた。

イスカンダルは二人に、特にサーヴァントに興味津々の様で、まるで子供の様にキラキラと目を輝かせ彼等に近づいていった。

「お主が今回召喚されたサーヴァントの一人かの?」

「おうよ。俺はランサーだ。」

忌憚なく話しかけてきたイスカンダルに面食らつたものの、元来の性分によりこちらもそう動搖することなく返すランサー。

ほうほうと囁きながらドジカリとランサーの前に座り込んだ。話し込む気満々である。

ウェイバーはどうすればいいかわからず、結局用意されていた座布団の上に座ることにした。

「疲れたでしょう? お茶菓子もどうぞ。」

「あ、ありがとうございます……」

「見たところ、君達の関係も相変わらずみたいだね。」

アイリスフィールの気配りによつてお茶菓子を進められ恐縮するウェイバー。

切嗣は第四次聖杯戦争じより変わらない一人の関係に微笑ましげな表情だ。当人にとっては微笑ましい処ではないのだが。

お茶を飲んで一息ついたウェイバーに、疲れによつてスルーしていだ疑問が浮かび上がってきた。

「えつと、この人は……？」

「ああ、彼女かい？君も知つていると思うけど、彼女は封印指定執行者のバゼットだよ。」

「バゼット・フラガ・マクレミッシュです。貴方の噂はかねがね聞き及んでいます。」

ウェイバーは時計塔で噂になる率が高いのだ。主にイスカンダル関係で。

その噂を聞いていたのだろう。

若干赤面しながらもウェイバーもなんとか挨拶を返した。

そして、その後ウェイバーが一番聞きたかったであろう事を切嗣が説明した。

それを聞き、あんまりな理由に思わず本当なのかと凝視してしまつた。

それを受け困惑の表情を浮かべながら視線をそらしたバゼットの態度に、本当なんだと理解したウェイバー。

なんと言えばいいか思い至らず、沈黙を貫くこととしたのだった。

一方、そんなマスター達の空気を知らないサーヴァント達はは盛り上がっていた。

「ランサーといったかの、どこの英靈なんじゃ？」

「クー・フーリンつていやあ、解るか？」

「なんと、光の御子か！」「いや凄いやつが四験されたもんじゅのう。」

本来なら隠すべき真名だが、もつ負けた以上隠す意味も無いと堂々と名を告げるランサー。

イスカンダルは有名どころに歓喜を隠せないでいた。

「んな大したものんでもねえよ。

でアンタは何処の奴か教えてくんねえのか？」

「おおう、余としたことが忘れておったわ。

余の名はイスカンダルじゅ。」

「名高い征服王サマか。そっちの方がよっぽどスゲエ存在じゅねえか。」

イスカンダルの名を聞き田を見開くランサー。

ランサーの驚愕に、心地良さげな笑顔を浮かべるイスカンダル。自分を知られていると言つことは、イスカンダルがよくやることにおいて有利になるからだ。

結果はおいといて。

「それでじや、ゴッちのれで……んん、レディーと一緒にいるサー・ヴァントも氣になるんじやが。」

「あら、レディーだなんて口が上手なのね。イスカンダル王。」

「連れないので、王など付けんでもよいぞ。」

「あら、そうなの? ジヤ あ遠慮なく。」

それと、彼は私のサーヴァントのバーサーカーよ。真名はヘラクレス。」

イスカンダルはテーブルの方でなく自分達の側に座っているイリヤと、そのサーヴァントへと話題を振った。

イリヤは彼等の話題に興味があつたようで、バーサーカーを連れて横に座り込んだのだ。

そして、返ってきた返事にわざわざ以上の喜色を滲ませたのだった。

「うほつ、ヘラクレスとなー?」リヤビッククリじや わい。」

「えへへ、そうでしょ。それに、私のバーサーカーは強いんだから。」

「

イリヤは胸を張つてヘラクレスを紹介する。

イスカンダルはふむふむと真面目に聞き入つていた。

そして、笑顔を浮かべる一言を放つ。

「時にお主等、余の臣下にならんか？」

後ろのテーブルの方で「ゴシン」と何か重いものがぶつかる音がした。しつかり聞こえている筈のそれを無視しつつ、イスカンダルは二人を見続けていた。

一瞬何を言われたのか解らなかつたランサーだが、理解すると同時に此方も楽しそうな表情を浮かべ返したのだった。

「クツクツクツ。そういうことにや興味がなくてな。  
わりいが断らせて貰わあ。」

キッパリとイスカンダルの誘いを断るランサー。

それも当然だろう。ランサーにとつて一番関心があるのはギリギリの戦いであり、騎士ではあっても仕えると言つことに欠片の興味もないのだから。

ランサーの返答を聞いて、バーサーカーはどうかとそちらを向く。真っ先に目に入ったのはバーサーカーでなく、その前に座る不機嫌そうなイリヤであった。

尋ねたのは英靈自身にであるのに、なぜそのマスターの機嫌が悪くなるのか解らず（考えず？）イスカンダルは首をかしげた。

「ダメよー！」

「うん？」

「ダメ、バーサーカーは私のサーヴァントなの！！  
他の人の所に行くなんて許さないんだからーー！」

前半をイスカンダルに向けて、後半をバーサーカーに向けて言つくりや。

バーサーカーはイリヤの言葉に嬉しそうに頷いた。

元よりバーサーカーにはイリヤ以外の者に従つ氣など無かつた。  
それでも、イリヤがそう主張してくれたことが嬉しかったのだ。

「そりや、そりや残念だのう。」

そんな二人……いや、三人の返事に残念だと言葉を返すイスカンダ

ル。

だが、言葉とは裏腹に残念そうな表情はしていない。

イスカンダルとて無理矢理勧誘しているわけではない。

臣下になつてくれるに越したことはないが、本人が嫌々やつている  
のなら今のように拒否してくれる方がいいのだ。

「ライダーーー！お前何考えてんだよ。いい加減そういうこと言いつの

止めろっていうてんだろ。」

「何を言つうか、坊主。余は制服王であるから、欲しいと思つたもの

を欲しがるのは当然だと思わんか？

それに、何れは世界征服に乗り出すにあたり臣下が多いに越したことはなかろう。」

ウェイバーは後ろからワイヤーに拳骨を贈り（この際ウェイバーの手の方が痛んだのは言つまでもない）、十年前から変わらぬ主張に頭を悩まされるのだつた。

ランサーはこの主従の言ひ合ひに笑い出すのを堪えきれなかつた。

「面白えな、お前等。」

イリヤもこのやり取りでさつきまでの不機嫌とも吹き飛び、口を押さえて笑つていた。

「本来会える可能性のない俺等が会つたんだ。  
ここは出会いを祝つて一杯やらねえか？」

「ほほーう、そりやいい考え方のう。

丁度余もアツチの酒を持ってきておるでな。これでやるとするかの。

「

ニヤッと笑つてランサーは酒を酌み交わさないかと口にした。  
酒の一言を聞きイスカンダルも笑顔を浮かべ、またウェイバーを無視してランサーに向き直つた。

会話はまだ少ないものの馬があうことをお互いに感じたのか、二人

は完全に意気投合していた。

酒の用意をし始めた一人に、流石に参加するわけにはいかないイリヤは二人から離れ両親がいるテーブルへと移動した。勿論バーサーカーも一緒である。

そして、一人だけの酒宴が開催されたのだった。

ウェイバーはやめさせようとしたのだが、イスカンダルの、煩いの一言と共に酒瓶の口を突っ込まれ、一気に体内に大量のアルコールを摂取することで完全に酔いが回ってしまった。

酔ったウェイバーはフラフラと壁際に歩みよつてしゃがみこみ、何かをブツブツと呟き始めた。

漏れ聞こえてくる声に耳を澄ませれば、「僕なんか」とか「どうせ」とか言っていた。

どうやら落ち込み戸だつたらしい。

ウェイバーが邪魔できなくなつたことを確認したイスカンダルは改めてランサーへと向き直つたのだ。

ウェイバーを黙らせた手腕に流石に絶句したランサーだが、自分にそう影響はないとおもいたりイスカンダル同様無視を決め込んだのだった。

そして、その酒宴の最中に学校組が帰ってきたと言うわけだ。

「え……なんだ、これ。」

第一声を発したのは一家の一員でもある士郎だった。  
家中ならばどんの非常識が起きて可笑しくないと学んだがゆえ  
の回復の早さだった。

「お帰り、士郎。」

「シロウ、帰つてきたんだ。お帰りー。」

「お帰りなさい。お友達も一緒なのね。」

帰つてきた士郎達に部屋に入つてきて気付いた彼等は、お帰りと声  
をかけた。

「あ、うん。ただ今。

遠坂達は今日来る人達に挨拶に来たんだけど……」

そこまで言つて、一斉に酒を飲み続けている一人の方へ目を向けた。  
サーヴァント故か酔つている様子は全く無かった。  
しかし、一人きりだと言うのに盛り上がり、周りの様子は全  
く目に入つていなかった。

「う~ん……あれじゃ無理そうだな。」

自分達の世界に入つている一人を目にし、邪魔はできないなど士郎

は思った。

だが、他の者達が士郎と同じ判断をするかと言えば否だ。

「何いつてるのよ、士郎。この私がせっかく来たんだから、いつちを向いて貰うに決まってるでしょ。」

「でも、どうするんですか？姉さん。」

桜の言葉に同意するようにライダーも頷く。

単に声をかけても聞いて貰えるか怪しいのが解るだけに尚更だ。

凛はにっこりと笑顔を浮かべ自分のサーヴァントに告げた。

「アーチャー、あいつ等をちゃんと話を聞くよつこしなさい。」

凛が声を出し始めたときから予測はしていたが、実際に言われれば人使いの荒さに落ち込むしかなかつた。

部屋の中にいる他の者達はそんなアーチャーに同情を寄せつつも、とばつちつを食らっては堪らないと黙つている。

仕方ないとため息を吐きながら自分達の存在に気づいてない一人に歩み寄る。

そうしながら、そしてどうあるかと考える。

単純に声をかけても駄目だらう。

大きくて無いが小さくもない筈の自分達の会話にも気付いていない

から、耳に入らない可能性が高い。

ならば殺氣を纏いつつ武器を向けるのが手っ取り早いと思うが、流石にこんな場所でそんなことをするわけには行かない。

だが、実力行使が一番効率がいいのに間違いはなく……と、そこでアーチャーにいい案が思い浮かんだ。

それならば危険はないが確実に此方へと注意を向けさせることが出来る。

どうやって解決させるのだろうかという興味の込められた視線を背中に受けつつ、人の悪い笑みを浮かべ準備に入る。

そう、昼間つから酒を飲んでいるこの男共に天罰（というなのハッ当たり）を下すために。

トレス・オン  
投影開始

周りに聞こえないように口の中だけで呪文を紡ぐ。

思い浮かべるは、ある意味では最強の対人宝具。

どんな存在であろうと絶対に避けることは出来ないと確信できるほどの物。

それを、両手に投影する。

「あれって竹刀じゃない。」

そう、アーチャーが投影したのは竹刀だ。だが、ただの竹刀ではない。

これは、いつの間にか、自分の中に登録された、宝具としての力を持つ、竹刀　虎竹刀だ。

この竹刀を知るもの達にばれない様にストラップはつけていないので、一見するとただの竹刀にしか見えないが中身は本物に近い。

真横に到着したアーチャーは、それでもまだ自分に気づかない二人に向かって手に持つ竹刀を振りかぶった。

そして、アカイアクマと同類の笑顔を浮かべ言葉を発しながらそれを降り下ろしたのだった。

「いい加減にせんか、このたわけ共が！！」  
バシーン

部屋に音が響き渡る。

二人をしばいたアーチャーはスッキリした顔をして凛達の元に戻つていった。

竹刀で打たれたランサーとイスカンダルは頭を押さえ、声も出せずには突つ伏していた。

そんな二人の姿に、命令した凛ですら冷や汗が止まらなかつた。

「凛、これでいいかね？」  
「え、あ、うん。ご苦労様、アーチャー。」

ただの竹刀の筈なのに英靈を攻撃しても壊れない処かあの威力、その事実に戦きながらアーチャーにどうにか言葉を返した凛。

竹刀の威力には他の者達も驚愕しかなかつた。  
なんせ、いまだに声なき声で呻いているのだ。

そして、サーヴァント特有の回復の早さで復活したランサーは吼えた。

「てんめえ……アーチャー、何しやがる。痛てえじゃねえか！！」

「はっ、気付かん貴様が悪い。

己の注意力のなさを私のせいにしないで貰おうか。

それに、マスターが話したいと言つていてね。この方が手つ取り早いだろ？

アーチャーはシレッとランサーの抗議に反論する。

確かに気付かなかつたことは自分の不注意ではあつたし、気を抜きすぎていたと言う自覚もある。

だが、あれは無いだろ？とも思つわけだ。

殴られた瞬間に獲物を見たが、あれは確実に竹刀が有する威力ではなかつた。

それに、あれを見たときなぜか恐怖と共に避けられないと本能が告げた。

「余もこれはないと思うんじゃがのう。

流石の余もかなり痛かつたぞ。うむ、中々の一撃であった。」

「それはすまなかつた。だが、ただ声を掛けただけでは気づいて貰えそうにも無かつたのでな。

「こういう手段をとらせてもらつた。」

盛り上がつていただけに気づかなかつた可能性を否定できないイスカンダルは、視線をあらぬ方へ向けポリポリと頬を指で搔いた。

アーチャーの鷹の目から逃れるように、未だ壁際にいるウェイバーのもとへ向かつた。

「ほれ、坊主。いい加減しゃつきりせんか。」

まだ壁に向かつて呴いているウェイバーの頭に、イスカンダルのゴツい拳骨が突き刺さつた。

「い……たいじやないか。何すんだよ、ライダー……！」

がつと鈍い音を出したそれは、どうやらウェイバーの正氣を取り戻すには十分だつたようだ。

もしかしたら、時間がたつていたことも大きかつたのかもしねい。

勢いよくイスカンダルを睨み付けるウェイバーだが、イスカンダルの後ろに到着した時は違う者達を認め再度驚愕した。

「つて人が増えてる！！  
へ、もうこんな時間が？」

人と同時に目に入った時計を見て、今の時間に混乱した。  
どうも酔っていた間の記憶がないようだ。

まあ、その方がいいかもしれない。

酔っているときの自分の言動を覚えていればきっと落ち込むに違いないのだから。

なんせ、全ては聞いていないものの近くにいた衛宮夫婦の視線が生温いのだ。

色々とグダグダになりつつある空気を変えようと、凛が咳払いをして視線を集める。

ウェイバーも自分の方を向いたのを確かめた凛は、ウェイバーとイスカンダルに向かって挨拶をしたのだった。

「初めてまして、セカンドオーナー遠坂時臣の娘の凛とります。  
そして、こつちは私のサーヴァントのアーチャーです。」

優等生の仮面を被つて挨拶をする凛。

その横でアーチャーはおざなりに頭を下げた。

どうせすぐばれるのに、と凛に向けられる視線には笑顔を返す。  
それを受けられた相手は顔を青くして引き攣った顔をした。  
(誰かは言わずとも解るだろ？)

「私は妹の桜とあります。そして彼女は私のサーヴァントのライダーです。

よろしくお願ひします。」

「短い付き合いでしょうが、よろしくお願ひします。」

桜も姉に続き挨拶をする。  
ライダーもだ。

二人の挨拶を受け、ウェイバーも慌てて自己紹介をする。  
高校生の凛達が落ち着いて挨拶をしてると言うのに、大人のウェイバーが慌てていると言うのはなんと言えばいいのだろうか。

こうして、衛宮家の邂逅はなされたのだった。

## I 十二章 脱力の宴（後書き）

今回もある意味では邂逅話のみとなりました。  
そして今回はセイバーが空気に……（汗）

このままではいけませんね。喋らせるためではいかなくとも、せめて存在感があるようにしなければ。

頑張つてこきたいと思つます！――

## 一十四章 間に潜むモノ（前書き）

来週は勤務時間調整のため土日出勤……その代わり平日が休日と言つわけで、土曜に更新できるかわかりません（汗）

いや、一度に出勤する人が多いからって、みんなずれて休みを取ることになつたんですが流石にこれは……（泣）

自己紹介と言つたの面通しを終えたあと、折角だからと帰ろうとする凛達を押し留め全員で少し回遊をすることになった。

ウェイバーはこの家での人間でないのに、自分達に自己紹介だけで帰ろうとした凛達に疑問を抱いた。  
何も用事がないのに来たのかと。

「えっと、君達はどんな用事できたんだ？」

「なんじゃ、気づいとらんのか坊主。鈍いの一。」

聞いた方が早いと思い口にしたウェイバーだったが、それに対する返答は真横から来た。

イスカンダルの言葉にムカツとしつつも、わからないのは事実なので睨み付けるだけに留めた。

そんなウェイバーの視線など意にも介さず、イスカンダルは煎餅をバリバリと食り食べていた。

隣ではセイバーも食べており、ハムハム食べつつコクコクと頷いていることからかなり気に入つたようである。

その更に隣ではランサーが物珍しげに煎餅を眺めたあと、同じく食べ始め、へえ、と言いつつ食べ進めていた。

因みに、この煎餅は大河が何時しか買ってきて躊躇りの「」とく隠していたもので、イスカンダルが部屋の中を（勝手に）物色した際に出てきたものである。

大河のモノであると云つて氣付いている衛宮家の面々だが、誰も何も言つ様子はない。

イスカンダル達を制したところで食べるのを止めるわけではないし、大河の隠し菓子が食べられるのは何時もの事でもあるからだ。

「じゃあ、お前は解つてゐるのかよ。ライダー。」「うむ。余の買つたばかりのコレクションを見に来たのであるわ。」

「ああ、なるほど……」

「つて、んな訳あるか――――――！」

言われなくとも解つてゐるというようなイスカンダルの態度に、流石王なだけあると感心していた密間の者達。

だが、実際にイスカンダルが口にした内容は全く違う事だった。周りはただため息をつくもの、脱力したようにテーブルになつくものの、頭を抱えるものと様々な反応を返していく。

アーチャーも自分の知る王とは一味違つたイスカンダルの姿に、なんだかやるせない思いが沸き起つてゐる。

アーチャーが知る王は彼女か英雄王だけなので仕方ないことではあるが。

凛は頭痛を感じる頭を手で押さえ、ウェイバーの疑問に答えることにして。

イスカンダルの発言、いや存在はこの際無視である。

「えーと、私達が来た用事について、でしたよね。」

凛が気を取り直して聞いてきたため、ウェイバーは凛に向き直る。  
そして、ウェイバーも先ほどのイスカンダルの発言は無かつたこと  
にしたのだった。

「そ、そろそろ。挨拶だけして帰るとしてたからさ。」

自分を無視して会話を進めようとする一人に、子供のように拗ねた  
表情をするイスカンダル。  
だが、まあ自業自得だろう。

「私達が来たのは顔見せのためです。」「  
顔見せって……必要ないんじやないか？  
僕達はこの家にお世話になるわけだし。」

理由を聞いても疑問符を飛ばしているウェイバー。

態々今顔見せに訪れなくとも、いずれ自然と顔を会わせることになると考へてるからだ。

凛はウェイバーの考へることを表情から推測し、この人は本当に  
年上の‘魔術師’なかとつい胡散臭げな目で見てしまった。  
だが、長年の猫かぶりもありそれを悟らせるような真似はしない。  
気付いたのは姉妹として暮らしている桜と、バスが繋がつており生

前から何かと巻き込まれてしまつたために気付かざるを得ないスキルを身につけたアーチャーの一人だけであった。

「確かに本来ならばそうかもしませんが、今冬木では異常事態が起きています。

もし今日来なくて顔見せを行つていない状態で私達だけが偶然邂逅し、その時が緊急時であつた場合挨拶なんとしてる暇はありません。

「…あ〜。」

凛は淡々と言葉を溢す。

それを聞き、遅ればせながらウエイバーも気付くことができた。

緊急時の連絡をスムーズにさせるために、まだなにもない今の内にお互いの顔を見せておこうと囁つことなのだと。

その状況に陥る可能性は限りなく低いがゼロではない。

ゼロではないからこそ、最悪の可能性を考慮して動かなければならないのだ。

それがわかつたとき、ウェイバーは凛の笑顔がとてもなく恐ろしいものに見えた。

そして、なるべく逆らわなこよつこよつと密かに思つたのだった。

親交を深めるための交流もある程度交わしたため、今度こそ帰宅しようつと凛達は腰をあげる。

見送りのために士郎も立ち上がりましたが、凛がそれを制した。

「別にいいわよ、それくらい。それに、そろそろ夕飯の準備しないといけないんじゃないの？」

「つて、うわ。ホントだ。

思つたより時間にくつたみたいだな。急がないと。悪いな、遠坂。」

士郎は凛の好意に甘えて、台所へと向かつていった。  
凛達もまた帰宅のために移動を開始した。

彼女達の中で一番後ろを歩くアーチャーは、出る時部屋の中へ気付かれぬよう視線を投じた。

殆ど一人だけで過ごしていたと言つても過言ではない自分の時と比べ、今見ているこの部屋は暖かさに満ちているような気がアーチャーはした。

内装も、家具も、何もかも同じである。

そこに、‘家族’が存在する以外は。

だが、それが一番の要因なのだと云つとも解つていた。

切嗣<sup>チチオヤ</sup>とアイリスファイール（ハハオヤ）そしてイリヤスファイール（アナ）。

それらが欠けることなく揃つている。

今はランサーや征服王も滞在し、‘ここ’の特徴として争うこともなく共に笑い合つ。

来て直ぐ田にした光景には些か辟易したが、あれも一つの平和とも言える。

……イスカンダルに関しては状況に関係なくそつ云つことをしそうではあるが。

懐かしくもあるが、初めてみる部屋。

最初に来たとき見る余裕は無かつたアーチャーの、それが再度この部屋を訪れた今の印象であった。

僅かな羨望と渴望が鈍色の瞳に浮かび、一瞬で消え去る。

どんな感情を抱こうとも、もうこの身には関係ない事なのだ。

後ろ髪を引かれる思いを感じながら、それを振り払つようアーチャーは部屋を後にした。

凛と桜はまだ玄関におり、アーチャーの様子には気付いていない。それに胸を撫で下ろしながら、四人は帰路についた。

その日の夜、凛と桜は再び巡回にでた。  
当然のことく二人は別々の行動だ。

ライダーが敗退した今一緒に行動することにおいて何ら問題はないが、別々に行動することによる効率化を図ったためそう相成ったのだ。

「異変が起きてほしいうて訳じやないけど、あれ以来何も無いわね。  
少し拍子抜けだわ。」

「何を言っている、凛。何もないと言つてもたかが数日だぞ。  
それに、嵐の前の静けさと言つ言葉もあるだろ？ 気を抜かんことだ。」

「解つてゐるわよ、アーチャー。ただ意氣込んでた分空回つちやつたな、て思つただけじやない。」

凛の発言に、諫める言葉をほくアーチャー。

そんなアーチャーに頭が固いわね等と考へる凛。

そんな会話のやり取りをしながらも周囲の警戒は怠らない一人。

その様なやり取りを交わしている一人の場所からは、眼下に星とは違つた輝きの海が見られた。

二人のいる場所。それは新都にあるビルの屋上だつた。

初めは何時ものように歩いて回つていたのだがそれでは捜索範囲が限られてしまうこと、凛の年では下手をすれば補導されかねない（実際に何度も危ない目に会つた）事からアーチャーが凛を抱えて移動することにしたのだ。

お陰で移動速度が上がり見回れる範囲も広がつた。  
いまはその小休憩といったところだ。

凛の反応にヤレヤレと首を竦め苦笑いを溢すアーチャー。  
そのアーチャーの感覚にサーヴァントの気配が引っかかった。

そつちを見れば、さつきまでの自分達と同様にビルを駆ける存在がいた。

アーチャーが気づいたのと同じ様に彼方も気付いたようで、アーチャー達がいるここへと向かつてきていた。

「一人で見回りとはこゝ苦労な事だな。」

「そうでもない。主のためを思えば、これくらい安いものだ。」「なるほど。流石は忠義の騎士、と言つべきかな。デイルムッド・オディイナ。」

そう、現れたサーヴァントとはデイルムッドだったのだ。  
彼が一人で見回っているのには勿論理由がある。

ケイネスは時計塔で軽くない責務が存在するため、婚約者であるソラウと二人揃つてゆつくりできる時間は少ない。

その為、まだ明確な敵が現れていないこの時ぐらいは、ゆつくり一人だけの時間を過ごさせてあげたいと言つデイルムッドの思いが込められているのだ。

十年前であればデイルムッドの言葉を素直に受け入れる事はなかつたし、単独行動も殆ど許さなかつただろう。  
だが、すんなりと受け入れたわけでもない。

余計な気を回すな等と一通り文句を言つたあと、そこまで言つながら勝手にしろといい放つたのだ。

もし、デイルムッドにイスカンダルと同じ知識があればこいつ断じただろう。

## ——ツンデレ

幸いにもそつちの知識に触れる機会がなかつた為、そんな不名誉な称号は避けられたケイネス。

……男のツンデレはあまりいいものではないが。

「で、どうしたの？なにか変化でもあったのかしら。」

「いいや、何も。ポイントも解らないからな、本当に見回っているだけって感じや。」

折角会つたのだからと近況を尋ねる凜だが、返答は予想通りのものだつた。

さしたる落胆もなく、そうと返事を返した。

アーチャーはディルムツドに今日捜索した範囲を訪ねた。  
別の日ならともかく、同じ日に同じ場所にいくよりもより広く見回つた方がいいからだ。

「我々はアチラの方を既に見てきている。」

「私はホテルからだからここら辺だな。」

「ふむ、では君はこちらの方に向かってくれるか？我々はコッチに行こう。」

「ああ、了解した。」

簡単にこれから向かう先を一人は決めた。

アバウトなのはあくまで重ならない程度にしただけであり、他にも警戒に回っている者とているからだ。

ディルムツドは再び夜の闇のなかにその身を投じ、それを見送った  
アーチャー達も休憩は終わりと動きを開始した。

「やっぱり、あれの気配は感じられないわね。」

靈脈にもたいた異常はなかつたつてお父様も言つてたし。」

街を見回つても表面的な異常等なく、魔術師的觀点からも何ら見つけることはできない凛。

完全にあれは身を潜めているとしか思えなく、やつぱり暫くは動きはないものと考えていた。

だが、アーチャーには街のアチコチに潜むアンリ・マゴの氣配が感じられていた。

凛にも解らないそれを感じられるのは、同じ氣配がするものを抱えているからだらうとを考えていた。

氣配があることは伝えたいが、自分でしか感じない異常を教えることはできない。

なぜ感じるのか、その理由まで話さなければいけなくなつてしまつ。

サーヴァントだからと言ひ理由だけでは難しい。

何故なら「テイルムッシュですら感じていなかつたのだ。

そう、実は屋上で邂逅していたときもアーチャーはアンリ・マゴの氣配を感じたのだ。

だが、テイルムッシュはそれに気付く様子はなかつた。

それを考えれば、他のサーヴァントも同じであらうと言ひひとじが考えられる。

不用意に告げれば、自分の異常を伝えるだけになつてしまつ。

それだけでなく、恐らくは自分のことを怪訝な目で見てくるだらう。あれと実は関わりがあるのでないか、と。

真実ではないが事実であるので下手に否定も出来ない。

もしかしたら、ランサーと交戦していた時と同じ状態に陥つてしまふ可能性も皆無ではないのだ。

ならば、寧ろ自分を疑つていってくれても構わないが、まだ告げるときではない。

今動きを制限されでは、奴を消す機会が失われてしまう。

アーチャーが頭の片隅でそんなことを考えていると、今まで独り言をいつていた凛がアーチャーに向けて語りかけた。

「ねえ、アーチャー。」

「なんだ、凛。」

「思つたんだけど、あの、影アンリ・ヤコ」って普通の人も襲うのかしら。」

凛の問いかけに、昔の映像を呼び起こす。

奴は人を襲い、それを‘養分’として吸収していた。

例え世界が違つても、この世全ての悪アンリ・ヤコとしての存在が同じであればそれに關しても同様だろう。

外見が同じである為楽観視はせず、変化はないと見た方がいいだろう。

なので、少々残酷かも知れないが正直に告げる」とした。

「……その可能性は否定できんな。相手の情報が殆どない以上、私達が知らないだけの可能性が高いからな。」

「そう、よね。」

「しかし、どうしたのかね。急に。」

アーチャーは何故凛が今になつてそんな疑問を感じたのだろうかと、逆に尋ね返した。

凛は少し言はずらうにしながらも、アーチャーが英靈である」とを思い出し素直に答えることにした。

「アーチャーは聞いてるかしら、冬木の街で人がたまにいなくなつているつて話。」

「むつ。そう言えば以前の休みの日の出掛ける直前に、遠坂葵が通り魔がどうのと言つていたな。  
もしやその事か？」

アーチャーは休日に買い物に出た日の事を思い出した。  
その時、確かに‘通り魔’と言つていた。

その時はよくある事件だと普通に流していた。  
凛の両親とて、大して重要視しているとも見えなかつた。  
なので、魔術絡みではないだらうと思つたのだ。

「ええ、そうよ。それで思つたんだけど…街から人がいなくなるのは通り魔なんかじゃなくて、もしかしたら、影、のせいじゃないのかつて。」

アーチャーは驚いた。

一見別々の事にしか見えない筈の一いつの事を、ヒントすら『えられていないと』いうのに辿り着いたのだ。

やはり、優秀な魔術師なだけはあると、改めてその凄さを認識した。だが、凛はアーチャーの驚きを別のものと捉え慌てて弁明を行つた。

「そ、そりや確かに突拍子も無いことかもしけないけど、それなりに根拠はあるのよ。

人が襲われるにしては血痕も何もなかつたし、浚われるにしても周辺の目撃情報が皆無つてのも怪しいじゃない。

アレだったらそのまま飲み込んでしまって考へられるし、状況的にもおかしくないじゃない。」

アーチャーに抱えられている状態のため離れることは出来ないが、なるべく顔を見ないように凛は顔を背けながら話した。

「まだ何の情報もない以上正しいとは言えないかもしれないけど、間違いとも言えないはずよ。

魔術師たるものどんだけ前性も考慮に入れないと  
お父様達は這ふ  
ものつてこれから決めつけてるみたいだけど……

「いや、私も同様の事を考えていた。」

アーチャーも同じ事を考えていたと聞き、思わずアーチャーを振り

返つた。

そこには、思いの外真剣な目をしたアーチャーがいた。

「だが、凛。そこまで考えていると詫ひ」とは解つてゐるのだからつな？」

アーチャーが何を言いたいのか。凛はそれを正確に察することができた。

ここまで考えている以上、それに思い至らないはずがないのだ。

「解つてるわ。今まで襲われた人たちもつ……生きていないでしょうね。」

そう、アレに襲われた以上、命がないであろうこと。  
それを、凛は悔しい思いで受け止めていた。

アレは捕まえるだけ等と云つ生易しいものではない。  
だからこそ、自分の不甲斐なさに凛は歯噛みした。

「その人たちの敵討ちなんて自惚れたことは言わないわ。  
これはセカンドオーナーの娘でありながらその人たちを守れなかつた私のケジメよ。」

ハツキリとアーチャーの目を見て告げる凛。

そこには現状を受け入れながらもそれに屈しないと言つ力強さがあった。

「ふつ。意氣込むのはいいが私の事も忘れないでいて貰おうか。

君は一人ではないのだからな。

私も奴には少々頭に来ている。全力で力を貸そう。」

アーチャーもまた後悔と共に怒っていた。

奴がどう言つものであるのか知っていた筈なのに、直ぐに思い至らなかつた自分の情けなさに。

そして改めて決意するのであつた。

アンリ・マコを絶対にこの世界から消滅をせようと。  
闇を睨み付けるアーチャーの瞳には、苛烈なまでの光が存在していた。

‘影’の所業に本氣で怒りを表している紅い弓兵。

そんなアーチャーを間近で見つめる凛。

名も知らない英雄ではあるが、呼び出したのがアーチャーでホントによかつたと凛は思つた。

そして、再び犠牲者を出さないようにするために、街の闇に一人は溶け込んでいった。

あの日の凛達の決意を尻目に、何事も起きずに土曜日を迎えた。  
凛と桜は己のサーヴァントをつけ、再び衛宮家に訪れていた。

「ああ、もう。なんたってこんなに進展がないのよ。」

凛はイライラを隠さず茶請けに出された菓子を食べていた。  
それを現在の衛宮家の住人達が静かに眺めていた。

「荒れでんなー、嬢ちゃん。」

「仕方ないでしょ。自分達が管理している土地に異変があるのに、  
何も進んでいないのですから。」

ランサーは暢気に凛を見つめ、バゼットは凛の気苦労を思い心配げ  
な表情である。

「うわ、今日は特に機嫌が悪いな。

ライダー、今日は大人しくしとけよ。」

「うむ。くつ、なかなかやるのう。」

「えい、えい。ふふ、私にかかればこのくらい…！」

ウェイバーは凛の逆鱗に触れないようイスカンダルに注意を促すが、  
イスカンダルはゲームに夢中で聞いていない。  
隣にはイスカンダルとならんでゲームをするイリヤがいた。

イスカンダルがしているゲームに興味を引かれやつてみたところ、  
見事にその魅力に嵌まってしまったのだ。

今では始めたばかりにも関わらず、イスカンダルに匹敵する腕前までになっていた。

「桜、遠坂の奴なんであんなに荒れてるんだ？」

「それが私にも解らないんです、先輩。」

士郎は凛が荒れてる理由を桜に尋ねるが、桜にも解らないようで一緒になつて困惑した表情を浮かべている。

ライダーはアーチャーが理由を知っているだろうとそちらを見るが、アーチャーに言つ気がないのを察してすぐにその矛を収めた。  
一緒に暮らしているうちに、アーチャーが以外に頑固な性格であることを理解したからだ。

言わないと決めたことは意地でも口にしない。故に今回の事も今は絶対に話さないと解ったのだ。

凛の機嫌が悪いのは、事態に進展が無いことが主な要因である。  
人が居なくなるのが、影、のせいだと推測したはいいが、そこから一向に変化がないからである。

だが、回りがその事に思い至るはずもない。  
何故なら、その事を言つていなければ。

これはアーチャーと凛の二人で決めたことである。  
‘影’が人を呑んでいると推測したが、確たる証拠があるわけでもない。

それなりの確証を得てから話そうと考えたのだ。

その方がより確実だと。

そんな話せないことの苛立ちも混じり、発散できない鬱憤となつて  
凛に堆積していたのだ。

「やれやれ……凛、苛立つのは解るがもう少し落ち着いたらどうだ。」

「五月蠅いわよ、アーチャー。」

「君のためを思つて言つてるのだかな。」

もう少し周囲に気を配りたまえ。今の君は完全に珍獣扱いだぞ。」

見かねたアーチャーがとうとう動いた。

凛は聞く耳持たないと言つた態度を貫く。

しかし、‘珍獣’の一言は見逃せなかつたようでアーチャーを睨み付ける。

が、アーチャー越しに見える他の人達を見て、正にその通りであることを実感した。

その隙にすかさずアーチャーは淹れたての紅茶を凛の前に出した。

茶葉は勿論鎮静効果のあるものである。

紅茶の香りを嗅いで一先ずは落ち着いた凛。

危険レベルが下がつたことを察した士郎が、疑問を直接凛に尋ねることにした。

「遠坂、今日は何時も以上に苛ついてるけどなんかあつたのか？」

「あら、それは私がいつもイラついていと言いたいのかしら？衛

宮君。」

「ちちち、違うって。遠坂。」

「……凜。」

「

行き場のない苛立ちを士郎にぶつけようとしたが、それはアーチャーに止められた。

意味のないハつ当たりであることを理解している凜は、すぐにそれをやめた。

「何でもないわよ。ただ、まだ何も解らない現状にちょっとね……」

「遠坂は考えすぎじゃないのか？もう少し息抜きをしたらどうだ？」

「息抜きかあ。でも、なにをすればいいの？」

確かに聖杯戦争が始まつてから、凜は常に緊張感を纏わせて息を抜く事はなかつた。

進展がない以上無駄に疲労を貯めるわけにはいかないと魔術師としての思考も判断を下したが、肝心の息抜きの手段がない。

暇さえあれば魔術師としての鍛練ばかりやっていたため、趣味らしい趣味を持つていないので。

息抜きの方法について頭を悩ませる彼ら。

息抜きのために疲れるなどと言つ本末転倒な事に陥りかけたとき、衛宮家に少年の声が響き渡つた。

## 一十四章 間に潜むモノ（後書き）

次回は再び息抜き話になります。

最後の声が誰か……殆どのかたは解りますよね（一）

ぬりせりせりせりせり

最近スマートフォンに変えたのですが、これが意外と文字が打ちにくいんですね…

文字を打つてしる最中に（仮称）キーボードが急に引込まれたり打つときにいちいちスクロールが必要だつたり。

お陰でいつもより文字数の少ない投稿になります。  
そんな状態ですが楽しんでいただければ幸いです。

## 一十五章 わくわくがん

アーチャーは田の前に光景をただ茫然と見つめていた。

ザザーン  
ザザーン

暖かな気候、打ち寄せる波。

まるで真夏を思わせる光景が展開されていた。

「フム、まさか冬の最中にこの様なことが出来ようとは。  
科学とやらの凄さはわかつたが、その時期にしか楽しめぬという詫  
び錆びが失われたのは悲しきことよな。」

本来なら鳥居から動ける筈の無いアサシンが現代の科学に感嘆し、

「ここにやつあつわけにはいかねえからな、泳ぎで勝負といつづ。  
セイバー。」  
「臨むといひです、ランサー。」

セイバーとランサーは闘争本能をみなぎらせていた。

また、衛宮一家は揃つてパラソルの下に陣取つており、凛と桜はラ

イダーを引き連れ泳ぎに向かつていた。

その際、凜が他の二人をわずかに羨ましそうに見ていた。

理由は押して図るべし。

他にも五次のマスターとそのサーヴァントに、現在冬木に来ている四次のマスターとそのサーヴァントが思い思いに寛いでいた。特にキヤスターは竜牙兵を用いてまで己がマスター為に快適な空間を作り出すことに尽力していたのだった。

秘匿はどうしたといいたい所だがそれは問題ない。何故ならこの場にいるのは魔術師かそれに関連する者達で占められているからである。

では何故そんな状況にすることが出来たのだろうか？

それはアーチャーの隣に立っている存在が関係していた。

「うわー、皆さん喜んでますねー。招待したかいがありました。」

ニコニコとした表情でとなりに立つ彼は金髪紅眼の少年で、ある存在の面影を強く残していた。

その存在とはアーチャーも良く知る存在なのだが、何度見ても何故この少年がああなるのか不思議に感じられた。

「それで、お兄さんは行かないんですか？せっかく貸し切りにしたんですから、楽しんで行ってくださいね。」

「残念ながら、こんなことではしゃぐような性格は持ち合わせてないでのな。その気持ちだけありがたく貰つておこう。ギルガメッシュ

そう、隣に立つ少年の正体とはあのギルガメッシュなのだ。  
そして、今いる場所とはギルガメッシュが支配人を勤める、わくわ  
くざぶるん、その施設であった。

何故彼等がここにいるのかと言えば、昨日の事が関係する。  
そう、時は衛宮邸にアーチャーの横にいる少年の声が響いた時まで  
戻る。

凛と何故か士郎が気分転換の方法について考え込み、それを他の人  
間（以外も存在するが）が我関せずとばかりに何気に見ていた時で  
あつた。

その声が彼等の耳に届いたのは。

「今日は～、お邪魔してもいいですか？」

明らかに子供とわかるその声に、聞き覚えの無い者達は何だろうと  
目を見合させた。魔術に関して全くの素人が来ないとは言い切れな  
い家だが、それでも不自然さが残る。

そうであつても無闇に騒ごうとしないのは、この家の主人一家がこ

の声の主を知つてゐるようであつたからである。

家主が迎えに行きつれ戻つてきた人物は、声から予想された通りまだ幼いとすら表現できる少年だった。

少年は「口」と笑顔をたたえ彼等の前に現れた。

「その姿でいるなんて珍しいな。最近はずつとあつちのままだつたのにな。」

「僕もあつちのボクが何を考えてるかはわかりませんが、きっと退屈だつたからとか言つ理由だと思いますよ？理由なんか無いってのも考えられますけどね。」

「確かに、理由とか考えてなさそつだよな。あいつは、お陰で何度迷惑した事やら。」

「あはは、自分のことながらホントこじめんなさい。」

士郎は珍しい姿に思わず言葉がこぼれた。

それに少年はへニヨンと困つたように眉を下げ、士郎だけでなく周囲にいる人たちにも謝つた。

彼等の会話は事情を知る者達からすればすぐにわかる内容だったが、少年の正体を知らない者達にとっては意味不明なことばかりであった。

故に会話に割り込んでしまつても仕方の無いことだらう。

「おーい、坊主。お前らさつきからなに言つてやがんだ？その姿だとか、あつちのボクだとかよ。」

「そう言えば、あなた達はまだ知らなかつたわね。」

ランサーが言葉を発した事でなにも知らない者もいたことを思い出す。

そして、少年がどういった存在なのか説明を行つた。

少年は第四次聖杯戦争に召喚されたサーヴァントであること、クラスはアーチャーで真名がギルガメッシュであること、本来は大人の姿だが今はある若返りの薬のせいでの少年になつてていること。

そして、大人のギルガメッシュは傲慢・慢心を表したような性格で、常に回りに迷惑をかけていること等々… できうる限り正確に伝えた。大人の姿で会つても心構えが出来ているようだ。

「ああ、以前であつた彼だつたのですね。道理で同じ気配がすると思いました…」

「英靈の姿が変わるとかありえ…なくもねえのか？」

「全ての財を集めるとすら言われるような存在ですし……」

以前大人の状態で会つたことのあるライダーは共通する部分からすぐ納得の色を見せたが、これが初見であるランサー達は半信半疑で目の前の少年を見つめる。

しかし、彼等が信じられなくとも事実は変わらなく、いずれわかるだろうと一応の説明も済んだことで話を進めることにした。

「それで、どうしたのよ子ギル。いつものあんたならどうかで遊んでるんじゃなかつたかしら。」

「子ギルはやめてくださいつていつてるじゃないですか、もう……」

今日はいつも迷惑をかけているお詫びに、皆さんを招待しようつがと思いまして。」

「「「招待?」「」」

凜がここへ来た理由を尋ねると部屋中の視線が子ギル、ことギルガメッシュに集まった。

普通であれば気圧されるほどの迫力を有していたが見られているほうもまた英靈。構うことなくここに来た目的を思いだし、告げたのだった。

「はい。大人のボクが新都のあるレジャー施設の支配人になりますて…」

「フム、わくわぐざぶーんとか言うフルだったな。確か。」

「あれえ、知つてたんですか?」

「ああ、たまたまテレビで見たものでな。」

驚かそうとしたのが詳しく言わずにいよつとしていたギルガメッシュだつたが、それはアーチャーによつて阻まれた。施設がなんのか暴露され、すねたように口を尖らした。

だが、アーチャーが何でその事を知つたのか聞くと今度は恥ずかしそうに顔を赤らめた。

流石にあれを知られるのは恥ずかしかつたのだろう。何せ自分であることに間違いはないのだから。

「あれを見たんですけど、恥ずかしいですね。」

「……まあ、見る限り別人も等しいのだな？へ気にする」ことはないと思つた。」

大人のギルガメッシュとは絶対に相容れないと言つことを身に染みてわかつてゐるアーチャーだが、常識を知つてゐる田の前の人物とは友好を結んでもいいとすら思つてゐるためフォローの言葉を投げ掛ける。

ギルガメッシュはこのように気遣われる事には慣れていない為さつきとは違つ恥ずかしで軽く視線を下にすらした。

「ああもう、話が進まないじゃない。で、そこに招待してくれるってわけなのかしら？」

「はい、その通りです。と言つても明日にありますけど。」

ギルガメッシュが心のなかで嬉しさを噛み締めていると、凛が話を進めるように言葉をかけてきた。

冬にプールが楽しめると言つことに皆は期待に満ちた表情をする。

そこから分かる通り、皆行く気満々である。

「ひとつ聞いていいか？他にも入つて呼んでいいか？」

「？皆さん呼ぶつもりですよ。」

士郎の問いかに、ちゃんと全員呼ぶつもりだと返すギルガメッシュ。それに違う違うと士郎は手を振つた。

キヨトンとしていたギルガメッシュだったが、士郎の性格を思いだ

し苦笑いをした。

「いいですよ、お友達も。でもお兄さん……」  
「ああ、大丈夫だ。事情は知ってるからな。」  
「そうですか、なら僕に否はありませんよ。それじゃ明日待つりますね。」

そう言い残しひがメッシュは帰つていったのだった。

そして冒頭へ戻るというわけだ。

アサシンは鳥居から動けた事がよほど嬉しいようで、剣士らしい肉体をさらし褲一丁で波のプールへ向かつ。

水泳に勝負に闘志を燃やす白いワンピースタイプの水着のセイバーと、青いトランクス姿で傷のある肉体のランサーは学校にあるものと同じタイプのプールへ足を向けた。

そんな子供のような彼等にアーチャーはため息を隠せなかつた。いや彼等よりもっと子供がいる。アーチャーはそちらへと視線を向けた。

「くつ、余としたことが敵の威力を図り間違つとは。」  
「何が敵だ！－ただの水だブファ……」

そう、イスカンダルである。彼がマスターと共にいるのは、子供が  
もっとも喜びそうなプール——流れるプールである。  
そして、何をしているかといえばありがちなことで、流れに逆らつ  
て泳いでいると言うものだ。

だが、それだけではない。水のスピードが違うのだ。  
イスカンダルはギルガメッシュへとお願いして流れるプールの速度  
を最高のものにしてもらったのだ。

お陰でプールの速度はありえない事になつていた。

イメージで表すのなら、さながらナイアガラの滝だ。なんでそんな  
スピードの設定があるかなんて聞いてはいけない。何せ支配人が“  
あの”ギルガメッシュなのだから。

イスカンダルに無理矢理付き合わされたウェイバーは御愁傷様である。

溺れかけているウェイバーを片手でつかみながらまだ上がる様  
子のないイスカンダルを見て、アーチャーは心の中だけで告げた。  
助けられなくてすまない、と。さすがの正義の味方も巻き込まれた  
くはなかつたようだ。

しかし、傷だらけの巨体をもつ男が笑顔を浮かべ流れに逆らつて泳  
ぐ姿はなんとも言い表しがたいものがある。

アーチャーは今度はセイバー達へと目を向けた。

どうやら最初の勝負が決まったようだ。ランサーが喜びセイバーが  
わずかにうつ向いている。

ランサーはこれで終わりだと思っているようで別のプールに向かお  
うとしている。

「…甘いぞ、ランサー。」

「ランサーさんですか。確かにその通りですね。」

思わず呟いたアーチャーにまだ隣にいたギルガメッシュも同感だと返した。

彼等は知っているからだ、セイバーの並々ならぬ負けず嫌いの事を。予想通りセイバーはランサーを引き留めた、尻尾のような髪を引っ張つて。

文句を言いたげに振り向いたランサーはセイバーの表情を見て引き攣った顔になる。

そこまでみて、再び他のもの達へと視線を巡らした。

凜達からはいつの間にかライダーがいなくなつており、代わりに士郎・慎二・一成・イリヤが一緒に遊んでいた。

ライダーは気をきかせていなくなつたらしい。そのライダーは今はスライダーを滑つており、嬉々として何往復もしている。

大人達は水着姿でいてもプールに入る気はあまりないらしく、プールに設置してある椅子でくつろいでいる。

サーヴァント達も団欒を邪魔しないよう、離れた位置で行動していた。このばに危険はないと判断したが故だ。

「正に、平穏というふわわしいな。」

また、ポツリと呟く。隣にいるギルガメッシュに辛うじて聞こえていたが、今度は言葉を返す事はなかつた。

アーチャーが意図して呟いた事でないことを察したからだ。

ぼんやりとアーチャーは目の前の光景を見つめ続ける。そして、生前の事を何とはなしに思い返していた。

と言つても、何度も言つようだがアーチャーに残された記憶など殆どない。

自分にはこんな幸せな時間得ることができなかつた、いや得る資格は無かつた事しかわからぬ。

原初の赤と決意の青。そして、 の金。 を にして のハチをアユミ続けたジブン。

「なんじゃ、お主らは泳がんのか？」

イスカンダルの声に飛びかかっていつた意識が引き戻された。  
何か重要なことだった気がするが埋没してしまい既に手にすることができない。また何かのきっかけで出てくるまでは。

アーチャーはため息を吐きイスカンダルへと顔を向ける。手にはぐつたりしているウエイバー。

「せーつかくプールに来とるんじゃ。お主も何時までもそんな格好でおいらんでとつと水着に着替えんか。」

イスカンダルが眞っ通り、アーチャーは水着ではなく普段着のままでこの場にいた。

勿論理由はある、水着を着たくないのだ。

「私は別に泳ぎに来た訳ではない。泳ぎたいと黙つてゐるわけでもないで気にしないで貰おつ。」

「なんじゃ、つまらんのつ。いつまでも付かれては困つのが常と云つもんじやろが。」

と言つて、豪快に笑い声をあげる。そして、傷のついた肉体がそれに会わせて震えた。

そう“傷”のついた。

これが、アーチャーが水着を着たくない理由である。  
理由はわからないが、サーヴァントには生前のものらしい傷が付いていた。これが四次のサーヴァントだけなら気にすることも無いのだが、ランサー・アサシン・バーサーカーにもあるとなれば話は別である。

ここまで来れば分かるだろう。アーチャーは口の傷を見せたく無いのだ。

だが、そんな事など関係ないとばかりにイスカンダルは動く。

「そりゃ。」

「うわーー何をする、征服王。」

服をつかみ一気に脱がせようとしたイスカンダルだが、気配で迫るものを探知したアーチャーにかわされた。

イスカンダルは悪びれた様子もなく、その姿のお主が悪いといい放つた。

睨み合うように対峙していると、いつの間にかセイバーとランサーが彼等のそばに近寄っていた。

そして二人の状態を疑問に思い傍観しているギルガメッシュに尋ねた。

「彼等はいったい何をしているのでしょうか。」

「アーチャーさんが普段着のままいるので、脱がせようとしているんですよ。」

「おお、お主らも協力せい。こやつの服を剥ぐぞ。」

イスカンダルのあまりの表現にアーチャーは吹き出した。  
言動になれているセイバーとギルガメッシュ、そして数日の生活である程度理解したランサーは脱力感に襲われながらもスルーするすべを身に付けていた。

「ふむ、まあ確かにこの場でその様な格好は相応しいとは言えませんね。」

「なんつったか？郷に入らずんば郷に従え、か？諦めろや、アーチャー。」

セイバーとランサーはイスカンダルに協力する姿勢を見せた。なん

と言つが、こんなときにも服を脱がないアーチャーに対する興味が大半を占めているのだが。

これに、アーチャーは己の不利を悟りざるを得なかつた。

イスカンダルだけであれば逃げ切る自信はあつたのだが、最優と最速が加わればどうなるかわからない。

彼等の間に緊張感が生まれる。

ジリジリと少しずつアーチャーの足が動くが、目線は三人から逸らさない。

セイバーは真面目な顔で、イスカンダルとランサーはニヤニヤとした笑みを浮かべてアーチャーに迫る。

額に冷や汗が浮かぶ。

始めて動いたのはランサーだった。早さをいかし一気に距離を詰める。

アーチャーの服へと伸びる腕を、己の腕をぶつけて弾く。序でにからだが流れの方へと飛ばすように軽く蹴りをぶちこんだ。

そのアーチャーにランサーと一緒に動いたセイバーが背後から接近する。

セイバーはまずは移動できないようにしようと、倒すために足を狙つて足払いをかける。それを軽く飛び上がって避け、そのまま距離を取る。

イスカンダルはこの間なにもせずただ見ていた。こう言つ体術系のやり取りはこの中では向かないからだ。

再度彼等は再び対峙する状態へと移行する。

「元もつとも危険な鬼ごっこが開始された。

## 一十五章 わくわくせいかん（後書き）

脱ぎたくないアーチャーと脱がせたい回り。  
ギャグなんだかシリアルスなんだかわからない状態になつております。

…いつもか（笑）

## 一十六章 ある意味熱い鬼」つゝ（前書き）

本来ならあのような地震が起きたばかりで小説を投稿するのは不謹慎かと思いますが、少しでも気分転換になればと思いさせていただきました。

かくゆう自分も今月末に結婚することの相手方の実家が福島だつたはまと申うことで、一時は大変でした…

すぐに連絡がとれたのがほんと幸いです。

## 一十六章 ある意味熱い鬼ごっこ

一対の色素の薄い鋼色の瞳と、三対のカラフルな瞳が正面からぶつかり合ひ。

アーチャーは心のなかでは焦っていたが、それを表に出すことなく毅然とした態度をとつていた。

思考はどうすればこの状況を切り抜けられるかと言つことに大半を割いており、周囲の状況を予断なく確認していた。

マスター達はまだこちらの現状に気付いた様子は見られず、今は大人は大人、子供は子供でそれぞれ一塊になつていた。

いや、宗一郎だけは不穏な気配を察知したのか一瞬こちらに目を向けた。だが、見た瞬間切迫するようなものではない事がわかつたのか、すぐに視線をもとに戻した。

サーヴァント達は自分達が対峙した瞬間にその事に気づきはしたが、何をするでもなくただ興味深そうにこちらに視線を向けている。恐らくイスカンダルがいることで厄介事の空氣を読み取ったに違いないとアーチャーは考えた。ここには手助けがないことを嘆くべきなのか、これ以上対応する相手が増えないことを喜ぶべきなのか決めかねていた。

取り敢えず、逃げるにあたりこの場から離れることが先決だとアーチャーは判断を下す。凜の目の前で本気ではないとは言え暴れることに代わりはないのだから。

騒動の理由を耳にすれば凜があきれたため息をつく様が用意に想像できた。

もしかしたら令呪使用するかもしない。頭に血が上れば何をする

かわからないのだ、昔“絶対服従”を告げたときのよつ。

そうと決まれば早速実行に移すのみである。アーチャーは更に距離をとり完全に逃走の姿勢に入った。

「ウウム、一筋縄ではいいかんか。よし、追いかけるぞ。」

「ちっ、待ちやがれアーチャー。」

「観念しなさい、アーチャー！！」

「はつ。そう言われて、はいそうですかと従うとしても思つてこのかね？だとすれば随分と可哀想な脳ミソだな。」

追跡者の冷静な判断を無くさせるようにアーチャーは挑発の言葉を投げ掛ける。ランサー達のような直情型はそうすることで動きが少し大振りになり行動が読みやすくなるからだ。

目論み通りセイバーとランサーはアーチャーの言葉にあつさりと頭に血を上らせた。これが戦場であればこうも簡単にいかなかつただろうが、今回はお遊びのようなものなので効果が高かつたということかもしれない。

追いかけてくるものたちの声を聞きながら、アーチャーはどのように逃げるかの算段を頭のなかで考える。

完全に逃げ切るために。そう、あんなモノを見せて不快にさせるわけにはいかないのだ。

アーチャーは足に力を込め、プールの地図を思い浮かべた。

逃走しやすい通路を選びそちらへと向かう。チラッと後ろを見れば、三人は一緒に追いかけてきた。

目につきにくいところまではこのまま移動できるだろうと顔を前に

戻し、移動することにアーチャーは集中した。

「アーチャーなぜ逃げるのです。ただ水着になればいいだけではありますか。」

「それが嫌だといつているんだ。」

「何嫌がってやがんだ、女じやあるめえし。」

「当たり前だ。私をみて女と思う奴がいれば正直神経を疑うぞ。ウム、精神科への受診をおすすめする。」

セイバー・ランサー・アーチャーと言った今回の三騎士は口論を交えつつ移動している。サーヴァントの中でも優秀とされるクラスの三人が子供じみた内容で口喧嘩とは、なかなか珍しいものだ。この先以降は珍しくなりそうな予感がするのはきっと気のせいではないだろう。

四人は騒ぎながら移動していった。

そんな彼等を複数の目が見つめていた。はじめは気づかなくとも、あれだけ大声で騒いでいれば気づくのも当然だ。さすがに内容までは彼等の耳には届かなかつたがおかげでこの様なものが始まつたことを見れば、大したことでないと簡単に推測できた。

何より彼等の表情がそう物語っていた。追いかけられているアーチャーはわりかしき羽詰まっているように傍観者達は感じたが、あの

メンバーに追いかけられているのならそれも当然かもしれないと思つたのも理由のひとつだ。

傍観していた者達の瞳に含まれる感情は様々だつた。その中でもあきれの色を浮かべていた凜は、さつまでアーチャー達のそばにいて今は一人で苦笑いを浮かべているギルガメッシュに声をかけることにした。

アーチャー達と話していた彼なら、突然開始された鬼ごっここの理由を知つてゐるだらうと考へたからだ。

「ギルガメッシュ、ちょっとこっちに来て。」

「はい、何ですか？」

自分に向かつておいでおいでと言つ動作をする凜にギルガメッシュはトコトコとよつていつた。

すぐ近くまで来ると前置きは省いてずぱつと尋ねた。

「それで、どうしてあいつらはあんなこと始めた訳? あんたずっとアーチャーの側にいたんだから理由はわかつてゐんでしょう?」

凜に呼ばれたときにそれを聞かることはすぐに解つたが、正直に言つべきかどうか悩んでいた。何故なら、アーチャーが肌を見せることに本気で嫌悪感のようなものを抱いていたことを察したからだ。英雄と呼ばれる存在だとて闇の部分がないわけではない。詳しくはわからないがアーチャーは肌を見せることがそれに当たることなのだろうとギルガメッシュは推測したのだ。

心情的には数少ない自分に気遣いを見てくれた存在であるアーチャーを手助けしたいと思いつつも、そこから興味を逸らせられるようないい考えが思い浮かばない。

凜のことだからきっと面白がってかき回すことになるだらうといふ予感が抜けなかつた。

「えへとですね。お兄さんが暇そつこしてたので、それを見た征服王が追いかけ始めちゃつて。面白そつだからつてランサーさん達まで参加しちやつたんですよ。ホント、子供みたいですよね～。」

「あら、そつなの。アーチャーも大変ね…………で、本当の理由は？」

取り敢えずはぐらかしてみよと試みたギルガメッシュだつたが、予想通りといふか凜には通用しなかつた。

しかも目が笑つていない。危険を本能的に察したギルガメッシュは、態度を一変させ正直に答えたのだつた。といふか、その選択肢しかなかつたと言つていい。

「普段着のお兄さんを水着にさせようとしてるんです。」

「そう言つことだつたのね。確かに、アーチャーの奴せつかくブルに来たつてのに、一人だけいつも格好だつたものね。こんなときぐらゐ氣を抜いてゆつくりしさないつてのよ。」

「そうですよね、警戒はしていない代わりに気を抜いてもいなつて感じられましたからね。」

今度は嘘ではない事がわかつた凜は、己のサーヴァントの堅物さにため息を吐いた。

着替えを済ませプールに出てきた凜は、先に着替えを済ませ既にいた男性陣の中で一人浮いた存在を認めた瞬間思わず頭を抱えそうになつた。

全員の息抜きをかねて来たといふのに、意味がないじゃないかと。

確かにサーヴァントとは戦わせるために召喚した存在だが、日常を楽しんではいけないという決まりがあるわけではない。寧ろ、かつて人としてあつたとき同様にいてもいいのではないかと考えてもいた。

しかし、アーチャーは食事を作ってくれたりとつたりはするものの、それ以外では戦闘に関係する行動以外をめつたにとることはなかつた。夜も睡眠を取ることなく見張りをしていることを凜は知つていた。

今は例の正体不明の存在があるため仕方ないが、それ以前も睡眠を取る様子はなかつた。

必要のない行動は心の贅肉だと凜は思つてゐるが、それでもどこか放つておけない雰囲気を纏うアーチャーに少しでもリラックスしてほしかつたのだ。

そう、だからこそ息抜きをどうしようか悩んでいたのだ。自分だけならどうともなつたが、アーチャーにも息抜きさせるにはどうすればいいか。そこが問題であつた。

なので、ギルガメッシュの提案はまさに渡りに船だつた。

結局、その効果を得ることはできなかつたが。

なら無理矢理にでも戦闘の事を忘れさせるようにすればいいのではないか。そんな考えがアーチャー達が消えていった方を見つめていた凜の頭に浮かんだ。

やつてやううじやないの、と凜は不敵な笑みを浮かべた。そして、考えたことを実行すべく行動を開始した。

一連の動作を静かに見つめていたギルガメッシュは、アーチャーに心の中で默祷を捧げた。

「「」めんなさい、お兄さん。止められませんでしたけど僕のせいじゃないですから、恨むならお姉さんにお願いしますね。」

朗らかにそう囁くギルガメッシュには悪意は欠片たりとも感じられず、だからこそ腹黒さが感じられ質が悪いとしか言えなかつた。

こう言う部分では少年である彼の方が恐ろしいとは、両方のギルガメッシュを知る者達の共通の見解であつた。

アーチャーは濡れて滑りやすい足場に注意しながら逃亡を続ける。追いかけてきている者達の中にランサーがいる以上すぐに追い付かれそうなものだが、足の遅い人物に合わせているのか一団として行動していた。

それはセイバーにも言える事で、魔力放出による移動速度の上昇は行っていなかつた。これらから、彼等が本気であつても全力ではないことがうかがい知れる。

これも一種の「ミニコニケーション」とでも考えているのかもしない。それも間違いではないだろう、正しくもないが。

アーチャーはこれから行動を考える。

このまま逃げ続けるというのはさすがに無理だろう。これが屋外であればまだ逃げきれる可能性があつたかもしれないが、残念なことにここは屋内。逃げる場所もそれに関する行動も限られてしまう。

一流れのプールの脇を走り、チラリと後ろを確認する。三人はお互に何か話しているようだつた。

ではどこかに隠れるか。それも難しいだろう。

こう言う施設には死角になりうる部分は確かに多く存在するが、一つ一つは小さく隠れきれない。よしんば隠れることができたとしても、気配を察知されるランサーの探索のルーンですぐに発見されてしまうだろう事は想像に固くない。

一子供用らしい浅いプールがえた。また後ろを見ればセイバーは木刀のようなものを持ち出しており、ランサーは己の象徴である槍を出していた。刃の部分を使わなければ確かに自分の武器の方が使いやすいだろう。ランサーである以上自分の武器（槍）を扱い損ねる何て言う馬鹿な事態は起きないだろうし。（そうなつたらおもいつきり笑つてやる。）

考えれば考えるほど現状が芳しくないと言つ事実ばかりが突きつけられる。

やはり氣を使わず来なればよかつたと少しの後悔に襲われた。だが、それはそれでまた別の後悔を感じたであろう事も予感していた。

と、アーチャーは今何か重要なものを見落とした気がした。今見た

光景を走り続けながら脳裏に思い浮かべた。

真っ先に浮かんだのは、セイバーとランサーの手に握られた武器。  
そう、武器だ。

本来の役目はを考えるならそれはおかしいことではない。ただ、思い出してほしい。ここがどこであり、何しに来ているのかを。それに気付いた瞬間、思わずアーチャーは叫び声をあげていた。

「一体何で物を出しているんだ、貴様らは……」

「ああ？ 別にいいだろ、本来の使い方をしようつて訳じゃねえんだ。」

「そういう問題ではないわ、このたわけが……」

アーチャーは顔だけを完全に振り返らせてランサーに怒鳴り返した。イスカンダルは無手のままである。先程から追いかけては来ているものの手を出そうとする様子は見られない。きっとランサー達に任せた方がよいとでも思つたに違いない。

やはり王様は王様である。私情抜きに判断する能力が高い。できな奴も存在するが。

一步下がった状態で判断を下すイスカンダルを厄介に思いつつ、戦闘以外でそういう奴を排除する方法を知らないアーチャーには手を出すことができない。

飛び込み用のプールの側に差し掛かる。

ランサーが持つ武器に注意すべきかと思うが、今投擲はしないだろうと接近されないことに心血を注ぐ。

追いかけてくる一人はほんとうにしつこいと感じるも、諦めが悪いからこそ英雄に成れるんだろうなと少々意識を飛ばした。

ハアと思わずため息を吐く。

ふと、違和感を感じたとき本能が危険信号をはつした。言ひなれば勘であるが、これは経験から来る予測にも等しいものである。故に微塵も疑うことなく導かれるまま体を動かした。

直後、アーチャーがいた場所をビュンと何かが通りすぎた。見ればセイバーがプール側から手にした木刀を振るっていた、水の上に立つて。

そうして思い出す。セイバーがランサーに怒鳴り返したときから居なかつた事に。そんなことにも気付かなかつたとは、自分も思つたほど冷静ではなかつたらしい。

「くっ、これで行けると思ったのですが。やりますね、アーチャー。」

「いや、危ないところだつたよ。君がアーサー王であつたことを失念していた。」

「成る程、加護の事を知つていたのですね。」

恐らく三人で話していたときにでもその事を話し、別行動をとつたのだろう。一瞬でも気づくのが遅かつたら危なかつた。

セイバーの剣は確実に意識を借りとるための動きをしていたのだから。

今の攻防で思わず足を止めてしまつたアーチャーを三人が取り囲む。しまつたと思つてももう遅い。退路は完全に絶たれた。飛び込み台を背にどこか道はないものかと視線を巡らすも、適切な位置に陣取りムカつく表情を浮かべる男どもしか目に入らない。こうなつたら背にした飛び込み台に登り逃走するしかないと思つた

とき、金属音と何かが空気を裂く音がアーチャーの耳に届いた。

先程と同じく本能が告げるままに避けるアーチャーが田にした音の正体は鎖だった。驚く間もなくさらに鎖は動いてアーチャーへと襲いかかつた。

アーチャーは手になんの変鉄もない木の棒を投影し鎖に向かって投げつける。しかし、ただ投げつけるだけでは効果がない事は一目瞭然。その為鉄甲作用を用いたのだった。

弾かれた鎖——釘剣を回収しつつ現れたのはライダーだった。これは征服王達も予想できなかつたようで驚いていた。

「まさか君も来るとは思わなかつたな、ライダー。」

「ええ、わたしも関わる氣は無かつたのですが、サクラに頼まれたものですから。」

これは凜の差し金である。残ったサーヴァントのうちすぐに動かせそうな存在は妹のサーヴァントだけであつたため、桜へと頼んだのだ。

さくらは苦笑いしつつも了承し、現在に至ると言つわけだ。

そしてライダーの出現により、アーチャーの退路は完璧に防がれてしまつた。正に八方塞がり、四面楚歌。

アーチャーの額に冷や汗が浮かぶ。

「今度こそ手詰まりつて訳だ。おとなしくしろよ、アーチャー。」

「その通りです、アーチャー。ただ着替えるだけではありませんか。」

「つむ、余は諦めんぞ。」

「…………観念した方が良さそうですよ。」

三人はヤル気満々だが、ライダーだけはやる気なくアーチャーに告げた。めんどくさいと言つ感情がありありと現れている。さつさとこの下らないやり取りを終わらせて戻りたいのだろう。

だが、ここまで来てもアーチャーに諦める気はなかつた。あれを見せる気は全くないのだから。

こうなつてはやりあう以外に逃れるすべはない、己の手に干将・莫耶を呼び出した。勿論、刃は潰した状態でだ。

これでアーチャーがまだ諦めてないことを理解したランサー達も、今手にあるものを構え直す。

今度も最初に動いたのはランサーだった。逆手に持つた槍で、変わらぬスピードのまま突きを繰り出す。

本気ではないからかうまく捌け、それだけであれば隙をついて逃げ出せたかもしぬないが、ほんの僅かな隙や動きが止まつた瞬間を狙つてライダーが釘剣を飛ばしてくる。

その為今いる位置から移動できずにいた。

ランサーが今までの動きを変化させ、突きから払いへと変わつた。ライダーの釘剣を打ち落とした直後だつたため防御が間に合つかわからなかつたが、ギリギリで槍と体の間に剣を滑り込ませる事に成功した。

しかし、受けたときの体の向きや足の位置が悪く、踏ん張ることができず、軽く飛ばされてしまつた。さらに運の悪いことにそこにはセイバーの刃の前であつた。

「アーチャー、覚悟！！」

「それはちょっと違わないか、セイバー！？」

全力で振るわれる木刀を強化した剣で迎撃つ。だが、飛ばされた直後のアーチャーに、剣で受ける、以外の事ができるはずもなく、再びアーチャーは飛ばされるのであった。

空中にいるアーチャーの手の中で強化を施した筈の干将・莫耶は音もなく崩れ去つた。その上、アーチャーの手まで痺れている。もし強化をしていなければ一発だったなど現実逃避のじとく思つた。

### ——ザッパー——

プールから大きな水柱が上がつた。アーチャーが飛ばされた先は幸いなことにプールだったのだ。

これ幸いとばかりにアーチャーは反対側に向かつて泳ぎ始めた。

上ではそんなアーチャーを眺めつつ追跡者達が会話をしていた。

「ちつ、アーチャーの野郎また逃げ始めやがつた。逃げられたのはてめえのせいだせ、セイバー。」

「もう、もう少しのところであったのだがのう。」

「申し訳ありません、もう少し考えて行動に移すべきでした。」

「…………（もう戻りたいのですが。）」

さすがに水中ではライダーの釘剣も勢いがなくなり、水上を歩けて

も水中の動きになれていないセイバーも一人でいくことは憚られた。流石にめんどくさが前に出てきたのか、ここまでで終わろうかと言つ空氣な流れかけたときセイバーが動いた。

「ライダー、今からアーチャーをだしますのでお願ひします。」

「それは構いませんが、出すとは……」

どうやって、と聞く前にセイバーは木刀を腰だめに構えて集中し出した。

それでなんとなく察したライダーはそれ以上なにも言わずに釘剣を構えたのだった。

高まるセイバーの鬪氣、それは水中のアーチャーにも感じられた。嫌な予感に悪寒が走った。

急いで泳ぎ早く岸に上がろうとしたが、その前にそれは起つた。

始めズンと思い衝撃が走ったかと思えばアーチャーの周囲から水分が全くなくなつた。なんとなしに下を見てみれば、かなり深い筈の飛び込みようプールの底が見えていた。

このまま行けば叩きつけられるなんて考えたアーチャーに鎖が巻き付き、まるで一本釣りの」とく吊り上げられた。

鎖の主が誰かなんて考えるまでもない。引き寄せられながらアーチャーが見たものはモーゼの」とく割れたプールと、剣を振り抜いた格好のセイバーだった。

「ぐはっ。」

「よひ、お帰り。アーチャー。」

とうとう、四人のもとへ戻されたアーチャー。迎えたのは嫌みなく  
らしい爽やかなランサーの笑顔だった。

逃げようにも鎖に縛られた状態のアーチャーは動けない。思わず顔  
を引き攣らせる。

「アーチャー。」

「な、なんだね、セイバー。」

「また追いかけるのも面倒なので、しばらく寝ていてください。」

「は…?つて、待て待て待て!…」

後ろに後ずさるアーチャーだが鎖の先はライダーの手のなか、すぐ  
に一杯になり動けなくなる。

そしてセイバーは容赦なくアーチャーの頭に木刀を降り下ろし、ア  
ーチャーの意識を刈り取った。

「さて、では戻りましょう

「おうよ。」

「楽しみだのう。」

「……(なんだか疲れました。)」

意識のなくなつたアーチャーをイスカンダルが抱き上げ、皆の元へ  
戻る四人だった。

凜はランサー達が戻つてくるまでお喋りに興じていた。すると、ライダーからレイラインを通じて伝えられた状況を桜が凜に伝えた。

「姉さん、アーチャーさんを確保したそうですよ。」

「あ、やつと？それじゃ、あとは着替えさせるだけね。」

少年組は一人の会話をずっと聞いてたためアーチャーに同情の念を禁じ得なかつた。

そして、皆が集まる場に意識のない（鎖を解かれた）アーチャーを担いだ彼等が戻ってきた。

何をしているのかと大人組が聞けば水着になるのを嫌がるアーチャーを？無理矢理にでも着替えさせるのだと言つ返答だ。

内容に苦笑いしつつも、そこまで拒否することに興味を引かれ、結局全員がこの場に集まつた。

イスカンダルがドサツとアーチャーを下ろす。

「ぐ…う。」

下ろされた衝撃にアーチャーは呻き声をあげ目を覚ます。そして、周囲を囲まれた現状に最悪な状態だと理解する。

「よし、と言うわけで脱ぐがよい、アーチャー。」

「断る！！別に私一人着替えんでもどうと言つ事もあるまい。」

「じゃがのう、こう一人だけ普段着と言つるのは、こう、脱がせたくならんか？」

「ならん！！」

どうしても抵抗するアーチャーにやはり力がすくしかないと判断した周囲は、すぐさま行動に移る。

まず、すぐ近くにいたイスカンダルがアーチャー羽交い締めにした。サーヴァントのなかで筋力があまり高くないアーチャーは勢いをつける余裕がなくなれば、それだけで抵抗する術がなくなる。

焦ったアーチャーは助けを求める視線を己がマスターに送るも、凜の笑顔に撃沈された。

服を無理矢理脱がせるための魔の手（ランサーの手）が己に延びる。ここに来てアーチャーはようやく觀念した。

もう抵抗しても無理だと言うことがわかつたからだ。

後は、少しでもあんなものを見せる時間が短いことを祈るばかりであつた。

ランサーの手が己の服にかかつたのを見て、アーチャーは目を閉じる。

破らんばかりに思い切り服を開けられた直後に聞こえたのは、複数の息を飲む音だった。

## 一十六章 ある意味熱い鬼」つゝ（後書き）

本当はイスカンダルの神威の車輪をだそつかどうか悩んだ。  
だってやりそうじゃないですか？

結局やりませんでしたけど。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2148n/>

---

異なる運命、新たな螺旋

2011年3月14日08時24分発行